

県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 築山遺跡Ⅲ



2009年3月

島根県出雲県土整備事務所  
出雲市教育委員会

県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 築山遺跡Ⅲ

2009年3月

島根県出雲県土整備事務所  
出雲市教育委員会



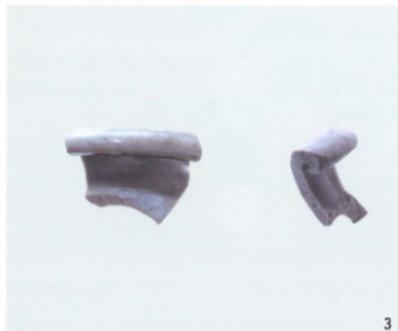
1.4区出土青磁 2.4区出土白磁



2



4



3



5

1.5A区北半（南から） 2.SK2030出土龍泉窯系青磁酒会壺 3.SK2050出土中国白磁四耳壺  
4・5.5A・B区出土貿易陶磁器（龍泉窯系青磁、中国白磁、褐釉陶器）

## 序

出雲市教育委員会では、島根県出雲県土整備事務所（前 島根県出雲土木建築事務所）からの委託を受け、平成15年度から県道今市古志線並びに県道出雲三刀屋線の改良事業予定地において築山遺跡の発掘調査を実施してまいりましたが、今年度の調査報告書の刊行をもちまして終了する運びとなりました。本書は、このうち平成16～18年度の発掘調査の成果をまとめたものです。

築山遺跡周辺には、国史跡上塩冶築山古墳をはじめとする古墳、横穴墓、集落跡などの遺跡密集地帯であり、数多くの歴史的文化遺産が残っています。

今回の調査では、縄文後期から中世までの遺構・遺物が確認されました。注目されるものは、建物を取り囲むと思われるL字状の溝、出雲平野でも屈指の質と量の輸入陶磁器、陰陽道的な色彩の強い呪符木簡などです。これらは、今後、出雲西部の歴史を考える上でも、大変貴重な資料になると思われます。

本書が、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり、ご支援ご協力いただきました島根県出雲県土整備事務所をはじめ、関係の皆様に対して心からお礼申し上げます。

平成21年（2009）3月

出雲市教育委員会  
教育長 黒目 俊 策

## 例 言

1 本書は、島根県出雲県土整備事務所の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成16年度(2004)から平成18年度(2006)に実施した、県道今市古志線改良事業に伴う築山遺跡(島根県遺跡番号:W24、出雲市遺跡番号:F23)の埋蔵文化財発掘調査の記録である。

現地調査は、平成15年度(2003)から平成19年度(2007)の5ヵ年実施している。このうち、平成15年度調査分については『築山遺跡』Ⅰ・Ⅱとして報告している。

2 調査は、用地取得の進捗状況に応じて実施したことから、調査地の順序は連続していない。

このため、整理・報告段階で、調査区の名称を北から南に振り直すこととし、北から南に4A区、4B区、4B東区、4C区、4D区、5A区、5B区とした。5B区には、報告Ⅱで掲載した場所が含まれているが、今回、関連することからあわせて報告する。

調査区名と、旧調査区名、面積、所在、発掘調査期間は次のとおりである。

4A区 H117北区 29-19gr 700㎡、出雲市上塩冶町1762, 1753, 1752-2ほか  
平成17年4月25日から平成17年10月21日まで

4B区 H16北区 19-6gr 900㎡、出雲市上塩冶町1754-1, 1761  
平成16年10月28日から平成17年2月14日まで

4B東区 H17北区18-12gr 150㎡、出雲市上塩冶町1762, 1753, 1752-2ほか  
平成17年4月25日から平成17年10月21日まで

4C区 H117北区6-1gr 450㎡、出雲市上塩冶町1762, 1753, 1752-2ほか  
平成17年4月25日から平成17年10月21日まで

4D区 H16南区1-8gr 700㎡、出雲市上塩冶町1742  
平成16年4月26日から平成16年8月2日まで

5A区 H17南区 21-32gr 1,450㎡、出雲市上塩冶町1737, 1735, 1737-3, 1734-2  
平成17年10月6日から平成18年3月20日まで

5 B 区 H18南区 34-55gr 2,400㎡、出雲市上塩治町1715-2, 1719-7, 1719-2, 1716,  
1725-5, 1719-1, 1720ほか

平成18年4月13日から平成18年10月20日まで

- 3 調査は、道路のセンター杭を基準に用い、5mグリッドとした。グリッド杭の番号は、東西はアルファベット、南北はアラビア数字とした。

なお杭番号であるが、東西については、西から東に向かってアルファベットをふった。南北については、4A～4C区は、4C区の南辺から北に向かってアラビア数字をふり、4D区は、北辺から南に向かってアラビア数字をふった。5A・5B区は、北から南に向かってアラビア数字をふった。

また、グリッド名は、4A～4C区は北東角の杭番号で呼ぶこととし、4D・5A・5B区は北西角の杭番号で呼ぶこととした。

- 4 遺構番号は、4区については、4A区北辺から4D区南辺に向かって1000番からの通し番号とした。5区については、5A区北辺から5B区南辺に向かって2000番からの通し番号とした。

また、遺構の種類を記号をもちいてあらわした。

SA 塀・柵 SB 建物 SD 井戸 SK 土坑 SX その他  
SP 柱穴

## 5 調査体制

平成16年度 現地調査

調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒目俊策）

調査指導 田中義昭（島根考古学会 会長）

東森 晋（島根県教育庁 文化財課 文化財保護主事）

中村唯史（三瓶自然館サヒメル指導員）

事務局 板倉 優（出雲市 文化企画部 芸術文化振興課長：合併前）

神門 勉（出雲市 文化観光部 文化財課長：合併後）

川上 稔（同 主査）

調査員 三原一将（出雲市 文化財課 副主任主事）

米田美江子（同 主任嘱託員）

調査補助 伊藤晶子、宮崎 綾、錦田充了（同 臨時職員）

整理作業員 飯國陽子、永田節子、吹野初子、藤原 舞、柿本節子、勝部光代

発掘作業員 青木 孝、今岡 実、小村恒利、小村保夫、奥田利晃、勝部初子、

川上清夫、岸 邦夫、上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、

曾田利夫、高根常代、高根 豊、富田 勉、長島節子、成相吉隆、  
藤江 実、藤原一男、古川八郎、吉川善美、吉田 栄、米山清司

#### 平成17年度 現地調査

調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒日俊策）  
調査指導 田中義昭（島根考古学会 会長）  
原田敏照（島根県教育庁 文化財保護主事）  
中村唯史（三瓶自然館サヒメル指導員）  
事務局 神門 勉（出雲市 文化観光部 文化財課長）  
川上 稔（同 主査）  
調査員 三原一将（出雲市 文化観光部 文化財課 主任）  
米田美江子（同 嘱託員）  
調査補助員 坂根健悦、高橋誠二（同 臨時職員）  
整理作業員 飯國陽子、永田節子  
発掘作業員 青木 孝、奥田利晃、川上靖夫、上代 勇、杉原秀雄、岡藤俊也、  
須山林吉、曾田利夫、高根常代、富田 勉、成相吉隆、古川八郎、  
米田 建、米山清司

#### 平成18年度 現地調査

調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒日俊策）  
調査指導 渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）  
田中義昭（島根考古学会会長）  
勝部智明（島根県教育庁文化財保護主事）  
守岡正司（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）  
事務局 石飛幸治（出雲市 文化観光部 文化財課長）  
花谷 浩（同 学芸調整官）  
川上 稔（同 主査）  
調査員 三原一将（出雲市 文化観光部 文化財課 主事）  
米田美江子（同 嘱託員）  
調査補助員 坂根健悦、高橋誠二、成相幸子（同 臨時職員）  
整理作業員 荒木恵理子、鶴口令子、永田節子  
発掘作業員 奥田利晃、小村恒利、川上靖夫、公田悦朗、小玉順子、来間達夫、  
上代 勇、杉原秀雄、岡藤俊也、須山林吉、高根常代、高橋イキコ、  
塚原立之、長島節子、成相吉隆、森口大輔、米田 建

平成19年度 現地調査・報告書作成

- 調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒目俊策）
- 調査指導 渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）  
田中義昭（島根考古学会会長）  
勝部智明（島根県教育庁文化財保護主事）  
守岡正司（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）
- 事務局 花谷 浩（出雲市 文化企画部 次長 兼 文化財課 学芸調整官）  
石飛幸治（出雲市 文化企画部 文化財課長）  
川上 稔（同 主査）  
景山真二（埋蔵文化財係 係長）
- 調査員 三原一将（出雲市 文化企画部 文化財課 主事）  
米田美江子（同 嘱託員）  
高橋誠二（同 嘱託員）
- 調査補助員 児玉達也、高橋 周、和田みゆき（同 臨時職員）
- 整理作業員 荒木恵理子、鶴口令子
- 発掘作業員 青木 孝、奥田利晃、小村恒利、川上靖夫、小玉順子、来間達夫、  
上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、高根常代、高根 豊、  
高橋イキコ、塚原立之、土肥源市、長島節子、成相吉陸、星野篤史、  
森口大輔

平成20年度 報告書作成

- 調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒目俊策）
- 調査指導 西尾克己（島根県古代文化センター）  
守岡正司（島根県教育庁文化財課世界遺産推進室）
- 事務局 花谷 浩（出雲市 文化企画部 次長 兼 文化財課 学芸調整官）  
石飛幸治（出雲市 文化企画部 文化財課長）  
景山真二（同 埋蔵文化財係 係長）
- 調査員 原 俊二（同 主任）  
米田美江子（同 嘱託員）  
高橋誠二（同 嘱託員）
- 調査補助員 児玉達也、高橋 周、和田みゆき（同 臨時職員）
- 整理作業員 荒木恵理子、鶴口令子
- 調査協力 三原一将（出雲市 文化企画部 文化財課 出雲弥生博物館創設準備室 主事）

- 6 発掘調査、室内整理及び報告書作成にあたっては、次の方々や機関からご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表しておきたい。(順不同・敬称略)

穴澤義功(製鉄遺跡研究会代表) 井上寛司(島根大学名誉教授)

豊島 修(大谷大学文学部教授) 平石 充(島根県埋蔵文化財センター)

廣江耕史(島根県埋蔵文化財センター) 今岡 清(出雲塩冶誌編集委員会編集長)

池瀬俊一(島根県教育庁文化財課)

- 7 本書の編集は米田・高橋誠二・高橋岡と協議しながら、原が行った。執筆は、三原、米田、高橋誠二、高橋岡が行った。分担は目次に示したが、第4章については、本文中に詳細を記した。

- 8 遺物の出土量を示すために用いたコンテナはL540mm×W340mm×H150mm、ビニール袋は大L380mm×W260mm、中L250mm×W150mm、小L140mm×W100mmのものである。

- 9 本書で使用した測地系は世界測地系で、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。

- 10 自然化学分析については、株式会社文化財調査コンサルタントに委託し、結果については第3章第2節に掲載した。

- 11 本書に掲載した写真の撮影は調査員が行った。航空写真は株式会社人陸設計と株式会社藤井基礎設計事務所に委託した。

- 12 遺物実測については、調査員、調査補助員のほか、次の者が従事した。

井上喜代女、藤原 舞、村田理恵(以上 いなか舎)

- 13 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会にて保管している。

# 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	(三原一将) ... 1
第1節 道路計画の概要	
第2節 発掘調査の経緯	
第3節 報告書の作成	
第2章 遺跡の位置と環境 .....	(高橋誠二) ... 5
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	
第2節 過去の調査	
第3章 4区の調査成果 .....	10
第1節 調査の概要 .....	(米田美江子) ... 10
1 基本層序	
2 遺構とその出土遺物	
3 包含層の遺物	
第2節 自然科学分析 .....	(渡辺正巳) ... 66
第3節 ま と め .....	(米田美江子) ... 80
第4章 5区の調査成果 .....	(高橋誠二・高橋 周) ...106
第1節 調査の概要	
1 基本層序	
2 遺構とその出土遺物	
3 包含層の遺物	
第2節 ま と め	
第5章 考 察 .....	180
第1節 築山遺跡5区出土の呪符木簡について .....	(高橋 周) ...180

# 挿 図 目 次

- 第1図 築山遺跡と出雲平野の主要遺跡 (1:3 石のみ1:4)  
(1:100,000)
- 第2図 築山遺跡と周辺の遺跡 (1:20,000)
- 第3図 4区・5区全体図 (1:3,000)
- 第4図 4区全体図 (1:1,000)
- 第5図 4A区遺構図 (1:200)
- 第6図 4B区(1)・4B東区遺構図 (1:200)
- 第7図 4B区(2)・4C区遺構図 (1:200)
- 第8図 4D区遺構図 (1:200)
- 第9図 調査区上層図 (1:120) と土層位置図  
(1:2,000)
- 第10図 弥生時代の遺構図と土層図  
(S1)1000は1:400と1:80、SK1037は1:40)
- 第11図 縄文・弥生時代の遺物実測図  
(土器1:3 石器1:4)
- 第12図 古墳時代の遺構実測図と遺物実測図  
(遺構1:30 土器1:3)
- 第13図 古代の遺構実測図 (1:60)
- 第14図 古代の遺構出土遺物実測図1  
(土器1:3 その他1:4)
- 第15図 古代の遺構出土遺物実測図2 (1:3)
- 第16図 中世の遺物遺構等実測図 (1:80)
- 第17図 中世の土坑と井戸実測図 (1:60)
- 第18図 中世の井戸実測図 (1:60)
- 第19図 中世の溝実測図 (1:60)
- 第20図 中世のその他の遺構実測図 (1:60)
- 第21図 中世の遺構出土遺物実測図1  
(土器1:3 石器1:4)
- 第22図 溝SD1111出土遺物実測図  
(1:3 石のみ1:4)
- 第23図 溝SD1111出土遺物実測図  
(1:3 石のみ1:4)
- 第24図 中世の井戸出土遺物実測図  
(1:3 曲物のみ1:6)
- 第25図 井戸SE1146出土遺物実測図
- 第26図 中世の溝出土遺物実測図  
(1:3 鉄貨のみ1:2)
- 第27図 溝SD1120出土遺物実測図1 (1:3)
- 第28図 溝SD1120出土遺物実測図2 (1:3)
- 第29図 溝SD1120出土遺物実測図3 (1:4)
- 第30図 溝状遺構SD1144出土遺物実測図  
(1:3 石のみ1:4)
- 第31図 中世の遺構出土遺物実測図2 (1:3)
- 第32図 遺構外出土遺物実測図1 (1:3)
- 第33図 遺構外出土遺物実測図2 (1:3)
- 第34図 遺構外出土遺物実測図3 (1:3)
- 第35図 遺構外出土遺物実測図4 (1:3)
- 第36図 遺構外出土遺物実測図5 (1:3)
- 第37図 遺構外出土遺物実測図6 (1:3)
- 第38図 遺構外出土遺物実測図7 195~207  
(1:3) 208~210 (1:2) 211~219 (1:4)
- 第39図 遺構外出土遺物実測図8 (1:3)
- 第40図 遺構外出土遺物実測図9 (1:3)
- 第41図 遺構外出土遺物実測図10 252~256  
(1:3) 257~261 (1:4)
- 第42図 遺構外出土遺物実測図11 (1:4)
- 第43図 遺構外出土遺物実測図12 (1:3)
- 第44図 4B区試料採取地点 (1:500)
- 第45図 SE1094の断面図および試料採取地点
- 第46図 SX1056の花粉ダイアグラム
- 第47図 SD1000の花粉ダイアグラム
- 第48図 SK1048の花粉ダイアグラム
- 第49図 SX1056のプラントオパールダイアグラム
- 第50図 SD1000のプラントオパールダイアグラム
- 第51図 SK1048のプラントオパールダイアグラム
- 第52図 SD1000の珪藻ダイアグラム
- 第53図 SD1000の硅藻総合ダイアグラム
- 第54図 SK1048の珪藻ダイアグラム
- 第55図 SK1048の硅藻総合ダイアグラム

- 第56図 5区全体図 (1:3,000)
- 第57図 5区十層模式図 (1:40)
- 第58図 5A区(1)遺構図1 (1:200)
- 第59図 5A区(2)・5B区(1)遺構図  
(1:200)
- 第60図 5B区(2)遺構図 (1:200)
- 第61図 5B区(3)遺構図 (1:200)
- 第62図 築山5号墳の全体図  
(遺構1:200 断面1:60 出土状況1:40)
- 第63図 築山5号墳出土遺物実測図 (1:3)
- 第64図 円形周溝1の全体図と出土遺物実測図  
(遺構1:200 断面1:60 土器1:3)
- 第65図 古代の遺構と遺物実測図  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第66図 5A区の中世建物遺構図1 (1:60)
- 第67図 5A区の中世建物遺構図2 (1:60)
- 第68図 5A区の中世建物遺構図3 (1:60)
- 第69図 5A区の中世建物遺構図4 (1:60)
- 第70図 5A区の中世柱列図と遺物実測図  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第71図 5A区の中世土坑図と遺物実測図1  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第72図 5A区の中世土坑図と遺物実測図2  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第73図 5A区の中世土坑図と遺物実測図3  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第74図 5A区の中世土坑図と遺物実測図4  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第75図 5A区の中世土坑図と遺物実測図5  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第76図 5A区の中世土坑図と遺物実測図6  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第77図 5A区の中世土坑図と遺物実測図7  
(遺構1:60 遺物1:3)
- 第78図 5A区の中世井戸実測図と遺物実測図  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第79図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図1  
(遺構1:300 断面1:60 土器1:3)
- 第80図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図2  
(遺構1:200 断面1:60 土器1:3)
- 第81図 5A区の中世溝状遺構実測図3  
(遺構1:200 断面1:60)
- 第82図 5A区の中世溝状遺構出土遺物実測図  
(1:3)
- 第83図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図4  
(遺構1:300 断面1:60 土器1:3)
- 第84図 橋状遺構実測図と5A区Pit内遺物  
(遺構1:100 土器1:3)
- 第85図 5B区の中世土坑図と遺物実測図1  
(遺構1:60 遺物1:3)
- 第86図 5B区の中世土坑図と遺物実測図2  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第87図 5B区の中世土坑図と遺物実測図3  
(遺構1:60 土器1:3)
- 第88図 5B区の中世土坑図と遺物実測図4  
(遺構1:20 土器1:3)
- 第89図 5B区の中世土坑図と遺物実測図5  
(遺構1:60 遺物1:3)
- 第90図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図1  
(遺構1:200 断面1:60 土器1:3)
- 第91図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図2  
(遺構1:200 断面1:60 遺物1:3 石1:6)
- 第92図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図3  
(遺構1:200 断面1:60 土器1:3)
- 第93図 遺構外出土遺物実測図1(弥生~古代)  
(1:3)
- 第94図 5区出土の土師質土器分類図1 (1:3)
- 第95図 5区出土の上師質土器分類図2 (1:3)

第96図 遺構外出土の土師質土器分布図  
(左図 1 : 250 右図 1 : 300)

第97図 5区遺構外出土の遺物実測図 1 (1 : 3)

第98図 5区遺構外出土の遺物実測図 2 (1 : 3)

第99図 5区遺構外出土の遺物実測図 3 (1 : 3)

第100図 5区遺構外出土の遺物実測図 4 (1 : 3)

第101図 5区遺構外出土の遺物実測図 5 (1 : 3)

第102図 5区遺構外出土の遺物実測図 6 (1 : 3)

第103図 5区遺構外出土の遺物実測図 7 (1 : 3)

第104図 5区遺構外出土の遺物実測図 8 (1 : 3)

第105図 SK2035出土の木簡実測図 1 (1 : 4)

## 表 目 次

表 1 4区出土鉄関連遺物構成表

表 2 微化石調査結果

表 3 種実同定結果 (S X1056 4層最下部)

表 4 SE1094の寄生虫卵分析結果

表 5 呪符木簡規格一覧

# 写真図版目次

- 巻頭カラー1 1. 4区出土青磁  
2. 4区山上白磁
- 巻頭カラー2 1. 5A区北半(南から)  
2. SK2030出土龍泉窯系青磁酒会壺  
3. SK2050出土中国白磁四耳壺  
4・5. 5A・B区出土貿易陶磁器(龍泉窯系青磁・中国白磁・褐釉陶器)
- 図版1 上空から見た調査区(4D区、北から)
- 図版2 1. 4A区北半(南から)  
2. 4A区南半(南から)
- 図版3 1. 4B区全景(上空から)  
2. 4B区北半  
3. 4B区南半  
4. 4B区全景(北から)
- 図版4 1. 4C区全景(南から)  
2. 4C区全景(北から)
- 図版5 1. 4D区全景(上空から)  
2. 4D区全景(北から)
- 図版6 1. 溝SD1000(4A区、南西から)  
2. 溝SD1000(4B区、北から)  
3. 溝SD1000(4C区、南から)  
4. 溝SD1000(4D区、南東から)
- 図版7 1. 井戸SE1094(東から)  
2. 井戸SE1094(北から)  
3. 土坑SK1080(東から)  
4. 井戸SE1142(南東から)  
5. 東西溝SD1052(西から)  
6・7. SX1131ほか(南から)
- 図版8 1. 土坑SK1048(南から)  
2. 井戸SE1025(南西から)  
3. 土坑SK1092・1093(東から)  
4. 土坑SK1044(東から)  
5. 井戸SE1026(西から)  
6. 井戸SE1100(東から)
7. 井戸SE1083(西から)  
8. 井戸SE1083(南西から)
- 図版9 1. 井戸SE1116(北から)  
2. 井戸SE1117(西から)  
3. 井戸SE1119(西から)  
4. 井戸SE1122(西から)  
5. 井戸SE1141(南西から)  
6. 井戸SE1146(南から)  
7. 東西溝SD1011(東から)
- 図版10 1. 溝SD1111と土坑SK1110(北東から)  
2. 土坑SK1110(南から)  
3. 舟形木製品(形代A)出土状態(北から)  
4. 舟形木製品(形代B)出土状態(東から)
- 図版11 1. 東西溝SD1090(東から)  
2. 東西溝SD1047(南から)  
3. 斜行溝SD1144(南西から)  
4. 溝SD1120(西から)  
5. 溝SD1120(南から)  
6. SX1038ほか  
7. SX1036(南から)
- 図版12 1. SX1034  
2・3. SD1000  
4. SK1070・SD1050  
5. SD1050・SE1051  
6. (SD1054・SD1123)  
7. (SE1137・SD1054)  
8. (SE1100)  
9. (SD1054・SD1073)  
10. (SD1096)  
11. (SD1123)  
12. (SD1054)  
13. (SD1145)
- 図版13 1. (SP1104)  
2. (SK1084・SK1092・SK1093)  
3. (SK1093・SK1110)

- 4 (SK1110)  
 5 (SK1110・SE1025)  
 6・7 (SK1110)  
 8～11 (SD1111)
- 図版14 1 (SP1147・SP1148)  
 2 (SE1025・SE1026・SE1083・SE1100・SE1116・SE1117)  
 3 (SE1116)  
 4 (SE1083)  
 5・6・8 (SE1146)  
 7 (SE1119・SE1122・SE1141・SE1146)  
 9 (SD1024)  
 10 (SD1144)  
 11 (SX1077・SX1109・SX1131)
- 図版15 1 (SD1113)  
 2～11 (SD1120)  
 12 (SX1127)
- 図版16 1 (SK1084)  
 2・3 (SD1098)  
 4 (SD1047・SD1090・SD1098)  
 5 (SD1106・SD1107・SD1113)  
 6 (SD1144)  
 7 (SX1077)  
 8・9 (SD1047・SD1098)
- 図版17 1・2. 白磁  
 図版18 1・2. 青磁  
 図版19 1. 青磁  
 2・3. 染付(青花)  
 図版20 1・2. 中世陶器  
 3・4. 肥前系陶器  
 図版21 1・2. 弥生土器  
 3～6. 須恵器  
 7. 中世須恵器  
 8・9. 土師器  
 図版22 1・2. 土師器
- 3・4. 瓦  
 5～14. 土師器
- 図版23 1・2. 中世陶器  
 3・4・6・8～10. 肥前系陶器  
 5. 中世陶器・瓦質土器  
 7. 瓦質土器  
 11. 土製品  
 12. 鉄製品  
 13. 石製品
- 図版24 1～6. 石製品  
 7～10. 木製品
- 図版25 1. 5B区北半(南から)  
 2. 5B区南半(南から)
- 図版26 1. 5号墳周溝北側(西から)  
 2. 5号墳周溝南側(東から)
- 図版27 1. SK2164(北東)  
 2. SK2174(北)  
 3. SK2183(南)  
 4. SK2183(南)  
 5. SK2166(北東)  
 6. SK2211(南東)  
 7. SK2210(南)  
 8. SK2210(西)
- 図版28 1. SK2018(南西から)  
 2. SK2021(南西から)  
 3. SK2022(東から)  
 4. SK2036(南から)  
 5. SK2035(北西から)
- 図版29 1. SK2047(南西から)  
 2. SK2030(北西から)  
 3. SK2057(南東から)  
 4. SK2045(南東から)  
 5. SX2010Aビット列西端ビット(北西から)  
 6. SK2076(北から)  
 7. SX2010Aビット列東端ビット(東から)

8. SX2010Bビット列中央ビット(南から)
- 図版30 1. SK2071 (東から)  
2. SK2070 (南東から)  
3. SK2066 (南西から)  
4. SK2069 (西から)  
5. SE2068 (南西から)
- 図版31 1. 土坑SK2179 (南西から)  
2. 土坑SK2220 (北東から)  
3. 土坑SK2160 (北西から)  
4. 土坑SK2129 (南西から)  
5. 土坑SK2186 (南から)
- 図版32 1. A27グリッド土器集中出土状況  
2. A30グリッド土器集中出土状況  
3. B30グリッド土器集中出土状況  
4. 5A区南半 (北西から)
- 図版33 1. SD2003・SD2006・SX2010 (西から)  
2. SD2007・SD2008 (北から)  
3. SD2001・SD2005 (北から)
- 図版34 1. SD2017・SD2019 (東から)  
2. SD2019・SD2048 (西から)  
3. SD2025・SD2031 (東から)  
4. SD2046 (南東から)  
5. SD2055北東隅 (北東から)  
6. SD2055南東隅 (東から)  
7. SD2055北半 (西から)  
8. SD2055南半 (西から)
- 図版35 1. 溝SD2090 (南東から)  
2. 溝SD2090 (南東から)  
3. 溝SD2095-1・2 (南東から)  
4. 溝SD2165、2168-1・2、2170・2177 (南東から)  
5. 5A区作業風景  
6. 5B区作業風景
- 図版36 1~9. 5号墳出土土器 (1:3)
- 図版37 1. 円形周溝1 (1:3)
2. SK2174 (1:3)  
3. SK2183 (1:3)  
4~6・10~12. 溝SD2090 (1:3)  
7・8. 土坑SK2172 (1:3)  
9. 土坑SK2192 (1:3)
- 図版38 1. SK2018 (1:3)  
2. SK2045 (1:3)  
3. SK2057 (1:3)  
4. SK2076 (1:3)  
5. SE2068 (1:3)  
6・7・14. SD2019 (1:3)  
8~12. SK2047 (1:3)  
13. SD2003 (1:3)  
15. SD2031 (1:3)
- 図版39 1. SK2066 (集合)  
2~7. SK2066 (個別) (1:3)
- 図版40 1. SK2186 (集合)  
2~7. SK2186 (個別) (1:3)
- 図版41 1~17. 5A・5B区遺構外 (1:須志器、  
2~17:土師質土器) (1:3)
- 図版42 1. A27グリッド土器集中 (集合)  
2~7. A27グリッド土器集中 (個別) (1:3)
- 図版43 1. A30グリッド土器集中 (集合)  
2~9. A30グリッド土器集中 (個別) (1:3)  
10~13. B30グリッド土器集中 (個別) (1:3)  
14~16. 5B区遺構外 (1:3)
- 図版44 1. 2. SK2018・SK2015・SK2070 (1:3)  
3. SE2068・SD2006・SD2007・SD2031 (1:3)  
4. SK2030・SK2045・SK2050・SK2069 (1:3)  
5. SE2068・SD2025・SD2048 (1:3)  
6・7. 土坑SK2220・土坑SK2179・溝SD2165 (1:3)
- 図版45 1~7. 5A・5B区遺構外 [1:縄文・

弥生・須恵器 2：中世須恵器 3：上師  
質土器 4：須恵器（子持壺） 5：国内  
陶器 6：[国内陶器（断面） 7：石器]  
(1：3)

图版46 1. 木簡全体写真

2. 木簡全体写真（赤外線）

3. 木簡全体図（1：3）

图版47 1. 木簡积文

2～5. 木簡拡大（赤外線）

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 道路計画の概要

都市計画道路である県道今市古志線は、出雲市街地の環状道路の一部をなす4車線の主要幹線街路であり、山陰自動車道とリンクし、出雲市の骨格となる街路として山陰自動車道の整備及び市街地内の他道路の整備に合わせ、島根県出雲県土整備事務所（以下、県土整備事務所という）によって計画され設置が進められている延長1.15kmの道路である。

## 第2節 発掘調査の経緯

### 平成15年度発掘調査以前

この道路は上塩冶町から今市町に及ぶ間で計画されているが、特に上塩冶町地内には史跡上塩冶築山古墳（以下、築山古墳という）などが存在する遺跡の密集地である。このため県土整備事務所は平成14年（2002）7月23日付けで、当該事業予定地内の埋蔵文化財について出雲市あて協議書を提出し、出雲市はこれに対し7月30日付けで試掘調査が必要な旨を回答した。その後、出雲市は11月25日、26日に試掘調査を行い事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地を概ね確定し、この調査結果を11月28日付けで、県土整備事務所あて報告した。

### 平成15年度

これを受けた県土整備事務所は平成15年（2003）4月1日付けで、県道今市古志線と同時に計画されていた県道出雲三刀屋線の両事業用地のうち、用地買収などが済んでおり発掘調査可能な範囲について、出雲市あてに埋蔵文化財発掘調査を依頼し、同日付けで委託契約を交わした。

これに基づき、出雲市は同年6月4日から11月30日まで県道出雲三刀屋線用地内の現地発掘調査（1区及び11号区両道路部）を実施した。さらに、12月1日から平成16年（2004）3月31日まで県道今市古志線予定地内の発掘調査（2区）を実施した。

なお、これらの発掘調査の報告書は平成17年12月（報告Ⅰ）及び平成19年3月（報告Ⅱ）にそれぞれ発刊済みである。<sup>1)</sup>

### 平成16年度

平成16年度は県土整備事務所と平成16年4月1日付けで交わした委託契約に基づき、出雲市が塩冶神社参道から南に延びる道路予定地である4D区・築山遺跡南区（1-8gr）の発掘調査を4月26日から8月2日まで行った。また、塩冶神社参道以北の道路予定地で、平成14年には用地買収の都合等で試掘調査ができなかった箇所について、県土整備事務所が7月23日及び10月15日付けで出雲市へ試掘調査の依頼を行った。これを受けた出雲市が試掘調査を行った結果は、8月23日及び平成17年2月23日付けで県土整備事務所へ報告された。特に8月23日付け

の報告では新たに発掘調査が必要となる箇所が指摘されていたため、県土整備事務所は10月15日付けで出雲市に追加で木調査の依頼をした。このため両者は10月28日付けで変更契約を締結し、出雲市は塩冶神社参道以北の調査区である4B区・築山遺跡北区(19-6gr)の発掘調査を10月28日から平成17年2月14日まで実施した。

#### 平成17年度

平成17年3月22日に出雲市ほか1市4町は合併した。このため、平成17年度当初の委託契約は出雲市の暫定予算内での締結となった。その後、県土整備事務所と出雲市は6月28日に変更契約することで通年の発掘調査に対応することとした。これにより、出雲市は4月25日から10月21日まで4A・4B東・4C区・築山遺跡北区(29-19、18-12、6-1gr)、10月6日から平成18年3月20日まで5A区・築山遺跡南区(21-32gr)の発掘調査を実施した。

#### 平成18年度

平成18年度は県土整備事務所と平成18年4月1日付けで交わした委託契約に基づき、出雲市は5B区・築山遺跡南区(34-55gr)の発掘調査を4月13日から10月20日まで行った。また、新たな調査区である3A～3E区・築山遺跡3区(CD01-CD24gr)の発掘調査を9月7日から平成19年3月31日まで実施した。

### 第3節 報告書の作成

5年度にわたって発掘調査を実施してきたが、既刊の報告書は平成15年度発掘調査分の2冊(報告Ⅰ・Ⅱ)のみであった。

県道は平成20年度中に竣工し、共用を開始する予定であったことから、一連の埋蔵文化財調査も同年度中に完了しなければならない状態であった。そのため、平成20年度に残り4年度分の調査成果をまとめて刊行することとなった。

整理作業は基本的に各年度の発掘調査と平行しながら現地事務所を進めてきたが、未整理・未岩手の内容も多々あり、作業は難航した。

しかし、年度末には調査成果を2冊(報告Ⅲ・Ⅳ)の報告書としてまとめ、刊行する運びとなった。

#### 注

- 1)『築山遺跡Ⅰ』—県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 2005 鳥根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会  
『築山遺跡Ⅱ』—県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 2007 鳥根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

## 関係する主な文書

平成16年（2004）

- 4月1日「埋蔵文化財発掘の通知について」県土整備事務所から（市教委）県教委へ
- 4月1日「都市計画道路（交付金B）今市古志線埋蔵文化財調査委託契約」県土整備事務所と出雲市
- 4月5日「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から（市教委）県土整備事務所へ
- 4月19日「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 8月5日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報の提出について（報告）」
- 8月5日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 8月9日「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ
- 8月11日「埋蔵文化財発見届」市教委から出雲警察署へ
- 8月11日「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 8月16日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ
- 10月27日「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 10月28日「都市計画道路（交付金B）今市古志線埋蔵文化財調査委託変更契約」県土整備事務所と出雲市

平成17年（2005）

- 2月15日「県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 2月15日「県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 2月16日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡北区）市教委から市教委へ
- 2月17日「埋蔵文化財発見届」市教委から出雲警察署へ
- 2月17日「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 2月23日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ

3月31日「業務完了報告書」出雲市から県土整備事務所へ

- 4月1日「今市古志線緊急地方道路（街路）事業埋蔵文化財調査委託契約」県土整備事務所と出雲市
- 4月15日「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 7月29日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 7月29日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 8月1日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡北区）市教委から市教委へ
- 8月4日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡北区）市教委から出雲警察署へ
- 8月4日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡北区）市教委から県教委へ
- 8月22日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡北区）市教委から市教委へ
- 10月21日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 10月21日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 10月24日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡北区）市教委から市教委へ
- 10月27日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡北区）市教委から出雲警察署へ
- 10月27日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡北区）市教委から県教委へ
- 11月2日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡北区）市教委から市教委へ
- 平成18年（2006）
- 1月31日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ

- 1月31日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 2月 6日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区分）市教委から出雲警察署へ
- 2月 6日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区分）市教委から県教委へ
- 2月10日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区分）県教委から市教委へ
- 3月20日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区30～32gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 3月20日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区30～32gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 3月24日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区30～32gr分）市教委から出雲警察署へ
- 3月24日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区30～32gr分）市教委から県教委へ
- 3月22日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡南区30～32gr分）県教委から市教委へ
- 3月30日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区30～32gr分）県教委から市教委へ
- 3月31日「業務完了報告書」出雲市から県土整備事務所へ
- 4月 1日「今市古志線地方道路交付金（街路）事業埋蔵文化財調査委託契約」県土整備事務所と出雲市
- 4月 1日「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 7月12日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区33～42gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 7月12日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区33～42gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 7月13日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡南区33～42gr分）県教委から市教委へ
- 7月18日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区33～42gr分）市教委から出雲警察署へ
- 7月18日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区33～42gr分）市教委から県教委へ
- 7月26日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区33～42gr分）県教委から市教委へ
- 10月23日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区43～55gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 10月23日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区43～55gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 10月23日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡南区43～55gr分）県教委から市教委へ
- 10月27日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区43～55gr分）市教委から出雲警察署へ
- 10月27日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区43～55gr分）市教委から県教委へ
- 11月10日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区43～55gr分）県教委から市教委へ

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と歴史的環境

出雲平野は、南北を中国山地と島根半島に挟まれ、中国山地から流れ出る神戸川と斐伊川の沖積作用によって形成された。

築山遺跡は、神戸川右岸の微高地に位置する。この微高地は、南側の丘陵裾から北側の水田面に向かって緩やかに低くなっている。東西の水田面との比高差は、東側の水田面とは差がほとんどないのに対し、西側の水田面とは約1.5mもの差がある。また、この微高地上には南から北へ築山遺跡、角田遺跡、宮松遺跡が広がっている。

以下、築山遺跡とその周辺の歴史的概観をみる。

築山遺跡からは縄文時代後期から弥生時代前期までの土器・石器が出土している。主要な出土遺物としては弥生時代前期の人面付き土器がある。築山遺跡周辺で見つかっている当該期の遺跡としては三田谷Ⅰ遺跡(38)がある。この遺跡は築山遺跡の南側丘陵を越えたところに位置し、直線距離で約1kmである。ここからは縄文時代後期の丸木船が見つかっている。

弥生時代中期～古墳時代中期の遺物は、築山遺跡からはほとんど出土していない。

弥生時代中期から後期にかけて入海「神門水海」周辺には古志本郷遺跡(45)や下古志遺跡(48)といった集落遺跡が次々と出現しているが、古墳時代前期には廃絶したり、規模が縮小したりしている。

古墳時代後期になると築山遺跡周辺には上塩冶築山古墳(34)と上塩冶横穴墓群(37)が造られている。従来、上塩冶築山古墳は1基のみ築造されたと考えられてきたが、今回周辺から7基の古墳が見つかり、本来は群集墳であったことが分かった。また、上塩冶横穴墓群の第34支群は、古墳群とほぼ同時期のもので、これ以後、連続と造墓活動が続いている。同時期に2種類の埋葬方法が存在することは、当時の社会構成を考える上で注目される。

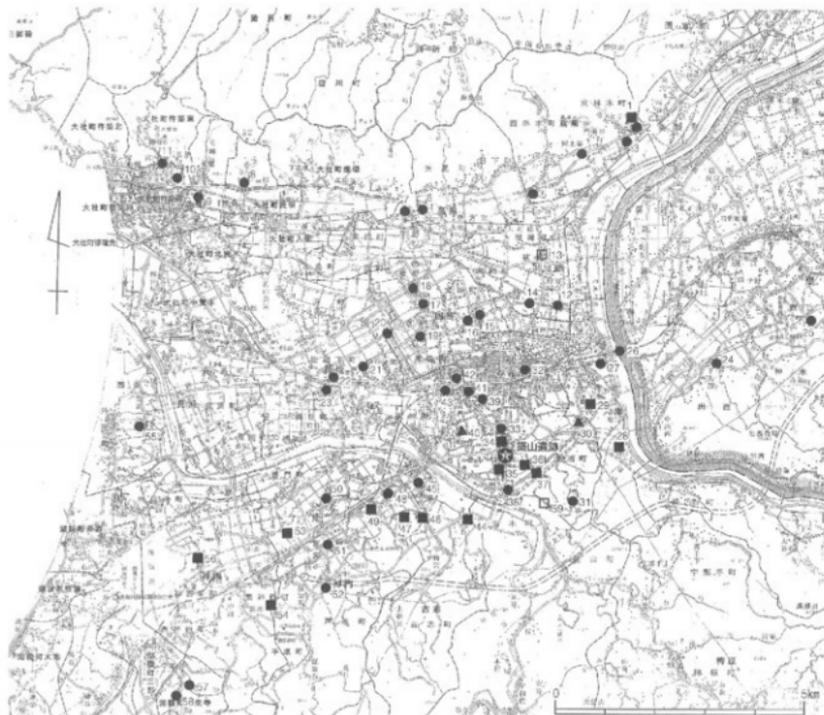
古代においては、8世紀に編纂された『出雲国風土記』に当時の様子がえがかれている。それによれば築山遺跡は神門郡の日置郷にあたる場所と推定される。塩冶神社周辺に日置郷があったとする考えもあるが、発掘調査範囲内では郷庁と判断できる遺構は見つからなかった。しかし、「佛」と書かれた黒書土器や、鉄鉢形土器などが出土しており、さらに、8世紀頃の須恵器蓋杯に火葬骨を入れて埋葬している土坑墓が見つかることなどから、調査地周辺に宗教に関する施設や役所などの公的な施設が存在した可能性も考えられる。

なお、神門郡の朝山郷の新造院と見られている神門寺境内廃寺(40)は、調査地の西約850mの地点である。

中世には掘立柱建物跡や方形の区画溝が見ついている。出雲平野での中世の建物跡は、藤小路西遺跡(16)、天神遺跡(43)、渡橋沖遺跡(19)などがある。築山遺跡の主な出土遺物と

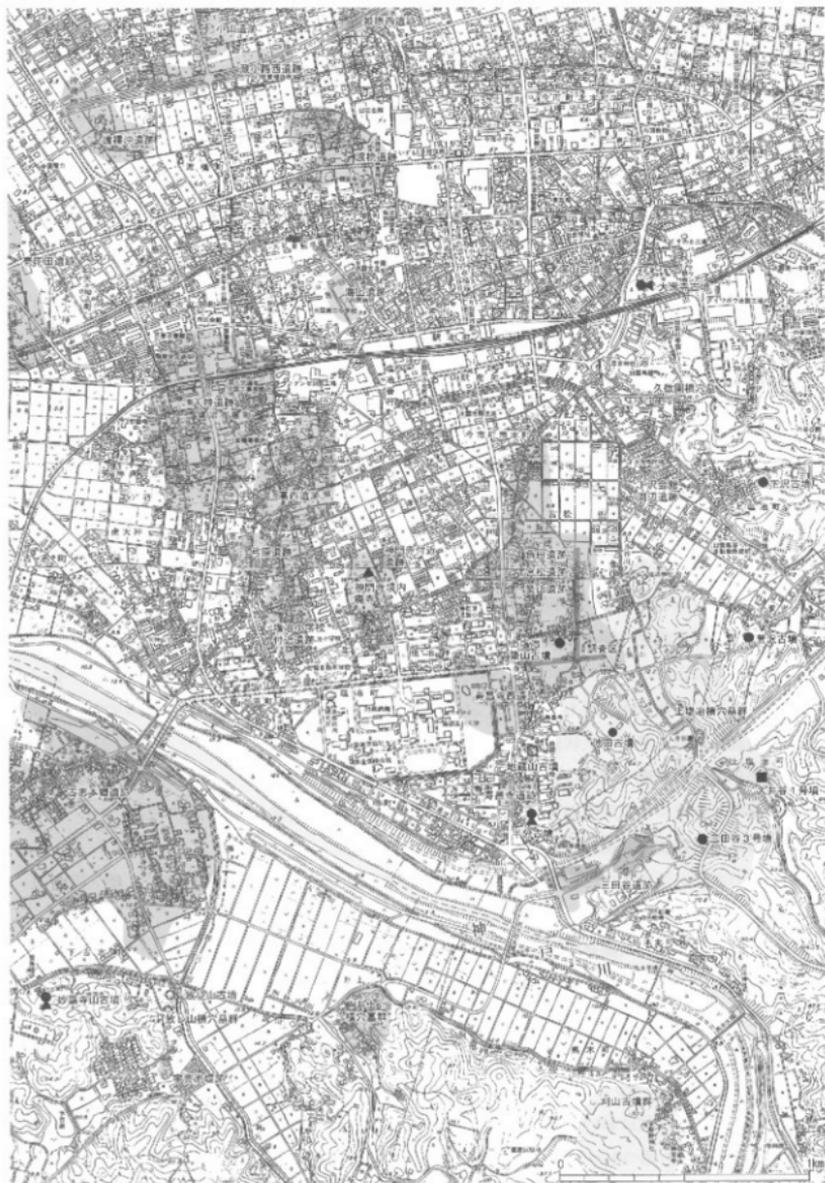
しては大量の輸入陶磁器がある。出雲平野において、輸入陶磁器の出土量は葦小路西遺跡に次ぐ量であり注目される。また、塩冶判官館跡の堀に推定されていた場所も今回調査地内であったが、堀などの館に関する遺構は見つからなかった。

このように、築山遺跡は出雲平野の南東部側の主要な遺跡として注目される存在である。



第1図 築山遺跡と出雲平野の主要遺跡 (1 : 100,000)

1. 大寺古墳 2. 大寺三蔵遺跡 3. 青木遺跡 4. 門前遺跡 5. 山持遺跡 6. 里方八石原遺跡
7. 高浜Ⅱ遺跡 8. 菱根遺跡 9. 原山遺跡 10. 五反配遺跡 11. 出雲大社境内遺跡 12. 中野清水遺跡
13. 荻村古墓 14. 中野美保遺跡 15. 姫原西遺跡 16. 葦小路西遺跡 17. 小山遺跡 18. 矢野遺跡
19. 渡橋沖遺跡 20. 白枝荒神遺跡 21. 壱丁田遺跡 22. 白枝本郷遺跡 23. 余小路遺跡 24. 後谷遺跡
25. 三井Ⅱ遺跡 26. 斐伊川鉄橋遺跡 27. 石土手遺跡 28. 権現山古墳 29. 西谷墳墓群 30. 長者原廃寺
31. 大井谷Ⅱ遺跡 32. 今市大念寺古墳 33. 角田遺跡 34. 上塩冶築山古墳 35. 上塩冶地藏山古墳
36. 池田古墳 37. 上塩冶横穴墓群 38. 三田谷Ⅰ遺跡 39. 藤ヶ森南遺跡 40. 神門寺境内廃寺
41. 善行寺遺跡 42. 海上遺跡 43. 天神遺跡 44. 井上横穴墓群 45. 古志本郷遺跡 46. 放レ山古墳
47. 妙蓮寺山古墳 48. 下古志遺跡 49. 宝塚古墳 50. 多聞院遺跡 51. 浅柄遺跡 52. 保知石遺跡
53. 神門横穴墓群 54. 北光寺古墳 55. 上長浜貝塚 56. 山地古墳 57. 三部竹筒遺跡 58. 御領田遺跡
59. 光明寺3号墓



第2図 築山遺跡と周辺の遺跡（1：20,000）

## 第2節 過去の調査

築山遺跡を対象とした最初の調査は、昭和60年度（1985）の範囲確認を目的とするトレンチ調査である。その後、平成12年度（2000）には、塩冶判官館跡のトレンチ調査が行われている。平成14年度（2002）には、築山土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われている。平成15年度（2003）から平成19年度（2007）には、県道出雲三刀屋線と県道今市古志線に伴う発掘調査がそれぞれ実施されている。簡単にこれらの調査内容を振り返ってみたい。

### 昭和60年度発掘調査（学術調査）

この調査では5つのトレンチが設定され、第1・2トレンチは築山古墳の墓域確認のため、第3・4・5トレンチは築山遺跡の範囲確認のために設定されている。第3・4・5トレンチからは遺物が出土しており、築山遺跡が広範囲に拡がることが確認できた。

### 平成12年度発掘調査（学術調査）

塩冶判官館跡の堀とされている場所にトレンチが1箇所設定された。しかし、堀の存在を認める遺構や遺物は見つかっていない。

### 平成14年度発掘調査（開発に伴う調査）

この調査の特筆すべき遺構としては、弥生時代の溝や土坑であり、遺物としては縄文時代後晩期の土器と塩冶氏家紋入漆碗が挙げられる。

### 平成15年度発掘調査（開発に伴う調査）

包含層ではあるが、縄文時代後期～弥生時代前期にかけての土器や石器が見ついている。また、奈良時代の火葬墓も見ついている。火葬墓は素掘りの土坑に、火葬人骨の納めた須恵器の蓋杯が据え置かれた状態で見ついている。

### 平成16年度発掘調査（開発に伴う調査）

古墳の可能性のある周溝が見つっており、周溝内からは土器も出土している。

### 平成17年度発掘調査（開発に伴う調査）

中世の方形区画溝や建物跡が見ついている。また、遺物としては呪符木簡や、輸入陶磁器が見ついている。

### 平成18年度発掘調査（開発に伴う調査）

古墳と古墳の可能性のある周溝が見つっており、周溝からは古墳時代の土器が出土している。また、古代の土坑墓も見ついている。

### 平成19年度発掘調査（開発に伴う調査）

円墳4基を確認した。いずれも墳丘は削平されていたが、玉や馬具といった副葬品が見ついている。また、古代においては「佛」と書かれた墨書土器や鉄鉢形土器など仏教との関連をうかがわせる遺物も見ついている。縄文晩期から弥生初頭にかけての人面付土器をはじめ土器・石器が見ついている。



第3図 4区・5区全体図 (1:3,000)

## 第3章 4区の調査成果

### 第1節 調査の概要（第4図、図版2～5）

今回報告分の調査区（4区）は、4つに区分されるので、これらを北から、4A区・4B区（4B東区）・4C区・4D区として報告する（第4図）。各調査区の調査年次や面積などの詳細は例言を参照されたい。

今回の調査区では、遺構検出面（地山面）はどこも東にむかって低くなっていた。これは調査区が谷地形（通称、大井谷）の西辺部に位置するためである。

調査の結果、各調査区で縄文時代から中世末（16世紀）にいたる各種遺構を確認した。なかでも、4C・4D区では遺構が密に分布していた。これらの多くは中世期（12～16世紀）の所産であり、古代以前の遺構は希薄であった。

#### 1 基本層序（第5～9図）

##### 4A区

上から耕作土（床土含む、約40cm、1層）・灰褐色粘質土層（約20cm、2層）・黒褐色粘土層（約10～20cm、3層）・第1ハイカ相当層（地山層）が堆積していた。また、調査区の北部東半では、黒褐色粘土層（3層）と地山層との間に黄褐色シルト層（約10cm、4層）があった。2層から4層は遺物包含層であり、これらを人力で除去したのち、地山層の上面で遺構検出を行った。地山面の標高は西側で約8.1m、東側で約8mである。

##### 4B区

4B区の北部は、基本的には4A区と同じ層序である。灰褐色粘質土層（2層）が約30cmとやや厚く、逆に黒褐色粘土層（3層）は約5cm前後と薄かった。

4B区中央の12ラインあたり以南では灰褐色粘質土層（2層）がなくなり、地山上には黒褐色粘土層（3層）が厚さ約20～30cm堆積していた。

遺構は地山面上で確認したが、溝SD1047は2層上面から掘削されている。

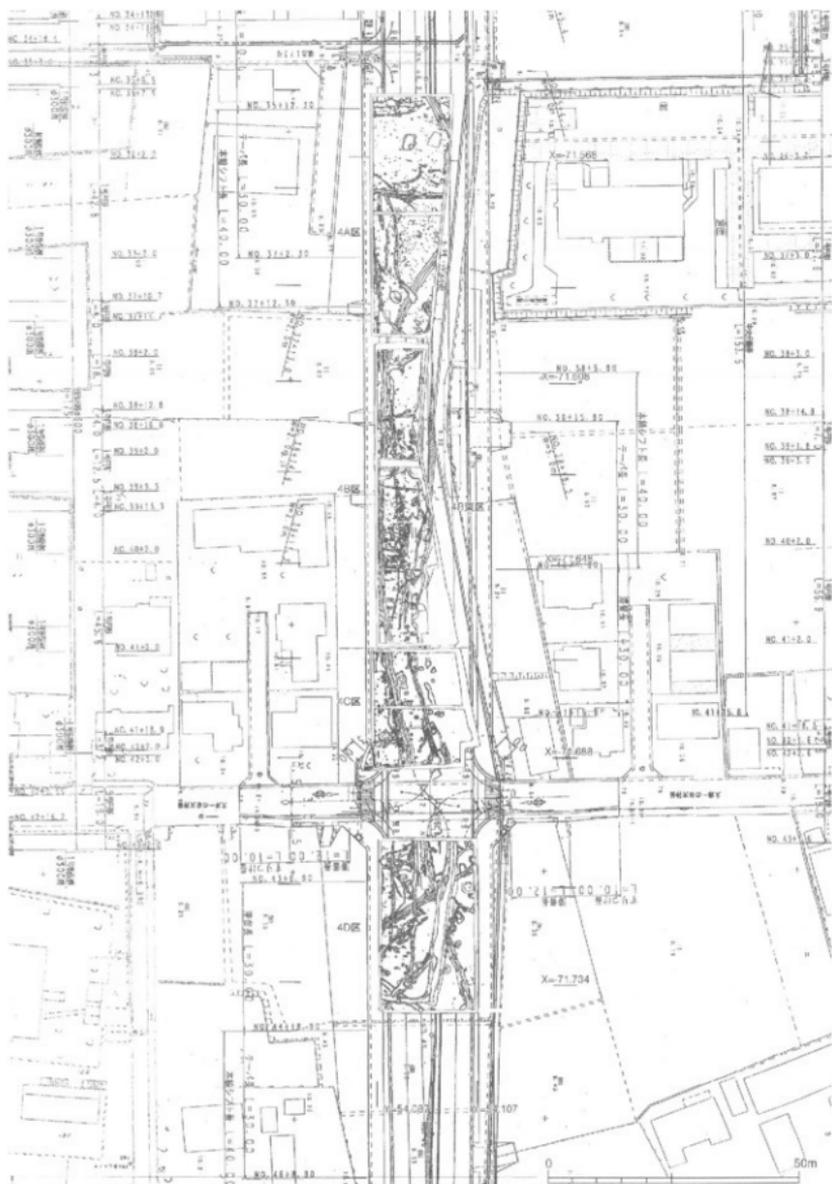
調査区の最高標高は西側で8.5m、最低標高は東側で8m、やはり東側へと地山面が下がる。

##### 4B東区

16グリッド内での底面の最高標高は8.3m（A16グリッド）、最低標高は7.9m（E16グリッド）で、東西で40cmの高低差がある。遺構は4C区東側と同じく最も疎である。

##### 4C区

基本的には4B区と同じである。北半部に一部、灰褐色粘質土層（2層）の堆積が認められた。4C区の最高標高は西側で8.6m、最低標高は東側で8mを測る。



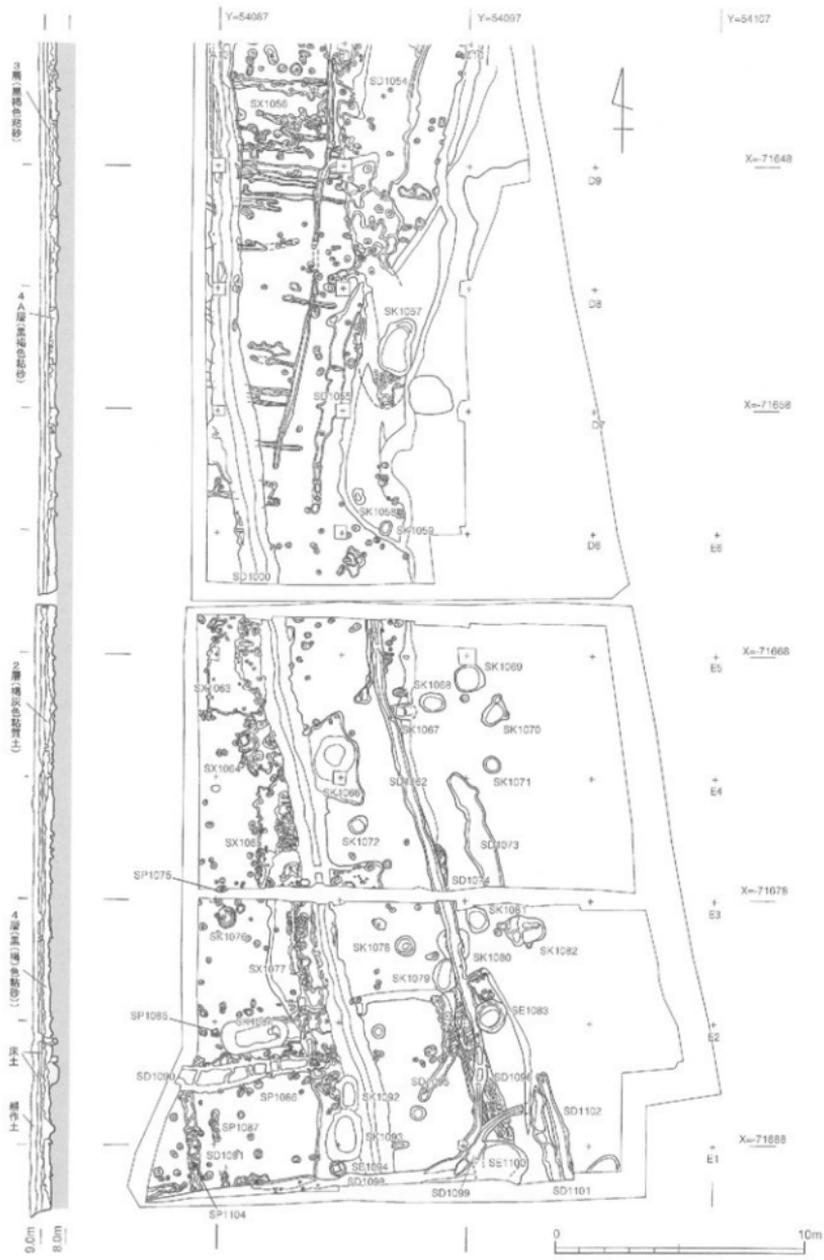
第4図 4区全体図 (1:1,000)



第5図 4A区遺構図(1:200)



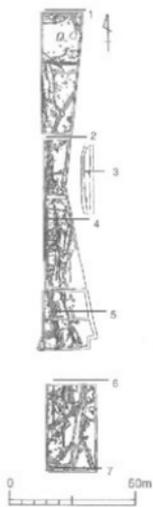
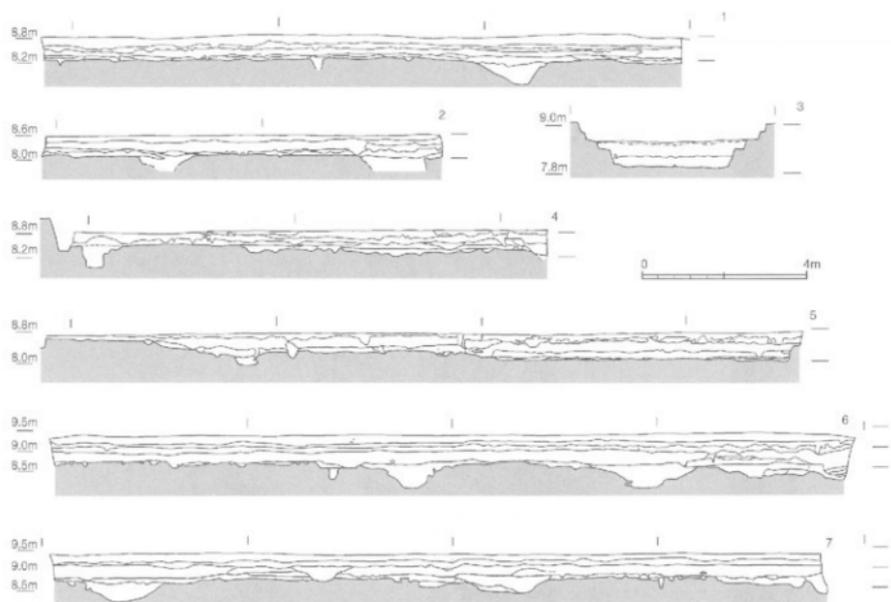
第6図 4B区(1)・4B東区遺構図(1:200)



第7图 4B区(2)·4C区遗構图(1:200)



第8図 4D区遺構図(1:200)



第9図 調査区土層図 (1 : 120) と土層位置図 (1 : 2,000)

#### 4D区

4C区と違って地山には薄く黒褐色粘土層（3層）が堆積しており、その上に約30cmの厚さで灰褐色粘質土層（2層）が堆積する。4D区の東部では、地山層上に3層はなく、かわりに暗灰色シルト層（6層）が約10～20cmの厚さで堆積していた。

黒褐色粘土層（5層）は、4D区南辺で、3層と6層との間に挟まれるように確認した土層である。最高標高は西側で8.7m、最低標高は北東側で8.2m。

## 2 遺構とその出土遺物

主要な遺構の詳細を以下記述する。

### (1) 縄文時代の遺構と遺物

**溝SD1033と堅穴状遺構SX1034**（第6・11図、図版12） 4B東区のE16グリッド内で検出した遺構である。検出標高は7.9mである。

溝SD1033は断面逆台形を呈した東西方向の素掘り溝である。堅穴状遺構SX1034は平面形が方形と考えられ、底面は平坦、壁はほぼ直立する。SX1034は溝SD1033の埋土に掘りこまれている。

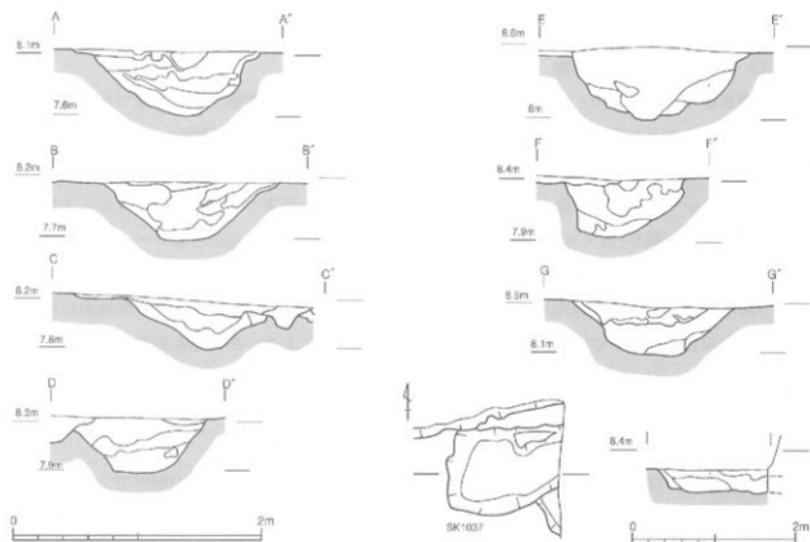
溝SD1033の出土遺物は皆無であるが、堅穴状遺構SX1034からは縄文土器の破片が数点出土した。これらはすべて同一個体と考えられる（図11-1～3、図版12-1）。1は口唇部に小さな刻み目をもつ深鉢の口縁部である。3はその胴部、2はその底部で、丸底である。器面調整は内外ともナデと思われる。詳細な時期は不明であるが、第1ハイカ層の上に形成された遺構なので、時期は縄文時代後期中葉以降と考えられる。

### (2) 弥生時代の遺構と遺物

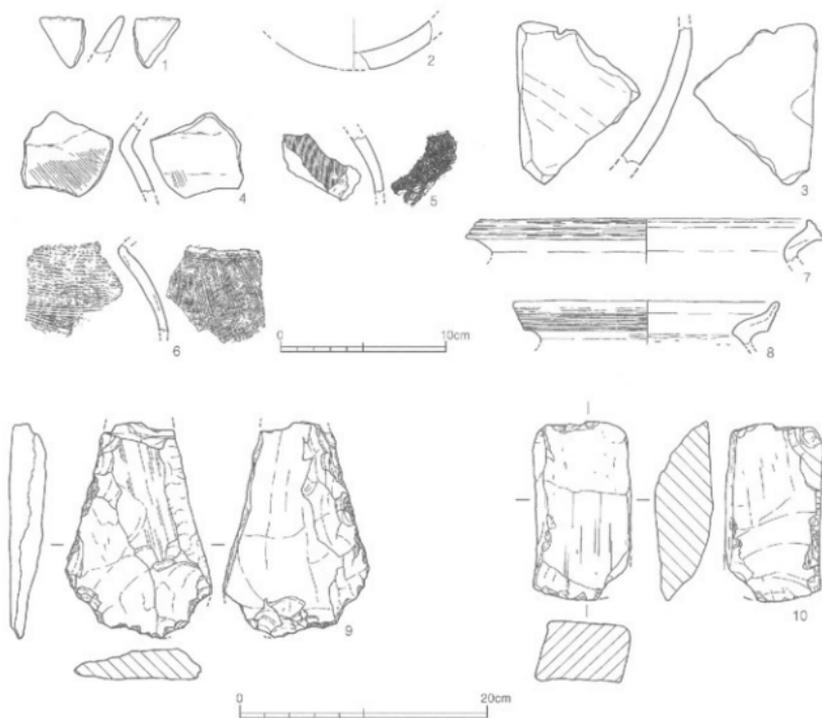
**南北溝SD1000**（第10・11図、図版2・6） 4区を縦断する素掘りの南北溝である。4A区北部では北西から南東方向へ延びて、一旦、調査区外へと消える（図版6-1）が、南部では再び調査区内を北北東-南南西方向に走る（図版6-1）。4A区南部で南へ湾曲し、4B区ではほぼまっすぐに南下する（図版6-2）。4C区北部から南東へ方向を変え、4C・4D区を貫通する（図版6-3・4）。総延長は200mにも及ぶ。傾斜変換点から数メートル西に離れて併走しているようで、地形に沿って掘削されたものと考えられる。本調査区では最も古い遺構である。底面の標高は最南端付近で8.15m、最北端付近で7.6mをはかり、自然地形に合わせて南から北へ傾斜している。断面形態はほぼ逆台形をしており、黒褐色粘砂及び粘土が堆積していた。

遺物は、上面からは古代から中世の土器が出土するが、これらはみな混入品である。量は少ないが、確実に埋土中から出土したものを掲載した（図11-4～10）。

4は如意形の口縁をもつ甕の頸部である。5は外面に刺突文を施した甕の胴部で、内面調整はケズリである。6・7は中期後半、8は後期後半の甕口縁部である。9は打製石斧。10は使用痕ある鏝。



第10図 弥生時代の遺構図と土層図 (S D1000は 1 : 400 と 1 : 80、S K1037は 1 : 40)



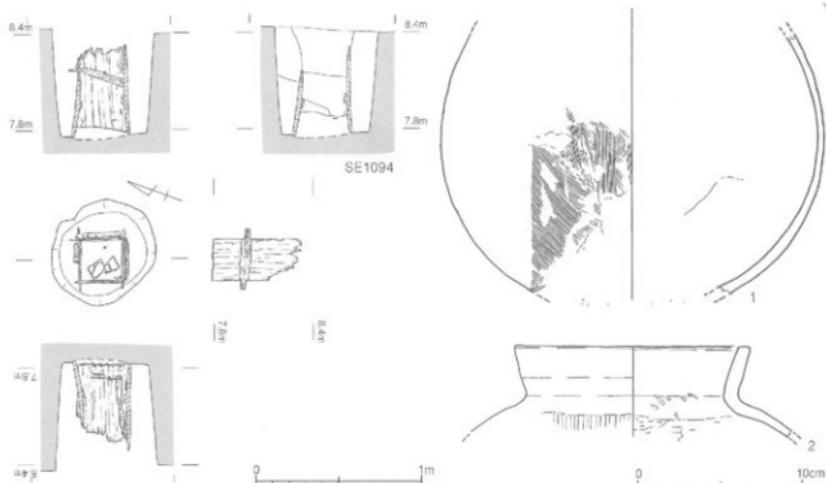
第11図 縄文・弥生時代の遺物実測図（土器1：3 石器1：4）

以上より、南北溝SD1000は、弥生時代後期末のものと考えられる<sup>20</sup>。しかし、今回の調査区からは同時期の遺構が他に検出されなかったことや出土遺物がごく少ないことを考慮すると、居住域からは離れていると思われる。

**土坑SK1037**（第10図） 4B区で検出した土坑である。平面形態がやや歪な長方形をした土坑である。SX1030・SD1032と重複し、それより古い。後述する土壌墓に近接し、平面形態も大きさも似ている。古代の遺構と考えられる溝SD1032よりは古いものの、出土した2点の土器が小片であるため弥生土器と断定しきれない。

### （3）古墳時代の遺構と遺物

**井戸SE1094**（第7・12図、図版7-1・2） 4C区南辺中央にある井戸で、平面円形の掘形に、縦板組方形の井戸枠をすえ付けている。掘形の壁はほぼ直立している。また、井戸枠の各辺はおおむね方位にそろう。重複関係からすると、南北溝SD1000より新しく、SX1077および土坑SK1093より古い。下辺に鋸状の切り込みを入れた枠板（現存長55cm、現存幅30cm）



第12図 古墳時代の遺構実測図と遺物実測図（遺構 1 : 30 土器 1 : 3）

を掘形の底に立て、東西の枠板にあけた枘穴に横木を差し込んで組んでいる。裏込め土は黒褐色粘質土で下半部は地山の砂が含まれている。掘形からは遺物は出土していない。井戸内の埋土は軟質の暗褐色粘質土である。

埋土の最上層上面から須恵器片が1点出土したが、混入物と考えられる。井戸枠内の底面からは古式土師器の甕胴部が出土した（第12図1）。器壁は薄いが焼成は良好である。外面全体に煤が付着している。

以上より、井戸SE1094は古墳時代前期と考えられる。

溝SD1096（第7・12図） 4C区の溝SD1062・SD1095・SD1099などの下から検出された溝である。底面は凹凸が著しい。出土遺物は、土師器の甕口縁部片1点のみ（第12図2）。口縁部は若干膨らみをもつが直線的で、口唇部は平坦面をもつが、端面はわずかにくぼんで沈線状となる。出土土器より古墳時代中期の遺構と考えられる。

#### （4）古代（奈良～平安時代）の遺構と遺物

土坑SK1067・SK1068・SK1069・SK1070・SK1071（第13図6） 4C区東北部の5m四方の範囲に密集する5基の土坑である。それぞれ平面形態は楕円形と長楕円形である。いずれの土坑も基本的には灰褐色粘質土の単一層を埋土とする。土坑SK1068は灰白色シルトブロックが多く混入する灰褐色粘質土を埋土とし、人為的に埋められたようである。

出土遺物は、土坑SK1068底面から弥生土器の小片1点、土坑SK1070からは須恵器甕の胴部破片（第14図6）がある。これら4C区東側で確認した遺構は、層位関係から古代のものと

考えた。

**土坑SK1080** (第13図、図版7-3) 4C区のほぼ中央にある素掘りの土坑。室町時代の溝SD1062の真下で確認した。平面は楕円形、壁はやや急傾斜である。埋土は整然とした堆積状況を示していた。2層・3層間から、木杭2本と自然木2本が出土した。また、それらと共に斧状の石製品1点が出土した。検出状況などから古代の遺構と考えられる。

**井戸SE1051** (第6・13・14図1) 小規模だが井戸と思われる遺構である。4B区のほぼ中央に位置する。溝SD1050と完全に重複し、その下層から見つかった。底面から土師器壺片(第14図1)と縄が1点ずつ出土したのみである。溝SD1050より古いので、古代の遺構と推定する。

**井戸SE1137** (第8・13・14図8) 4D区の西辺中央部にある素掘りの井戸。溝SD1123を掘削中に確認した。掘形は楕円形をした断面形態はバケツ形である。出土遺物は凝灰岩製の磨石1点(第14図8)である。10世紀の溝SD1123に壊されているので、古代の遺構とみてよからう。

**井戸SE1142** (第8・13図) 4D区南部にあり、掘形の西側を溝SD1120に1/4程度壊されているが、井戸と考えられる。平面形態は長楕円形に復元できる。断面形態は楕円状をしていて、そのほぼ中央に水溜部がある。埋土最下層には植物繊維を含んでいる。出土遺物は皆無である。井戸SE1142は、埋土などから古代の遺構ではないかと考えられる。

**東西溝SD1032・SD1052** (第6図、図版7-5) 4B区中央やや北にある東西方向の素掘りの溝である。互いに規模はよく似ており、約15mの距離をへだてて併走しているが、東に向かってやや離れていく。断面形はほぼ矩形を呈し、壁はしっかりとした立ち上がりである。両者の間が道路状遺構である可能性も考え精査したが、踏み固めたような痕跡は認められなかった。

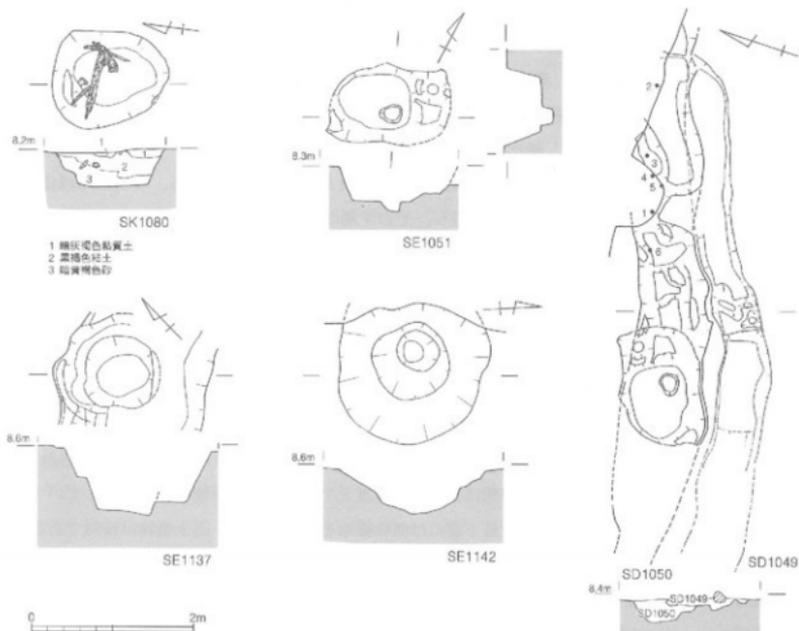
出土遺物は、それぞれ古式土師器の壺小片1点と土師器小片1点のみである。2条の溝とも南北溝SD1000以外、いずれの重複する遺構よりも古いことを考慮すると、古代の遺構と考えられる。

**溝SD1049・SD1050** (第6・13・14図2~4) 4B区西壁からゆるく湾曲しながら北東へ延びる溝である。東端は溝SD1047とSX1048に壊されて取東してしまう。溝SD1050が埋没したのち、南側にずらして浅く掘り直したのが溝SD1049である。

出土遺物は、溝SD1049からは土師器の小片6点のみである。1点には丹塗りが施されている。溝SD1050からは須恵器・土師器・弥生前期土器(小片1点)などが出土した(中袋に1袋分)。第14図2・3は須恵器で2は皿の底部で、底面にはヘラ切り痕が残っている。3は壺の底部付近で外面には平行タタキ目ののちにカキ目を施している。4は土師器壺の口縁部である。

**溝SD1054** (第6・7・15図) 4B区南半を南北に延びる浅い溝である。検出長28.3m。溝というよりもSX1056のような耕作に関わる遺構の可能性もある。

出土遺物は、須恵器・土師器・砥石(1点)・鉄滓(1点)がある(大袋1袋分)。C9グリッ



第13図 古代の遺構実測図 (1:60)

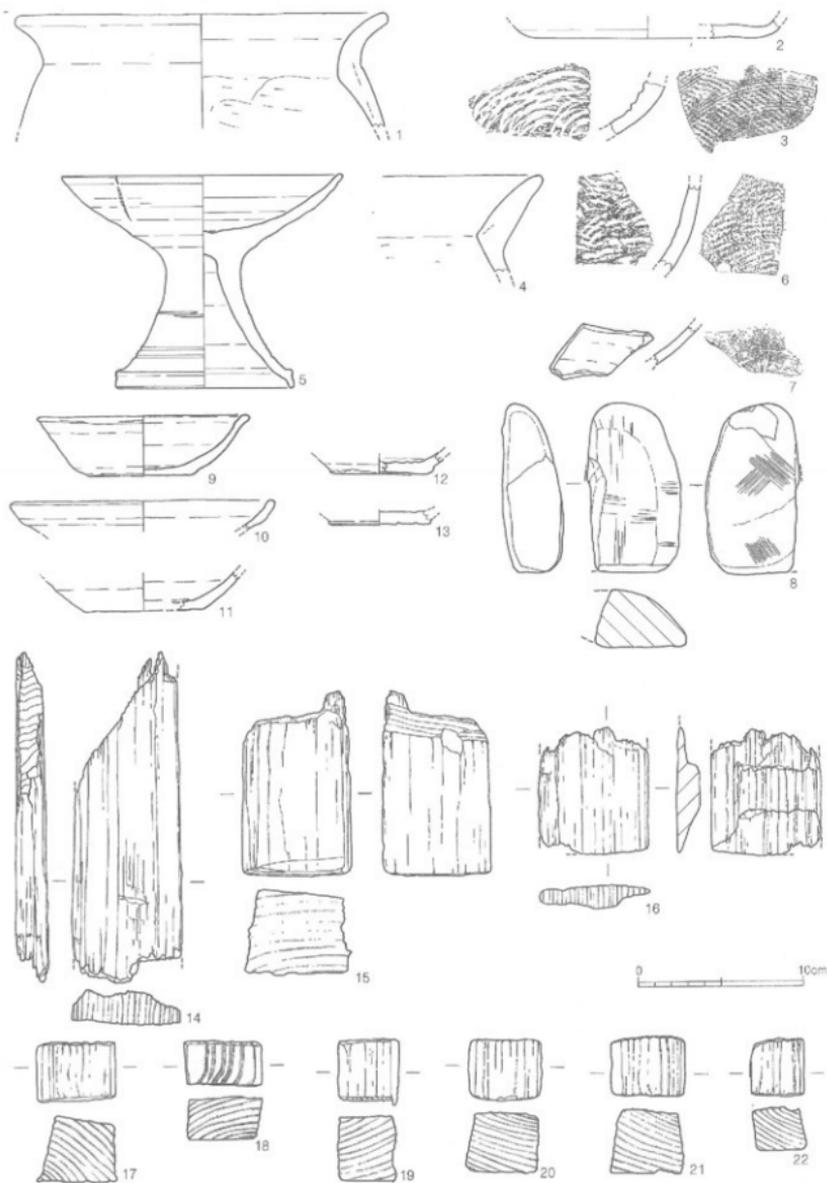
ド内でややまとまって出土した。

第15図1～3は須恵器。1は高台付杯の底部、2は壺の口縁部である。頸部に接合痕が明瞭に残る。外面の一部には自然釉がかかっている。3は壺の底部である。外面は回転ヘラケズリ調整を行ったのちに高台を接合している。4・5は土師器で、4は内外丹塗りの皿、5は杯の底部で底面には回転糸切り痕が残る。6は砂岩の砥石である。両先端は敲打面として、4面は砥面として利用している。また全面に赤色顔料が付着している。出土遺物から8～9世紀のものである。

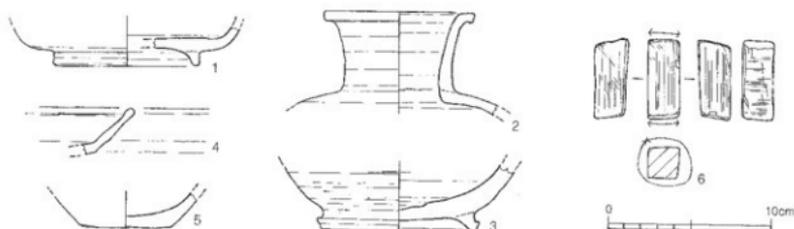
南北溝SD1073 (第7・14図7) 4C区中央にある南北溝である。埋土は暗灰色砂で、木切れを多く含む。

出土遺物は、弥生土器小片2点・須恵器片2点・加工痕のある石器1点である。第14図7は須恵器の碗と思われる破片で、浅く「十」の記号が刻まれている。須恵器からみて、奈良～平安時代の遺構であろう。

斜行溝SD1123 (第8・14図9～22) 4D区を斜行する溝である。総長23mにおよび、両端は調査区外に延びる。井戸SE1137より新しいほかは、溝SD1120など重複している全ての遺



第14図 古代の遺構出土遺物実測図1 (土器 1 : 3 その他 1 : 4)



第15図 古代の遺構出土遺物実測図2 (1:3)

構より古い。4 D区の他の溝状遺構とは方位を異にし、東北東～西南西 (N-55°-E) である。断面形態は逆台形状に近い。埋土はおもに褐灰色粘質土と暗褐色粘土である。

出土遺物は、重複する溝SD1120以東では皆無であるが、それより西からは須恵器片 (1点)・土師器・磨石 (1点)・木材が出土した (中袋1袋分)。

第14図9～13は土師器の杯である。9は底部からやや内湾して立ち上がる体部をもち、口縁部はわずかに外反する。10は口縁部、11～13は底部である。14～22は木製品。14・16は加工面をもつ板材、15は角材、17～22はサイコロ状の角材である。

出土土師器から、溝SD1123の年代は10世紀と考えられる。

**斜行溝SD1145** (第8・14図5) 4 D区西南隅にある斜行溝 (北西-南東) である。埋土は主に暗褐色粘土である。

N-50°-Wに軸をとり、溝SD1123とはほぼ直交するが、両遺構の埋土の様相は違っており、西側調査区外で両者が繋がってL字状をなすかは不明である。底面は平坦で壁の立ち上がりは急角度である。井戸SE1146や溝SD1120・SD1144と重複し、これらよりも古い。

出土遺物は、須恵器の高杯第14図5のみである。5は器部が浅く口径の広いもので、脚柱部には1条の雫な凹線文 (始点と終点がずれる) とその下に2条の凹線文が施されている。脚端部は垂下している。

**S X 1036** (第6図) 4 B区の北部で確認した径1m強の土坑状遺構である。平面は楕円形を呈している。溝SD1031と溝SD1032に横されているため、歪になっている。後述する土壇墓の付近に位置し、平面形態も大きさも似ているが、出土遺物が皆無であるため、古代以前の遺構ということ以上は不明である。

#### (5) 中世の遺構と遺物

今回報告する4区では、中世 (12～16世紀) の遺構が最も多く発見された。これらを、建物跡、土坑、井戸跡、溝、その他の順で記述する。

4 D区の西部では、地山上面で柱根や柱穴を確認した。これらは、ほぼ方位にそった建物など3棟と柵列2条に復元することができた。

**建物状遺構 S X 1131** (第8・16・21図3～6・17・18) 南北4.6m×東西3.8mの距離で大型

の柱穴4基が方形に並び、その南北に約1mをへだてて小型の柱穴が4基並んだ遺構である。妻柱が見つからなかったことや、柱間が広い点など、建物とするにはやや難があるので「建物状遺構」とした。柱穴掘形の埋土は灰色系の粘土である。柱穴は南北溝SD1106・1107の埋土に掘り込まれている。出土遺物は、土師器片11点、青磁片1点である。第21図3は北西端の大型柱穴から出土した土師器杯底部、4・5は北東隅の大型柱穴から出土した土師器杯底部、6は南東隅の大型柱穴から出土した土師器杯底部である。

SX1131の中央の大型柱穴4基の上面には、炭化物や焼土を含んだ土が堆積していた。若干の鉄滓があったため鍛冶遺構の可能性も想定したが、確証は得られなかった。SX1131が焼けたためにその柱基部に炭化物が堆積した可能性が考えられる。柱穴の上面からは土師器片（小袋4袋分、杯底部：5・6）のほか有孔石製品（17）、台石状の礫（安山岩製、18）、獣骨（2点）、鉄滓が含まれていた。

**建物SB1132**（第8・16・21図7～9） SX1131の南西にある建物跡である。柱穴4基を確認したが、東西棟建物で西側は調査区外にあると推定される。梁間1間（4m）、桁行の柱間は2.5mである。柱穴掘形埋土は、SX1131と類似した灰色系の粘土であるが、SX1131とはごくかすかに建物の方位に振れがある。

出土遺物は、土師器片20点・植物の種（桃？）である。第21図7～9は土師器の杯と皿。7は杯底部、8は皿の口縁部で、体部が「ハ」の字状に大きく開いたものである。口縁部縁に煤が付着している。9は小皿の底部である。

**建物SB1134**（第8・16・21図10～12） 建物SB1132の約1m南にあって、方位をほぼそろえた東西棟の建物跡である。1間×2間以上で西妻は調査区外にある。

出土遺物は、土師器片12点である。第21図10は杯底部、11・12は小皿で、11は体部が外開きとなるが、12は体部が若干内湾する。

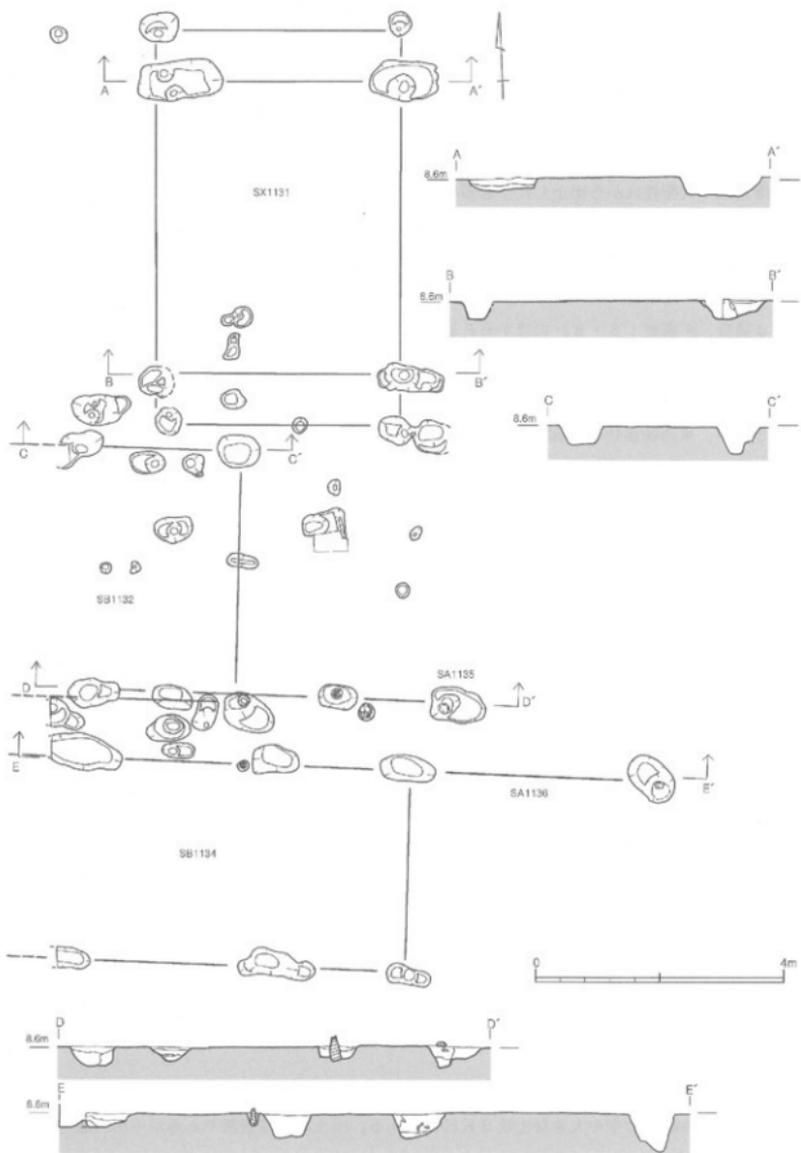
**柵列SA1135**（第8・16図） 建物SB1132の両側柱筋に重なり、調査区外の西へと延びると判断した柵列である。建物SB1132とは柱穴が重複しておらず新旧関係は不明である。東から2番目の柱穴には柱根が残存している。柱根は残存直径15cm、残存長40cmをはかる。出土遺物は、土師器片8点、フイゴの羽口片1点である。

**柵列SA1136**（第8・16図） 建物SB1134の北側柱筋の東延長上にある柵列である。出土遺物は、土師器片3点である。

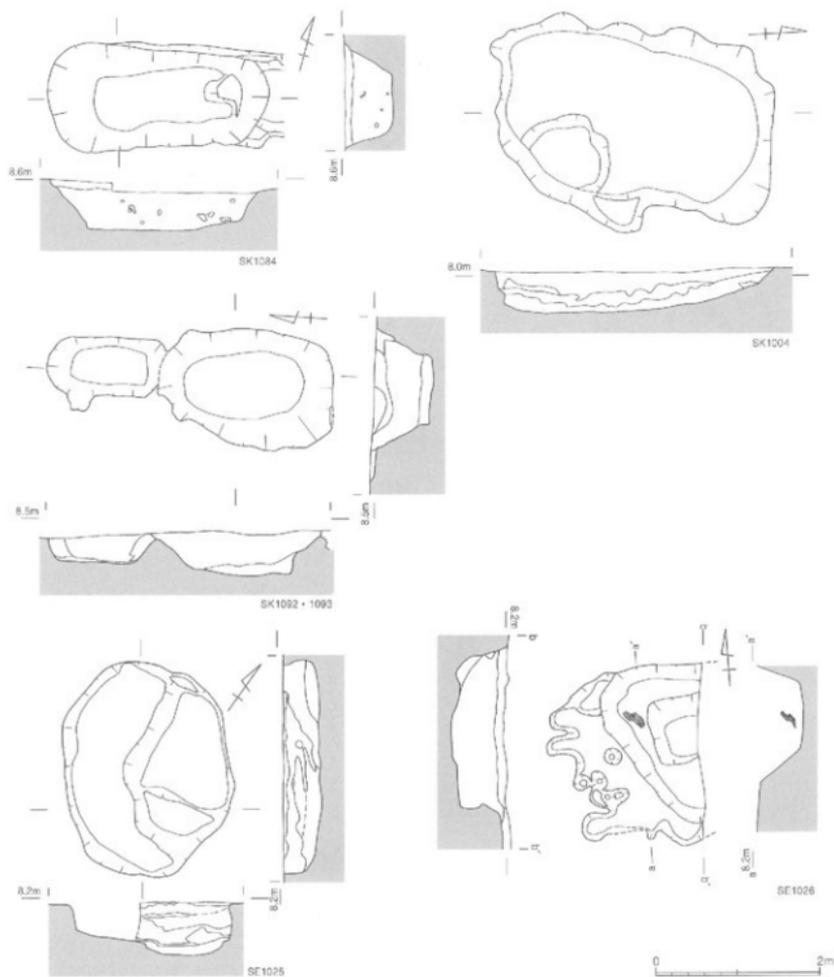
以上のSX1131、SB1132・1134、SA1135・1136は、いずれも柱穴掘形の埋土が灰色系の粘土であることが共通し、柱穴出土土器もほぼ15世紀代のものなので、一群の遺構と理解できよう。

**土坑SK1014**（第5図） 4A区中央部では、小規模なピットが集中して確認されたが、その中に1基のみ規模のやや大きな土坑SK1014がある。出土遺物は皆無であるが中世の遺構であろう。

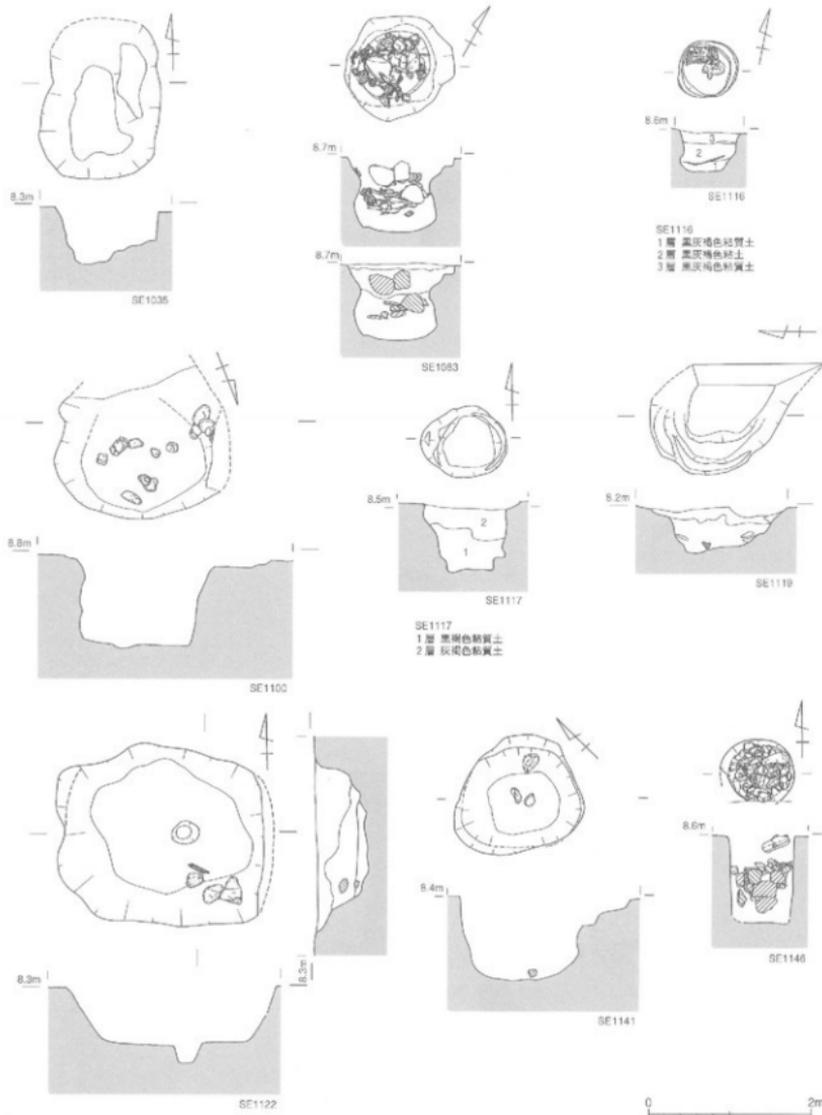
**土坑SK1048**（第6・20図、図版8-1） 4B区中央部の東壁沿いにある径約5mの大型の土



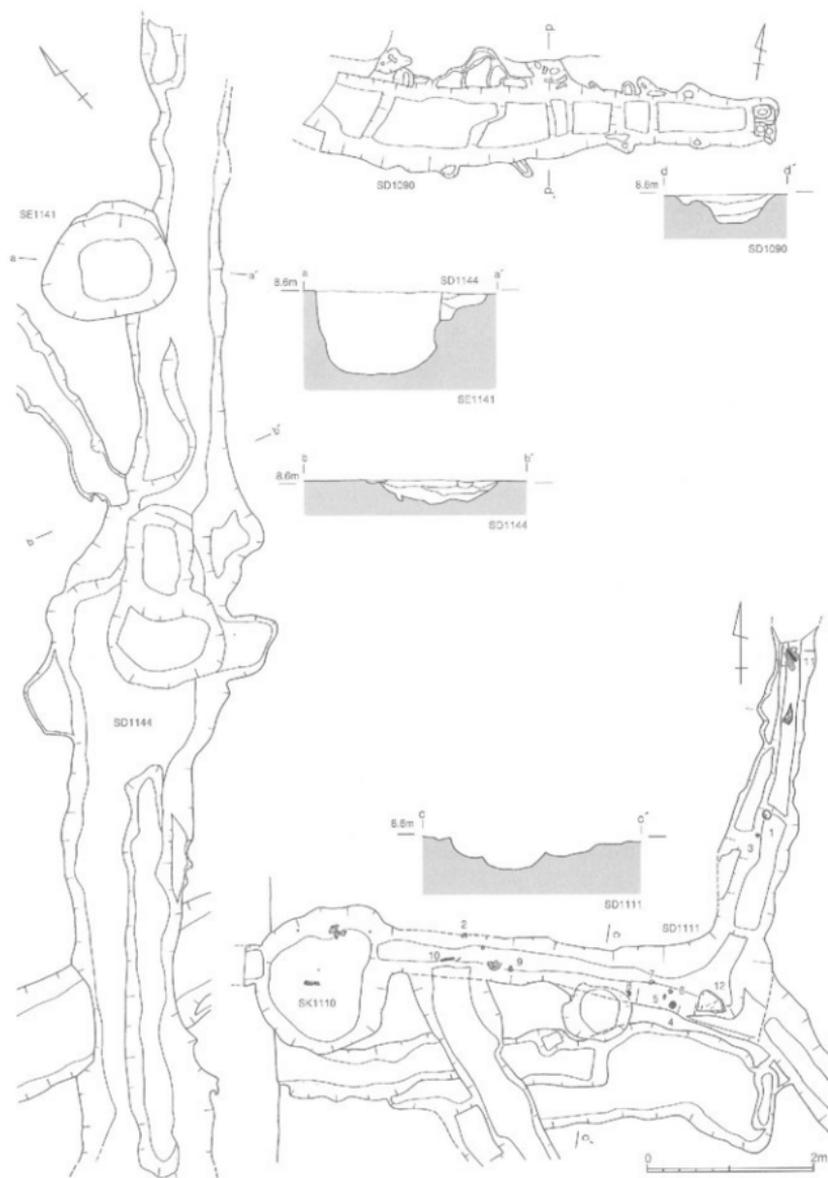
第16図 中世の建物遺構等実測図 (1 : 80)



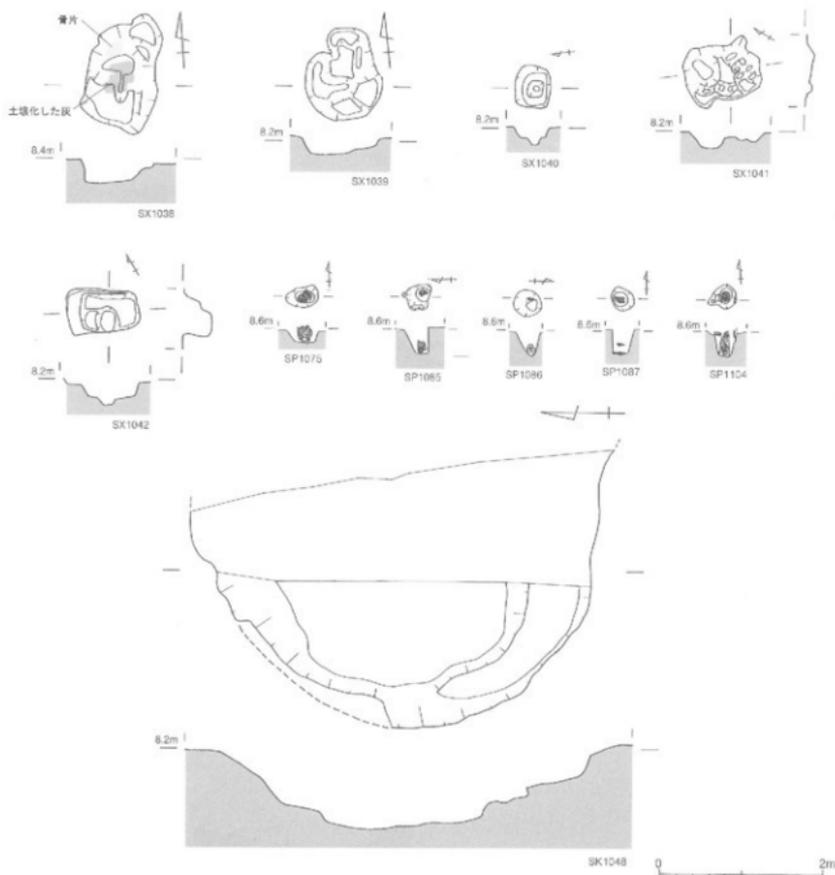
第17図 中世の土坑と井戸実測図 (1:60)



第18図 中世の井戸実測図 (1:60)



第19図 中世の溝実測図（1：60）

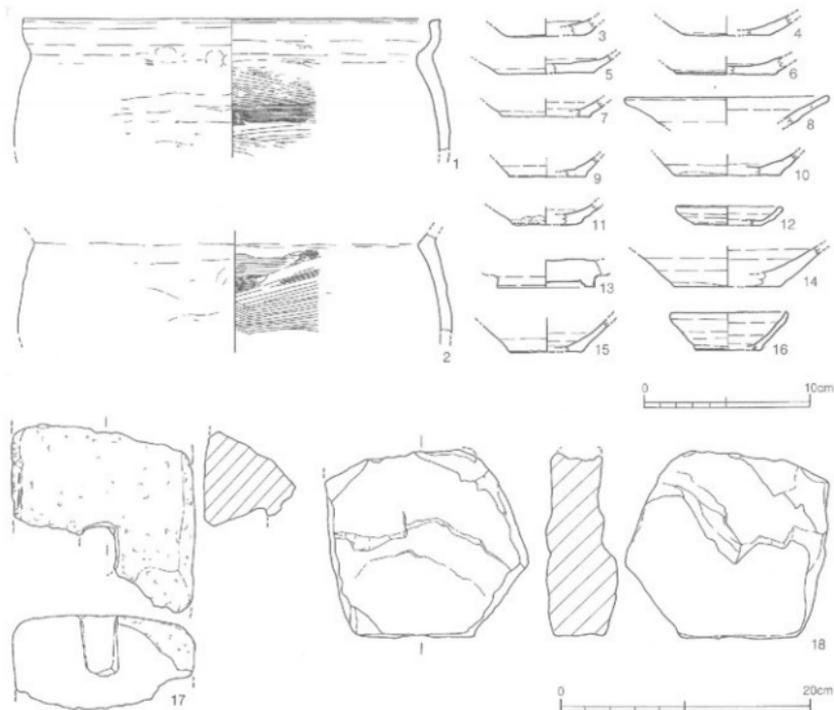


第20図 中世のその他の遺構実測図（1：60）

坑である。全体のおよそ半分を確認し、そのうち西側2/3程度の掘削にとどめた。東西溝SD1047によって1/3近くが壊されるが、斜行溝SD1050よりは新しい。搦鉢状の断面で底面は平坦である。粘土と粘砂からなる埋土3層が整然と堆積しており、円形の水溜ではないかと考えられる。最下層には植物質を含んでいる。

出土遺物は、須恵器・土師器が数点である。出土遺物からは時期不明であるが、東西溝SD1047以前である。

土坑SK1066（第7図） 4C区西北部にある不整形な土坑である。掘形は、本来、直径約1.8



第21図 中世の遺構出土遺物実測図1 (土器1:3 石器1:4)

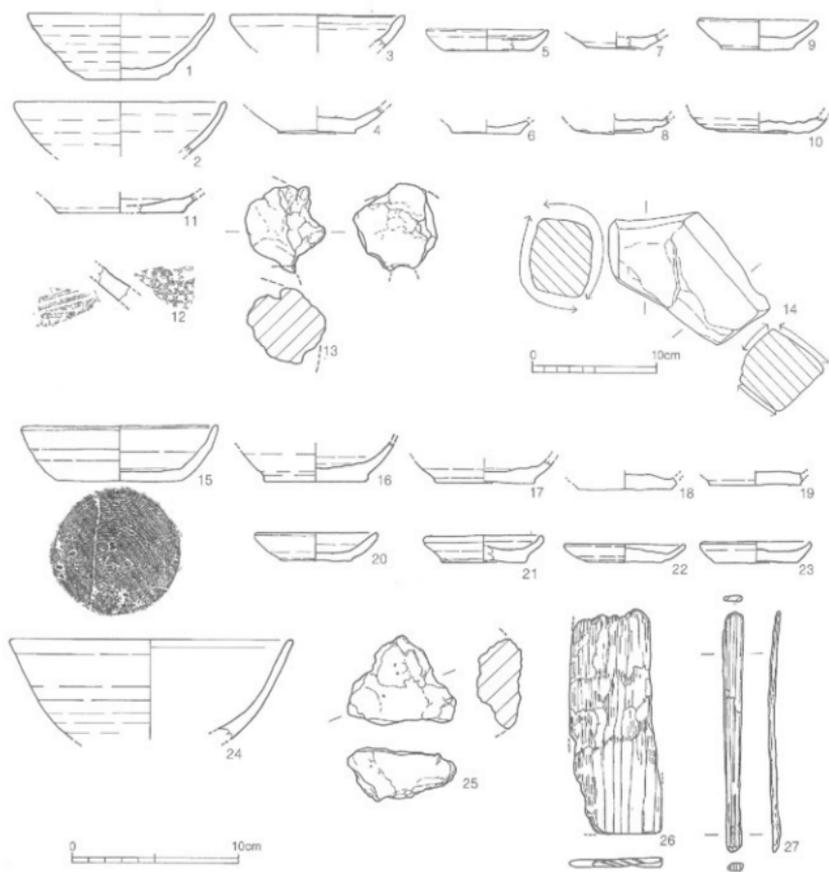
mをはかる楕円形であったと思われる。断面形態は逆台形である。灰褐色粘質土を埋土とし、長さ50cmと15cmの木片が出土した。他に出土遺物は無い。

**土坑SK1076・SK1078 (第7図)** 4C区の中央部やや西にある円形の土坑である。2基とも遺物包含層(黄褐色シルト層・4層)を掘り込んで作られている。

出土遺物は、土坑SK1076から土師器の小片(小袋1袋分)、土坑SK1078から土師器の小片が6点・砥石1点・礫2点があった。16世紀の遺構であろう。

**土坑SK1084 (第7・17・22図1~6、図版8-4)** 4C区西南部にある大型の土坑である。平面形は小判形である。土坑SK1084の埋土は暗褐色粘砂(灰白色シルトブロックを含みやや軟質)の単一層であるが、土坑上面には別の溝の埋土がわずかにのっていた。

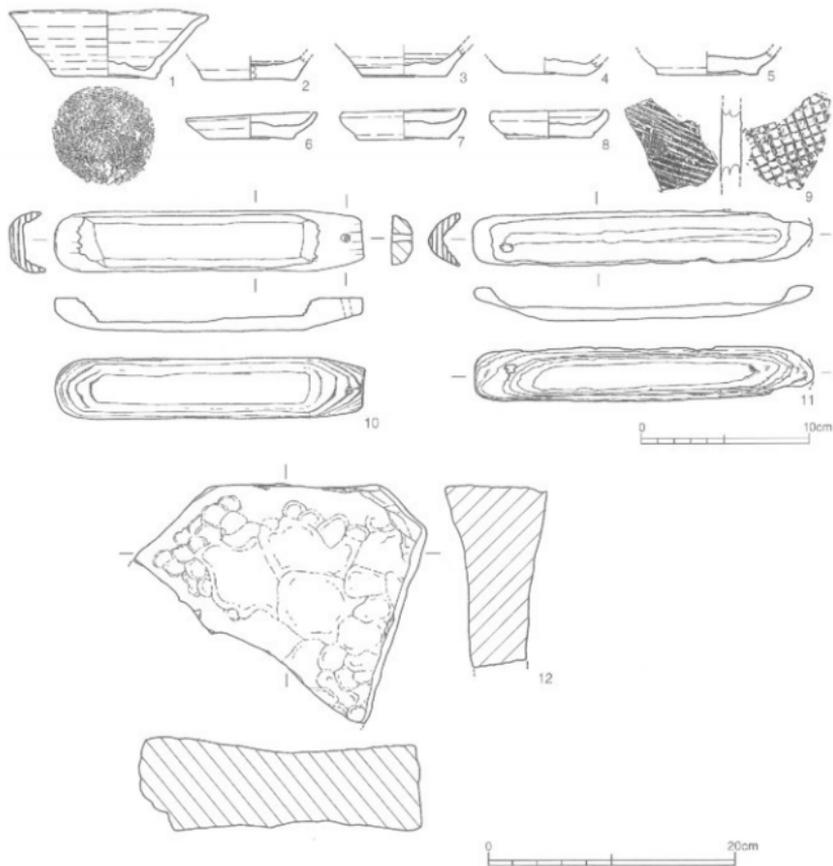
出土遺物は、土師器片である(大袋1袋分)。第22図1~3が杯、4~6は小皿である。5の皿は器壁がやや厚手で、口縁部内面には強いサデによる段がある。12~13世紀のものと考えられる。



第22図 中世の遺構出土遺物実測図2 (1:3 石のみ1:4)

土坑SK1092(第17・22図7・8、図版8-3) 4C区の西南部にあつて、小判形平面をした断面形態はバケツ形の土坑である。南端で土坑SK1093と接しており、SK1093より古い。底面は平坦で壁はやや急傾斜である。

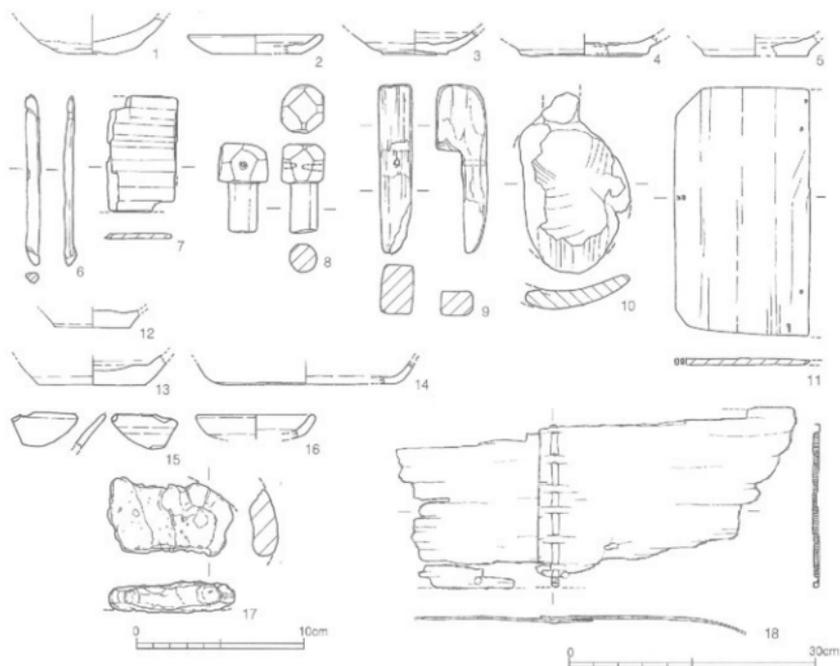
出土遺物は、土師器片5点、中世須恵器小片1点である。第22図8は杯の底部で、底部回転糸切りが切りっぱなしのため器壁のナデにより粘土の盛り上がりが残っている。7は小皿の底部である。ほかに中世須恵器の裏胴部片がある。外面は亀山系の格子タタキ目、内面は板目状の調整痕が観察される。これらは13~14世紀頃と考えられる。



第23図 溝S D 1111出土遺物実測図 (1 : 3 石のみ 1 : 4)

土坑SK1093 (第7・17・22図9・10・13、図版8-3) 土坑SK1092の南に接し、土坑SK1092より一回り大きな土坑である。平面が小判形をした断面形態はバケツ形の土坑であり、埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物は、フイゴの羽口第22図13 (1点) と土師器第22図9・10 (中袋1袋分) である。10は杯の底部で、底部から体部への立ち上がりは丸みを帯びたものである。9は小皿でやや厚手である。ともに13~14世紀のものであろう。

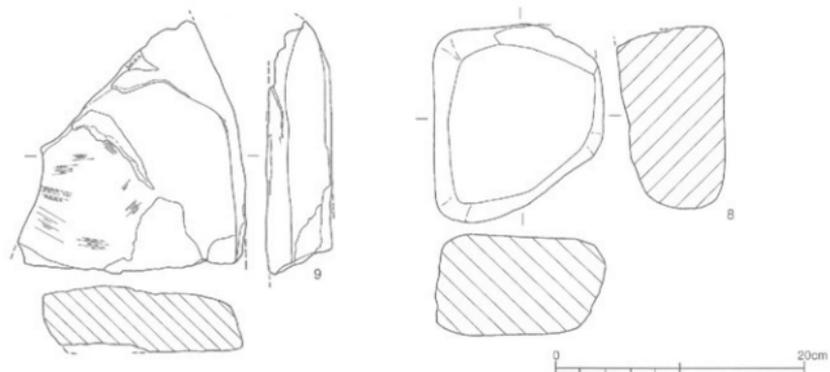
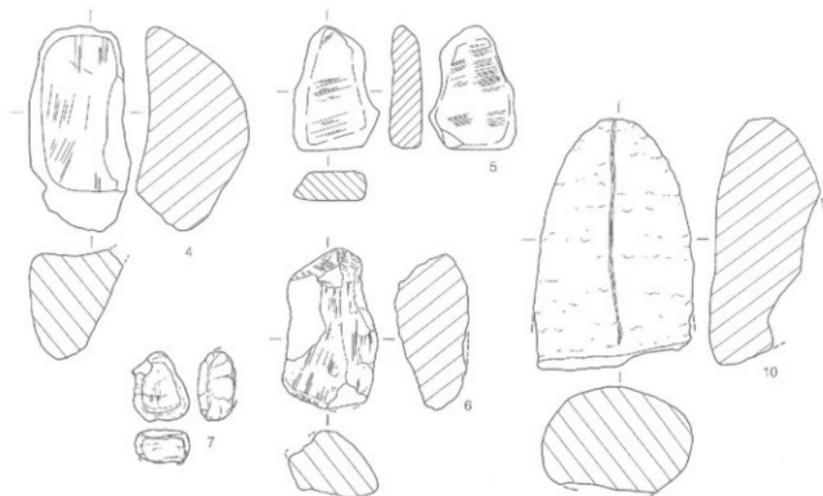
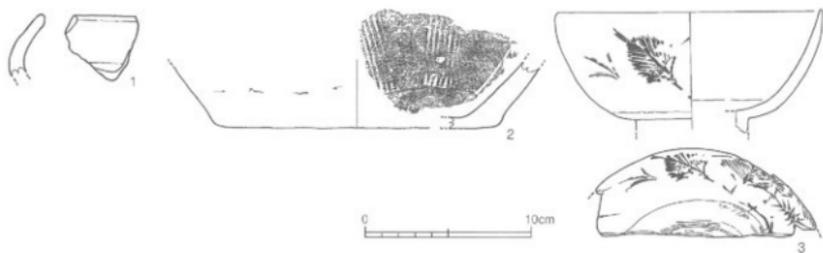


第24図 中世の井戸出土遺物実測図（1：3 曲物のみ1：6）

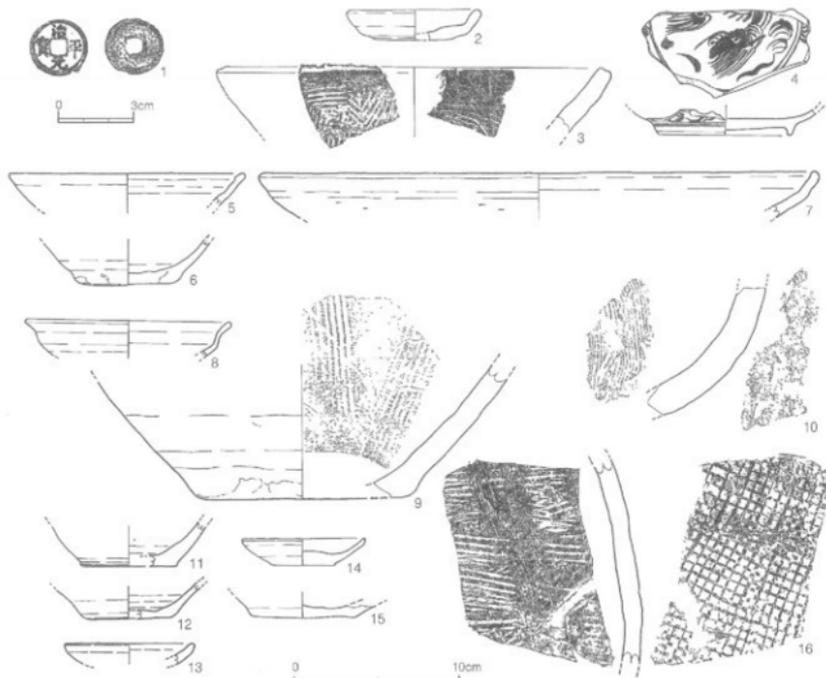
土坑SK1110と溝SD1111（第8・19・22図15～27・23図、図版10） 土坑SK1110は、4D区の西北隅にある径1.8mの大型円形土坑である。底面は平坦で壁の立ち上がりはやや緩やかである。土坑SK1110の東西両側には溝SD1111が延びている。土坑SK1110の東側に接続する溝SD1111は、東へ延びたのち、北へ折れ曲がる。溝SD1111の底面はおおむね平坦で、壁は急傾斜で立ち上がり、断面形態は逆台形というより箱形に近い。土坑SK1110と溝SD1111からは、比較的多量の遺物が出土した。

土坑SK1110の出土遺物は、土師器・青磁・鉄滓・木製品である（中袋1袋分）。

第22図15～27。15～19は土師器杯である。15はほぼ完形品である。体部がやや内湾する。焼成は良好である。16・17は杯の底部である。底部周辺を強くナデて高台状になっている。18・19は杯の底部である。20～23は小皿である。4点とも細部が異なるが、口縁端部が短く内湾することが共通点である。24は龍泉窯系青磁の碗の口縁部である。内外面とも無紋で、外面には若干の凹凸が観察される。25は小サイズの碗形鍛冶滓である。26は木の薄板、27は板状の棒で



第25図 井戸SE1146出土遺物実測図(1:3 石のみ1:4)



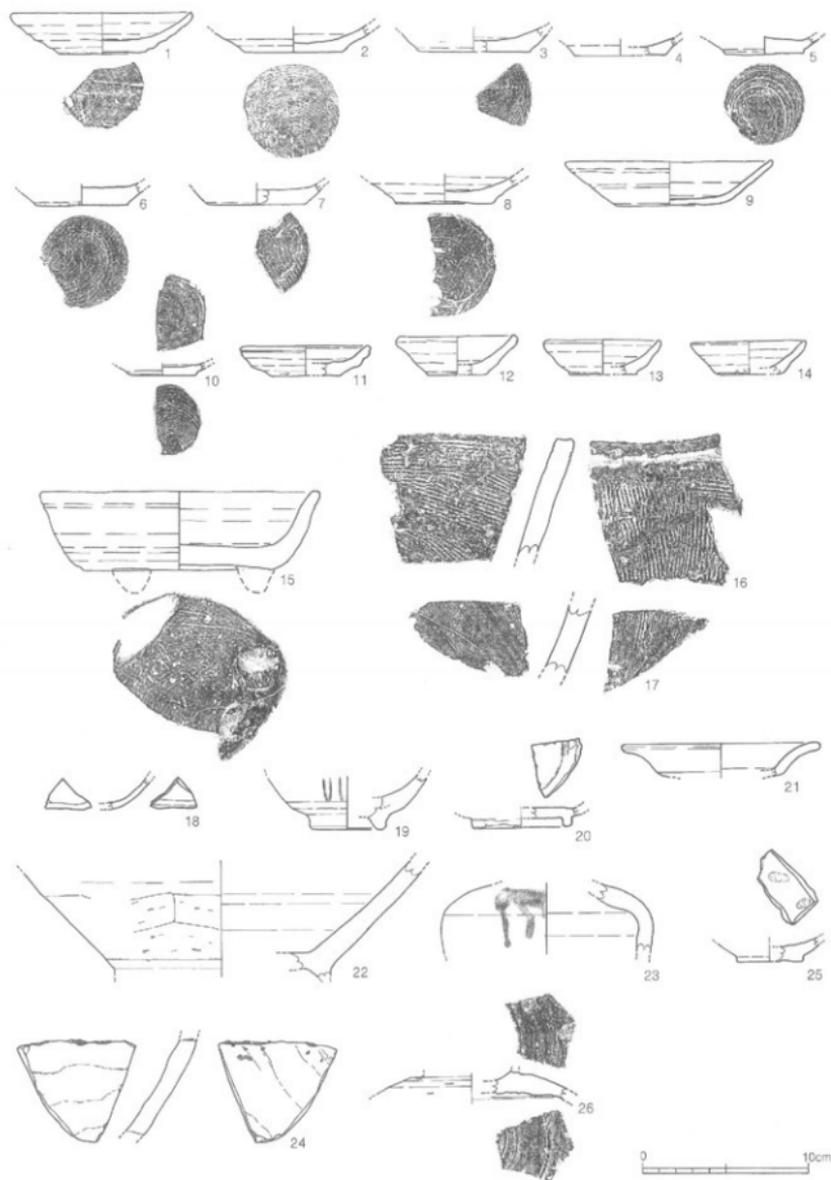
第26図 中世の清出土遺物実測図（1：3 銭貨のみ1：2）

先端は燃えてコゲている。

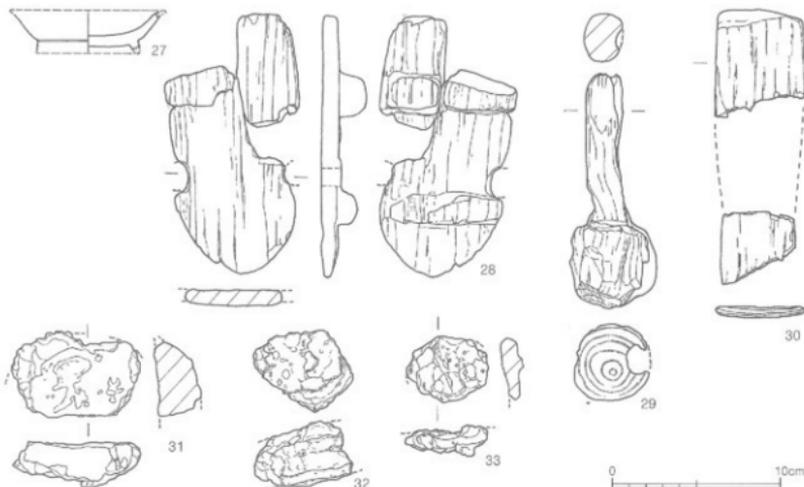
溝SD1111からは、木製の舟形の形代が2点出土した。溝がL字状に屈折する位置に三角形の台石（第23図12）が置かれており、屈折部の西3.4mのところから舟形の形代A（第23図10）が横向きで、屈折部の北4.3mのところからは舟形の形代B（第23図11）が反転した状態で出土した。舟形Aは溝底に接し、舟形Bは溝底から10cm浮いた状態で出土した。また、舟形Bの真上10cm、20×15cmの範囲からは炭化物が検出された。

溝SD1111出土遺物はこのほかに、須恵器片（2点）・土師器・中世須恵器・鉄滓などである（大袋1袋分）。ほかに台石・礫・木製品・植物の種などがある。

第23図1～5は土師器杯である。1は完形品で、底部と体部の境が明瞭で体部はやや外反して立ち上がる。内面は同心円ナデにより見込み中央が盛り上がっている。6～8は小皿で、7・8は完形品である。厚手の底部に口縁端部が短く内湾している。9は中世須恵器の甕胴部で、外面に亀山系のタタキ目が施されている。10・11が木製の舟形の形代で、共に樹種はスギ属スギである。10（形代A）は長さが短く幅広で、11（形代B）は長さが長く幅は細い。2点とも



第27图 满S D1120出土遗物实测图1 (1:3)



第28図 溝S D 1120出土遺物実測図2 (1 : 3)

若干様相が違う。また10には船首に穿孔がある。12は流紋岩製の三角形を呈する台石である。中央部分が窪んでいる。

以上、土坑S K 1110および溝S D 1111出土遺物の時期は13～14世紀と考えられる。

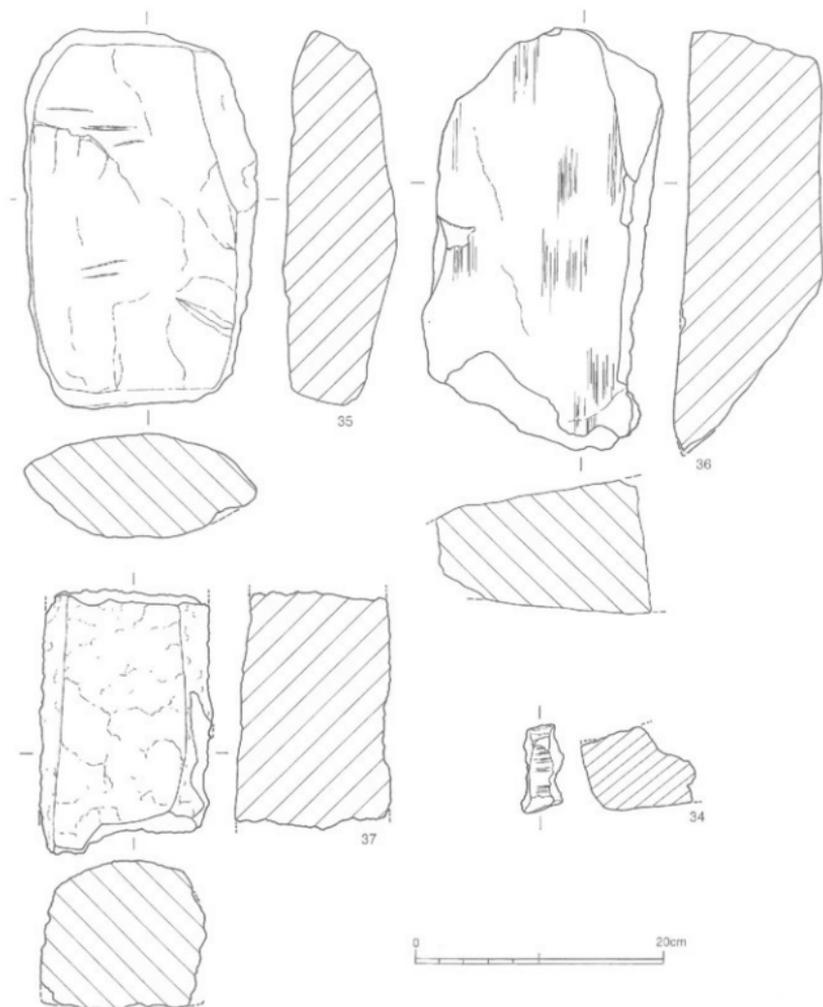
**井戸S E 1025** (第5・17～24図1・6・7) 4A区南部にある大型の井戸である。平面形は長径2.7mの小判形をし、壁はほぼ直立する。底面の北西部が一段下がっているのも、そこを水溜部とした井戸ではなかったかと考えられる。埋土は粘土と砂が互層になって堆積していたので、井戸廃棄後に自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物は少ない(小袋1袋分)。3点を図示した。第24図1は須恵器の杯身で最下層からの出土である。6・7は木製品で、6はもえさし、7は曲物の側板の破片、ともに上層出土である。下層からは須恵器が出土したが、上層からは土師器の擂鉢片なども出土しており、中世の井戸であろう。

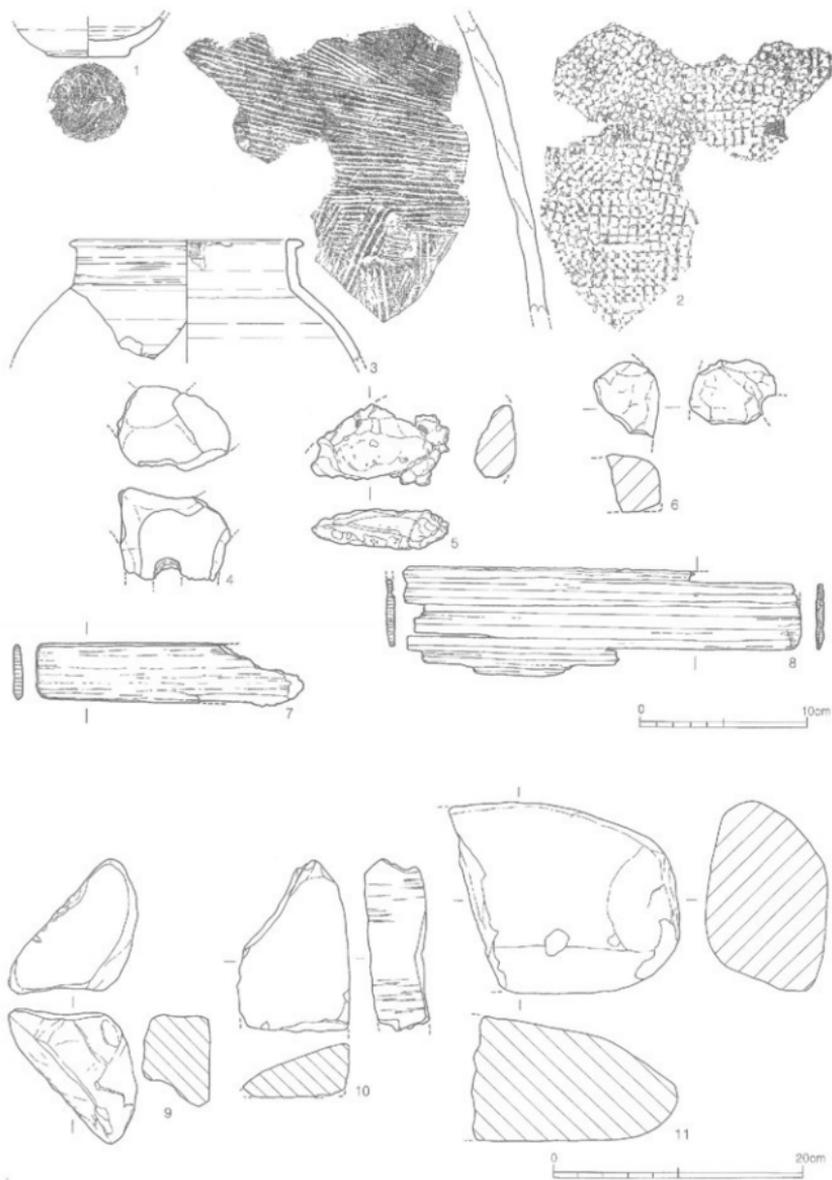
**井戸S E 1026** (第5・17・24図2・3、図版8-5) 4A区南部、井戸S E 1025の東約7mにある井戸である。西側の約半分を調査した。検出面では歪な方形をしていたが、中心部は三角形に近い平面の掘形であった。堆積土の中位には蕪状のものが少量検出された。底には水溜状の凹みがあったので、井戸と考えた。

出土遺物は少量の須恵器と土師器である(小袋1袋分)。第24図3は土師器杯の底部、2は小皿である。胎土と形状からみて、14～15世紀のものと考えられる。

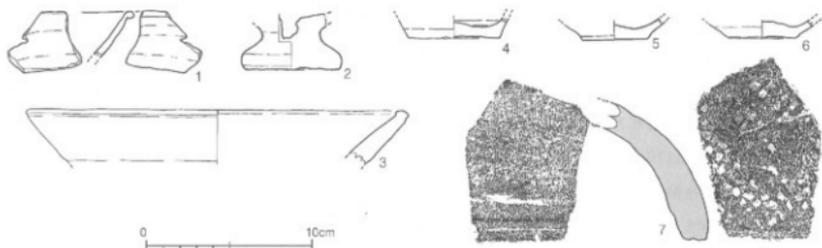
**井戸S E 1035** (第6・18図) 4B区北部にある平面小判形(長径2m)の井戸。南北溝S D



第29図 溝S D1120出土遺物実測図3 (1:4)



第30图 溝S D1144出土遺物実測図(1:3 石1:4)



第31図 中世の遺構出土遺物実測図2 (1:3)

1000の真上につくられている。出土遺物はない。

**井戸SE1083** (第7・18・24図4・8~11、図版8-7・8) 4C区東南部にある円形平面の井戸である。斜溝SD1062より新しく、調査区内で最も新しい遺構のひとつである。掘形は上部がすぼまった袋状である。底面から約25cmより上層には大小の礫(径40cmまで)が50数個詰め込まれていた。井戸を廃棄する際に投げ込まれたものと思われる。礫には人工的に使用された台石・磨石・砥石と考えられるものが16点あった。また、礫の堆積の下層には、長さ68cmで2.2cm角の木杭が斜めに差し込まれていた。

石以外の出土遺物は、須恵器小片(1点)・土師器小片(小袋1袋分)と、木製品である。第24図4は土師器の杯底部である。8~11は木製品で、10は大振りの匙部分である。11は角が面取りしてあるので折敷の底板と考えられる。8は木栓。頭部は角を面取りされた多面体で、横から穿孔してある。孔は貫通していない。樹種はスギ属スギ。9は角を丸く仕上げたもので細い部分には穿孔がある。部材の一部であろう。樹種はスギ属スギ。

**井戸SE1100** (第7・18・22図11・12・14、図版8-6) 4C区南辺にある径2.1m平面形態円形の井戸である。溝SD1062や溝SD1099よりは古い、溝SD1098より新しい。断面形態はバケツ形である。

出土遺物は、須恵器片(1点)・土師器片・中世須恵器片(1点)である(小袋1袋分)。第22図11は土師器の杯底部である。底径が広くて器壁が薄いものである。12は中世須恵器の甕胴部片である。外面には亀山系の格子タタキ目が施されている。14は五角形状の砥石で、ほぼ全面を仕上げ砥ぎと中砥ぎとして使用している。このほか、埋土の中位から礫が10数点出土した。

出土遺物からみて15~16世紀の遺構であろう。

**井戸SE1116** (第8・18・24図5・18、図版9-1) 4D区北辺中央にある小型円形の素掘りの井戸である。溝SD1000と重複し、その埋土に掘られている。断面形態はほぼ筒形で、下から黒灰褐色粘質土(砂粒を多く含む)、黒灰褐色粘土(軟弱)、黒灰褐色粘質土(砂粒を多く含む)が、整然と堆積している。黒灰褐色粘土(2層)中から曲物の一部分(第24図18)と腐食した曲物の底板が出土した。出土状況から曲物の径は約66cmに復元できる。井戸の掘形直径が

70cmなので、この曲物はもと井戸枠だったのであろう。

出土遺物はほかに土師器片6点と中世須恵器片1点がある。第24図5は土師器の杯底部である。

**井戸SE1117** (第8・18・24図12、図版9-2) 井戸SE1116の南3mにある円形の井戸である。井戸SE1116と同じく、溝SD1000の埋土中に掘削されている。断面形態はほぼ筒形で、下から灰褐色粘質土、黒褐色粘質土(砂粒・植物質を多く含む)が整然と堆積している。

出土遺物は、土師器片2点と角材である。第24図12は土師器の杯底部、底部は厚いが体部は薄い。

SE1116とSE1117はともに形状や規模がよく似ており、一連の遺構と考えられる。

**井戸SE1119** (第8・18・24図14、図版9-3) 4D区東北隅にある素掘りの井戸である。平面形態は小判形と思われる。底面は緩やかに凹む。下層に灰褐色粘質土(砂粒子をやや多く含む)、上層に灰褐色粘土が堆積している。

出土遺物は、土師器片1点と角材1点のみである。第24図14は土師器の杯で、底部から体部下位の部分で、境目が丸みを帯びたやや不明瞭なものである。底面縁辺部の調整はナデである。

**井戸SE1122** (第8・18・24図13、図版9-4) 4D区東北部、井戸SE1119の南6mにある素掘りの井戸である。掘形は長楕円形で、その底のほぼ中央に直径30cm、深さ約20cmの水溜部が掘られている。埋土は下から、オリーブ灰色粘土、オリーブ灰色粘質土(砂粒を多く含む)、暗灰色粗砂(粘土を若干含む)が整然と堆積していた。南東側の下層上面から中層にかけて20~30cm大の礫3点と長さ25cm、幅5cm、厚さ3cmの角材が1点出土している。

出土遺物は、土師器片・鉄滓(1点)である(小袋1袋分)。第24図13は土師器の杯の底部である。底部と体部の境が明瞭なものである。調査区で最も新しい遺構の一つで、15~16世紀と考えられる。

**井戸SE1141** (第8・19・24図15~17、図版9-5) 4D区の南部にある素掘りの井戸である。斜行溝SD1143・1144より新しい。掘形は楕円形をし、壁は急傾斜である。下半部に暗褐色灰色粘砂が堆積し、その上に5~8cm厚で糞状の植物質が認められた。

出土遺物は、土師器片(9点)・鉄滓である。第24図15は土師器杯口縁部、16は土師器小皿である。17は椀形鍛冶滓の小サイズのものである。土師器小皿は15世紀のものと考えられる。

**井戸SE1146** (第8・18・25図、図版9-6) 4D区の南辺中央にある井戸である。遺物包含層である2層の上面から検出した。掘形は平面形態がほぼ円形の断面形態が筒形である。底面の約20cm上あたりから上層には10~40cm大の礫が60点近く廃棄されていた。

出土遺物は、須恵器片1点・土師器片1点・備前焼片1点・漆碗1点・石製品である。第25図1は土師器の甕口縁部である。2は備前焼の播鉢の底部である。3は漆碗。外面は黒漆を塗った後に赤漆で草花文を描き、内面は赤漆を塗っている。樹種は、クスノキ属クスノキ。4~10は石製品である。4は石英製の磨石、5は凝灰岩製の磨石、6は凝灰岩製の砥石で、上面のみが使用されている。7は流紋岩製の磨石でほぼ全面に削痕が観察される。8は凝灰岩製の台石

で、縁辺部に欠損後の被熱が観察される。9は流紋岩製の台石である。10は全体を敲打により成形した石製装飾品である。長軸に沿って1条の沈線が施されている。

SE1146は15～16世紀のものと考えられる。

**溝SD1008** (第5図) 4A区北側のSX1004の南にある湾曲した溝状遺構である。溝の内側には他の遺構は全くなかった。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

**東西溝SD1011** (第5図、図版9-7) 4A区中央北寄りを横断する東西溝である。2段に掘り込まれた溝で、下段はほぼまっすぐである。調査区東壁面では、溝の掘り直しによって2段となった状況が確認された。

**溝SD1024** (第5・26図1) 4A区の西辺中央からはほぼ南に向かってのび、調査区の西南で南東方向へと湾曲する素掘りの溝である。この東には、SD1012・1013・1028など数条の溝が曲線を描いて延びている。いずれの溝とも深さが10cmに満たない。

溝SD1024からは「治平元寶」(北宋銭、初鋳1064年)が1点(第26図1)出土した他、須恵器片2点、土師器片1点が出土した。

**斜行溝SD1062** (第7図) 4C区で確認したが、北側の4B区では検出できなかった。南側は東西溝SD1098に合流して終わる。

出土遺物は、須恵器・土師器・白磁(1点)である(中袋1袋分)。土師器の時期と遺構の重複関係から15～16世紀の遺構であろう。

**東西溝SD1090** (第7・19・26図5、図版11-1) 4C区西南部にある東西溝である。東側はSX1077と重なり、西側は調査区外へと延びていく。溝の断面形態は箱形に近い。底面はおおむね平坦。

出土遺物は、縄文土器片?(1点)・古式土師器片(1点)・須恵器片(1点)・土師器片である(中袋1袋分)。第26図5は土師器の杯の口縁部。内面には強いヨコナデによる凹みが観察される。

**東西溝SD1098** (第7・26図6～10) 4C区の南壁沿いにある東西溝。東側は井戸SE1100に壊されている。検出幅は20～50cm。埋土は大きく3層あり、下から褐色粘質土(1層、軟弱)、オリーブ灰色粘土(2層、軟質)、褐色粘砂(3層、砂ブロックを多く含む)である。

出土遺物は、須恵器片(1点)・土師器片・備前焼(1点)・瓦質土器(1点)・白磁片(1点)・鉄塊(1点)・古銭(1点)・種子(梅か、20数個)である(大袋1袋分)。第26図6は土師器の杯下半部である。底部から器壁へは不明瞭に立ち上がる。10は土師質の播鉢の胴部である。8は白磁の皿で、外面下半部は露胎となっている。9は備前焼の播鉢で、内面は使い込みによる磨滅が著しい。7は瓦質土器の鍋口縁部である。

出土遺物から、SD1098は16世紀の遺構と考えられる。

**南北溝SD1106・SD1107・SD1108** (第8・26図11～13・16) 4D区の西部を走る3条の南北溝である。基本土層の6層が埋土である。調査区内で最も新しい遺構のひとつである。

出土遺物は、SD1106から中世須恵器片(1点)と土師器片(小袋1袋分)、SD1107から

土師器片・白磁片（1点）・鉄滓など（中袋1袋分）、SD1108から土師器片5点・砥石片1点である。

第26図16はSD1106出土の中世須恵器壺の胴部片である。外面に亀山系の格子タタキ目がある。11～13はSD1107出土の土師器で、11・12は杯の底部、13は小皿である。

SD1106とSD1108は14世紀以降、SD1107は15世紀の遺構であろう。

**溝SD1112・SD1113・SD1114**（第8・26図14・15） 4D区の溝SD1111周辺で確認した3条の溝である。SD1113は、SD1111やSD1112より新しい。

出土遺物は、SD1112が須恵器片（2点）・土師器片・瓦質土器片（1点）・鉄滓など（中袋1袋分）、SD1113からは須恵器片（1点）・土師器2点、SD1114からは土師器片7点である。SD1113から出土した土師器杯（第26図15）は底部のみ。小皿は、厚手の底部に薄い体部を持ち縁端部が短く内湾している（14）。

出土遺物からみて、SD1112は13～14世紀、SD1113は14～15世紀、SD1114は13～15世紀と捉えておきたい。

**溝SD1120**（第8・27～29図、図版5、11-4・5） 4D区全体をL字状に延びる溝である。4D区の中で最も新しい遺構のひとつである。底面は平坦であり、断面形は逆台形である。底面標高は、北端が7.95m、屈折部西寄りが8.2m、西端が8.45mであり、地形に沿って南西から北東へ傾斜する。埋土は基本的に暗灰黄色粘土で、下半は粘性が強く軟弱である。砂ブロックを含む場所もある。D6グリッド内では15～30cm大の礫が出土して、一見、踏み石のようである。

出土遺物は、須恵器片・土師器・陶磁器・鍛冶関連遺物など（大袋2袋分）のほか、木製品と石製品である（第27～29図）。

第27図1～14は土師器。1～9は杯で、外開きに体部が立ち上がる。1～8は底部と体部の境がある程度明瞭だが、9は両者の境が丸く不明瞭で器壁も薄い。9のみ京都系手づくね土器の模倣品のようである。10～14は小皿。11は厚手で口縁部外面に1条の沈線状の凹みがある。12～14は11と比べて器高が高い。

15は土師質土器の脚付碗。3脚と考えられる。16・17は土師質土器の槽鉢である。

18は白磁の皿片。19～21は龍泉窯系青磁。19は碗の下部。全面に施釉され、外面には線描きの蓮弁文がある。20・21は皿。20は体下部で屈曲し外反するもの、21は見込み部分に圏線文がある。

22・23は瓷器系陶器。23は壺の肩部、22は高台付こね鉢で内面は使用のため磨減している。24は陶器の甕胴部片。破面には漆接ぎの痕跡がある。25は粉青沙器（朝鮮王朝陶器）の皿底部である。見込みに2箇所砂目積み痕が観察される。26は須恵器の杯蓋で混入品。

第28図27～30は木製品。27は小型の高台付杯。黒漆の上に赤漆を重ね塗りしたもので、高台内のみが黒漆のままである。樹種はケヤキ属ケヤキ。28は一木作りの連歯下駄である。29は横植状の木製品である。樹種はクワ属。30は板材。

31～33は楕形鍛冶滓で、それぞれ中・小・極小サイズである。

第29図34～37は石製品。34は凝灰岩製の砥石、35～37は流紋岩製の台石である。

出土遺物からみて溝SD1120の年代は15～16世紀であろう。

**斜溝SD1144**（第8・19・30図、図版11-3） 4D区の西南隅にある南西―北東方向（N-45°-E）の溝である。溝SD1145より新しいが、溝SD1107、井戸SE1141と櫛列SA1136、そして溝SD1120よりは古い。SD1120によって西側と北東側を壊されており、北東方向へはそれ以上延びていない。底面は平坦で、壁はやや急傾斜に立ち上がる。SD1144の中央付近は幅が広く、その底面には長楕円形の堅穴状の落ち込みがある。

出土遺物は、土師器片・中世須恵器片（1点）・中国産陶器（1点）・土製支脚片（1点）・鍛冶関連遺物・石器・薄板である（大袋1袋分）。

第30図1は土師器の杯底部。高台状をした底部から内湾するように体部が立ち上がる。2は亀山系の中世須恵器の甕胴部である。

3は中国産褐釉系陶器の四耳壺である。頸部に自然釉がかかる。4は土製支脚の頭部片で突起は欠損している。横孔は残存している。5は楕形鍛冶滓の小サイズのもの、6はファイゴの羽口の先端上半部である。7・8は板材である。9～11は石製品で、9は凝灰岩製の磨石。縁辺部に被熱痕（煤付着）がある。10は流紋岩製の磨石で下部欠損後に表面全体に煤が付着している。11は花崗岩製の台石様の礎である。

1～3の土器からみて、SD1144は13～14世紀と考えられる。

**SX1038・SX1039・SX1040・SX1041・SX1042**（第6・20図、図版11-6） 4B区中央部のやや北、東西溝SD1047北側の約8m四方の範囲には、計5基の土坑が密集している。それぞれの平面形は、SX1038・1040～1042が隅丸長方形、SX1039が楕円形である。SX1038の埋土からは骨片のような白い粒子や灰が土壌化したような痕跡を確認したので、これら5基の遺構は墓の可能性がある。

遺物は、SX1040から土師器の小片が1点出土したのみ。埋土の状況などから中世の遺構であろう。

**SX1056**（第6・7図、図版11-7） 4B区南部のA・B-7～11グリッド内には、幅20～60cmの小溝が何条か東西方向に併走している。これらはまとめて畝状の遺構ではないかと考えた。溝SD1054でも記述したように、4B区南半分は耕作関連の遺構が集中している可能性がある。出土遺物は、土師器の皿と思われる小片が1点あったただけだが、遺構の検出状況などから中世の遺構ではないかと考えられる。

**SX1077**（第7・31図1～3） 4C区の南半部、南北溝SD1000の西側には1～2m幅の落ち込みがある。底面は凹凸が著しい。4C区南辺の東西溝SD1098よりは古いが、重複している他の遺構すべてより新しい。同じ4C区にあるSX1063・SX1064・SX1065も同様な遺構と思われるが、いずれも性格は不明である

SX1077出土遺物は、須恵器片（2点）・土師器片・鉄滓（2点）である（大袋半分位）。

第31図1は土師器杯の口縁部である。端部を玉縁状に作っているのは白磁の影響と思われる。2は土師器の柱状高台部である。内面中央に焼成前の穿孔がある。3は土師質の鉢の口縁部である。

以上、SX1063～1065・1077は、16世紀以前の遺構と考えられる。

**SX1109** (第8・31図4～7) 4D区の西北隅にある性格不明の落ち込み遺構である。溝SD1106～SD1108・SX1131・SB1132よりは古いが、その他の重複する遺構より新しい。

出土遺物は、須恵器片・土師器片・丸瓦(1点)である(中袋1袋分)。第31図4は土師器杯の底部。やや厚手の底部と体部の境は明瞭で、体部は急角度にひらく。5・6は土師器小皿である。7は土師質の丸瓦片で、外面に太目の格子タタキ目、内面には布目痕がみられる。神門寺境内廃寺の創建期の丸瓦である。

**柱穴SP1075・SP1085・SP1086・SP1087・SP1104** (第7・20・21図1・2) 4C区の西辺、中央から南部にかけて柱根を残すピット5基を確認した。このうちSP1075・1085・1087の3基は、ほぼ一直線上に並ぶ。

SP1104から、土師器の小片4点と瓦質土器片3点が出土した。第21図1と2は同一固体の可能性のある瓦質土器の鍋で、1は受け口状の口縁部である。両者とも外面には煤が付着している。

以上より、SP1104の時期は14世紀と考えられる。ほかのピットは、時期を確定できない。

**SP1147・SP1148** (第8・16図、21図13～16) 4D区のスX1131～1134周辺にも、柱根を残すピットが2基ある。SP1147は平面が長楕円形で、2箇所柱痕がある。SP1148は長楕円形である。

SP1147出土遺物は、土師器片数点と青磁片が1点。第21図14は土師器の杯底部。底部から体部が開くように立ち上がる。13は龍泉窯系の青磁碗の底部である。器壁が厚く、低い高台で、軸は畳付け部と高台内にも一部かかる。

SP1148出土遺物は、土師器片(小袋半分)と梅と思われる植物の種である。第21図15は土師器杯底部。器壁は薄い。16は土師器小皿。これも器壁は薄く、高く立ち上がる。内面上半部の一部に煤が付着している。

以上より、SP1147は15世紀、SP1148は15～16世紀の遺物と考えられる。

#### (6) 近世の遺構と遺物

**土坑SK1004** (第5図) 4A区の北部中央にある、長径3.4mの隅丸長方形の土坑である。北側の壁はなだらかな傾斜だが、南側は直立する。堆積土を3層に分けたが、下層は黄褐色砂と褐色粘土が互層をなす水成堆積であった。水溜のようなものではなかったと考えられる。

出土遺物は砥石かと思われる礫が1点のみであった。2層上面から掘り込まれていたことと検出面と埋土から近世の遺構であろう。

**東西溝SD1047** (第6・26図2～4) 4B区の中央やや北を横断する東西溝である。耕作土の直下から掘り込まれ、幅1.8～2.4mの大きな溝である。断面形態は逆台形を呈している。埋

土は暗褐色灰色粘土の単純層で植物質を含み、軟質である。SD1047の近辺に位置するSD1045・SK1046も同じ埋土なので、同時期と考えられる。調査区では最も新しい遺構のひとつである。

出土遺物は、土師器・磁器・陶器・瓦などである（中袋1袋分）。第26図2は土師器の小皿である。底部から休部にかけてナデによるくびれがある。3は土師質の播鉢の口縁部、4は青花（景德鎮）の皿で、外面に圏線と草花文を、見込み部に圏線と龍の絵を描いている。

近世以降の遺構であろう。

### 3 包含層の遺物

築山遺跡4区の遺物包含層から出土した遺物は、弥生土器・須恵器・中世須恵器・土師器・陶磁器・瓦質土器・瓦・土製品・鉄製品・石製品・木製品があり、それらの出土量はコンテナ16箱分である。そのうち図化に耐えうる286点を図示した。

出土土器の種類ごとにその出土地区を検討すると、弥生土器は4A区に、須恵器は4B区に、中世須恵器は4C・4D区にのみ、土師器は4D区に、白磁は4B区に、青磁（青白磁含む）は4D区に、青花は4B・4D区に、中世陶器は4D区に、瓦質土器は4C・4D区にのみ、肥前系陶磁器は4D区に集中しており、これを検討すると、古い土器は北側の地区から、新しい土器は南側の地区から集中して出土する傾向にあることがわかる。

以下、遺物の個別の概要を述べるが、詳細は観察表に委ねる。

#### 弥生土器（第32図1～14）

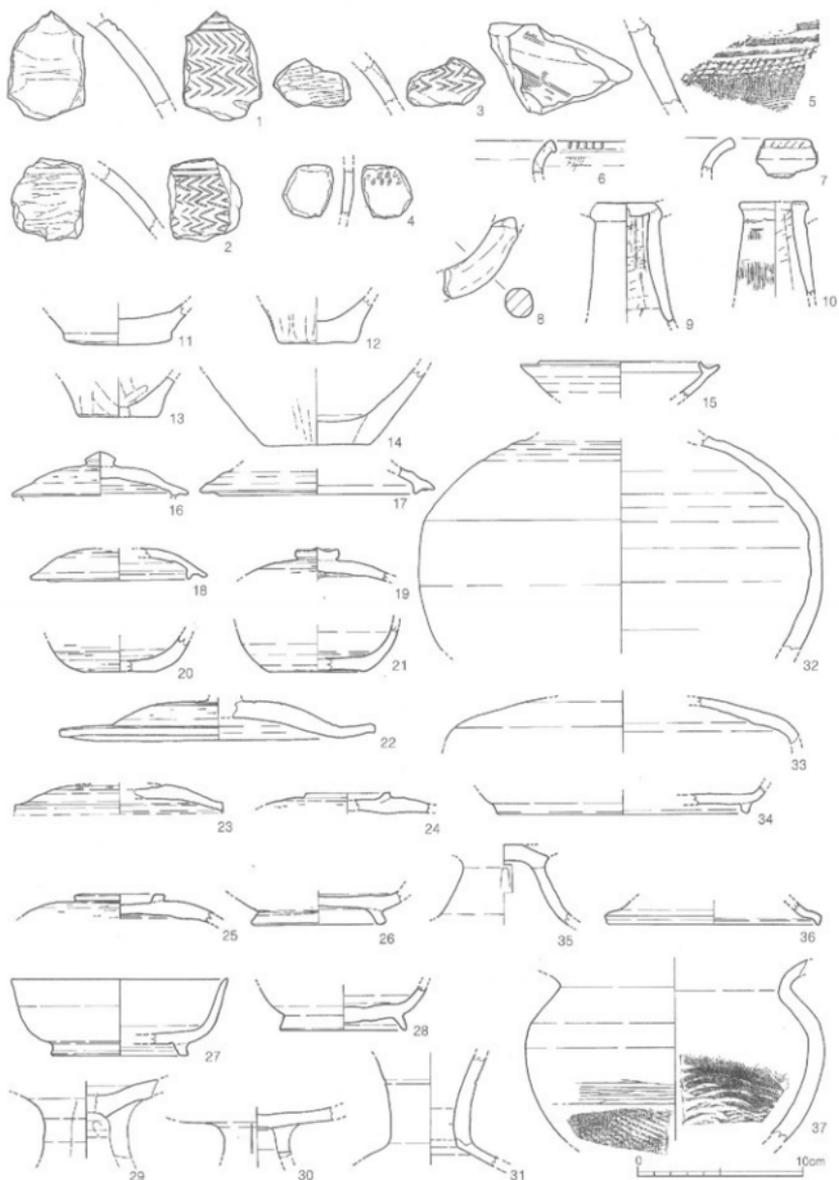
1～3はヘラ描き沈線文と羽状文を飾る壺胴部の破片で、4は壺の胴部片。先端の丸い棒状工具による刺突文がある。5は壺の肩部付近の破片。2条の凹線文と連続の刺突文がみえる。6・7は壺の口縁部片である。6の口唇部はわずかにたれ下がり、端面には刻目がある。7の口唇部にも細い刻目がある。9・10は高杯の脚柱部で、特に9の杯部の破面と脚端部の破片が人工的に丸く磨滅しており、2次使用の可能性も考えられる。11～14は壺または甕の底部で、いずれも厚手の平底である。

#### 須恵器（第32図15～37・第33図38）

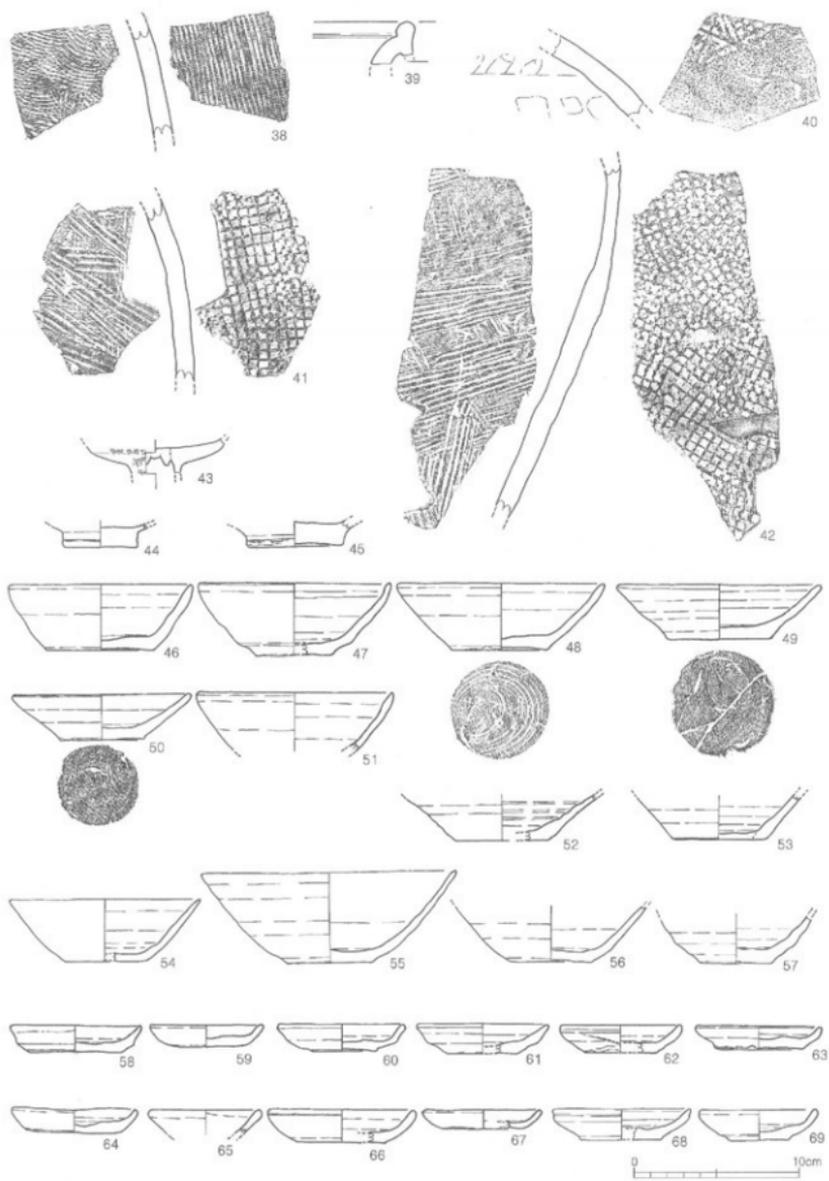
15・20・35・38は古墳時代の遺物である。15は蓋杯の身で短いちあがりの付くもの、20は壺の底部、35は2方向に長方形のスカシがある。38は甕の胴部である。

上記以外は7～9世紀の遺物である。16～19・22～25・36は蓋杯の蓋である。16～19は宝珠状・擬宝珠状のつまみとかえりが付く。最大径が10cm位の小振りのものである。22～25・36は口唇部が垂下し天井が低いものである。21・26～28・34はそれぞれ杯・高台付杯・高台付皿で、貼り付け高台である。26は見込み部分が研磨されており転用皿と思われる。29・30は高杯の破片。切れ込み状のスカシが2～3方向にあると考えられる。31～33・37は壺。31は長頸壺の頸部である。

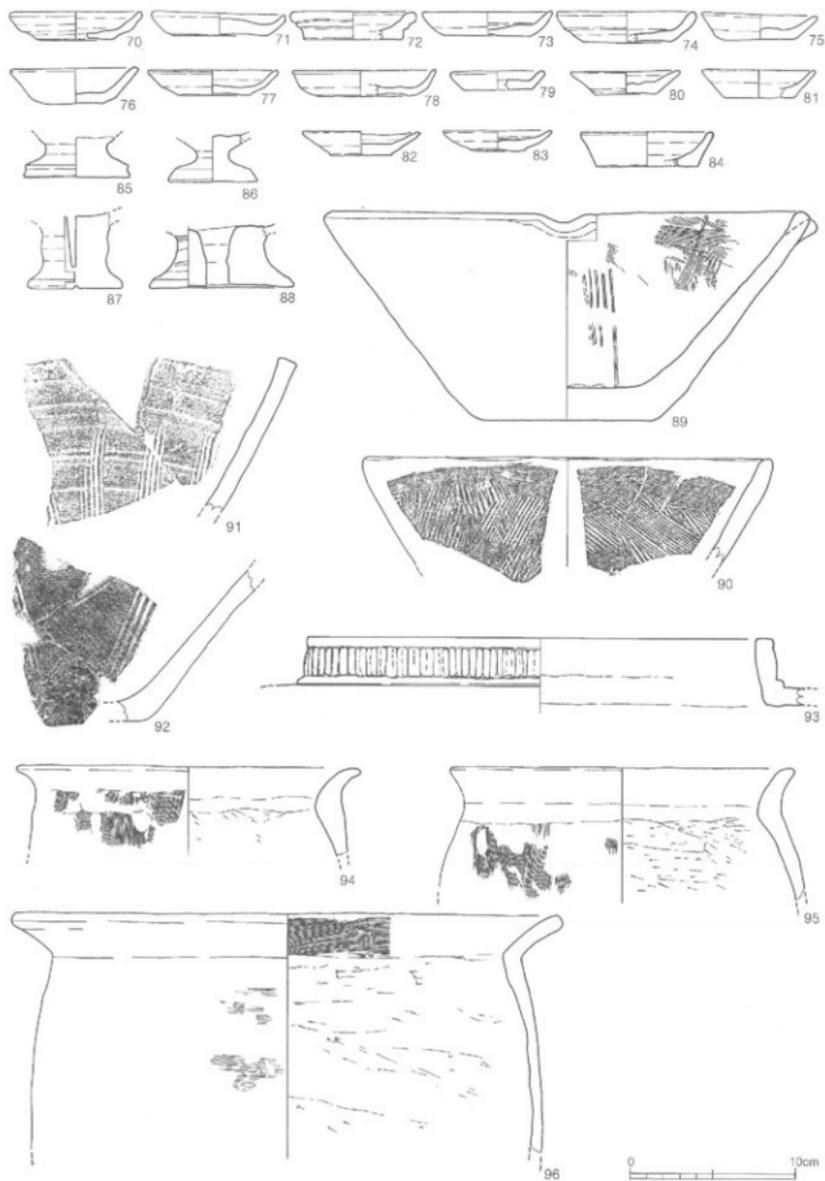
#### 中世須恵器（第33図39～42）



第32图 遺構外出土遺物実測図1 (1:3)



第33图 遺構外出土遺物実測図2 (1 : 3)



第34图 遺構外出土遺物実測図3 (1:3)

39は口縁部である。40はスタンプ文または叩き目ある甕の肩部片である。41・42は甕の胴部で、共に外面には亀山系の格子タタキ目がある。

#### 土師器（第33図43～第34図96）

43は古墳時代の高杯で内外面とも丹塗りである。

44～57は杯である。44・45は底部が分厚く高台状である。55はやや薄手の椀形である。46～50・57は器壁がやや厚い。49・50は体部が大きくひらいた浅めの杯である。また52・54は内面の強いヨコナデによる凹凸が観察される。

58～84は小皿である。

85～88は柱状高台付杯または皿の高台部である。4点とも器部は欠損しており器形は不明である。87は貫通しない穿孔が、88は貫通した穿孔がある。

94～96は甕の上半部で、94・95の外面には煤の付着が観察される。

89～93は土師器と比較して堅緻な焼成なので土師質土器として扱う。90はこね鉢、89・91・92は罌鉢である。93はいわゆる奈良火鉢（瓦質土器）を模倣して作られた風炉の口縁部である。直立した口縁部に浮き彫り状の夔状文が施されている。

#### 白磁（第35図97～116）

97～99は碗である。

97は蛇ノ目高台をもち、初期段階の輸入白磁。98は軸に貫入がある。99は底部と体部の境が屈折し高台も角ばった作りである。

100～112は皿である。100・108は口禿、101は見込みに軸剥ぎが、106は見込みに蛇ノ目軸剥ぎが施されている。104の見込みには軸掻きによる文様がある。109の体部外面には強いナデでできた段がある。

113～115は杯。114は角杯の口縁部である。

116は四耳壺の肩部で、1箇所耳の痕跡がある。

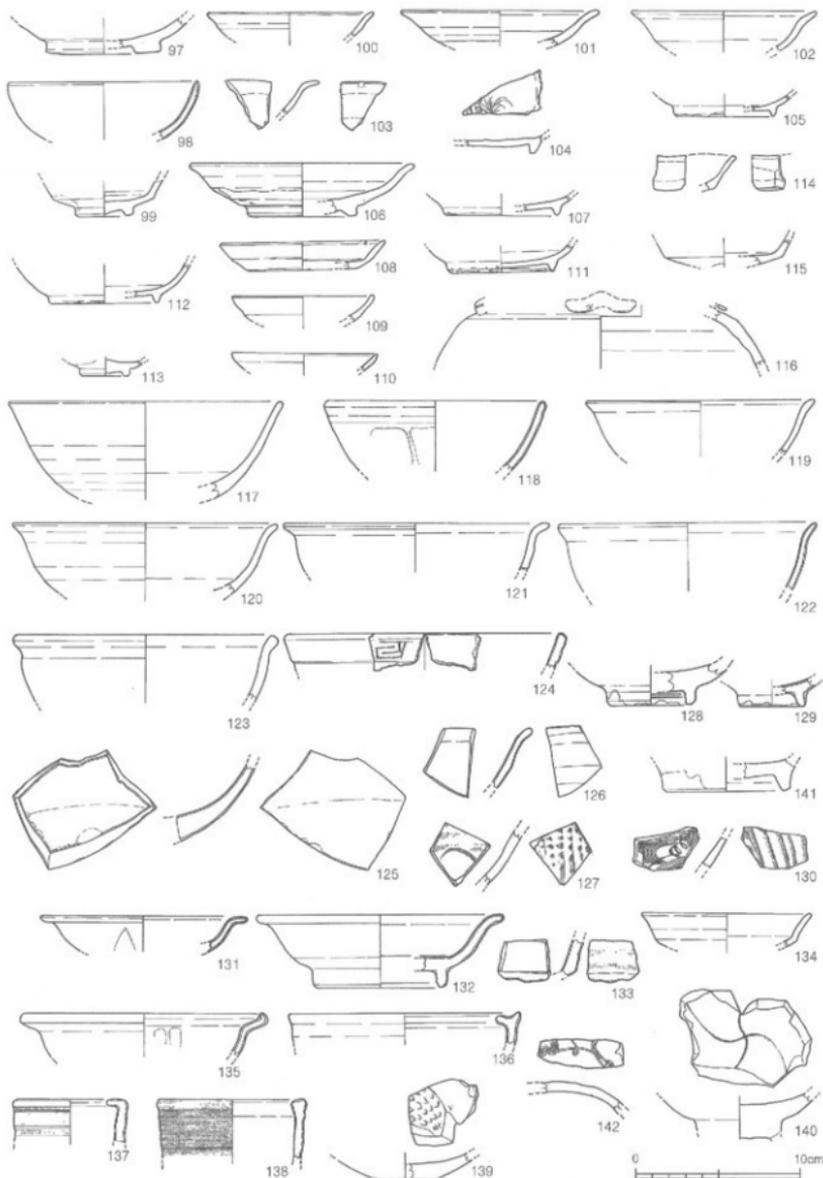
#### 青磁（青白磁）（第35図117～142）

117～126・128・129・131・132・137～140は龍泉窯系青磁、127・130・134は同安窯系青磁である。

117～130・140は碗。118の外面には幅広の蓮弁文？が施してある。120～123・126は口縁部が外反する。124は外面に雷文がある。124・125は軸葉がやや厚く、貫入がある。127は外面に粗いクシによる連続刺突文、内面にはヘラやクシによる文様が施されている。130は外面に片切彫り状の沈線文が、内面には花文がある。140は高台状の厚い底部で、見込みに「まんじ」のような文様が施されている。

131・132・134は皿である。131・132の口縁部は外反し、131の外面にはヘラ描きの蓮弁文が施されている。134は下半部が屈曲する。

135は盤。口縁端部は屈曲して内傾する。内面には輪花状のヘラ彫りがなされている。139は杯で、見込みに鱗状文がある。



第35圖 遺構外出土遺物実測圖4 (1:3)

133・136～138は香炉である。円筒形の体部をもち、口縁端部が内側に屈折するか、肥厚されている。体部表面の凹凸により釉に濃淡があらわれ、それが文様効果をもたらしている。138は全体に貫入がある。

141・142は青白磁で、141は碗の底部、142は合子の蓋の小破片である。外面には削り出した草花文がある。

#### 染付（青花）（第36図143～150）

143～150は皿である。143・149は外面に山形文と草花文、内面に圏線文が描かれる。144の外面口縁部には圏線を、内面口縁部には圏線と逆四方棒文（その間にも規格的な文様あり）が描かれている。145・147は口縁部内面に圏線文、外面に圏線と波状文がみえる。146は口縁端部が外反する。内面に草花文がある。148は見込みに鹿と草花文が描かれている。150は削り出し高台の外側に圏線文があり、見込みには花文が描かれている。

#### 中世陶器（第36図151～170・第38図198）

151～153は中国産陶器。151は褐釉陶器の壺口縁部、152は小型の茶壺の上半部、153は天目茶碗の体部である。152は器壁が薄く、きゃしゃな作りである。

154～156は李氏朝鮮王朝の陶器である。154・156は粉青沙器の皿で、高台状の底部をもつ。155も高台状の底部をもつ碗である。

198は灰釉陶器の碗で、外面に薄く自然釉がかかる。157は美濃焼の天目茶碗、158は瀬戸焼の灰釉陶器皿である。見込みの釉は貫入がある。

159～161は備前焼である。159・161は擂鉢。160は甕の玉鉢状口縁部である。

162～165・167・168・170は瓷器系陶器で、162～164は甕の口縁部である。165は鉢の口縁部。口端部がやや膨らみをもつ。167は甕の頸部片で、内面の粘土貼り付け痕が明瞭に観察される。168は底部である。170は甕の胴部で、外面にスタンプ状の格子と矢羽状のタタキ目が施されている。166・169は陶器の底部である。169の内面の一部に漆と思われるものが付着している。

#### 瓦質土器（第38図197・199～203）

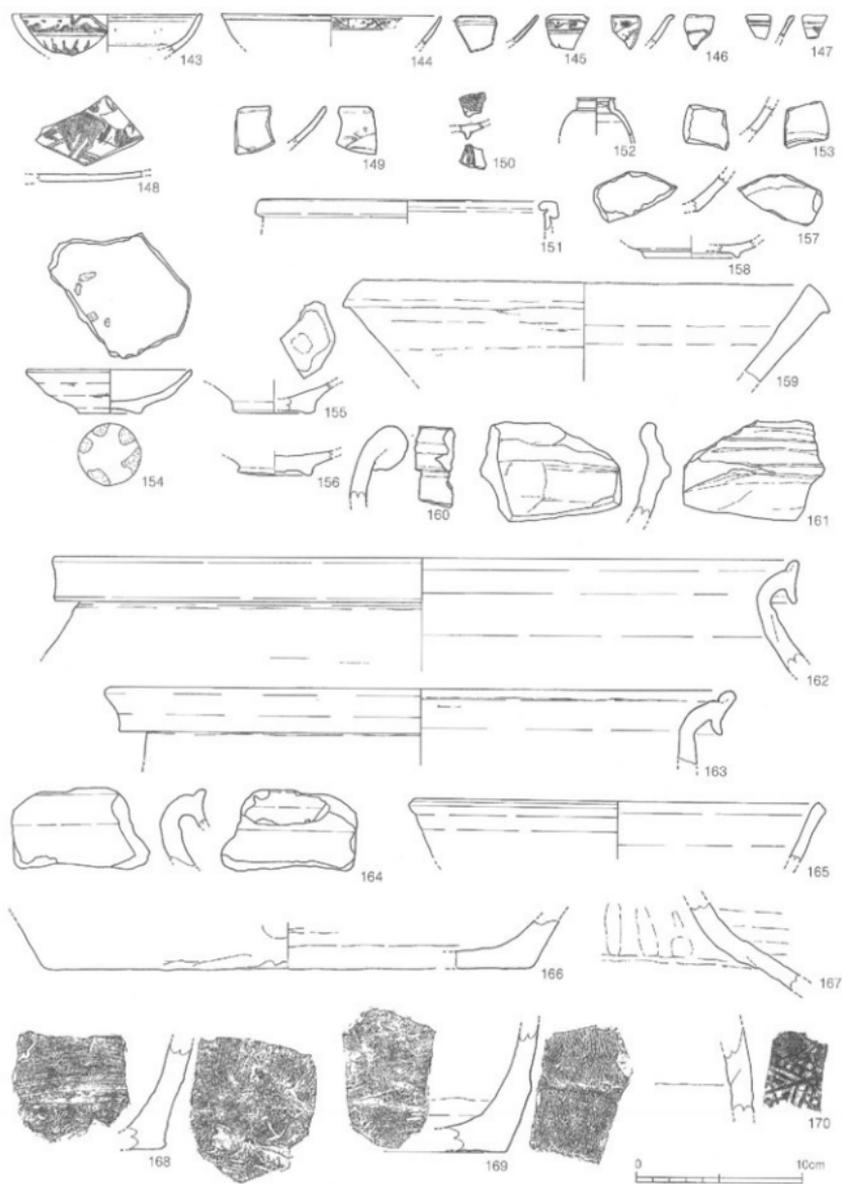
197・200は奈良火鉢である。197は浅鉢口縁部で、1条の突帯下には菱形区画のスタンプ文が施されている。200は風がであろう。1条の低い突帯の上には簾状文、その下段には羽状文が浮き彫りを表されている。199・203は鍋の口縁部である。201は鉢、202は擂鉢の口縁部である。

#### 肥前系陶磁器（第37図171～194・第38図195・196）

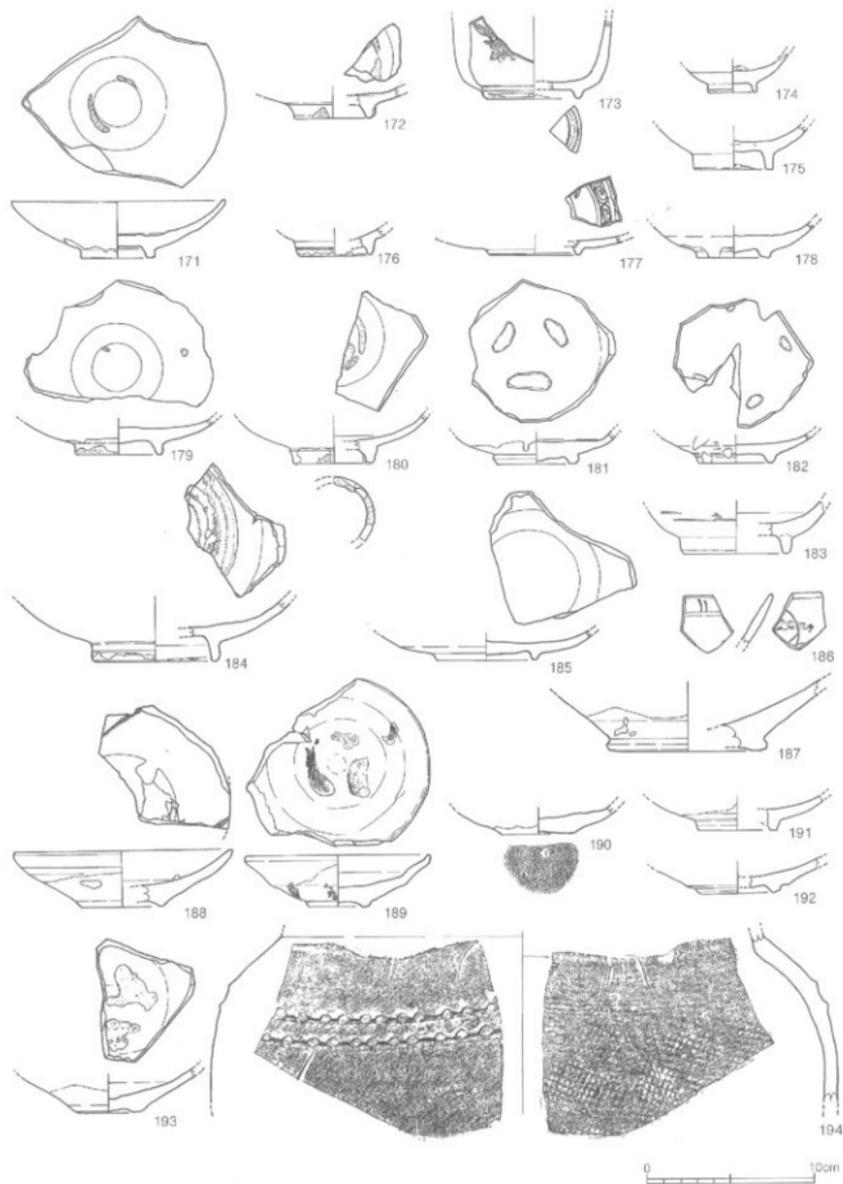
肥前系陶磁器の高台は基本的に削り出し高台である。

171～173・176・177・179・180・186は磁器である。171・179・180は皿。172・176は碗。いずれも見込みに釉剥ぎがあり、砂目積み痕が残る。176は高台の外面を細く釉剥ぎしたのちに赤色顔料が塗られている。173は小型の碗で外面にかえて集文様が、高台の内外に圏線文がある。177は皿、見込みに圏線で縁取られた渦巻状の雷文がある。186は碗。

174・175・178・181～185・187～196は陶器である。174・175は碗で174は高台外側に圏線が

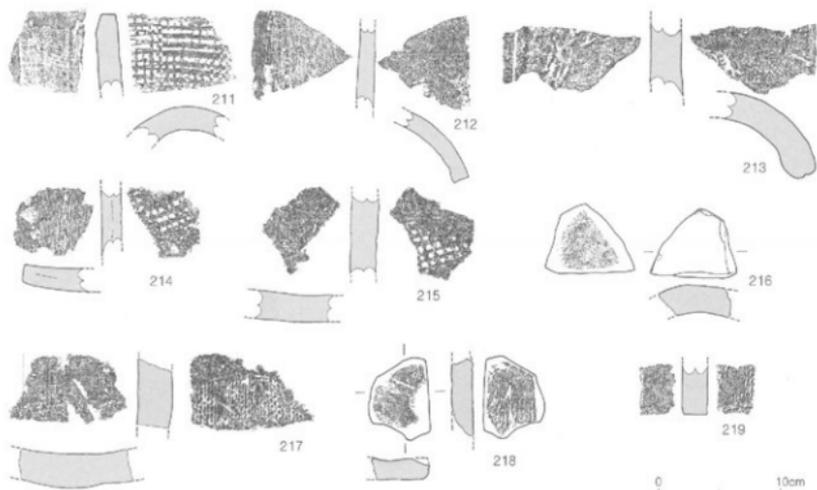
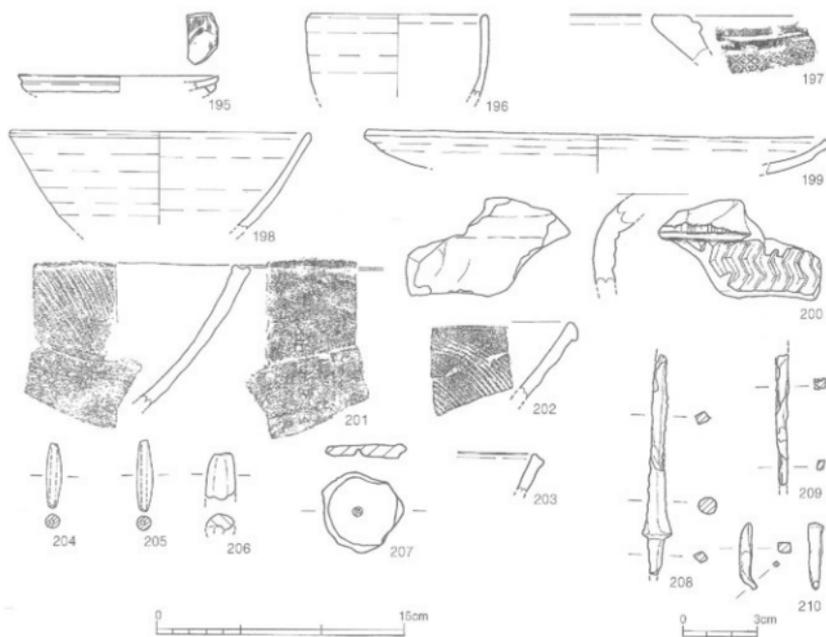


第36图 遺構外出土遺物実測図5 (1:3)



第37図 遺構外出土遺物実測図6 (1:3)

0 10cm



第38图 遺構外出土遺物実測図7

195~207 (1:3) 208~210 (1:2) 211~219 (1:4)

描かれている。178・181・182は皿。181の見込みには3箇所、182の見込みには4箇所の胎十目積み痕がある。183は碗。外面に文様の痕跡が確認できる。184・185・191・192は皿。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。192の高台は上げ底状である。187は大皿。内面には粗雑な施釉がある。188・189・193は皿で、上げ底状の高台。188は見込みに釉剥ぎを施し、189は3箇所の、193は2箇所の砂目積み痕が観察される。第38図195は皿。見込みに鉄絵が描かれている。外面には別個体の皿が癒着し、そのため歪んでいる。196は小型の碗である。194は甕の胸部である。外面には押圧文を付けた2条の貼り付け突帯がある。内面には細かい格子状の当具痕があり回転ヨコナデにより擦り消している。

#### 土製品（第38図204～207）

204～206は土鉢である。204・205は紡錘形、206は太型の紡錘形である。207は土師器の杯底部を転用した土製円盤で、中央に凹みがある。

#### 鉄製品（第38図208～210）

208は錐状の鉄製品である。一端が茎状となっている。209は細い角棒の破片である。太さからみて火箸の可能性が考えられる。210は用途不明品。

#### 瓦（第38図211～219）

211～213は丸瓦である。211は狭端部。凸面には格子目叩き痕を残し、凹面には、糸切痕、側板痕、回布圧痕がある。側板連結模骨を使う粘土板巻き作りの行基丸瓦である。狭端面はヘラケズリののち、凸凹面側ともに面とりされている。212は側辺部。凸面調整はヨコナデ、凹面には糸切痕と布圧痕、布筒の綴じ合わせ目痕がある。綴じ目はぐし縫い。側面の凹面側のみ面とりがある。213も側辺を残す破片。凸面調整はヨコナデ、凹面には糸切痕と布圧痕がある。側面の凸凹両方に面とりがある。

214～219は平瓦。214・215は凸面の格子目叩き痕をヨコナデ調整ですり消す。凹面には布圧痕がある。216は叩き痕を残さない。217～219はタテ縄叩き平瓦。いずれも一枚作りであろう。これらの瓦片は、本遺跡の北西約1kmにある神門寺境内廃寺の所用瓦であり、211・214・215は創建期の瓦である。

#### 石製品（第39図220～第42図269）

220は流紋岩製の石筥状石器で、表面の自然面は風化のため軟質となり線状のキズ痕が残る。裏面は摂理面で剥離されている。

224は碧玉製の、229は玉髓製の楔形石器である。224は縁辺に刃潰しが観察され、229は上下縁辺部に敲打痕が観察される。

225は玉髓製の敲石。縁辺及び凸状部に潰れ痕が著しい。

221～223・226・228は玉髓製の石核、227は黒曜石の石核である。222は所々自然面が残存し、223は凸部に敲打痕が観察される。

230は玉髓製の調整剥片である。235は流紋岩製の加工痕ある石器である。231は玉髓製の剥片で両側面に刃こぼれが観察される。

232・233は安山岩製の石錘で、平らな川原石を利用している。233の縁辺一部には磨滅痕が観察される。

234・236～250・252～261・264～266・268・269は砥石である。

237・238・240・242・246・247・253・256・259・264は荒研ぎ～仕上げ研ぎ、250は荒研ぎと仕上げ研ぎ、252は荒研ぎと中研ぎ、260・265は中研ぎ、239・241・243・249・254・255・257・269は中研ぎと仕上げ研ぎ、245・258・261・266は仕上げ研ぎ、248は中研ぎとして使用されているが、左側面に剥離痕が観察される。

234・236～241・243～245・247～250・255は凝灰岩製、242・246・252・253・257・259は砂岩製、254・258・260・261・264・265・269は流紋岩製、256は安山岩製、266は花崗岩製である。234・236は玉作関連の石器とも考えられる。234・244は側面には擦り切り痕のような削痕がみられる。236は元来石鐮の可能性も考えられるようなものである。

268は打製石斧の転用砥石と考えられ、表裏面の平坦面を研磨している。

251は全面に擦痕のある硯のような形を作り出しており形代と考えられるものである。

262は台石である。刃キズが観察される。263・267は研磨痕ある礫で、263は刃キズが明瞭に観察され、被熱で一部煤が付着している。

また砥石が4D区に集中して出土しており、鍛冶関連遺物が集中していることと関係がありそうに思われる。

#### 木製品 (第43図270～286)<sup>3)</sup>

270～272は漆器碗の破片である。270は高台部で、黒漆主体であるが見込みみ赤漆が一部観察される。271は体部。外面に黒漆、内面に赤漆が塗布してある。272は内外面とも黒漆が塗布され、外面には赤漆で鶴と思われる鳥が描かれている。

274は折敷の底板であろう。残存する角を面取りしている。275は小判形の本皿と思われる。

273は算盤玉状の木製品で、中央に穿孔が施されている。276は軸をもたない独奏で、上面の中心から外れた位置に直径5mmの円形の凹みがある。樹種はマツ属(二葉松類)。

277は角棒状品で、側面から穿孔が1箇所施されている。278はやや小振りの横楯である。キブシ属キブシ。

279・280は下駄である。279はやや幅広の長方形をした連歯下駄で、樹種はクリ属クリ。280は細長く隅丸に作られた露刃下駄。差歯の一部が残存している。樹種は、台と後歯はハダ属キハダ。前歯は環孔材。

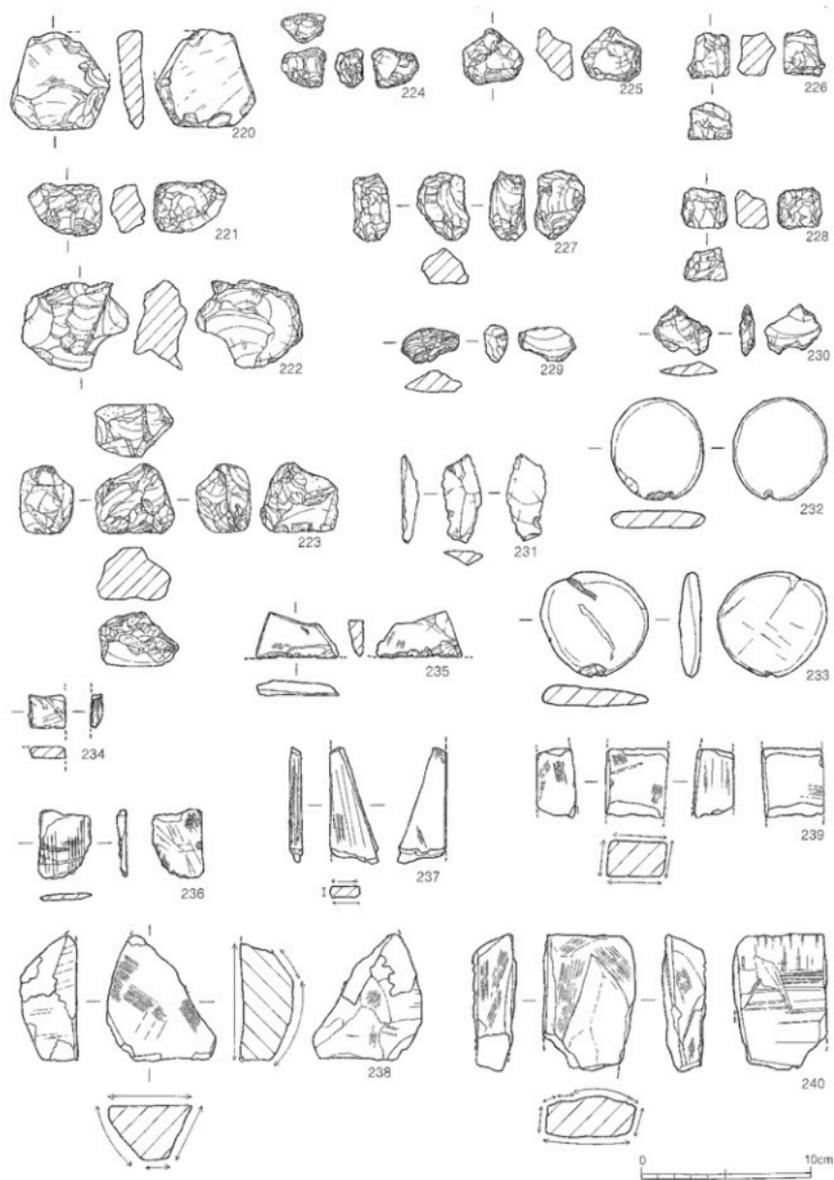
281～286は板材である。

#### 鉄滓(表1)

鉄滓は、構成表(表1)及び観察表としてまとめた。

#### 註

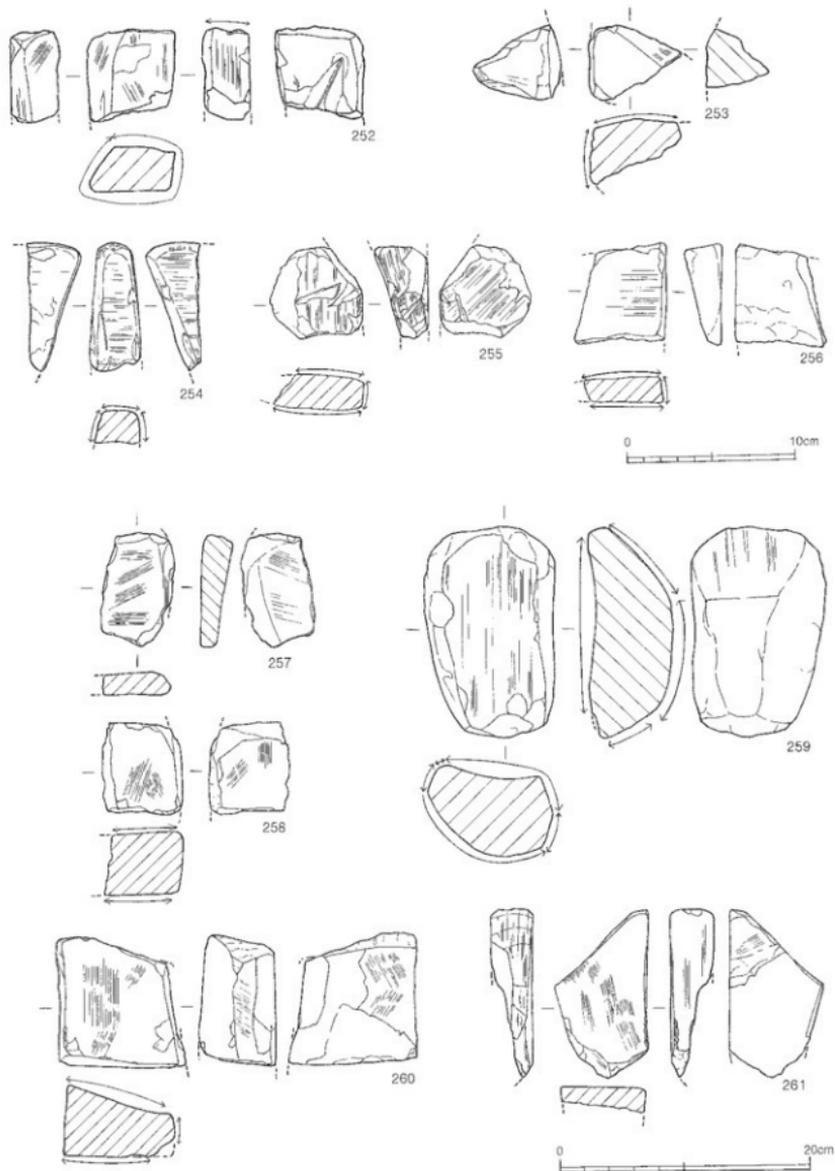
- 1) 約3600年前の三瓶山噴火による火山灰の土砂が神戸川を流れて堆積したもの。燧層。
- 2) 出土した弥生土器片は総計13点ある。そのうちわけは、前期6点、中期7点、後期3点である。
- 3) 木製品については、一部しか樹種同定を行っていない。



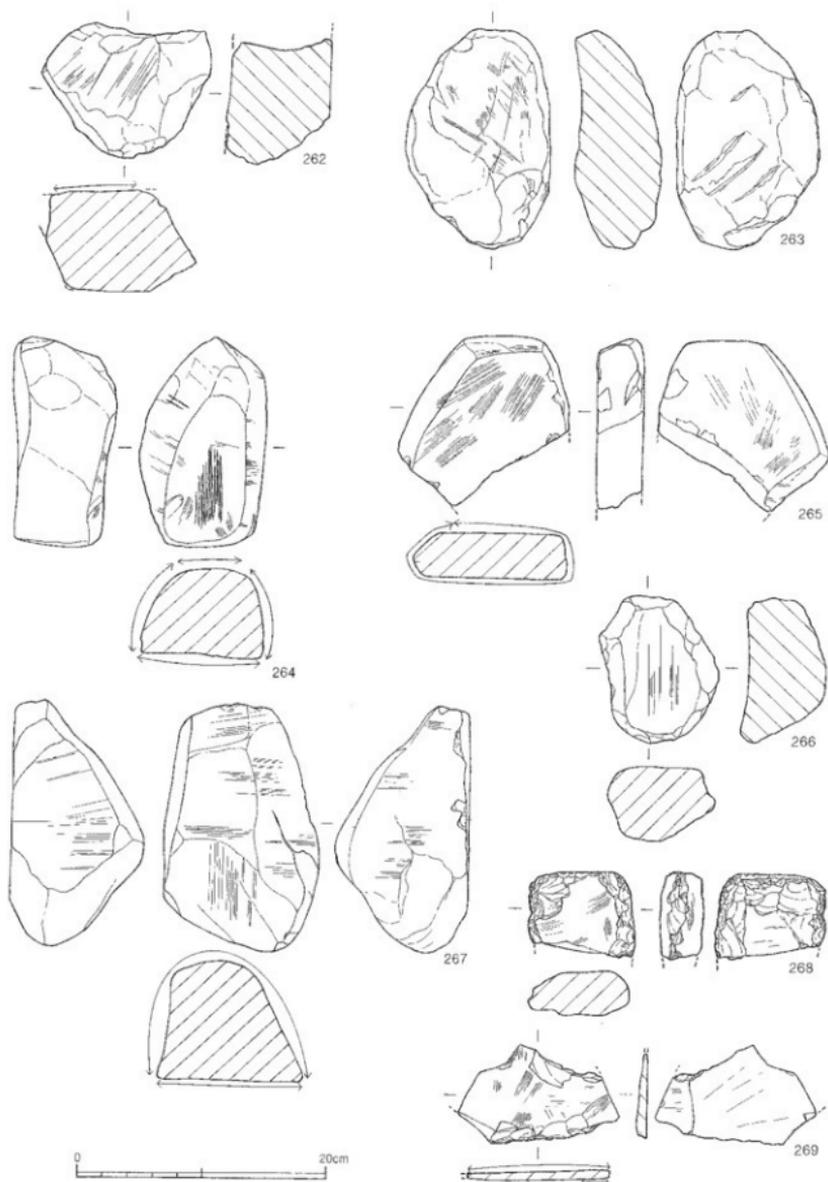
第39図 遺構外出土遺物実測図8 (1:3)



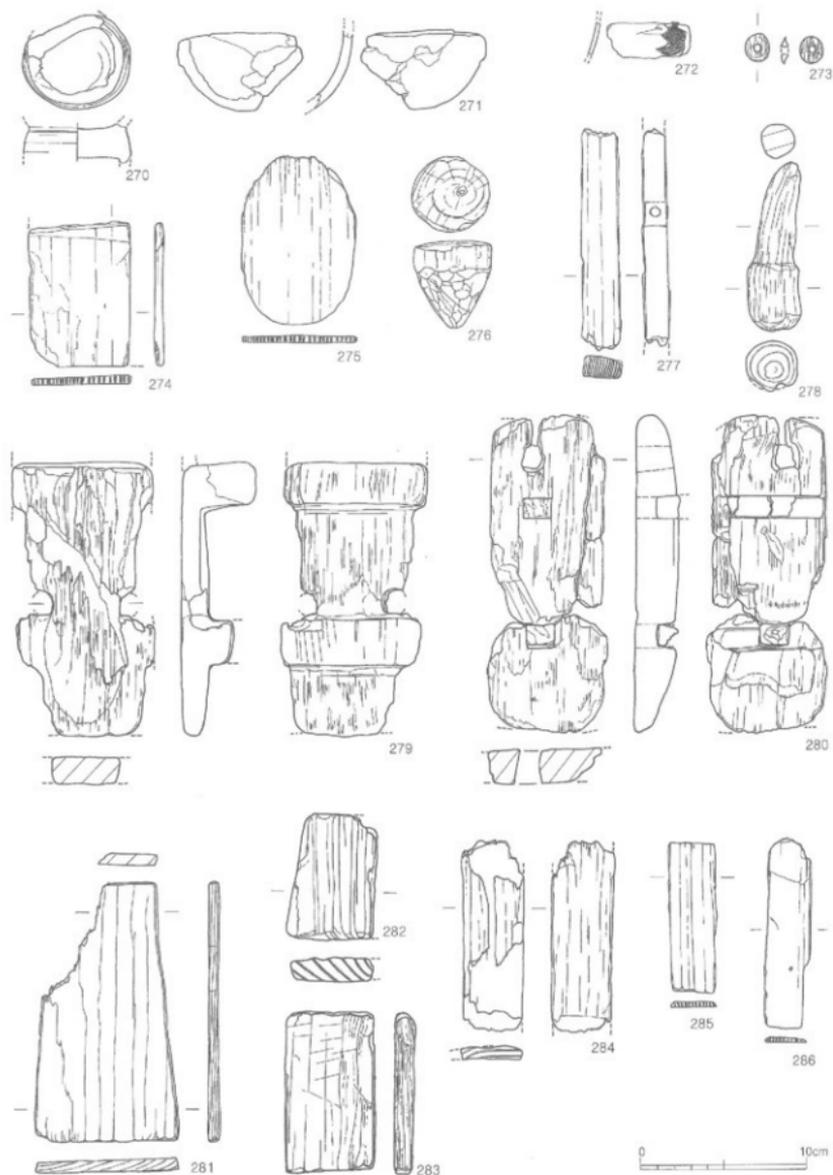
第40图 遺構外出土遺物実測図9 (1:3)



第41图 遺構外出土遺物実測図10 252~256 (1 : 3) 257~261 (1 : 4)



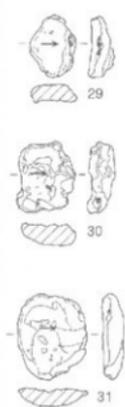
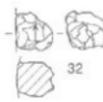
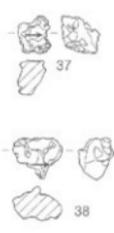
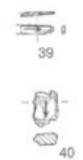
第42图 遺構外出土遺物実測図11 (1 : 4)



第43圖 遺構外出土遺物実測圖12 (1:3)

表1 4区出土鉄関連遺物構成表

遺物名	椀形鍛冶滓 (中)	椀形鍛冶滓 (小)	椀形鍛冶滓 (極小)	鍛冶滓
4 A・B・C 区				
軽 ↑  ↓ 重				
4 D 区				
軽 ↑  ↓ 重				

碗形鍛冶滓 (中・含鉄) 錆化(Δ)	炉壁(鍛冶炉)	羽口(鍛冶)	粘土質溶解物	鉄製品 (鍛造品)	砥石
4 A・B・C 区					
			 <p>6</p> <p>7</p>	 <p>B</p>	 <p>9</p> <p>10</p>
4 D 区					
 <p>29</p> <p>30</p> <p>31</p>	 <p>32</p>	 <p>33</p> <p>34</p> <p>35</p> <p>36</p>	 <p>37</p> <p>38</p>	 <p>39</p> <p>40</p>	 <p>41</p>

## 第2節 築山遺跡(平成17年度発掘調査4B区)にかかる自然科学分析

渡辺正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)

### はじめに

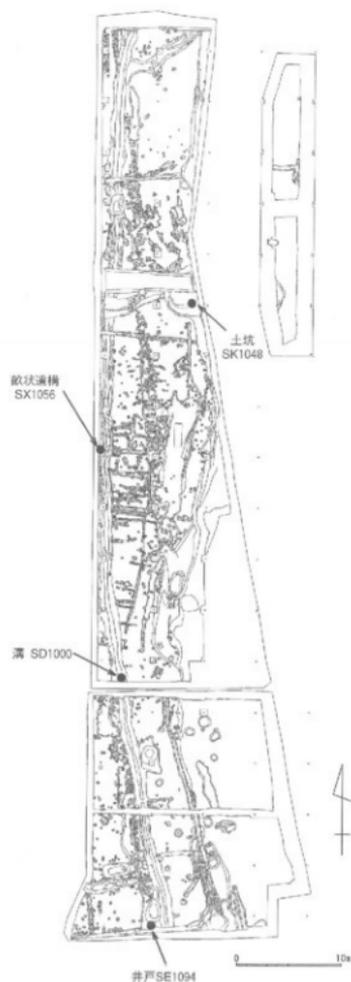
築山遺跡は島根県中央部の出雲市上塩治町に位置する。本報は、出雲市が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した複数の業務内容をまとめ、再編集したものである。

分析の目的は以下に示す3点であり、花粉分析、植物珪酸体(プラント・オパール)分析、珪藻分析、種実分析、寄生虫卵分析を実施し、それぞれの目的に対して考察を行った。

- ①溝状遺構(SD1000)の堆積環境を明らかにする。
- ②畝跡と考えられる畝状遺構(SX1056)(No.1地点)での耕作の実態を明らかにするとともに、同時期の水溜状遺構(SK1048)との関連を調べる。
- ③遺構(SE1094)の性格を明らかにする。

### 分析試料について

図44に、試料採取地点を示す。それぞれの地点での模式柱状図及び分析試料採取層準を、分析結果として示した各種ダイアグラム左端に示してある。種実分析試料は、「畝状遺構(SX1056)」地点4層最下部からブロックで採取した。また、図45に遺構SE1094の断面図及び寄生虫卵分析試料の採取位置を示す。



第44図 4B区試料採取地点(1:500)

## 分析方法及び分析結果

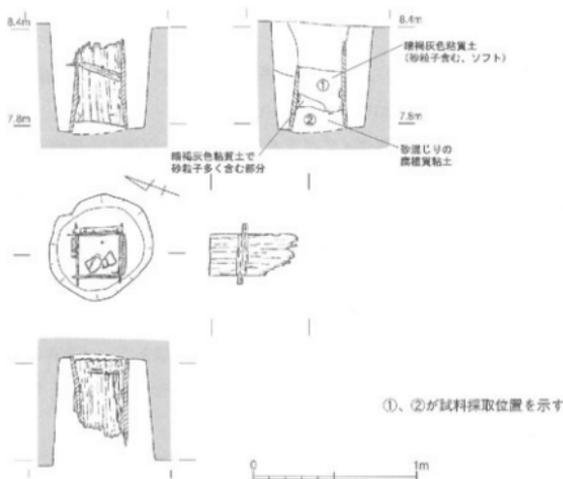
### 1) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び珪藻分析用プレパラートを用いて、その外の微化石、火山ガラスの含有状況を確認した。各微化石・火山ガラスの概査結果は、第2表のとおりである（植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体は、珪藻分析用プレパラートを観察した）。

### 2) 花粉分析

処理は渡辺（1995 a）に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・孢子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村（1974）に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

分析結果を第46～48図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。統計処理に十分な量の木本化石が検出できなかった試料では、検出できた種類を「\*」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積



第45図 SE 1094の断面図および試料採取地点

表2 微化石調査結果

地点名	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	フント・オパール
SX1056 (畝遺構)	1	△	◎	△×	△×	△×	○
	2	△	◎	△×	△×	△×	○
	3	△	○	△×	△	△×	○
	4	○	△	△	◎	△×	○
SD1000	1	◎	○	△	◎	△	◎
	2	◎	○	△	◎	△×	◎
	3	○	○	△	○	△×	◎
SK1048	4	◎	△	△	◎	△×	○
	10	◎	△	△	◎	△×	△×
	16	◎	△	△	◎	△×	△×
	20	◎	△	△	◎	△×	△×

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる  
△：非常に少ない △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

百分率として示した。

### 3) 植物珪酸体分析

分析処理は藤原(1976)のグラスピース法に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いた。同定・計数は、イネ科の機動細胞由来植物珪酸体のほか、形態分類群、樹木起源など同定可能な分類群について行った。また計数は、同時に計数したグラスピースの個数が300を超えるまで行った。

分析結果を第49～51図の植物珪酸体ダイアグラムに示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

### 4) 珪藻分析

処理は渡辺(1995b)に従った。プレパラートの観察・同定を光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。

分析結果を第52・54図の珪藻ダイアグラム及び、第53・55図の珪藻総合ダイアグラムに示す。珪藻ダイアグラムでは珪藻総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、スペクトルで示した。珪藻総合ダイアグラムでは、生息域ごとにまとめて百分率を算出し、累積ダイアグラムで示した。また、生息水域グラフでは検出総数を基数とし、他のグラフでは淡水種総数を基数としている。珪藻化石組成表では、検出総数を基数とした百分率を算出し示してある。

### 5) 種実分析

試料を0.25mm目の篩で水洗し細粒物を除去した後、肉眼あるいは実体顕微鏡を用いて植物遺体を選別・同定する。同定に当り、現生標本及び図鑑類を参考にした。同定後の試料は、調査地点ごとに分類群別にガラス瓶に入れ標本とした。

分析結果を表3の種実同定結果に示す。また、以下に分類群ごとの記載を行った。

#### (1) イネ科 (Gramineae)

炭化した種子を出土した。種子は長卵形で扁平、腹面下端に長楕円形の胚があり、背面には不明瞭なへこみがある。種子頂部は丸く、表面は平滑である。形状からメヒシバやカモジグサ

表3 種実同定結果 (S X 1056 4層最下部)

試料名	分類	部位名	個数
S X 1056 4層	イネ科	種子	1
	核菌綱	菌核	1

などと考えられる。

#### (2) 核菌綱 (Pyrenomycetes)

菌核を出した。ほぼ球形で表面はざらつくが模様はない。中は均質のスポンジ状である。もともと黒く堅いので炭化しているかどうかの判断は難しい。主にコナラ属などの広葉樹の樹皮に付着して生活する菌類で、胞子を放出する器官である菌核は、成熟すると子座から離れる構造になっている。

#### 6) 寄生虫卵分析

処理は金原 (2003) に従った。プレパラートの観察・同定を光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。

分析結果を、表4の寄生虫卵分析結果に示した。表4には、同定種類ごとの計数値を示すほか、処理試料1cmあたりの含有数に換算した数量を示す。また、基礎データとして寄生虫卵密度・希釈率を示す。

#### 花粉分帯

築山遺跡では平成15年度以降、継続的に花粉分析等の自然科学分析が実施されている。これらのうち渡辺 (2004) では、弥生時代以降とされるほぼ連続した花粉組成が得られている。また、近隣の三田谷 I 遺跡では、断続的ではあるが縄文時代中期以降の花粉組成が得られている (中村・渡辺, 2000ほか)。

今回の分析地点の内、S D 1000が弥生時代後期、S X 1056地点及びS K 1048が中世に堆積したと、それぞれの出土遺物から考えられていた。

既知の花粉分析結果、及び今回の推定堆積年代を基に、各地点で築山遺跡での局地花粉帯 (渡辺, 2004) に対比した。

##### 1) S X 1056地点の各試料について

S X 1056地点は、中世の畝状遺構 (畝跡) と考えられていた。

試料No. 3～1は、出土遺物の時期からⅢ帯に相当すると考えられる。しかし、木本花粉の検出数が少ないことから、花粉分帯の対象から除いた。

試料No. 4は最下部から採取したものであったが、微粒炭に乏しいなど他の3試料と試料の様相が異なった。また、この試料のみ花粉化石の含有量も多いなど異質なものであった。下位の地山は砂層であり、これらの花粉化石が「地山」からの混入であるとは考えにくい。どこから持ってきて客土をしたなどの可能性が指摘され、木質的なものでないと考えて花粉分帯の対象から除いた。

表4 SE1094の寄生虫卵分析結果

試料No		①	②
1 マンソン裂頭条虫卵 <i>Diphyllobothyium mansoni</i>	個体数	0	1
	(個体/cdf)	0	2
総数		0	1
寄生虫卵密度 (個体/cdf)		0	2
種積率 (1/x)		17	2

## 2) IV帯 (弥生時代後期: SD1000)

スギ属が卓越し、マツ属 (複維管束亜属)、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。孢子化石の割合は低く、草本花粉ではヨモギ属が卓越するほか、イネ科 (40ミクロン未満) も高率を示す。

渡辺 (2004) では、中世の堆積層下位で弥生時代に堆積した可能性のある層準の花粉組成もⅢ帯としていた。しかし、ここでのⅢ帯はマツ属 (複維管束亜属) が卓越し、今回得られた花粉組成とは異なるものであった。一方、近辺の遺跡に目を向けても弥生時代に堆積したと確定される堆積物の分析例がなかった。両地点とも局地的な植生を反映したものである可能性も残るが、今回の試料は明らかに弥生時代後期の堆積物であり、渡辺 (2004) の堆積時期は不確実なことから、今回得られた花粉組成が弥生時代後期を代表する花粉組成であると考えた。またⅢ帯に先立つことから、IV帯とした。

## 3) Ⅲ帯 (中世: SK1048)

マツ属 (複維管束亜属) が卓越するほか、スギ属、コナラ亜属を伴う。孢子化石の割合は低く、草本花粉ではイネ科 (40ミクロン以上) が卓越するほか、イネ科 (40ミクロン未満)、ヨモギ属が高率を示す。

今回得られた花粉組成の特徴は、渡辺 (2004) で明らかになったⅢ帯の特徴と一致する。また、時期も良く一致することからⅢ帯に対比した。

## 畝状遺構で花粉化石含有量が少なかった原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

1. 堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2. 堆積物の特性 (粒度・比重) と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
3. 土壌生成作用に伴う堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

今回分析した試料の多くは暗褐～黒色の中～粗砂質粘土であり、孢子の割合が高く、キク科を主とした草本の割合も高い。またブラント・オパール含有量も多い。これらのことから、

3が主因であったと考えられる。つまり、堆積速度が遅いために花粉が堆積物中に固定される以前に紫外線の作用で分解したと考えられる。

## S X 1056 (畝状遺構) と S K 1048 (土城) の関係について

### 1) 畝状遺構の環境

前述のように、畝状遺構は紫外線の影響を強く受ける環境下で土壌化を受けていたことが明らかである。つまり、畝作環境に長く置かれていたことが示唆される。一方分析試料の内、試料No.1からは「イネ」のプラント・オパールが多量に検出されるほか、「ムギ」のプラント・オパールも検出され、畝作を裏付けるものである。しかし、試料No.1層準は畝状遺構を覆う堆積物であり、畝状遺構の耕作土ではない。したがって、中世にイネやムギが作られていたとは言い難い。

試料No.2では「キビ族型」のプラント・オパールとソバ属花粉が検出された。「ソバ」と「アワ (キビ族型プラント・オパール)」が栽培された可能性が指摘できるが、試料No.2層準も畝状遺構を覆う堆積物であり、畝状遺構の耕作土ではない。

試料No.4、3でも「キビ族型」のプラント・オパールが検出された。また試料No.3では、ソバ属花粉が検出された。試料No.4層準の種実分析では、イネ科の「雑草」であるメヒシバあるいはカモジグサと考えられる種子が検出されたが栽培植物は検出できなかった。

試料No.3では「ソバ」と「アワ (キビ族型プラント・オパール)」が栽培された可能性が指摘できる。しかし、ソバ属花粉の検出量は少なく、上位の2層からも検出されていることから上位から混入した可能性も指摘できる。またキビ族型プラント・オパールがアワ以外の雑草も含むことなど、「ソバ」と「アワ (キビ族型プラント・オパール)」が栽培された可能性は低い。

### 2) S X 1056地点と S K 1048との関連

共に中世の遺構と考えられることから、S K 1048が畝への灌漑用溜池の可能性が指摘されていた。S K 1048の花粉分析結果からは、近辺が草地あるいは水田であったことが示唆され、S X 1056地点が土壌化を受ける環境 (畝地、草地) であったことと矛盾はしない。しかし、両地点で共通して特徴的な花粉化石が検出されなかったことから、両地点の関連を論ずることはできなかった。

## 遺構 S E 1094の性格について

遺構 S E 1094がその形態からトイレ遺構との可能性が指摘された。このことから、遺構内堆積物の寄生虫卵分析を行った。しかし、分析結果 (表3) に示すとおり、検出された寄生虫卵はマンソン裂頭条虫 (イヌ、ネコに普通にみられる寄生虫) 卵1個体であった。ヒトには、生水や広範囲に分布している第2中間及び待機宿主の生食や加熱不十分な状態で摂取することによって感染するが、ヒトが終宿主ではないため、幼虫状態で寄生する。

前述のように S E 1094の上部①からは全く寄生虫卵が検出されず、下部の②からのみ寄生虫

卵がわずかに検出された。現地観察で②がS E 1094の本質的な堆積物で、①は廃棄時あるいは廃棄後の堆積物であると推定されていたことと併せると、検出された寄生虫卵はS E 1094の使用時に付加されたことになる。しかし前述のように、マンソン裂頭条虫はイス、ネコが終宿主であり（卵は終宿主の体内で生まれる）、S E 1094に人間の糞がたまっていたと言うことにはならない。

いわゆる「トイレ遺構」では、終宿主が人間の寄生虫卵が数百個体/cm以上の密度で検出されるのが普通であり、今回の結果からは、S E 1094がいわゆる「トイレ遺構」であるとは考えにくい。

## 古環境推定

以下では、堆積時期ごとに古環境を推定する。

### 1) 弥生時代後期（IV帯期）

#### ① S D 1000の堆積環境

珪藻分析結果で底生種がほとんどを占め、上位に向かい陸生種が微増する。また、流水種は検出できなかった。また試料No. 3層準が粘土質砂層であったものの、全体に明確なラミナが認められないことから、閉鎖的で流れの乏しい湿地状の溝であったと考えられる。溝が埋まるにつれ、水量も減り時には干上がることもあったと考えられる。

#### ② S D 1000内あるいは近辺の植生

ヨシ属のプラント・オパールが検出されることから、溝内あるいは縁辺にはヨシが生育していた部分があったと考えられる。また、ウシクサ族A型やススキ属型のプラント・オパールも検出され、チガヤ類やススキ類などが溝の縁辺から近辺には繁茂していたと考えられる。一方で、アリノトウグサ科やノアズキ属の花粉が特徴的に検出され、フサモ類が溝内に、ノアズキが溝近辺に繁茂していたことが明らかである。

また、ブナ科のプラント・オパールが検出されることから、シノキ類が近辺に生育していた可能性がある。

#### ③ 山地の植生

草本花粉が卓越することから、遺跡近辺には草地在が広がっていたと考えられる。また得られた木本花粉は、遺跡背後の山地から遠く中国山地より飛来、あるいは水とともに流れ着いたもので、広い範囲の植生をしめしていると考えられる。

谷沿いや、扇状地末端にはスギ林が分布する一方、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林やナラ類、マツ類を要素とするいわゆる「二次林」が分布していたと考えられる。

### 2) 中世（III帯期）

#### ① S K 1048の堆積環境

珪藻分析で底生種がほとんどを占め、下位ほど浮遊種が多い。もともと水深が深かったものが、徐々に埋まっていったことが分かる。途中で砂層が発達するなど流れ込みがあったことは

確実であるが、流水種はほとんど検出されないことから、出水時にS K 1048内に水が流れ込むことがある程度で、ふだんは流れが乏しかったと考えられる。

#### ② S K 1048内あるいは近辺の植生

イネの花粉（イネ科：40ミクロン以上）やプラント・オパールが検出され、S K 1048の近辺あるいは流れ込む溝の周囲で稲作が行われていたと考えられる。またヨシ属やウシクサ族A型やススキ属型のプラント・オパールが検出されることから、溝内あるいは縁辺、近辺にかけてヨシ、チガヤ類やススキ類などが溝の縁辺から近辺には繁茂していたと考えられる。

また水生植物の花粉も検出されるが、水田雑草でもある。これらはS K 1048の近辺あるいは流れ込む溝の周囲、水田内に生育していたと考えられる。

#### ③ 山地の植生

前時期同様に草本花粉が卓越することから、遺跡近辺には草地在り広がっていたと考えられる。また得られた木本花粉も、遺跡背後の山地から遠く中国山地より飛来、あるいは水とともに流れ着いたもので、広い範囲の植生をしめしていると考えられる。

谷沿いや、扇状地末端のスギ林や山地の照葉樹林の分布域が縮小し、山地にはマツ類やコナラ類を要素とする、いわゆる「里山」が広く分布していたと考えられる。

### まとめ

築山遺跡平成17年度調査での自然科学分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

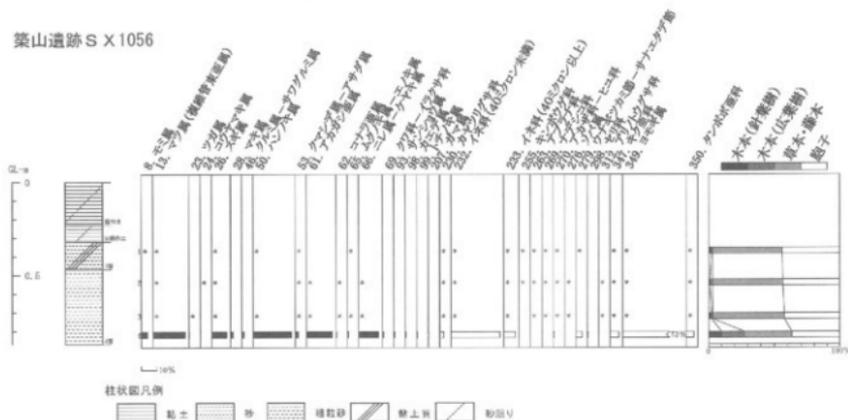
- (1) 花粉分帯を行い、既知の局地花粉帯との比較を行った。
  - ① 従来弥生時代以降の植生を示すとしていたⅢ帯に先立つ花粉組成が見つかり、Ⅳ帯とした。ただし、既知の結果にも局地的な植生を反映した可能性があるなど、再度検討する必要がある。
  - ② Ⅲ帯は、中世を中心とする植生を示唆する可能性が高くなった。
- (2) S X 1056畝状遺構での堆積環境を推定した。

いわゆる土壌化作用により形成され、畝作環境下にあったことが分かった。また、畝状遺構を覆う試料No.1層準からはイネ、ムギが検出された。畝状遺構の作土である試料No.3、4層準では、ソバ属花粉、キビ族型のプラント・オパールが検出された。このことからソバ、アワが栽培された可能性が指摘できるが、可能性は低い。
- (3) S X 1056とS K 1048の関係は、分からなかった。
- (4) S D 1000、S K 1048に関連した古環境が明らかになった。
  - ① S D 1000は、湿地状で流れに乏しい溝であった。
  - ② S K 1048は、水深の深い水滴池(?)であった。出水の度に砂が流入するが、普段は流れに乏しかった。
  - ③ 弥生時代後期、中世の遺跡内から周辺にかけての植生が明らかになった。
  - (5) 遺構S E 1094は、トイレ遺構とは考えられなかった。

## 引用文献

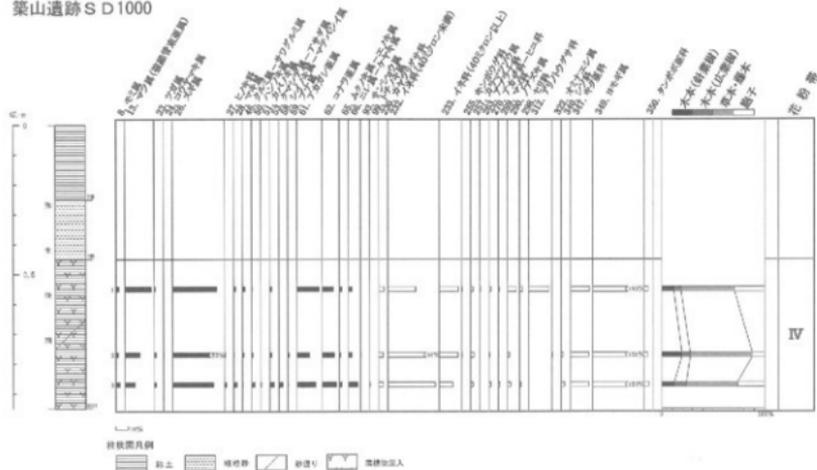
- 金原正明 (2003) 遺跡の土壌分析. 環境考古学マニュアル, 77-84, 同成社.
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13, 187-197.
- 中村唯史・渡辺正巳 (2000) 三田谷 I 遺跡の地下層序と地形発達史. 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ-三田谷 I 遺跡 (Vol. 2) -, 116-127, 建設省中国地方建設局出雲工事事務所・島根県教育委員会.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 渡辺正巳 (1995 a) 花粉分析法. 考古資料分析法, 84-85. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳 (1995 b) 珪藻分析法. 考古資料分析法, 86-87. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳 (2004) 築山遺跡における自然科学分析. 出雲市築山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-寿昌寺遺跡・築山遺跡報告書-, 出雲市教育委員会. 156-166.

築山遺跡 S X 1056



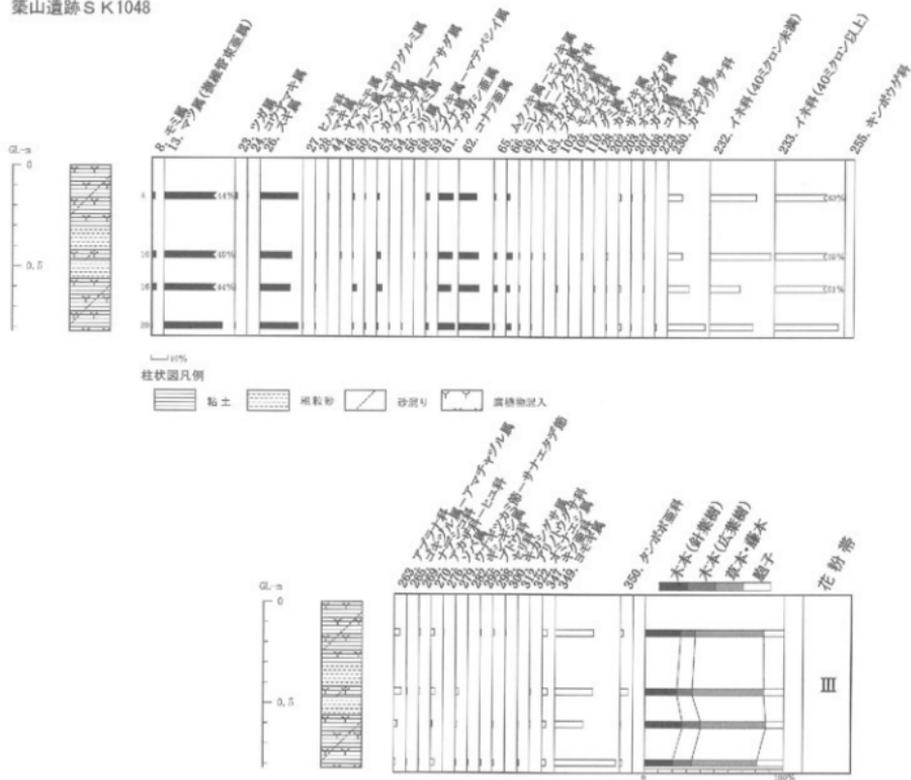
第46図 S X 1056の花粉ダイアグラム

築山遺跡 S D 1000



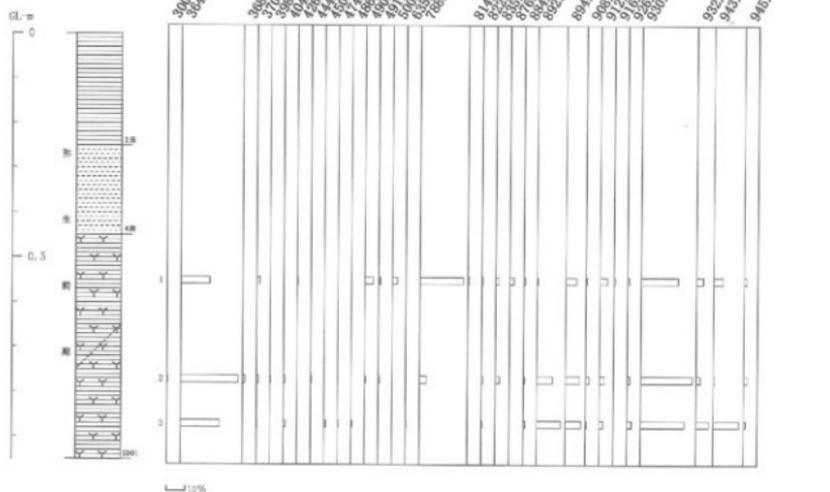
第47図 S D 1000の花粉ダイアグラム

築山遺跡 S K 1048



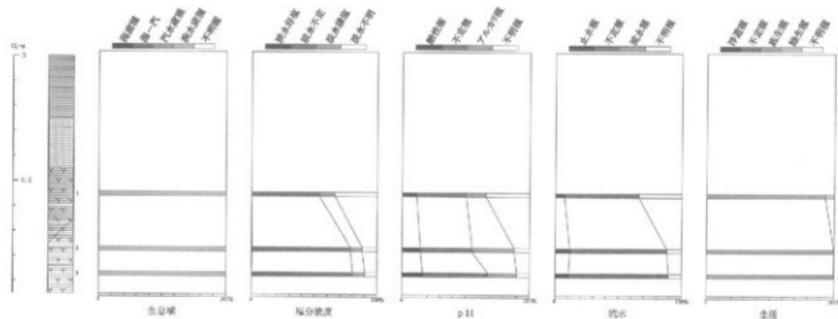


葉山遺跡 S D1000



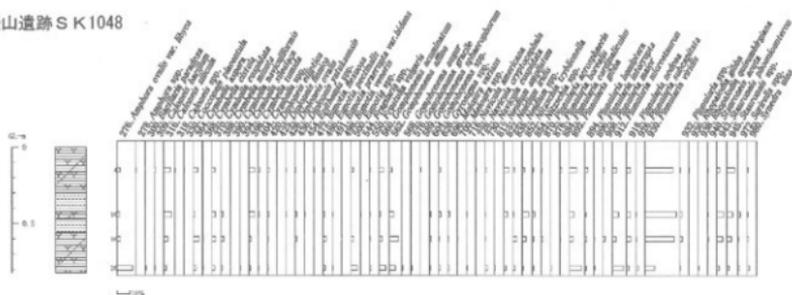
第52図 S D1000の珪藻ダイアグラム

葉山遺跡 S D1000



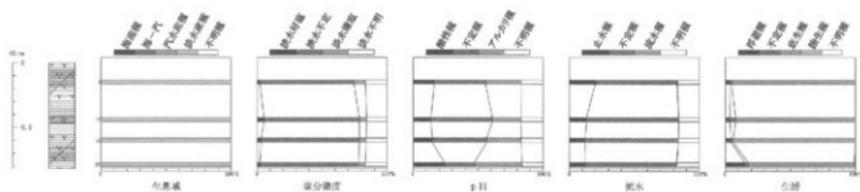
第53図 S D1000の珪藻総合ダイアグラム

築山遺跡 S K 1048



第54図 S K 1048の珪藻ダイアグラム

築山遺跡 S K 1048



第55図 S K 1048の珪藻総合ダイアグラム

### 第3節 ま と め

今回報告した築山遺跡4区では中世の遺構・遺物を中心とし、縄文時代以降、古代に至る遺構・遺物も確認した。4区の遺構配置状況を概観すると、4D区に最も遺構が密集し4A区が最もまばらである。以下、時代毎にまとめを記す。

#### 縄文時代

4B東区の北部にある溝SD1033とSX1034の2つの遺構が検出されているのみである。詳細な時期が判明する縄文土器は出土していないが、遺構が第1ハイカ上面に形成されているので、その時期は後期中葉以降であろう。

築山遺跡ではこれまで、平成14年度調査Ⅱ区（遠藤ほか2004）および、その北に隣接した平成15年度調査1区（三原ほか2005）で、第2黒色土と第2ハイカ層が確認され、縄文時代後期初頭の中津式土器が石器をともなって出土した。また、第1ハイカ層面からは縄文時代晩期からの突帯文土器が弥生時代前期の土器と供伴して石器と共に出土している。約50m南西に位置する平成19年度調査3区（本年度報告予定）の西端からは、第1ハイカ層面から縄文時代晩期中葉～弥生時代初頭の土器が石器とともに出土している。

#### 弥生時代

約200mにわたって4区を縦断する南北溝SD1000と土坑1基（SK1037）がある。南北SD1000は弥生時代後期の溝であるが、周辺から同時期の遺構はみつからなかった。

#### 古墳時代

4C区に古墳時代前期の縦板組の井戸SE1094と中期の溝SD1096があった。

今回報告した4区の南方に位置する2区（三原ほか2007）と5区（本書第4章）、および南西の3区（平成18・19年度調査、本年度報告予定）からは後期（6世紀後半から7世紀前半）の遺構・遺物がみつまっている。これらは破壊された古墳に関わると推測されるもので、4区とは様相が異なる。

#### 古 代

古代の遺構として、4D区の斜行溝SD1123・SD1145、そして4B区南端から4C区にかけて点在していた6基の土坑（SK1067～1071・1080）を報告した。既報告の築山遺跡2区からは8世紀前半の須恵器骨甕器1基、11号区画道路部の調査区からは8世紀後半の斜行溝（SD01）がみつまっているが、概して古代の遺構は希薄である。

## 中 世

4区では、もっとも遺構と遺物の多い時期である。その前半期は平安時代末から鎌倉時代(12～14世紀)、後半期は室町時代(14～16世紀)にほぼ該当する。

前半期の遺構では、4D区で確認したL字状の溝SD1111およびそれと連結した土坑SK1110(13～14世紀)が目される。溝SD1111からは舟形の形代が2点出土し、土師器の杯と小皿も一定量出土していて、祭祀的な様相をうかがうことができる。

後半期には4区全体にわたり井戸や水溜遺構があるほか、4D区では15世紀代の建物跡と権跡を確認した。この時期の出土遺物量からみても、4D区は今回報告する調査区を中心となるであろう。

4区全体からは、総数130点の輸入陶磁器が出土した(白磁41点、青磁63点、青白磁2点、青花12点、褐釉黒釉など7点)。白磁には9～10世紀の製品が1点(第35図97)ある。これは伝世品の可能性があるが、出雲平野部では最も古い白磁である。12世紀の白磁と青磁はごく少なく、13世紀になると数が増える。14世紀のものがやや少ないようであるが、15世紀になると出土量ももっとも多くなり、この地区が盛期をむかえたようである。17世紀の遺構は確認できなかったが、肥前系の陶磁器が出土している。

出雲平野部での陶磁器出土遺跡は、1994年時点で16遺跡(西尾・守岡1994)、1999年時点で28遺跡(間野1999)が数えられている。そのうち、出雲平野中央にある蔵小路西遺跡(出雲市小山町・渡橋町)からは破片数で、青磁216点、白磁55点、褐釉陶器6点のほか国産陶磁器379点が出土している。輸入陶磁器は13～14世紀を中心とするようで、青磁の中には双魚文盤など優品を含む。これらの遺物や遺構の状況から、12～15世紀の蔵小路西遺跡は、「朝山家総領家」の居館跡と推定されている。

築山遺跡4区の輸入陶磁器類の出土量は、蔵小路西遺跡にはおよばないものの、出雲平野部では屈指の質と量ではある。当然、この地に勢力をかけた塩治氏との関係が問題となるが、それは本報告の築山遺跡3区・5区の報告を経た後に議論してみたい。

## 参考文献

第3章で用いた分類（用語を含む）及び編年観は基本的に下記の論文・報告書に依拠している。

## 弥生土器

松本岩雄 1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』—山陰・山陽編— 木耳社

## 須恵器

柳浦俊一 1980 「山雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号 松江考古学研究会

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会

## 古式土師器

赤澤秀則 1992 『講武地区県営調整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会

寺澤 薫 1900 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『穴部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

## 中世土師器

八峠 美 1997 「鳥取県における土師器皿の展開について」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学論集刊行会

八峠 興 1998 「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」『中近世土器の基礎研究』XIII 日本中世土器研究会

「平安時代前期の土器様相—中国地方を中心に—」『第4回 山陰中世土器検討会資料』山陰中世土器検討会 2005

『出雲平野の中世土器検討会資料』1998

「山陰における中世の調理具」『第6回 山陰中世土器検討会資料』山陰中世土器検討会 2007

岡野大丞 1999 「蔵小路西遺跡」—般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会

## 陶磁器

「城館出土の貿易陶磁器—職豊前夜の西国大名と貿易—」『貿易陶磁研究会 四国大会資料集』日本貿易陶磁研究会 2000

横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『研究論集』4 九州歴史資料館

西尾克己・守岡正司 1994 「常楽寺遺跡と庭反II遺跡の性格について—出雲西部出土の中世陶磁器を手掛りとして—」『湖陵町誌研究』3 湖陵町教育委員会

大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社

乘岡 実 2000 「中世の備前焼甕(壺)の編年案」『第2回 中近世備前焼研究会資料』

## 中世（その他）

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

小野正敏編 2001 『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会

## 鉄滓

穴澤義功 2005 「製鉄関連遺物（分析資料）の考古学的観察」『若ヶ原奥たたら跡』林道宮本壺谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II 島根県出雲農林振興センター・出雲市教育委員会

天辰正義・穴澤義功・平井昭司・藤尾慎一郎 2005 『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告—鉄関連

遺物の発掘・整理から分析調査・保存まで』(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム 鉄関連遺物の分析評価研究グループ

#### その他

- 遠藤正樹・藤永照隆 2004 『寿昌寺遺跡・築山遺跡発掘調査報告書』出雲市築山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 三原一将・米田美江子・藤永照隆 2005 『築山遺跡』I 県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥根県出雲土木事務所・出雲市教育委員会
- 三原一将・米田美江子 2007 『築山遺跡』II 県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会

## 遺物観察表の記載事項について

挿 図 番 号：本文の挿図番号に対応する。

出 土 地 点：地区名・グリッド名・遺構名・層位名の順で記した。

種 別・器 種：土器の種類・器種、不確定なものは部位を記した。土器以外のものは、素材・器種を記した。

計測値・残存率：実測図から測定した。残存率は全体分の、部位が記載してあるものはその部位の、比率である。

胎 土：胎土に含まれる砂粒子の大きさとその量、砂粒子の主な種類（目分量の多いものから順に）を記した。

焼 成：良好・やや良好・普通・やや不良・不良の5段階に分けて判断した。

色 調：素焼き系統の土器は褐色を、還元炎焼成の土器は灰色を基本として色調を判断した。

成形・調整・文様：遺物を正位置に置いた状態での、各位の上から下へ、底面は外縁から内縁へ特徴を記した。変化点には「・」で区切りをつけた。重複するものは「→」を使い「古→新」で表した。並列関係は「+」を用いた。「回転」と明記したものは、回転台・轆轤を利用したと考えられるものである。

「ナデ」とのみ記載したものは意識的な方向性を持たないもの、または方向が不明なもの。

「ケズリ（LR）」とはヘラケズリの方向が左から右を表したものである。

「ケズリ（DU）」とはヘラケズリの方向が下から上を表したものである。

ハケ目の単位が未記載のものは不明なものである。

鍛冶関連遺物：椀形鍛冶滓の（中）は500g以下、（小）は250g以下、（極小）は125g以下のものをさす。

磁着度とは製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」を用いて、6mmを1単位として資料との反応の程度を数字で表したものである。

メタル度とは埋蔵文化財専用を整準された小型特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留の程度を示すもので、基準感度は次のものである。

H（○）は最高感度で、ごく小さな金属鉄が残留する。

M（◎）は標準感度で、Hの倍以上の金属鉄が残留する。

L（●）は低感度でMの倍以上の金属鉄が残留する。

特L（☆）はごく低感度でLの倍以上の大きな金属鉄が残留する。

錆化（△）とは、かつて金属鉄が内包されていた資料でも既に錆化してしまったもの。

4区出土遺物観察表1

探出番号	止土地層	種別	計測値 (cm)	形状	組成	色調	成形・調整・文様	備考
第1図1	4B区E6 SX1034	縄文土器 深鉢口縁部	3×2.5角	1cm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄褐色	口縁部：小さな凹目 外：ややぬいつき 内：ナデ	第11図2・3と同一体の可能性がある 後期中葉以降
第11図2	4B区E6 SX1034	縄文土器 深鉢口縁部	ほぼ 3×4	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	灰黄褐色	丸底 外：調整不明 内：ナデ	第11図1・3と同一体の可能性あり 後期中葉以降
第11図3	4B区F16 SX1035	縄文土器 深鉢口縁部	10×7角	2cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	灰黄褐色	外：ナデ 内：斜めナデ	第11図1・2と同一体の可能性あり 後期の類例以遠
第11図4	4A区D29 SX1000 上層	弥生土器 深鉢口縁部	5×4角	1~2mm次の砂粒子(石英・花崗石など)含む	普通	灰黄褐色	外：ナデ・調整面曲中に工具痕あり・ハケ目(6本/5cm) 内：ナデ・ハケ目(4~5本/5cm)	高麗形口縁 前期末
第11図5	4A区B-C 2C SX1000 上層	弥生土器 深鉢口縁部	5×2角	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外：黄褐色 内：灰褐色	外：ハケ目→ナデ・連続割 突目：ハケ目(6本/5cm)・ケズリ目	中期後半
第11図6	4B区B14 SX1000 中位	弥生土器 深鉢口縁部	6×6角	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	黄褐色	外：タテハケ目→ヨコナデ・タテハケ目(1cm) 内：ヨコナデ・ヨコハケ目(5cm/2cm)	内外面ともハケ目調整を施して縁が低い状態に見せかけている 中期後半
第11図7	4A区D29 SX1000 上層	弥生土器 深鉢口縁部	口径 10.7 口縁部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄色	外：3本の浅いアア状の凹線・ヨコナデ 内：ヨコナデ	塚本N-2
第11図8	4B区37 SX1000 上位	弥生土器 深鉢口縁部	口径 16 口縁部 1/9存	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	にぶい褐色	外：口縁上縁(腰同線)→ナデ滑り、口縁下縁(6本の縦凹文)・ヨコナデ 内：ヨコナデ・ヨコハケ目(5cm/2cm)	滑り口縁 中葉3
第12図1	4C区D-C1 SE1094 底土	古式土器 深鉢口縁部	胴部産人骨23 群部 1/4存	1cm以下の砂粒子(石英・長石など)多く含む	良好	黄褐色	外：ナデ・ハケ目 (10本/1cm)	外部は球状で磨替は得手・外部全体に厚く磨替 層付6~7
第12図2	4C区C3 SX1086	土師器 深鉢口縁部	口径 14 口縁部 1/2存	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)やや多く含む	普通	灰白色	外：口縁部(ナデ)・ナデ・ハケ目→ナデ 内：ヨコナデ・ナデ・ケズリ目	内外面とも厚く磨替を施す
第14図6	4C区D5 SE1070	須恵器 深鉢口縁部	5×8角	微砂粒子(石英など)若干含む	良好	灰色	外：厚付タタキ目 内：同心タタキ目	古代
第14図9	4B区B14 SX1051 底土	土師器 上半部	口径 72.4 底面 1/6存	1mm次の砂粒子(石英・角閃石・長石など)多く含む	やや不純	明黄灰色	外：調整不明 内：調整不明・ケズリ目	古代~中世
第14図2	4B区B14 SX1056	須恵器 皿底面	底径 13.6 底面 1/7存	1mm次の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外：調整不明・底面(ナデ・ヘラ切り) 内：調整不明	9世紀
第14図3	4B区B14 SX1050	須恵器 深鉢口縁部	8×4.5角	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外：ヨコタタキ目・磨同線に若干目 内：磨同線・ナデ	古墳~中代
第14図4	4B区B14 SX1050	土師器 深鉢口縁部	8×6.5角	1mm次の砂粒子(石英・長石など)多く含む	やや不純	にぶい黄褐色	外：調整不明 内：調整不明・ケズリ目	古墳~中世
第14図7	4C区D4 SX1073 上層	須恵器 碗7割部	6×3角	微砂粒子(石英・長石など)少量含む	良好	灰色	外：同軸ヨコナデ→「ナ」字の凹目若干 内：同軸ヨコナデ	割置は多く磨されその面はナデと同心よな面が磨られる 7~8世紀
第14図9	4B区36 SX1123 中位	土師器 杯	口径 12.8 底面 3.6 底面 6.7 2/3存	1cm以下の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄褐色	外：同軸ヨコナデ・磨同線(凹目若干) 内：同軸ヨコナデ・同心円ナデ	内外面とも厚く磨替 10世紀
第14図10	4B区C4 SX1123 上半	土師器 杯口縁部	口径 16 口縁部 1/12存	微砂粒子(石英など)少量含む	良好	にぶい黄褐色	外：同軸ヨコナデ 内：同軸ヨコナデ	15世紀
第14図11	4B区R6 SX1123 上半	土師器 杯底面	底径 7 底面 1/6存	微砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	灰黄褐色	外：同軸ヨコナデ・磨同線(同心円若干) 内：同軸ヨコナデ・同心円ナデ	14世紀
第14図12	4B区R6 SX1123 上半	土師器 杯底面	底径 6 底面 1/7存	微砂粒子(石英・角閃石など)及び若干の1.5mm次の砂粒子を含む	良好	にぶい黄褐色	外：同軸ヨコナデ・磨同線(同心円若干) 内：同軸ヨコナデ・強い同軸ヨコナデ	中世
第14図13	4B区R6 SX1123 上半	土師器 杯底面	底径 6.2 底面 1/3存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	灰黄褐色	外：調整不明・底面(同軸(同心円)一般状工具によるナデ)内：ナデ	内外面に磨痕あり 内外面とも厚く磨替 西暦一世紀
第14図5	4B区R6 SX1145 上半	須恵器 深鉢口縁部	口径 17 底面 13 底面 10.8 1/3存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	暗灰色	外：同軸ヨコナデ→厚割部(1本の凹文・2本の凹線) 内：同軸ヨコナデ・ナデ・磨同線(ナデ・同軸ヨコナデ)	杯部外周にキズ痕あり 古代
第15図1	4B区C3 SX1054 上層	須恵器 産人骨1/5存	底径 2.6 底面 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：同軸ヨコナデ・磨同線(同心円若干) 内：同軸ヨコナデ・同心円ナデ→ナデ	7世紀末~8世紀前半
第15図2	4B区C3 SX1054	須恵器 産人骨1/5存	口径 9 口縁部 2/3存	1.5mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：同軸ヨコナデ 内：同軸ヨコナデ	内面に調整と杯部の接合痕あり
第15図3	4B区C3 SX1054	須恵器 産人骨1/5存	底径 9.3 底面 1/3存	1cm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外：同軸ヘラケリ目・同軸ヨコナデ・底割(同心円若干)→底面磨りナデ・外縁を同軸ヨコナデ 内：同軸ヨコナデ・同心円ナデ	古代

採回番号	出土地点	種別	計測値 (cm) 2 残存部	胎上	胎底	色	紋	成形・調整・文様	備考	
第15図 a	48区C9 S7054	土師器 臼形部	4×3角	微砂粒子(石英など) 若干含むが均しい	良好	黄褐色	流黄褐色	外: 玄転ヨコナデ・胎内: 内: 玄転ヨコナデ	内外面とも丹塗り 12世紀	
第15図 b	48区C11 S01054	土師器 杯形部	底径 5.6 胴径 10	微砂粒子(石英・長石 など)少量含む	良好	淡黄色	外: 玄転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 玄転ヨコナデ・胎心 ナデ	外: 玄転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 玄転ヨコナデ・胎心 ナデ	9世紀	
第21図 1	48区A SP1104	瓦質土器 胴・上半部	口径 25 口縁部 1/15寸	1m以下の砂粒子(石英・ 長石など)やや多く含む	普通	オリーブ黒色	附黄	外: 胎転ヨコナデ・胎心(胎 底未切り)及び胎心ナデ 内: 胎転ヨコナデ・胎心ナ デ(胎心5~15cm/10)	第21図2と同一体の可能 性あり内面平らに丹塗りで 胎底にコシ線あり(胎底外 面に丹塗痕あり)外面に一部 丹塗り 12~14世紀	
第21図 2	48区A1 SP1104	瓦質土器 胴部	底径 24 胎底 1/15寸	1m以下の砂粒子(石英・ 長石など)やや多く含む	普通	オリーブ黒色	新黄	外: 胎心ナデ 内: 玄転ヨコナデ・胎心ナ デ(胎心5~15cm/10)→胎心ナ デ無し	第21図1と同一体の可能 性あり外面に丹付 12~14世紀	
第21図 3	48区B4 S1113 3層	土師器 杯形部	底径 4.6 胎底 1/8寸	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	灰白色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底不明) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底不明) 内: 胎転ヨコナデ	15~16世紀	
第21図 4	48区C4 SK 131 3層	土師器 杯形部	底径 5 胎底 1/8寸	微砂粒子(石英・長石 など)若干含む	良好	灰黄色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	15~16世紀	
第21図 5	48区C4 SK131 上層	土師器 杯形部	底径 5.6 胎底 1/4寸	微砂粒子(石英・長石 角閃石など)若干含む	良好	にぶい棕色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	15~16世紀	
第21図 6	48区C5 SK113 上層	土師器 杯形部	底径 6 胎底 1/3寸	微砂粒子(石英・長石 など)若干含む	良好	灰黄色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	15~16世紀	
第21図 7	48区B6 SB132	土師器 杯形部	底径 5.4 胎底 1/8寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)若干含む	良好	にぶい黄褐色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	9世紀	
第21図 8	48区B6 SB132 下層	土師器 皿口縁部	口径 12.4 口縁部 1/8寸	微砂粒子(石英・長石・ 金剛石など)若干含む	良好	にぶい黄褐色	外: 胎転ヨコナデ 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ 内: 胎転ヨコナデ	口縁部が丹塗りに丹付 15世紀	
第21図 9	48区B6 SB1132	土師器 小皿底	底径 4.6 胎底 1/4寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石・金剛石など) 少量含む	良好	にぶい棕色	外: 調整不明・胎底(胎転 底未切り) 内: 調整不明	外: 調整不明・胎底(胎転 底未切り) 内: 調整不明	13世紀	
第21図 10	48区B6 SB1134	土師器 杯形部	底径 6.4 胎底 1/5寸	微砂粒子(石英・長石 など)若干含む	良好	にぶい棕色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	15世紀	
第21図 11	48区B6 SB1134	土師器 小皿	底径 4.2 胎底 1/5寸	微砂粒子(石英・長石 など)若干含む	良好	黄灰色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	14~15世紀	
第21図 12	48区B7 SB1134 中層	土師器 小皿	口径 5.4 胎底 1.15 底径 4 胎底 1/8寸	微砂粒子(石英など) 少量含む	良好	灰黄褐色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(調 整不明) 内: 胎転ヨコナデ	15世紀	
第21図 13	48区B5 SP1147	青磁 柄形部	底径 5.8 胎底 2/3寸	胎底	良好	胎:オリーブ 灰色 露胎: 灰白色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り)の一部に胎 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ1層 胎底は厚 13世紀	
第21図 14	48区B5 SP1147	土師器 杯下半部	底径 6.3 胎底 1/3寸	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	灰黄色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ
第21図 15	48区B6 SP1148	土師器 杯下半部	底径 4.5 胎底 1/3寸	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)若干含む	良好	にぶい棕色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ
第21図 16	48区B6 SP1148	土師器 小皿	口径 7 胎底 2.3 底径 4 胎底 1/2寸	微砂粒子(石英・長石 など)若干含む	良好	にぶい棕色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	内面・上半部の一部に丹塗 15~16世紀	
第22図 1	48区B2 SK1084 上層・中 位	土師器 杯	口径 11.2 胎底 4.05 底径 4.8 胎底 1/8寸 胎底完全	3mm以下の砂粒子(石 英・長石・金剛石・角 閃石など)含む	良好	灰白色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ・胎心 ナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ・胎心 ナデ	口縁部に若干の平坦面あり 12世紀	
第22図 2	48区B2 SK1084 中位	土師器 杯口縁部	口径 12.0 口縁部 1/6寸	微砂粒子(石英など) 含む	良好	灰白色	外: 胎転ヨコナデ 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ 内: 胎転ヨコナデ	12世紀	
第22図 3	48区B2 SK 084 中位	土師器 小皿上半部	口径 10.4 口縁部 1/7寸	微砂粒子(石英・角閃 石・金剛石など)含む	普通	灰黄褐色	外: 胎転ヨコナデ 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ 内: 胎転ヨコナデ	内面に流しガによる段あり 13世紀	
第22図 4	48区B2 SK1084 上層	土師器 杯形部	底径 4.7 胎底ほぼ完全	1~2mm以下の砂粒子(石 英・長石・金剛石・金 剛石など)含む	普通	にぶい棕色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	13世紀	
第22図 5	48区B2 SK 084 中位	土師器 小皿	口径 2.3 胎底 1.3 底径 5.3 胎底 1/5寸	微砂粒子(石英・長石 など)少量含むやや 粗っぽい	普通	灰黄褐色 胎底: にぶい 黄褐色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ
第22図 6	48区B2 SK1084 中位	土師器 杯形部	底径 4.1 胎底 1/3寸	微砂粒子(石英・長石 など)少量含むやや 粗っぽい	良好	黄褐色→黒褐色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ
第22図 7	48区C SK1092 中層	土師器 小皿底	底径 3.4 胎底 1/4寸	微砂粒子(石英・長石 など)及び若干の2mm 以下の砂粒子を含む	普通	黄灰色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ
第22図 8	48区C SK1092 上層	土師器 杯形部	底径 4.8 胎底ほぼ完全	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石・金剛石など)及び 若干の1mm以下の砂 粒子を含む	良好	灰黄色	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	外: 胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ	胎転ヨコナデ・胎底(胎 底未切り) 内: 胎転ヨコナデ

探洞番号	出土地点	遺物 種類	計測値 (cm-g) 残存数	形状	材質	色調	成形・調整・文様	備考
第22図9	4C区B1-2 SK1093 1層	土師器 小皿	口径 7.3 柄高 1.8 底径 4.5 底厚 1/7寸 底足形状	微砂粒子(石英・長石 など)及び1~2mm大 の灰白色土を含む	普通	褐色~にぶい 褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部(凹 轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ・ナデ付	古瓦面のナデ取りは中央に2 回の溝・穴に由来するもの 12~13世紀
第22図10	4C区C2 SK1095 1層	土師器 杯底部	口径 6.2 底径 1/2寸	微砂粒子(長石など) 少量含む	普通	にぶい褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 同心円ナデ	内面は強いナデにより凹凸 が著しい 13世紀
第22図15	4C区B2 SK1100	土師器 杯	口径 11.0 柄高 3.4 底径 7.6 底厚 1/2寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)を含む	良好	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ	外底に若干の保存割 13~14世紀
第22図16	4C区B1 SK1100	土師器 杯下半部	口径 6.2 底径 2/3寸	微砂粒子(石英・金雲 母など)を含む	良好	灰黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ	SK111と接合 厚底状の底部 13~14世紀
第22図17	4C区B2 SK1100	土師器 杯下半部	口径 6 底径 1/2寸	微砂粒子(石英・長石・ 金雲母など)を含む	良好	外: 淡黄褐色 内: 淡黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・ナデ	厚底状の底部 13~14世紀
第22図18	4C区B3 SK1100	土師器 杯底部	口径 5.6 底厚 1/2寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)多く含む	良好	にぶい黄褐色	外: ミコフア・底部(凹轡糸 切り) 内: 同心円ナデ	古瓦~中世
第22図19	4C区D3 SK1113	土師器 杯底部	口径 5.6 底厚 1/2寸	微砂粒子(石英・角閃 石など)やや多く含む	良好	外: 黄褐色 内: にぶい黄褐色	外: ミコフア・底部(凹轡糸 切り) 内: 同心円ナデ	古代~中世
第22図20	4C区B2 SK1110 下層	土師器 小皿	口径 7.4 柄高 1.75 底径 4.2 1/4寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石・金雲母など) を含む	良好	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ	13~14世紀
第22図21	4C区B2 SK1110	土師器 小皿	口径 7.2 柄高 1.6 底径 3.1	微砂粒子(石英・金雲 母など)を含む	良好	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ	口縁断面形状は三角形 厚底状の底部 13~14世紀
第22図22	4C区B2-3 SK1110	土師器 小皿	口径 7.7 柄高 1.1 底径 4.6 底厚 1/7寸 底足形状	微砂粒子(石英・長石・ 金雲母など)を含む	良好	灰黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデナデ	古瓦面に斜線状にできた 凹跡あり 厚底状の底部 13~14世紀
第22図23	4C区B2 SK1110	土師器 小皿	口径 6.8 柄高 1.3 底径 5 1/2寸	微砂粒子(石英・角閃 石・長石など)を含む	良好	淡黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ	口縁部等外面を少し欠くナ デで内面磨きみになる 13~14世紀
第22図24	4C区B2 SK1110	青銅 鍔底部	口径 17 口縁部 1/8寸		良好	緑: 灰オレンジ 黒部: 黒色産	外: 凹轡ヨコナデ~瓶口 内: 溝掘	外底に若干の凹凸が観察さ れる 13世紀末
第22図25	4C区D1 SK1100	土師器 杯底部	口径 7.6 底径 1/3寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石・金雲母など)を含む	普通	灰白色	外: 凹轡不明・底部(糸切) 内: 凹轡ヨコナデ	中世
第22図26	4C区D1 SK1100	中世前期 鍔底部	3.5×2角	1mm大の砂粒子(小豆 色粘土など)を含む	良好	灰白色	外: 格子タタキ目 内: 幾何学的目(3本/9mm)	龜山系 13~14世紀
第23図1	4C区C2 SK1111 中層	土師器 杯	口径 11.9 柄高 4.2 底径 6.1	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)及び半 径の2.5~8mm大の砂 粒子を含む	普通	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ	長込中央部分へ上る1 3~14世紀
第23図2	4C区C2 SK1111 中層	土師器 杯底部	口径 6.6 底径 1/3寸	1mm以下の砂粒子(石 英・赤褐色粘土・金雲 母など)を多く含む	普通	外: にぶい黄 褐色 内: 灰黄褐色	外: 凹轡三ナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り)	牛埜
第23図3	4C区C3 SK1111 中層	土師器 杯底部	口径 5 底径 1/3寸	微砂粒子(石英・角閃 石・金雲母など)を含む	普通	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ	中世
第23図4	4C区C3 SK1111 中層	土師器 杯底部	口径 5 底厚 1/2寸	微砂粒子(石英・長石 など)を含む	普通	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ 内: 同心円ナデ	古瓦面とも併存 10世紀
第23図5	4C区C7 SK1111	土師器 杯底部	口径 6 底径 1/2寸	微砂粒子(石英・角閃 石・赤褐色粘土・金雲 母など)を含む	良好	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り)~一部ナ デ 内: 凹轡ヨコナデ 外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り)	中世
第23図6	4C区C3 SK1111 中層	土師器 小皿	口径 7.9 柄高 1.6 底径 5.2	2mm以下の砂粒子(石 英・長石・角閃石・金 雲母など)を含む	普通	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ	薄手の体厚・厚手の底部 13~14世紀
第23図7	4C区C3 SK1111 中層	土師器 小皿	口径 7.5 柄高 1.8 底径 5.4	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石・金雲母など) を含む	普通	にぶい黄褐色	外: 凹轡三ナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ	凹轡三ナ 13~14世紀
第23図8	4C区C3 SK1111 中層	土師器 小皿	口径 6.8 柄高 2.15 底径 5 1/2寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石・金雲母など) を含む	普通	外: にぶい黄 褐色 内: 淡黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ	凹轡三ナ 13~14世紀
第23図9	4C区C3 SK1111	中世前期 鍔底部	6×4.5角	1mm大の砂粒子(石 英・長石など)を含む	良好	灰色	外: 格子タタキ目 内: 幾何学的目	龜山系 13~14世紀
第24図1	4A区D21 SK1026 最下層	赤銅器 杯下半部	口径 6.8 底径 2/3寸	1mm以下の砂粒子(石 英など)少量含む	良好	灰白色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: ナデ	若干角底 7世紀
第24図2	4A区C21 SK1096 1層	土師器 小皿	口径 6.2 柄高 1.2 底径 6	1mm以下の砂粒子(石 英・長石・角閃石・金 雲母など)を含む	普通	にぶい黄褐色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ	15世紀
第24図3	4A区D21 SK1026 最下層	土師器 杯下半部	口径 6 底径 2/3寸	微砂粒子(石英など) 若干を含むややうに	良好	灰白色	外: 凹轡ヨコナデ・底部 (凹轡糸切り) 内: 凹轡ヨコナデ・同心円ナ デ	凹轡三ナ 14世紀

探出番号	土地地点	層 号	地 層	計測値 (cm) 残存率	土 質	構成	色 裁	成形・調整・文様	備 考
第24区4	40CD3 SE1083 2層	土師器 杯形部	底径 7.4 底径 1/5寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石・金雲母など) 含む	普通	淡黄色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 同心ヨコナデ	中世	
第24区5	40CD-02 SE1116 2層	土師器 杯形部	底径 6.4 底径 1/4寸	微砂粒子(石英・角閃 石など)含む	普通	にぶい黄色	外: ナデ・底唇(回転糸切り) 内: 同心ヨコナデ	中世	
第24区12	40CD3 SE1117 2層	土師器 杯形部	底径 4.6 底径 1/2寸	微砂粒子(石英・長石 など)含む	良好	灰黄色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 回転ヨコナデ・ナデ	中世	
第24区14	40CD7-3 SE1119 1層	土師器 杯形部	底径 11 底径 1/10寸	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	灰黄褐色	外: ナデ・底唇(ナデ)	古代~中世	
第24区13	40CD4 SE1122 3層	土師器 杯形部	底径 6.6 底径 1/2寸	1.5mm以下の砂粒子(石 英・長石・角閃石 など)含む	普通	にぶい褐色	外: 調整不詳 内: 調整不明	中世	
第24区15	40CD7 SE1141 2層	土師器 杯形・脚部	4×2角	微砂粒子(石英・角閃 石など)含む	良好	にぶい褐色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ	15世紀	
第24区16	40CD7 SE1141 2層	土師器 杯形・脚部	4×2角	微砂粒子(石英・角閃 石など)含む	普通	灰黄色	外: 調整不詳 内: 調整不明	手廻り? 14~15世紀	
第25区1	40CD9 SE1146 中世	土師器 大口脚部	4×4角	1mm大の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)多 く含む	やや 不良	灰褐色	外: ナデ 内: ナデ	古来~古代	
第25区2	40CD9 SE1146 3層	土師器 大口脚部	4×4角	1mm大の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)多 く含む	普通	灰褐色	外: ナデ・底唇(ナデ) 内: ナデ・底唇(7条単位)	内室は使い込みによる敷 14~15世紀	
第26区2	40CD14 SE1047 中世	土師器 小皿	口径 1.7 底径 4.6 1/2寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)含む	良好	灰白色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 回転ヨコナデ	底部と底唇の境目に黄バ ナデによるくづれあり 14~15世紀	
第26区3	40CD14 SE1047 中世	土師器 小皿	口径 23.8 口径脚部 1/14寸	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)若干含む	普通	灰白色	外: ナデ・底唇(1本1周) 内: ナデ・底唇(1本1周) 上部はナデ	1層脚部に平坦面あり(粘土 の盛り上がりにより平坦は ない) 14~15世紀	
第26区4	40CD17 SE1047 1層	青花 皿底紋	底径 7.0 底径 1/2寸	藍染	良好	灰白色	外: 単花文+2重墨線描写→ 底唇・底唇(薄胎一枚付は軸 線彩色)・灰白色 文・裏灰白色 薄青灰色	内: 7条単位 16世紀	
第26区5	40CD2 SE1090 1層	土師器 杯形部	口径 14.1 口径脚部 1/10寸	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	にぶい褐色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ	内室にはのびのびしたナデによ り西向きに敷きわたる 12世紀?	
第26区6	40CD1 SE1098	土師器 杯形部	底径 5.8 底径 1/2寸	若干の「大」の砂粒子 を含む	良好	にぶい黄褐色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 回転ヨコナデ	底唇は調整作り 15世紀	
第26区7	40CD1 SE1098	瓦蓋土師 鏡口脚部	口径 30.8 口径脚部 1/4寸	微砂粒子(石英・長石 など)含む	やや 不良	灰白色	外: ココナデ・ズリ(裏) 内: ヨコナデ	1層脚部に平坦面あり 14~15世紀	
第26区8	40CD1 SE1098	土師器 杯形部	口径 12.4 口径脚部 1/8寸	微砂	良好	灰白色	外: 底唇・下部線跡 内: 底唇	底部中央に線跡あり 15~16世紀	
第26区9	40CD31 SE1098	土師器 杯形部	底径 12.8 底径脚部 1/3寸	2mm以下の砂粒子(赤 褐色粒子・石英・長石 など)含む	良好	赤褐色~黄色	外: ヨコナデ・底唇(調整不 詳) 内: ナデ・底唇(単位7本)	内室は使い込みでかなり磨 滅している外室底部下に敷 一枚板を敷く 14~15世紀	
第26区10	40CD1 SE1098	土師器 杯形部	口径 4.5角	6mm以下の砂粒子(石 英・長石など)少量含む	普通	灰白色~明褐色 灰色	外: ハタヨコナデ 内: ナデ・底唇(単位5本) 内	14~15世紀	
第26区11	40CD4 SE1137	土師器 杯形部	底径 5.6 底径 1/5寸	2mm以下の砂粒子(石 英・角閃石など)含む	普通	灰黄褐色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り?) 内: 回転ヨコナデ	14~15世紀	
第26区12	40CD3 SE1107	土師器 杯形部	底径 5.2 底径 1/4寸	2mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	にぶい褐色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 回転ヨコナデ	底部と底唇の境が不明 15世紀	
第26区13	40CD4 SE1107	土師器 杯形部	底径 7.8 底径 1/7寸	1mm大の砂粒子(石英・ 長石・金雲母など)含む	普通	浅黄色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ	1層脚部外面を強くナデで 磨立にする 15世紀	
第26区14	40CD3 SE1113	土師器 小皿	口径 7.4 底径 1.65 底径 3.6 1/2寸	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)含む	良好	浅褐色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 回転ヨコナデ・丁穿 ナデ	底唇の体部・底唇の底唇 13~14世紀	
第26区15	40CD3 SE1113	土師器 杯形部	底径 6.1 底径脚部は底唇	2mm大の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 同心ヨコナデ	内室は使い込み 13~14世紀	
第26区16	40CD2 SE1106	土師器 杯形部	12×2角	1mm大の砂粒子(石英・ 長石など)含む	良好	灰色	外: 格子タタタ目 内: 横位のハタ目→縦位の ナデ	亀山系 13~14世紀	
第27区1	40CD3 SE1120 1層	土師器 杯形部	口径 10.8 底径 2.5 底径 3.3 1/2寸	微砂粒子若干含む	良好	にぶい黄褐色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 回転ヨコナデ	体部は浅い 15世紀	
第27区2	40CD3 SE1120 2層	土師器 杯形部	底径 5.8 底径脚部	1mm以下の砂粒子(石 英・赤褐色粒子など)含む	良好	にぶい褐色	外: 回転ヨコナデ・底唇(回 転糸切り) 内: 回転ヨコナデ	立ち上がり広がる 15世紀	

洋名番号	出土地点	種別 器名	計測値 (寸法) 現存率	胎土	産地	色相	成形・調整・文様	備考
第27図3	40京D8 S01120 2層	土師器 杯底部	底径 6.6 口径 1/5寸	微砂粒子(石英・金雲母など)少量含む	良好	灰黄色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ・丁寧なナデ	10世紀
第27図4	40京D6 S01120 2層	土師器 林底部	底径 5.4 口径 1/5寸	微砂粒子(石英など)少量含む	良好	灰黄色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐不揃	10世紀
第27図5	40京D4 S01120 2層	土師器 林底部	底径 4.8 口径不明	微砂粒子(石英・長石など)少量含む	良好	にぶい黄褐色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 同心ヨコナデ	高台杖の底部 15世紀
第27図6	40京D3 S01120 2層	土師器 外底部	底径 5.4 口径不明	1cm以下の砂粒子(石英・長石など)少量含む	良好	にぶい黄褐色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 同心ヨコナデ	10世紀
第27図7	40京D4 S01120 2層	土師器 杯底部	底径 5.6 口径 1/3寸	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)少量含む	良好	灰黄色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り・平行条線の残るナデ) 内: 割紐不揃	15世紀
第27図8	40京D6 S01120 2層	土師器 林下半部	底径 6	1cm大の砂粒子(石英など)少量含む	良好	にぶい黄褐色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ	刃外蓋とも併存 15~16世紀
第27図9	40京D3 S01120 1層	土師器 杯	1層 12.4 底径 2.7 口径 1/2寸 外形	微砂粒子(石英・金雲母など)少量含む	良好	にぶい藍色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ	割紐系系手づね土師焼物品 15~16世紀
第27図10	40京D8 S01120 1層	土師器 小皿底部	口径 4 底径 1/2寸	微砂粒子(石英・角閃石など)少量含む	良好	にぶい黄褐色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ	15世紀
第27図11	40京D6 S01120 1層	土師器 小皿	口径 7.8 底径 1.8 口径 1/3寸	微砂粒子(石英・角閃石など)少量含む	良好	にぶい黄褐色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ	土師下半部にナデによるくぼれ 口縁部に朱の塗線 14世紀
第27図12	40京D3 S01120 1層	土師器 小皿	口径 2.7 底径 2.35 口径 1/4寸	微砂粒子(石英など)少量含む	良好	灰黄色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ	底部にキズ痕 15世紀
第27図13	40京D1 S01120 2層	土師器 小皿	口径 7 底径 2.1 口径 1/3寸	微砂粒子(石英など)若干含む	良好	にぶい黄褐色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ	15世紀
第27図14	40京D3 S01120 1層	土師器 小皿	口径 7 底径 2 口径 1/3寸	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰黄色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り) 内: 割紐ヨコナデ	15世紀
第27図15	40京D3 S01120 1層	土師器 小皿	口径 16.5 底径 4.8 口径 1/2寸	1cm以下の砂粒子(石英・長石など)少量含む	良好	黄褐色	外: 割紐ヨコナデ・底部(割紐未切り)→割紐なし(割紐痕あり) 内: 割紐ヨコナデ・割紐ヨコナデ・ナデ	脚はおそらく3ヵ所
第27図16	40京D3 S01120 1層	土師器 土師器口縁部	6.5×7.5角	mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: ナデ・ハケ目(木/1cm) 内: ハケ目による黒目(木/1cm)	外蓋に併存 3~14世紀
第27図17	40京D-E2 S01120 1層	土師器 土師器杯	6.5×4.5角	1cm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	にぶい黄褐色	外: ハケ目(木/1cm) 内: 黒目(木/8木/3mm)	中世
第27図18	40京D8 S01120 1層	土師器 土師器杯	3×2.5角	緻密	良好	釉: 灰白 露胎: 明オリーブ灰色	外: 割紐ヨコナデ・柄杓・露胎 内: 露胎	中世
第27図19	40京D6 S01120 1層	土師器 土師器杯	底径 4.6 口径 1/8寸	緻密	良好	釉: オリーブ色 露胎: 灰色	外: 縁部との間文・油粘 内: 露胎	龍泉窯系 15世紀
第27図20	40京D4 S01120 1層	土師器 土師器杯	底径 6 口径 1/4寸	緻密	良好	釉: オリーブ色 露胎: 灰色	外: 露胎・露胎(高台内露胎) 内: 2本の露胎→10世紀	龍泉窯系 15世紀
第27図21	40京D6 S01120 4層	土師器 土師器杯	口径 12 口径 1/8寸	緻密	良好	釉: オリーブ色 露胎: 灰白色	外: 露胎 内: 露胎	龍泉窯系 15世紀
第27図22	40京D-E2 S01120 1層	土師器 土師器杯	底径 13 口径 1/8寸	1cm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	にぶい黄褐色	外: ナデ・ハケ目(木/1cm) 内: 割紐ヨコナデ	内蓋に使用のため磨滅 13~14世紀
第27図23	40京D4 S01120 1層	土師器 土師器杯	底径 12.7 口径 1/8寸	mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	外: 縁部磨滅不揃 釉: オリーブ色	外: 灰胎がかかるため磨滅不揃 内: 割紐ヨコナデ	中世
第27図24	40京D2-3 S01120 1層	土師器 土師器杯	6.5×6角	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外: ナデ 内: ナデ	割内口に透存 (透つき跡) 中世
第27図25	40京D6 S01120 1層	土師器 土師器杯	底径 4 口径 1/3寸	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	釉: 灰白色 露胎: にぶい藍色	外: 露胎 内: 露胎	見込みに砂目模様あり 16世紀
第27図26	40京D8 S01120 1層	土師器 土師器杯	口径 1/6寸	微砂粒子(石英など)少量含む	良好	灰色	外: 割紐ヨコナデ・回輪(ハケ目) 内: 割紐ヨコナデ	輪状のみみの磨滅 7世紀末~8世紀前期
第30図1	40京D6 S01144 1層	土師器 土師器杯	底径 4.9 口径不明	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄色	外: 磨滅不揃・底部(回輪系・磨滅) 内: 割紐ヨコナデ	11~12世紀
第30図2	40京D6 S01144 C-03-2-6	土師器 土師器杯	21×11角	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: 磨滅不揃 内: ハケ目(木/1cm)	12~13世紀

検出箇所	土地地点	掘 出 層	深さ(m) 埋存 状況	地 上	状況	色 調	形状・調整・文様	備 考
第30図3	4D区39 S 1144	中庭裏 内 四ツ芳子 上半部	深さ 14 埋存部 1/47	空	良好	オリーブ黒色	外: 同軸コナテ(ア)素の沈 城内 内: 同軸コナテ	1層部は奥に引き出し平坦 面をもつ 12世紀
第31図1	4D区29 S X 1077	土師部 内 1層部	4×3.5角	1m大の砂粒子(石炭・ 炭屑・骨片・角石など) 含む	普通	にぶい褐色	外: 同軸コナテ 内: 同軸コナテ	玉縁状の口縁部(口縁の彫 刻) 12世紀
第31図2	4D区C2 S X 1077 上半	土師部 内 1層部	底径 6 深さ 13.5 埋存部 1/27	微砂粒子(石灰・角石・ 石炭など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: 同軸ナテ・底部(内切) 内: 高麗不明	中央に浅い溝(未調査) あり。春日状の当て具でね じりつけた感じ 12~13世紀
第31図3	4D区C2 S X 1077 上半	土師部 内 1層部	口径 23 深さ 17/47	1~2mm大の砂粒子 (石灰など)含む	普通	灰白色	外: ナテ 内: ナテ	口縁部は内傾き 12世紀
第31図4	4D区D2 S X 1109	土師部 内 1層部	底径 5.4 底形 円形	3mm以下の砂粒子(石 炭・角石・骨片など) 含む	普通	灰黄色	外: 同軸コナテ・底部(同 軸丸切) 内: 同軸コナテ	底の丸い部分が 見込み中央部分で上がる
第31図5	4D区D3 S X 1109 上面	土師部 内 1層部	底径 4 底形 ほぼ円形	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: 同軸コナテ・底部 (同軸丸切) 内: 同軸コナテ	見込み中央部分で上がる
第31図6	4D区C3 S X 1109	土師部 内 1層部	底径 4 底形 ほぼ円形	1.5mm以下の砂粒子 (石炭・骨片・角石など) 含む	普通	にぶい赤褐色	外: 同軸コナテ・底部 (同軸丸切) 内: 同軸コナテ	見込み部分に強い同軸コ ナテにより力強い口縁が 出ている
第32図1	4A区359 3層	弥生土器 前期	6.5×4.5角	1~3mm大の砂粒子 (石灰・花崗岩など) 含む	普通	灰黄色へ 淡い褐色	外: ナテ 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図2	4A区C2 3層	弥生土器 前期	4.5×4角	1~2mm大の砂粒子 (花崗岩・石灰など) や多く含む	普通	淡黄色	外: ナテ 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図3	4A区B29 3層	弥生土器 前期	4.5×2.5角	1.5mm大の砂粒子(花 崗岩・石灰・角石など) 含む	普通	にぶい黄色	外: ナテ 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図4	4A区C23 3層	弥生土器 前期	3×2.5角	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	灰黄色	外: ナテ 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図5	4D区37 2層	弥生土器 前期	9×5角	2mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	にぶい黄色	外: 2層の割文・割文・ハケ 目(白土)・3層の沈積 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図6	4B区C15 3層	弥生土器 前期	2.5×2角	1~3mm大の砂粒子 (石灰・花崗岩など) 多く含む	普通	にぶい褐色	外: ナテ 内: ナテ	口縁部が引ききざされて いる 弥生前期前半
第32図7	4B区C16 3層	弥生土器 前期	3.5×2.5角	2mm大の砂粒子(安山 岩・角石など)や多く 含む	普通	灰黄褐色	口縁部: 割文 内: 高麗不明 内: 高麗不明	口縁部は断面形状 赤土前葉
第32図8	4A区B30 3層	弥生土器 前期	底径 6 底径 1.9	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	淡黄褐色	ナテ	弥生前期後半
第32図9	4D区B4 2層	弥生土器 前期	底径 3.9 底径 1/27	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	褐色	外: ナテ 内: ナテ	口縁部は 断面形状 赤土前葉
第32図10	4B区C1 3層	弥生土器 前期	底径 3.9 底径 1/27	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	灰白色	外: ナテ 内: ナテ	口縁部は 断面形状 赤土前葉
第32図11	4B区B28 3層	弥生土器 前期	底径 6.4 底径 1/27	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: ナテ 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図12	4A区A22 2-3層	弥生土器 前期	底径 4.7 底径 1/27	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: ナテ 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図13	4B区B8 3層	弥生土器 前期	底径 5 底径 1/5	微砂粒子(石灰・角石 など)含む	普通	外: 灰黄色 内: 黄褐色	外: ナテ 内: ナテ	外唇の下部から断面に傾 き直る 弥生前葉
第32図14	4A区B23 3層	弥生土器 前期	底径 6.4 底径 1/27	1mm以下の砂粒子(石灰 ・角石など)含む	普通	淡黄色	外: ナテ 内: ナテ	底の丸い部分に 強い口縁が 出ている
第32図15	4D区37 2層	弥生土器 前期	口径 12.6 底径 12 埋存部 1/27	微砂粒子(石灰・角石 など)含む	良好	灰色	外: 同軸コナテ 内: 同軸コナテ	出葉 6A型 (出葉7)
第32図16	4B区C19 2層	弥生土器 前期	口径 10.8 底径 10.8 埋存部 1/27	1mm以下の砂粒子(石 炭・角石など)含む	普通	灰色	外: ナテ 内: ナテ	口縁部は 断面形状 赤土前葉
第32図17	4D区37 3層	弥生土器 前期	口径 13 底径 14.2 埋存部 1/27	微砂粒子(石灰・角石 など)含む	良好	灰色	外: 同軸コナテ 内: 同軸コナテ	口縁部は 断面形状 赤土前葉
第32図18	4B区B15 3層	弥生土器 前期	口径 8.4 底径 2.9 埋存部 1/27	微砂粒子(石灰・角石 など)含む	良好	灰色	外: 同軸コナテ 内: 同軸コナテ	口縁部は 断面形状 赤土前葉

探洞番号	出土地点	種別	発見層	貯蔵量(m <sup>3</sup> ) 保存率	土質	構成	色調	形状・調整・文様	備考
第32図19	4D区15	須恵器 外底式片	つまみ径 2.0 底径 5.5×2角	1m以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ・底転ヘンズリ(丸)・内: アデ	外: 同転ヘラズリ(丸)・内: 同転ヨコナデ	2層式状つまみ 9世紀
第32図20	4D区30	須恵器 底底式	底径 4.4 底径 1/4存	1m以下の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外: 同転ヘラズリ(丸)・底面(ケズ)内: 同転ヨコナデ		内面に自然釉 と底縁後葉
第32図21	4C区4 2層	須恵器 杯下半部	底径 6 底径 1/7存	砂内子ほとんど含まず	良好	黄灰色	外: 互転ヨコナデ・底面(四角状)	外: 互転ヨコナデ・ナデ	8~9世紀
第32図22	4C区4 3層	須恵器 杯底	口径 9 1/4存	2m以下の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外: 互転ヨコナデ・同転ヘラズリ→1次の次第で赤のぬい底転・互転ヨコナデ	外: 互転ヨコナデ・ナデ 内: 互転ヨコナデ・ナデ	外底式片部につまみ 対面する 口唇部はあまり厚くない 9世紀
第32図23	4A区2 3層	須恵器 杯底	口径 12.6 1/6存	微砂粒子(石英・石英など)含む	良好	灰色	外: 互転ヘラズリ・同転ヨコナデ(口縁部は強いナデでやや厚みあり)	外: 互転ヨコナデ・ナデ 内: 同転ヨコナデ・ナデ	外底式片部につまみ 対面する 口唇部は不明瞭 9世紀
第32図24	4B区3/ 1層	須恵器 杯底式片	つまみ径 5 つまみ径 1/3存	1m以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: つまみ部付→同転ヨコナデ・同転ヘラズリ	外: つまみ部付→同転ヨコナデ・同転ヘラズリ 内: 同転ヨコナデ	輪状つまみ 私用種(内面にツルツルして おり)底縁は不明瞭 9世紀
第32図25	4D区45 1層	須恵器 杯底式片	つまみ径 5 1/4存	2m以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: つまみ部付→ナデ・同転ヨコナデ・底転ヘンズリ(丸)内: アデ		輪状つまみ 私用種(9世紀)
第32図26	4B区8 3層	須恵器 角付杯底	口径 8 底径 1/2存	1m以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ・底面(四角状)→角付部→同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ・同転ヘラズリ 内: 互転ヨコナデ・同転ヨコナデ	輪状つまみ 私用種(角付部がツルツル している) 9世紀
第32図27	1A区16 2層	須恵器 角付杯底	口径 12.9 底径 4.6 底径 2.1 1/4存	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰白色	外: 同転ヨコナデ・底面(四角状)→角付部→同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ・底面(四角状)→角付部→同転ヨコナデ 内: 同転ヨコナデ	9世紀
第32図28	4D区2 3層	須恵器 角付杯底	口径 7.6 底径 1/2存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ・底面(同転ヨコナデ)	外: 同転ヨコナデ・底面(同転ヨコナデ)	私用種 9世紀末~8世紀初葉
第32図29	4B区10 2層	須恵器 外底式片	底径 5 杯底部→底面 1/3存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ 内: アデ・脚柱部(同転ヨコナデ)	3方用スクリ (9世紀)
第32図30	4C区1 3層	須恵器 外底式片	口径 3.9 底径 1/2存	1m以下の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ・ナデ	外: 同転ヨコナデ・ナデ 内: アデ・脚柱部(同転ヨコナデ)	紐結用 スクリは2ヶ所確認(おそら く1ヶ所はスクリ) スクリは切れ込み状だが普通 2世紀
第32図31	4B区9 3層	須恵器 長脚底底	口径部径 5 脚部 1/4存	2mm次の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外: 互転ヨコナデ	外: 互転ヨコナデ	内面に自然釉 9世紀
第32図32	4C区3/ C3-4, D3-4 2層	須恵器 脚部	脚部最大径 口径 17.9 脚部 1/3存	微砂粒子(石英・石英など)含む	良好	灰色	外: 互転ヨコナデ・粗雑な互転ヨコナデ	外: 互転ヨコナデ 内: 同転ヨコナデ	外底上部に強いナデによる 凹凸がみられる 内面は強いナデによる凹凸 がみられる 9世紀
第32図33	4A区24- 25 2層	須恵器 杯底	口径 20.5 脚部 1/7存	1mm次の砂粒子(石英・石英など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ 内: 同転ヨコナデ	古代
第32図34	4A区10 3層	須恵器 高杯脚部	口径 15.1 底径 1/8存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ 内: 同転ヨコナデ	9世紀
第32図35	4D区2 3層	須恵器 高杯脚部	口径部径 5 脚部 1/3存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ 内: アデ・脚柱部(同転ヨコナデ)	2方高方形スクリ 大台5個(古墳後期後葉)
第32図36	4D区7 2層	須恵器 杯底	口径 13 口唇部 1/11存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ 内: 同転ヨコナデ	落下口縁 9世紀末~9世紀
第32図37	4B区10 3層	須恵器 外底式片	口径部径 13.8 脚部最大径 8 脚部 1/4存	微砂粒子(石英など)及び2mm次の砂粒子若干含む	良好	自然釉: 緑灰色 露紋: 灰色	外: 同転ヨコナデ・底面(四角状)→角付部→同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ・底面(四角状)→角付部→同転ヨコナデ 内: 同転ヨコナデ・同転ヨコナデ	緑灰色・底面は自然釉もか かるとなようにヨコナデが施 される 8~9世紀
第32図38	4D区5 2層	須恵器 外底式片	6.5×6角	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外: 平行タタキ目	外: 平行タタキ目 内: 同転ヨコナデ	古墳時代
第32図39	4C区1 3層	須恵器 外底式片	4×3角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外: 同転ヨコナデ	外: 同転ヨコナデ 内: 同転ヨコナデ	丸い口唇部 私用種 7~8世紀
第32図40	4C区5 2層	中須恵器 外底式片	1×9角	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	自然釉: オリーブ 灰色 露紋: 灰白色	外: スタンブ文及びきり目文・須恵器系	外: スタンブ文及びきり目文・須恵器系 内: 同転ヨコナデ+指のさき・ヨコナデ+テ目によるナデ	2~3世紀
第32図41	4D区C- 2 7-3層	中須恵器 外底式片	11×7.5角	1m以下の砂粒子(石英など)若干含む	良好	灰色	外: 互転ヨコナデ	外: 互転ヨコナデ 内: 平行タタキ目・ナメ ハタ目ヤケテ	龜山系 3~4世紀
第32図42	4D区7 2-3層	中須恵器 外底式片	23×8.5角	2mm以下の砂粒子(石英など)若干含む	良好	灰色	外: 平行タタキ目	外: 平行タタキ目 内: 斜め方向のハケ目→半 ナメ+下底縁のハケ目	龜山系 3~4世紀
第32図43	4C区2 3層	土師器 高杯脚部	口径部径 3.15 脚部 1/4存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)やや多量含む	普通	露紋: にぶい 黄褐色 丹色: 褐色	外: タテハク目	外: タテハク目 内: アデ	内外面とも月塗り戸塗充満漆 (内面の下部に竹葉状の刺 突)
第32図44	4C区15 2層	土師器 外底式片	底径 4.4 底径 3.5四角形	微砂粒子(石英・長石・石英など)含む	良好	灰黄色	外: 同転ヨコナデ・底面(同転丸切)	外: 同転ヨコナデ・底面(同転丸切) 内: 同転不明	底面は厚み状で強い亀山系 中にヘン種充満漆? 10~11世紀

探洞番号	出土地点	層位	形状 (寸法)	土質	焼成	色 類	成形・調整・文付	備 考
第33区45b	47区02 3層	土師器 杯状部	口径 5.8 底径 3.5 体高 2.5 底面ほぼ円形	2cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)を含む	普通	にぶい黄褐色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	底面には高台状で厚手14世紀
第33区46	40区B5 2層	土師器 杯	口径 11 底径 4 底径 5.4 1/存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)や多量含む	普通	灰白色	外：強い回転コナデ・底部(回転糸切) 内：強い回転コナデ・調整不明	14世紀
第33区47	40区B5 2層	土師器 杯	口径 11.6 底径 4.4 底径 4.6 1/4存	3cm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など)若干含む	良好	にぶい黄褐色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ・同心コナデ	底面から体厚への立ち上がりは緩やかによりよれる14世紀
第33区48	40区B3 2層	土師器 杯	口径 12.4 底径 4 底径 6 体高 1/3存 底面変形	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	良好	にぶい黄褐色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	14～15世紀
第33区49	40区B8 2層	土師器 杯	口径 12.3 底径 3.3 底径 6.3 体高 1/2存 底面変形	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)少量含む	良好	にぶい黄褐色	外：強い回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	14～15世紀
第33区50	40区B8 2層	土師器 杯	口径 10.8 底径 2.6 底径 5 体高 2/3存 底面変形	1cm以下の砂粒子(石英など)及び4mm次の砂粒子若干含む	良好	にぶい黄褐色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	口部面に平面あり16世紀
第33区51	40区B3 3層	土師器 杯上半部	口径 12 上半部 1/3存	微砂粒子(石英・赤褐色粒子・角閃石など)若干含む	良好	にぶい黄褐色	外：回転コナデ 内：同心コナデ	15世紀
第33区52	40区B5 2層	土師器 杯下半部	口径 5.6 下半部 1/4存	微砂粒子(長石など)若干含む	良好	にぶい黄褐色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	内面は深いアタテによる凹凸が美しい15世紀
第33区53	40区C4 2層	土師器 杯下半部	口径 5.8 下半部 1/3存	1cm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など)若干含む	良好	灰青色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	15～16世紀
第33区54	40区C22 2層	土師器 杯	口径 11.5 底径 3.9 底径 5.1 体高 1/3存 底面 1/2存	微砂粒子(石英・長石など)若干含むやや粘っぽい	普通	にぶい褐色	外：調整不明・底群(回転糸切) 内：同心コナデ	内面は弱によりYのみあり15世紀
第33区55	40区B21 3層	土師器 杯	口径 15.4 底径 5.5 底径 5.7 1/9存	微砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：調整不明・同心コナデ	13～14世紀
第33区56	40区B20 2層	土師器 杯下半部	口径 5 底径 2/3存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	にぶい黄褐色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ・同心コナデ	調整は薄手15世紀
第33区57	40区B22 3層	土師器 杯下半部	口径 4.4 底径 2/3存	微砂粒子(石英・長石など)若干含むやや粘っぽい	普通	灰白色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	内外面とも強いアタテにより凹凸が美しい15世紀
第33区58	40区C7 2層	土師器 小皿	口径 8 底径 1.6 底径 5.6 1/3存	1cm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	にぶい黄褐色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	13世紀
第33区59	40区C6 2層	土師器 小皿	口径 6.8 底径 1.85 底径 4.5 1/2存	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	灰黄色～灰青色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	13世紀
第33区60	40区D6 2層	土師器 小皿	口径 7.6 底径 1.65 底径 4.1 体高 1/4存 底面変形	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	黄灰色	外：回転コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	13～14世紀
第33区61	40区C6 2層	土師器 小皿	口径 8 底径 1.8 底径 4.2 1/3存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	良好	にぶい黄褐色	外：同心コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ・同心コナデ	底面から体厚への立ち上がりは緩やかによりよれる4世紀
第33区62	40区C5 2層	土師器 小皿	口径 7.2 底径 1.7 底径 4.4 1/3存	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)若干含む	良好	浅黄色	外：同心コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	14～15世紀
第33区63	40区B4 2-3層	土師器 小皿	口径 7.6 底径 1.4 底径 5.3 2/3存 底面ほぼ円形	1cm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	黄灰色～灰青色	外：同心コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	14～15世紀
第33区64	40区C4 2層	土師器 小皿	口径 7.5 底径 1.55 底径 5.8 底面変形	微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む	良好	黄褐色	外：同心コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	外面に煤付着14～15世紀
第33区65	40区S6 2層	土師器 小皿上半部	口径 7 上半部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	普通	灰白色	外：同心コナデ 内：同心コナデ	口縁部面の一部に煤付着14～15世紀
第33区66	40区C2 2層	土師器 小皿	口径 9 底径 2 底径 5.4 1/2存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰白色～にぶい褐色	外：同心コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	15世紀
第33区67	40区C7 2層	土師器 小皿	口径 7.7 底径 1.15 底径 4.8 1/6存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰黄色	外：同心コナデ・底部(回転糸切) 内：同心コナデ	16世紀

探出番号	出土地点	遺物	計測値(m=μ) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
第33回8	48区C19 3層	土師器 小皿	口径 8.4 底径 1.85 高さ 1.6 1/7存	1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	淡黄褐色	外: 頸部・コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ・ナテ	口縁部に強いテマリによる波線が底面から縁部にかけては強いテマリにより14世紀
第33回9	48区B18 3層	土師器 小皿	口径 7.9 底径 1.5 高さ 1.5 1/4存	微砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	にぶい褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ	底部から縁部への立ち上がりは強いテマリにより14世紀
第34回70	48区C2 3層	土師器 小皿	口径 7.8 底径 1.8 高さ 1.7 1/7存	微砂粒子(石英・長石など)若干含むや削っぱい	良好	にぶい褐色	外: 強い回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 強い回転コナテ	内外面とも強いテマリにより口縁部は強い14~15世紀
第34回71	48区A10 3層	土師器 小皿	口径 7.8 底径 1.5 高さ 1.4 1/5存 底部欠片	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外: 淡黄褐色 内: にぶい黄褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ・同心円ナテ	13世紀
第34回72	48区B20 3層	土師器 小皿	口径 7.6 底径 1.7 高さ 1.4 1/4存	微砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: 複雑なコナテ・底部(同転糸切り) 内: 複雑な回転コナテ	外至口縁部までコナテによりテマリが強い 縁部が厚手 14世紀
第34回73	48区B28 3層	土師器 小皿	口径 7.8 底径 1.5 高さ 1.3 1/5存	微砂粒子若干含むや削っぱい	普通	にぶい黄褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ	内外面に波線あり 13~14世紀
第34回74	48区C20 3層	土師器 小皿	口径 8.2 底径 1.3 高さ 1.2 1/2存	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ・同心円ナテ	14~15世紀
第34回75	48区C11 3層	土師器 小皿	口径 7.2 底径 1.2 高さ 1.2 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ・同心円ナテ	15~16世紀
第34回76	48区C11 3層	土師器 小皿	口径 7.6 底径 2.1 高さ 1.4 1/2存	微砂粒子(石英・角閃石・長石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ	15~16世紀
第34回77	48区B26 3層	土師器 小皿	口径 7.8 底径 1.6 高さ 1.4 1/5存	微砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ・同心円ナテ	13世紀
第34回79	48区B22 3層	土師器 小皿	口径 8.6 底径 1.6 高さ 1.4 1/6存	微砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄褐色	外: 回転コナテ・調整不明(同転糸切り) 内: 調整不明	外至口縁部にかけての波線 13世紀
第34回79	48区C1 3層	土師器 小皿	口径 6.9 底径 1.15 高さ 1.1 1/4存	微砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	にぶい褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ	14~15世紀
第34回80	48区C31 3層	土師器 小皿	口径 6.6 底径 1.4 高さ 1.3 1/7存 底部一部欠片	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	黄灰色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ・同心円ナテ	14世紀?
第34回81	48区B3 調査区等 調査区	土師器 小皿	口径 6.8 底径 1.7 高さ 1.5 2/3存	微砂粒子若干含む	良好	淡黄色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ	口縁部の一部にケール状の傷付あり 15世紀
第34回82	48区A2 3層	土師器 小皿	口径 7.2 底径 1.5 高さ 1.3 1/3存	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ・同心円ナテ	口縁部の高さが一様でない 12世紀
第34回83	48区B6 2層	土師器 小皿	口径 6.6 底径 1.3 高さ 1.4 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	にぶい褐色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ	12世紀
第34回84	48区B7 2層	土師器 小皿	口径 8 底径 2.1 高さ 1.6 1/4存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰白色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 回転コナテ	底部から縁部への境は明確 17世紀
第34回85	48区C7 2層	土師器 柱状高脚杯	口径 6.4 底径 3/4存	微砂粒子(石英・角閃石など)多く含む	普通	灰白色	外: 回転コナテ・底部(同転糸切り) 内: 調整によるテマリ	13~14世紀
第34回86	48区B2 2層	土師器 柱状高脚杯	口径 5.4 底径 3/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外: ナテ・底部(同転糸切り) 内: ナテ	13~14世紀
第34回87	48区B17 2層	土師器 柱状高脚杯	口径 6.8 底径 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)少量含む	普通	灰白色	外: コナテ・底部(同転糸切り) 内: 調整不明	縁部は強いテマリによる波線が底面から縁部にかけては強いテマリにより13~14世紀
第34回88	48区B7 2層	土師器 柱状高脚杯	口径 8 底径 2.4 高さ 1.4 底径部欠片	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰白色	外: コナテ・底部(同転糸切り) 内: コナテ	底面から縁部にかけて穿孔孔は底面側にかけて小さくなる 中世
第34回89	48区B7 C-3-7-8 7-9 2層	土師器 高脚杯	口径 12.9 底径 10.4 高さ 1.2 底径部欠片	2mm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	灰黄褐色	外: ナテ 内: ハケ目一拵目(単位5mmで磨上)	14世紀
第34回90	48区E5 2層	土師器上段 鉢口縁部	口径 25 口縁部 1/7存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	淡黄色	外: ナテ・ハケ目(5mm/1cm)ナテ 内: ハケ目(単位5mm)	14~15世紀
第34回91	48区B20 C23 2層	土師器上段 鉢口縁部	口径 14×10角	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	にぶい黄褐色	外: ナテ・強いコナテ 内: 強いコナテ・扁目(単位5mm)	14~15世紀

標号	出土地点	構造	直径 (cm)	高さ (cm)	土質	焼成	色別	成形・装飾・文様	備考
第34図92	4B区E14 2層	土師器上層付土師器下層付	口径 10	高さ 8	2~3mm入の砂粒子(石灰・灰石など)含む	普通	赤褐色 灰白色	外: 暗褐色ナデ 内: ココロコロ一帯黒・黒縁不鮮・黒口	内面土師器に厚付付 4~15世紀
第34図93	4D区C3 2層	土師器上層付土師器下層付	口径 28.1 口径部 1/14寸		2mm大の砂粒子(石灰・灰石など)含む	良好	外: 赤褐色 内: 灰白色	外: ナデ+厚帯状の黒縁ナデ	15~16世紀
第34図94	4C区C4 3層	土師器上層付土師器下層付	口径 20.7 口径部 1/11寸		3mm以下の砂粒子(石灰・灰石など)やや多く含む	普通	赤褐色	外: ナデ・ハケ目(5~8/5mm)一帯黒縁ナデ 内: ナデ・ナデリ(10X10)	第34図92と同一体の可能性がある 外面土師器に厚付付
第34図95	4C区C5 2層	土師器上層付土師器下層付	口径 20.9 口径部 1/8寸		1mm大の砂粒子(石灰・灰石など)やや多く含む	普通	褐色	外: ナデ・ハケ目(6mm/5mm)一帯ナデ 内: ナデ・ナデリ(10)	第34図92と同一体の可能性がある 外面土師器付
第34図96	4C区C3 2層	土師器上層付土師器下層付	口径 30.1 口径部 1/5寸		1mm大の砂粒子(石灰・灰石など)多く含む	普通	赤褐色	外: ナデ・ハケ目(4mm/5mm)一帯ナデ 内: ハケ目(8mm/1cm)・ナデリ(10)	11世紀?
第35図97	4B区A1 2層	白磁 碗底	口径 7 口径部 1/5寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・底帯(胎輪の一部高台内に細かな)ナデ・胎輪	胎の両面(両面により平滑) 切縁型急縁輪 口径部E2-2(9~10世紀)
第35図98	4B区B3 2層	白磁 碗底	口径 11.2 口径部 1/8寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪	内外面とも貫入あり 口径部D群 (15世紀)
第35図99	4B区E14 2層	白磁 碗底	口径 9.7 口径部 1/8寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・底帯(厚出し高台) 内: 胎輪	体下半部で胎輪 口径部D群 (15世紀)
第35図100	4B区E14 2層	白磁 碗底	口径 11.2 口径部 1/8寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・底帯(厚出し高台) 内: 胎輪	口径部E群 (13~15世紀)
第35図101	4D区D1 2層	白磁 碗底	口径 17 口径部 1/7寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・無胎 内: 胎輪・見込み輪ハギ	白磁皿E群 (15世紀)
第35図102	4B区E17 2層	白磁 碗底	口径 11.7 口径部 1/5寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	白磁皿E群 (16世紀)
第35図103	4B区E14 2層	白磁 碗底	口径 2.5		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪	口径部が外 口径部C群 (14~15世紀)
第35図104	4B区C14 1層	白磁 碗底	口径 5		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・厚付付(胎輪) 内: 胎輪一帯ナデによる文様	白磁皿E群 (10世紀)
第35図105	4D区D5 2層	白磁 碗底	口径 6 口径部 1/3寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・底帯(厚付付帯以外胎輪) 内: 胎輪	胎正し高台 白磁皿E群 (15~16世紀)
第35図106	4D区E8 2層	白磁 碗底	口径 13.6 口径部 1/4寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・胎輪ハケ目・胎輪コナデ・底帯(厚付付) 内: 胎輪一帯/見込み輪ハギ	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)
第35図107	4D区E16 2層	白磁 碗底	口径 6.6 口径部 1/6寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・底帯(厚付付帯以外胎輪) 内: 胎輪	白磁皿E群 (16世紀)
第35図108	4A区A1 2層	白磁 碗底	口径 9.8 口径部 1/7寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・胎輪ハケ目・胎輪コナデ・底帯(厚付付) 内: 胎輪一帯/見込み輪ハギ	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)
第35図109	4A区A2 2層	白磁 碗底	口径 6.7 口径部 1/16寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・胎輪ハケ目・胎輪コナデ・底帯(厚付付) 内: 胎輪一帯/見込み輪ハギ	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)
第35図110	4A区D6 2層	白磁 碗底	口径 8.5 口径部 1/6寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	外生体部に強いナデによる 胎あり 白磁皿E群 (15世紀)
第35図111	4B区C17 2層	白磁 碗底	口径 8.7 口径部 1/13寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	中室白磁皿D群 (15世紀)
第35図112	4A区A8-20-21 2層	白磁 碗底	口径 6.5 口径部 1/10寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・底帯(厚付付帯以外胎輪) 内: 胎輪	胎正し高台 白磁皿E群 (16世紀)
第35図113	4A区A8-20-27 2層	白磁 碗底	口径 3.1 口径部 1/10寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・胎輪ハケ目・胎輪コナデ・底帯(厚付付) 内: 胎輪一帯/見込み輪ハギ	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)
第35図114	4B区C18 2層	白磁 碗底	口径 2.5		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	白磁皿E群 (15世紀)
第35図115	4D区C3 2層	白磁 碗底	口径 7.1 口径部 1/9寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・胎輪ハケ目・胎輪コナデ・底帯(厚付付) 内: 胎輪一帯/見込み輪ハギ	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)
第35図116	4D区B3 2層	白磁 碗底	口径 4.5		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)
第35図117	4C区B3 3層	白磁 碗底	口径 6.5 口径部 1/8寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)
第35図118	4D区C6 2層	白磁 碗底	口径 13.4 口径部 1/8寸		密	良好	輪: 灰白色 脚輪: 灰白色	外: 胎輪・胎輪コナデ・胎輪ハケ目・胎輪コナデ・底帯(厚付付) 内: 胎輪一帯/見込み輪ハギ	胎正し高台 白磁皿E群 (15世紀)

標記番号	出土地点	地 区	引 違	計測値 (cm) 形状	胎 子	構成 色 澤	形状・調整・文様	備 考
第35図119	4D区B6 2層	青磁 碗上半部	口径 14 口縁部 1/12存	密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	龍泉窯系 15世紀
第35図120	4D区D7 2層	青磁 碗底部	口径 16 口縁部 1/10存	密	良好	胎:明緑灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	龍泉窯系 15世紀
第35図121	4D区D4 2層	青磁 碗口縁部	口径 16 口縁部 1/7存	密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	龍泉窯系 15世紀
第35図122	4A区D90 2層	青磁 碗上半部	口径 15.5 口縁部 1/15存	緻密	良好	胎:明オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	部分に灰白色の灰が分かる 龍泉窯系C群 (15世紀)
第35図123	4B区B19 2層	青磁 碗上半部	口径 15 口縁部 1/17存	密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	外表面部に土層状の灰みあり 龍泉窯系C群 (15世紀)
第35図124	4B区C16 2層	青磁 碗口縁部	口径 17 口縁部 1/16	緻密	良好	胎:明オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨文→磨胎 内:磨胎	胎裏がやや厚く貫入あり 龍泉窯系C群 (15世紀)
第35図125	4B区D8 2層	青磁 碗底部	8.5×7角	緻密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	胎裏が厚く貫入あり 龍泉窯系C群 (15世紀前半)
第35図126	4D区D5 2層	青磁 碗口縁部	4×2角	緻密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	逆戻り口縁 龍泉窯系C群 (15世紀)
第35図127	4B区C2 2層	青磁 碗底部	3.5×3.5角	密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:遺跡制陶文→磨胎 内:シグザク文・ヘラ痕 具による文様→磨胎	同安窯系群 4種 (12~13世紀)
第35図128	4D区D4 2層	青磁 碗底部	底径 5 底面 1/4存	密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎→出し磨胎 内:磨胎	高台内に2本の比較 磨胎痕あり 15世紀
第35図129	4B区B6 2層	青磁 碗底部	底径 4 底面 1/6存	密	良好	胎:灰オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎→底面(磨胎)部以外 外:磨胎	龍泉窯系 15世紀
第35図130	4C区B1 2・3層	青磁 碗底部	3.5×2角	緻密	良好	胎:灰オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:片栗り状沈積→磨胎 内:花文→磨胎	内面の花文はツシム状・ヘラ 痕の遺文による 同安窯系C群 (13世紀前半)
第35図131	4D区B5 2層	青磁 皿上半部	口径 12.6 口縁部 1/6存	緻密	良好	胎:明緑灰色 断面:灰白色	外:薄片文→磨胎 内:磨胎	龍泉窯系 14~15世紀
第35図132	4C区C2 2層	青磁 皿	口径 5 底径 4.45 底面 8.2 7/10存	密	良好	胎:明オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎→底面(磨胎)部以外 外:磨胎 内:磨胎	内外面とも貫入あり 磨胎→出し磨胎 龍泉窯系 15世紀
第35図133	4B区C4 2層	青磁 香炉底部	2×2.5角	緻密	良好	胎:緑灰色 断面:灰白色	外:口縁状の凹み→磨胎 内:磨胎	中世
第35図134	4B区C19 2層	青磁 皿口縁部	口径 10.2 口縁部 1/12存	緻密	良好	胎:灰白色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	同安窯系 12~13世紀
第35図135	4D区E7 2層	青磁 碗口縁部	口径 15 口縁部 1/12存	緻密	良好	胎:明緑灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	内外面とも貫入あり 15世紀
第35図136	4D区D8 2層	青磁 碗口縁部	口径 14 口縁部 1/7存	緻密	良好	胎:明緑灰色 断面:灰白色	外:磨胎 内:磨胎	15世紀?
第35図137	4B区C16 2層	青磁 碗口縁部	口径 7 口縁部 1/7存	緻密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:口縁状の凹み→磨胎 内:磨胎	13~14世紀
第35図138	4A区C21 2層	青磁 碗口縁部	口径 8.8 口縁部 1/4存	緻密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:口縁状の凹み→磨胎 内:磨胎	口唇部に平坦面あり 内外面とも貫入あり 15~16世紀
第35図139	4A区C28 2層	青磁 鉢底部	底径 3.8 底面 1/4存	緻密	良好	胎:緑灰色 断面:灰白色	外:磨胎→底面(磨胎)部 内:うるこ状陶文→磨胎	龍泉窯系 15世紀
第35図140	4A区D0 2層	青磁 鉢底部	底径 5.1 底面ほぼ円形	密	良好	胎:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:磨胎→底面(灰く磨胎) 内:見込みまじり状の陶 文→磨胎	龍泉窯系群 C群 (15世紀)
第35図141	4D区B5 2層	青磁 碗底部	底径 7.6 底面 1/8存	密	良好	胎:明緑灰色 断面:灰白色	外:磨胎→底面(磨胎)部 内:磨胎	中世
第35図142	4D区D7 2層	青磁 碗口縁部	3.5×1角	緻密	良好	胎:明緑灰色 断面:灰白色	外:口縁に彫り出した草花 文→磨胎 内:磨胎	12~13世紀
第35図143	4D区B-D 2層	青磁 皿口縁部	口径 11.4 口縁部 1/6存	密	良好	胎:明緑灰色 断面:灰白色	外:山形模+草花文→磨胎 内:2本の遺文→磨胎	青花皿C群 (16世紀)
第35図144	4B区E15 2層	青磁 皿口縁部	口径 13.2 口縁部 1/8存	緻密	良好	胎:灰白色 断面:灰白色	外:磨胎→磨胎 内:磨胎と逆四方模文など →磨胎	染付皿C群 (15~16世紀)

発掘番号	出土地点	建 物 種 別	針灸線 (cm) 残存率	土 質	焼 成	色 調	成形・顔装・文様	備 考
第36回146	48区D9 2層	青花 須口線部	2.5×2角	磁器	良好	釉: 明灰白色 染付: 墨藍色	外: 蓋縁+流状文→線輪 内: 2本の墨線→線輪	青23のC群 (15~16世紀)
第36回146	48区 墨模底部	青花 墨口線部	2×1.5角	磁器	良好	釉: 明灰白色 染付: 青色 断面: 灰白色	外: 文様→胎輪 内: 文様→胎輪	二番部外反 15~16世紀
第36回147	48区C17 2層	青花 墨口線部	1.5×1角	磁器	良好	釉: 灰白色 染付: 濃紺色 断面: 明灰白色	外: 蓋縁+流状文→線輪 内: 2本の墨線→線輪	青花加C群 (15~16世紀)
第36回148	48区E6 2層	青花 墨口線部	6.5×3.5角	やや磁器	良好	釉: 灰白色 断面: 灰白色	外: 蓋+草文文→胎輪 内: 線輪	16世紀
第36回149	48区C7 2層	青花 墨口線部	3×2角	磁器	良好	釉: 灰白色 染付: 青灰色	外: 蓋縁+草文文→胎輪 内: 蓋縁→胎輪	中世
第36回150	48区C2 2層	青花 墨口線部	1.5×1.5角	磁器	良好	釉: 明青灰色 断面: 灰白色	外: 2本の墨線→貴付け部 以外無装 内: 蓋文→胎輪	16世紀
第36回151	48区D9 2層	中世陶加 口線部	口径 7.8 1線部 1/12存	磁	良好	深赤褐色へに ぶい褐色 断面: 灰白色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ+ヘラ状 12具以上の浮し込み	13~14世紀
第36回152	48区E8 2層	中世陶加 口線部	口径 2.2 上半部 1/3存	磁器	良好	釉: 褐色 断面: 灰白色	外: 洗鉢・包帯→胎輪 内: ヨコナデ・回転ヨコ ナデ→胎輪・胎輪	中世
第36回153	48区B0 2層	中世陶加 口線部	2×2角	磁	良好	釉: 黒色 断面: 灰白色	外: 蓋輪 内: 蓋輪	中世後半
第36回154	48区B5 2層	中世陶加 口線部	口径 10 断面 2.7 底径 3.8 1/3存	1.5mm以下の砂粒子 (石英など)含む	良好	釉: オリーブ 灰色 断面: 灰色	外: 蓋縁(陶器の下に砂粒 輪の痕跡あり)・底部(陶器) 内: 胎輪	見込み及び底部に砂目積み 込み 蓋台状の底縁はやや上げ底 15世紀
第36回155	48区B16 2層	中世陶加 口線部	口径 5 底径 1/4存	微砂粒子(石英・長 石など)若干含む	良好	釉: 灰白色 断面: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	見込み及び底部に砂目積み あり 蓋台状の底部 16世紀
第36回156	48区D9 1層	中世陶加 口線部	口径 4.4 底径 1/10存	1mm以下の砂粒子(石 英など)含む	良好	釉: 灰白色 断面: 灰白色	外: 胎輪 内: 胎輪	蓋台状の底縁はやや上げ底 15世紀
第36回157	48区F6 2層	中世陶加 口線部	5×2.5角	微砂粒子(長石など) 若干含む	良好	釉: 黒色 断面: 灰白色	外: 胎輪・ヘラズリ? 内: 胎輪	16世紀前半
第36回158	48区D15 2層	中世陶加 口線部	口径 5.4 底径 1/5	磁器	良好	釉: 灰白色 断面: 灰白色	外: 胎輪・底部(蓋付け部以 外無装) 内: 胎輪(貫入あり)	14~15世紀
第36回159	48区C4 2層	中世陶加 口線部	口径 26.8 口線部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	灰白~黄灰色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ→線輪	14世紀
第36回160	48区C3 2層	中世陶加 口線部	5.5×2角	微砂粒子(石英など) 含む	良好	馬鹿色 断面: 灰黄褐色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ	瓦線口線 14~15世紀
第36回161	48区B8 2層	中世陶加 口線部	8×5.5角	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	外: 墨赤褐色 ~灰色 内: 灰褐色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ	いびつに成形 16世紀後半
第36回162	48区E8 6層	中世陶加 口線部	口径 45.8 口線部 1/10存	4mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	灰色	外: ナデ 内: ナデ	二重口線 13世紀
第36回163	48区B7 2層	中世陶加 口線部	口径 37.7 口線部 1/12存	1.5mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	黄灰色 釉: オリーブ 褐色 断面: 灰白色	外: 回転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ	内外ともに自然釉がかかる 二重口線 13世紀
第36回164	48区C3 2層	中世陶加 口線部	8×4.5角	1~7mm大の砂粒子 (石英・長石など)含む	良好	赤色 自然釉: 灰口 断面: ぶい 黄褐色	外: 回転ヨコナデ+ア ナ: 回転ヨコナデ	二重口線 13世紀
第36回165	48区B16 2層	中世陶加 口線部	口径 25 口線部 1/14存	1mm大の砂粒子(石英・ 長石など)含む	良好	ぶい赤褐色	外: 口縁部周囲に流線→回 転ヨコナデ 内: 回転ヨコナデ	中世
第36回166	48区E2 2層	中世陶加 口線部	口径 29.6 底径 1/11存	1.5mm以下の砂粒子(石 英など)含む	良好	灰色	外: クタナデ・ナデ・蓋部 (ハケ目(0.5cm/1cm) ナデ)	中世
第36回167	48区B4 2層	中世陶加 口線部	9×8角	2mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	灰色 自然釉: 灰白 色	外: 細い単位の間隙なヨコ ナデ 内: 押押し+折縁相いナ デ・楕円ナデ	内底では粘土粘付が明確 中世
第36回168	48区E8 2層	中世陶加 口線部	7×7角	3mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	外: にぶい赤 褐色 内: にぶい黄 褐色	外: ナデ 内: ナデ	中世
第36回169	48区F7 2層	中世陶加 口線部	10×5角	1.5mm以下の砂粒子 (石英・長石・赤褐色 粒子など)含む	良好	外: にぶい黄 褐色 内: にぶい黄 褐色	外: ハケ目(0.5cm/1cm)・ナ デ・ヨコナデ・底付(ナデ) 内: 回転ヨコナデ・回転ヨ コナデ+ヘラによるク タナデ	内部の一部に摩り付 中世
第36回170	48区E14 2層	中世陶加 口線部	4.5×3角	微砂粒子(石英・長石 など)含む	良好	灰白色	外: 椅子状のクタクキ+矢羽 状のクタクキ(スタンプ?) 内: 粗面ナデ	中世

発掘番号	出土地点	種類	計測値 (cm-g) 寸法 保存率	器 二	形状	色 調	成形・調整・文様	備 考	
第37図171	4D区C8 2層	肥前系灰濁 土	口径 12.0 底径 3.5 高 4.4 1/4寸 底部完形	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 内: 黄緑・灰白色	外: 露胎部→底部以外露胎 内: 露胎・見込み部(肥ノ口 輪八半)	割り出し高台 見込部及び裏付け部に砂目 積みあり 17世紀後半	
第37図177	4D区D2	肥前系灰濁 土	口径 4.0 底径 1/8寸	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 内: 露胎・灰白色	外: 露胎・底部(露胎) 内: 露胎・見込み(肥之取ノ 内)・露胎	割り出し高台及び裏台外面に 砂目積みあり 17世紀後半	
第37図175	4D区E7 2層	肥前系灰濁 土	口径 5.6 底径 1/5寸	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎・文・2条の垂線→一 周・露胎(露胎・露胎)→条の 露胎	割り出し高台 18世紀	
第37図174	4A区 露胎部	肥前系灰濁 土	口径 3 底径 完形	磁器	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎 内: 露胎	割り出し高台 見込部に砂目積みあり 17世紀	
第37図175	4D区E7 2層	肥前系灰濁 土	口径 4.8 底径 完形	磁器	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 見込部に砂目積みあり 17世紀	
第37図176	4D区C8 2層	肥前系灰濁 土	口径 4.8 底径 1/4寸	陶	良好	内: にぶい黄 褐色 胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→底部(露胎)に露 胎→露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	露胎 内: 露胎 高台面に砂目積みあり 18世紀	
第37図177	4D区E4 2層	肥前系灰濁 土	口径 5.4 底径 1/10寸	磁器	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰白色	外: 露胎 内: 2条半位の平行線文の 露胎	割り出し高台 17世紀	
第37図178	4D区C5 2層	肥前系灰濁 土	口径 4.5 底径 完形	磁器	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰黄色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 16世紀	
第37図173	4D区E7 2層	肥前系灰濁 土	口径 3 底径 1/2寸	陶器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎・ケズリ?・露胎 内: ケズリ?・ケズリ?・露胎	肥ノ口 見込部及び裏付け部に砂目積 みあり 17世紀後半	
第37図180	4D区E7 2層	肥前系灰濁 土	口径 5 底径 1/3寸	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎・ケズリ 内: 露胎・見込み部輪八半	割り出し高台 見込部及び裏付け部に砂目 積みあり 17世紀後半	
第37図181	4D区C8 2層	肥前系灰濁 土	口径 4.8 底径 完形	陶	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎 内: 露胎	割り出し高台 見込部にケズリの跡土目積 みあり 17世紀中頃	
第37図182	4D区D7 2層	肥前系灰濁 土	口径 4.6 底径 完形	磁器	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰黄色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	外周の一部に露胎から 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 見込部に砂目積みあり 17世紀後半
第37図183	4A区D25 1層	肥前系灰濁 土	口径 0.4 底径 1/8寸	陶	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	露胎あり 18世紀	
第37図184	4D区D6 1層	肥前系灰濁 土	口径 7.4 底径 1/6寸	磁器	良好	胎: にぶい黄 褐色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 18世紀	
第37図185	4D区E7 2層	肥前系灰濁 土	口径 6 底径 1/2寸	陶	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰黄色	外: 露胎・底部(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 見込部及び裏付け部に砂目 積みあり 17世紀後半	
第37図186	4A区E25 試掘坑	肥前系灰濁 土	口径 3.5×3角 底径 完形	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎 内: 露胎	露胎	
第37図189	4D区E9 2層	肥前系灰濁 土	口径 9.6 底径 1/10寸	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 外周一部に露胎土 17世紀前半	
第37図188	4D区D6 1層	肥前系灰濁 土	口径 13 底径 3.4 高 2.5 1/4寸	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 見込部に砂目積みあり 17世紀中頃	
第37図189	4B区C13 2層	肥前系灰濁 土	口径 11 底径 3.1 高 3.6 3/4寸	陶	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰黄色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	割り出し高台 見込部及び外周下部と露 台内に砂目積みあり 17世紀	
第37図190	4D区E8 2層	肥前系灰濁 土	口径 4 底径 1/2寸	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	露胎	
第37図191	4B区E6 1-2層	肥前系灰濁 土	口径 4.6 底径 1/8寸	磁器	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰黄色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	露胎	
第37図192	4B区E6 1層	肥前系灰濁 土	口径 4.4 底径 1/3寸	磁器	良好	胎: オリーブ 色 露胎: 黄緑灰色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	露胎	
第37図193	4D区D6 2層	肥前系灰濁 土	口径 4.1 底径 1/2寸	陶	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	露胎	
第37図194	4D区B-C 1-2層	肥前系灰濁 土	口径 37.9 底径 1/8寸	磁器	良好	胎: 黄緑灰色 露胎: 灰白色	外: 露胎→露胎(露胎)→露胎 内: 露胎	露胎	
第37図195	4D区E7 2層	肥前系灰濁 土	口径 12.1 底径 1/1寸	陶	良好	胎: 灰白色 露胎: 灰白色	外: 露胎 内: 露胎	露胎	

洋図番号	出土地点	種別	計測値 (cm・g) 残存率	形状	色 調	成形・調整・文様	備 考
第38図196	40区C0 2層	朝鮮系陶器 小型陶埴器	口径 10.8 体容 1/99	壺	良好 釉：浅黄台 露胎：灰白色	外：凹線ヨコナデ+地輪 内：凹線ヨコナデ+地輪	西入あり 17世紀末～18世紀
第38図197	48区B6 2層	瓦葺土器 浅鉢口縁部	φ.5×4角	1～3mmの砂粒子(石 英・長石など)含む	普通 灰色 断面：灰黄色	外：ヨコナデ+窪帯文・ス テンプ文(変形凸面文) 内：ナデ	内外面とも風化が著しい 14～15世紀
第38図198	40区C3-4 2層	淡路御茶 山形吹 殖埴器	口径 18 体容 1/89	1.5mm以下の砂粒子 (石英・長石など)若干 含む	良好 灰白色	外：凹線ヨコナデ	口縁部土縁状 外面に薄く自然釉かかる 12世紀
第38図199	40区 32-33-C2 2-3層	瓦葺土器 横口縁部	口径 27.8 口径比 1/107	微砂粒子(石英・長石 など)含む	やや不 良 黄灰色	外：窪線ヨコナデ+ケズリ 内：凹線ヨコナデ	口縁部に平直面あり 14～15世紀
第38図200	40区D2 2-3層	瓦葺土器 瓦口7割空	10×6角	2mm以下の砂粒子(石 英など)若干含む	良好 暗灰色 断面：灰白色	外：窪線状文・浅い窪帯文・ 浮彫状の窪帯帯状文 内：ナデ+窪線ミズナデ	15～16世紀
第38図201	40区B5- C1 3層	瓦葺土器 鉢口平部	10×6.5角	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好 外：黄色 内：黄色～灰 白色	外：凹線ヨコナデ+指押さ えナデ 内：ハケ目(7本/1cm)、調整 不明	14～15世紀
第38図202	40区B1-2 3層	瓦葺土器 横鉢口縁部	5×5角	微砂粒子(石英など) 若干含む	普通 灰色	外：相線ナデ 内：ナデ+線目	13世紀
第38図203	48区B6 2層	瓦葺土器 横鉢口縁部	4×2角	微砂粒子(石英・長石 など)含む	普通 暗灰色	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	口縁部以外に少し出し し相面をつくる 3～15世紀

#### 4区出土遺物観察表 2

洋図番号	出土地点	種別	計測値 (cm・g) 残存率	形状	色 調	成形・調整・文様	備 考
第14図9	40区D7 S D 1000	流紋岩 打敷石岸	現存長 17.6 最大厚 3 刃部一部・基部 欠損	基本幅 11.7 重量 355		磨削・突刃	表面の一部に磨面及び 石臼縁に取付痕あり
第14図10	4A区C3-C20 S D 1300 土層	流紋岩 实用威おる礫	長さ 4.7 最大厚 5	幅 7.6 重量 780			表面に磨面あり
第14図8	4D区B5 S E 1137	凝灰岩 礫石	長さ 10.4 最大厚 3.7	幅 5.6 重量 270			全体で磨られている
第14図14	40区D4 S D 123	木製正 版材	現存長 20.1 最大厚 2	現存幅 6.6			左上方を斜めにカット 裏りイドは調整。裏面は取り残った まま使用
第14図16	40区B5 S D 1123 底瓦	木製品 版材	現存長 7.7 現存厚 1.4	現存幅 6.6			下縁を片刃状にカット
第14図15	40区D1 S D 1123 2層	木製品 角材	現存長 11.2 厚さ 5.3	幅 6.5			上面は調整、下室は斜で切断、左右面 は尖結整
第14図17	40区D4 S D 1123 5層	木製品 角材	長さ 3.6 厚さ 4	幅 4.7			サイコロ状
第14図18	40区C1 S D 1123	木製品 角材	長さ 2.8 厚さ 2.7	幅 4.6			サイコロ状
第14図19	40区D4 S D 1123	木製品 角材	長さ 4 厚さ 4.1	幅 3.6			サイコロ状
第14図20	40区D4 S D 1123 2層	木製品 角材	長さ 3.7 厚さ 3.6	幅 4.3			サイコロ状
第14図21	40区D4 S D 1123	木製品 角材	長さ 3.6 厚さ 3.9	幅 4.5			サイコロ状
第14図22	40区D4 S D 1123	木製品 角材	長さ 3.5 厚さ 2.6	幅 3.3			サイコロ状
図15-6	48区C10 S D 1054	砂岩 未用磨礫石	長さ 4.9 厚さ 2	幅 2 重量 35			全面に朱が付着 上下底は磨し面、4面は 磨面
図21-17	40区 S X 131	凝灰岩 若孔石製品	現存長 15.4 現存厚 7.5	幅 14.5 重量 1210			中央に長方形の穿孔あり 一側縁に磨面あり
図21-18	40区 S X 113	安山岩 台石	長さ 15.3 厚さ 6	幅 16.2 重量 2500			上面の一部に炭化物付着

標号番号	出土地点	種別	別種	計測値 (cm・g)	現存率	成形・調整・文様	備考
第22図13	4C区B1-2 S K 1060 上半	統治関連遺物	フイゴの羽口	5×5.5cm			外面にガラス溶融付着
第22図14	4C区D1 S E 1100	陶石		長さ 13.1 厚さ 6	幅 6.1 重量 880		中研ぎ〜仕上げ研ぎ
第22図25	4D区D2-3 S K 1110 下半	統治関連遺物	板形鉄滓(薄小)	長さ 6.6 厚さ 2.8	幅 5.4 重量 76		
第22図26	4D区D3 S K 1110	木製品	薄板	現存長 13.7 厚さ 0.95	幅 5.5	下半は斜で切断	表裏面に付着物残存
第22図27	4D区D2-3 S K 1110 下半	木製品	板状の棒	長さ 14.6 厚さ 0.5	幅 1.7	先端を耳掻き状に加工	先端は被熱のため黒化している
第23図9	4D区D7 S D 1111 断面	木製品	舟形の形代	長さ 18.6 厚さ 2.1	幅 3.7	底面は丸みを帯びた削りを実施す 船底は平坦に削り出す(断面J字状)	船首中央に穿孔あり
第23図11	4D区D7 S D 1111 中位	木製品	舟形の形代	長さ 20.3 厚さ 2.1	幅 3.3	底面は丸みを帯びた削りを実施す 船底は工具傷分平坦に削り出す(断面V字状)	第23図10より組立
第23図12	4D区D3 S D 1111 中位	泥状磁	舟形	長さ 28.4 厚さ 12.4	幅 35.2 重量 13730		中央部は深く窪み周辺は 舟形凹状の浅い窪みあり (内面の著しい使用面)
第24図6	4A区D21 S E 1025 1層	木製品	かきまげ棒状品	長さ 10.4 径大厚 0.7	幅 0.8	柄部分に切れ込みあり 先端部は削厚して丸形状	先端は被熱のため黒化している
第24図7	4A区D21 S E 1025 1層	木製品	伴物の泥板片	7×4.1角		切れ込み箇所	
第24図8	4C区D2-3 S E 1083	木製品	木栓	長さ 5.45 直径幅 2.9 孔径 0.4~0.6	基部径 1.7 頭部厚 2.5	頭部はこけし状の多角形面取りを実施す	頭部に貫通しない孔あり
第24図9	4C区D2-3 S E 1083	木製品	部材	長さ 10.35 頭部幅 2.9	厚さ 2 基部幅 1.4	片側下半部をカット	基部に穿孔あり
第24図10	4C区D7 S E 1083	木製品	大板の形	現存長 11.1 径大厚 1.8	現存幅 6.4		
第24図11	4C区D3 S E 1083 3層	木製品	折敷の底材	長さ 15.1 厚さ 0.4	現存幅 8.15	角取りを実施す	縁部に数ヶ所小穿孔あり
第24図17	4D区D7 S E 1141 5層	統治関連遺物	板形鉄滓(薄小)	長さ 7.5 厚さ 1.7	幅 4.8 重量 71		
第24図18	4C区C-02 S F 1118 2層	木製品	団物の脚板	現存長 46.5 厚さ 0.3	復元径 22.4	内側に切れ込み箇所 径10mmの縦じばで外生長く内側短く削じ る	裏面合わせは6.5mm部分 下部に底敷との目録孔あり
第25図3	4D区D9 S E 1146 中位	木製品	漆塗り板	口径 16 1/3厚	底径 6.7	外面は黒漆を塗った後赤漆で草花文を 描く。内面は赤漆を実施す	顔料は朱
第25図4	4D区D9 S E 1146 中位	漆塗り板	磁石	現存長 16.5 厚さ 8	現存幅 7.7 重量 1370		上表面のみ使用
第25図5	4D区D9 S E 1146 中位	漆塗り板	磁石	長さ 10.1 厚さ 7.6	幅 5.6 重量 250		全面に削痕が観察される
第25図6	4D区D9 S E 1146 中位	漆塗り板	磁石	現存長 12.3 厚さ 5.2	現存幅 6.3 重量 600		全面に削痕が観察される
第25図7	4D区D9 S E 1146 中位	石灰 磁石		現存長 5.2 現存厚 2.6	現存幅 3.8 重量 100		
第25図8	4D区D9 S E 1146 上位	漆塗り板	磁石	長さ 15.6 厚さ 8.6	幅 3.5 重量 3100		上面は剥離した後に被熱
第25図9	4D区D9 S E 1146 下位	漆塗り板	磁石	現存長 20.1 厚さ 5.3	現存幅 16.1		
第25図10	4D区D9 S E 1146 下位	石灰 磁石		長さ 15.1 現存厚 8.3	幅 12.1 重量 2920	全体に削打による成形	中央部に削って窪んだ1 朱の痕あり
第26図1	4A区D20 S D 1024	占具	米鏡	直径 2.3 内孔径 0.65	厚さ 0.12 重量 25		「治平元鏡」初編1064年
第26-27	4D区D7 S D 1120 2層	木製品	棒	復元口径 0.2 底径 6.1 一辺欠損	径高 2.1	内外面は黒漆を塗ったのち赤漆塗布 両面内は黒漆塗布	顔料は朱

採石番号	出土地点	種類 分類	数量 現存率	形状・用途・文様	備考	
第28区28	4D区05 S D 1120 1層	木製品 透木下駄	現存台長 15.9 現存台幅 8 現存高さ 前 2.4 後 2.1	2ヶ所横溝あり	上面は後面の近くわずかに火を受けている	
第28区29	4D区02 S D 1120	木製品 槌棒杖木製品	現存長 14.3 現存厚 2.9	現存幅 5	下方の先端が磨滅	
第28区30	4D区05 S D 1120	木製品 板材	径元長 16.9 最大厚 0.7	最大幅 5.4		
第28区31	4D区03 S D 1120 上位	観治間遺物 楕形鏡治厚(小)	長さ 7.7 厚さ 2.85	現存幅 5.25 重量 135		
第28区32	4D区04 S D 1120	観治間遺物 楕形鏡治厚(P)	長さ 5.9 厚さ 3.8	幅 5 重量 147		
第28区33	4D区04 S D 1120	観治間遺物 楕形鏡治厚(極小)	長さ 4.9 厚さ 1.95	幅 4 重量 29		
第29区34	4D区08 S D 1120 上位	凝灰岩 礎石	現存長 7.8 現存厚 9.9	現存幅 3.1 重量 210		
第29区35	4D区06 S D 1120	凝灰岩 礎石	現存長 31.5 現存厚 9.1	現存幅 18.5 重量 6400		
第29区36	4D区06 S D 1120	凝灰岩 礎石	現存長 34.2 現存厚 12.1	現存幅 17.1 重量 9320	裏面に数本の刃キズあり	
第29区37	4D区08 S D 1120	玄武岩 アロックス状の角状	現存長 21.1 現存厚 12.5	現存幅 13 重量 5400	全体に敲打による成形	
第30区4	4D区06 S D 1144	土製品 土製品	現存長 5.6 現存厚 4.9	現存幅 6.7	外：ナデ	下半部及び上部のV字状突起を欠損 胎土：6mm以下の砂粒子(石灰・長石など)含む 色調：涼しい黄褐色
第30区5	4D区C7 S D 1144	観治間遺物 楕形鏡治厚(小)	長さ 8.3 厚さ 2.5	幅 4.9 重量 105		
第30区6	4D区08 S D 1144 下層	観治間遺物 フィロの羽口(鍔)	現存長 4 現存厚 3.5	現存幅 4 重量 81		
第30区7	4D区C7 S D 1144 3層	木製品 板材	現存長 15.9 最大厚 0.5	最大幅 3.7		
第30区8	4D区C7 S D 1144 上位	木製品 板材	最大長 23.7 最大厚 0.5	最大幅 6.6	1ヶ所穿孔あり	
第30区9	4D区C7 S D 1144 上位	凝灰岩 礎石	長さ 10.1 厚さ 5.6	幅 11 重量 615	縁辺部に被動痕(嵌付痕)	
第30区10	4D区08 S D 1144 下層	凝灰岩 礎石	現存長 13.9 現存厚 4.9	現存幅 6.9 重量 638	表面は下部欠損後に煤付層	
第30区11	4D区08 S D 1144 下層	花崗岩 台石	長さ 15.3 厚さ 8.9	現存幅 18.7 重量 3720		
第31区7	4D区C2 S X 1109	土質質 平丸	10×7角		凸面：種子タタキ皿痕 凹面：布圧痕	胎土：1mmの砂粒子(石灰など)含む 焼成：良好 色調：灰黄褐色
第31区12	4D区B4 S X 1127	凝灰岩 有孔石	現存長 14.3 現存厚 7.5	現存幅 15.4 重量 1210		内面に磨り痕をもち全面の中央に長方形(隅丸)の穿孔あり
第31区18	4D区05 S X 1130	安山岩 礎石	現存長 15.3 現存厚 6	現存幅 16.2		上面の一部に灰化物付着
第38区204	4A区A21 3層	土製品 土鉢	長さ 4 孔径 0.3	最大径 0.9		紡錘形
第38区205	4A区B20 2層	土製品 土鉢	長さ 4.3 孔径 0.3	最大径 0.9		紡錘形
第38区206	4S区B11 3層	土製品 土鉢	現存長 2.8 孔径 (0.3)	現存幅 1.8		紡錘形
第38区207	4C区D6 3層	二部構造紡錘用品 二製用器	直径 5	孔径 111.6		外面側：①軽ナデ、底部(回転糸切り) 内面側：回転アテ
第38区208	4D区05 2層	鉄製品 錐?	最大長 8.95 最大厚 1	最大幅 1.75		

採掘番号	出所地点	種別	計測値 (cm・a)		成形・調整・文様	備考
			現存長さ	現存幅		
第39区209	4D区C7 2層	鉄製品 火鋸?	現存長さ 5.3 現存厚 2.05	現存幅 0.5		
第39区210	4D区D3 3層	鉄製品 用途不明品	現存長さ 3.7 現存厚 0.35	現存幅 0.9		
第39区211	4D区D8 2層	須置質 丸丸側面部	8×6角		凸面: 格子目タタキ痕 凹面: 糸切り痕・鬼敷痕・凹凸巾痕	胎土: 1mm以下の砂粒子 (石英・長石など)含む 焼成: 良好 色調: 灰色
第39区212	4D区B2 3層	須置質 丸丸側面部	7.5×7角		凸面: ヨコナデ 凹面: 糸切り痕・布圧痕・糸貫織り目 わずら目痕 側面の凹面側は面取りされている	胎土: 1.5mm以下の砂粒子 (石英・長石など)含む 焼成: 良好 色調: 凸面は灰色・凹面に 薄い黄褐色
第39区213	4D区D3 2層	土師質 丸丸側面部	10.5×6.5角		凸面: ヨコナデ 凹面: 糸切り痕・布圧痕 側面の凸凹両方に面取りあり	胎土: 2mm以下の砂粒子 (石英など)含む 焼成: 良好 色調: 凸面は灰色・凹面 に薄い褐色
第39区214	4D区E4 2層	須置質 平瓦	6×5.5角		凸面: 格子目タタキ痕→ヨコナデによる 面取り 凹面: 布圧痕	胎土: 微砂粒子(石英・ 長石など)含む 焼成: 良好 色調: 灰色
第39区215	4D区C2 2層	土師質 平瓦	7×5.5角		凸面: 格子目タタキ痕→ヨコナデによる 面取り 凹面: 布圧痕	胎土: 8mm以下の砂粒子 (長石など)含む 焼成: 普通 色調: に薄い黄褐色→褐色
第39区216	4C区C4 3層	須置質 平瓦	7×5.5角		凸面: タタキ→ナデ消し 凹面: 布圧痕	胎土: 微砂粒子(石英・ 長石など)含む 焼成: 良好 色調: 灰色
第39区217	4B区B5 平瓦	土師質 平瓦	10×6.5角		凸面: タタキタタキ痕 凹面: 布圧痕	胎土: 1mm以下の砂粒子 (石英など)含む 焼成: 普通 色調: 灰色
第39区218	4C区C4 3層	須置質 平瓦	8×5角		凸面: タタキタタキ痕 凹面: 布圧痕	胎土: 1mm以下の砂粒子 (石英・長石など)含む 焼成: 普通 色調: 黄褐色
第39区219	4D区B3 2層	須置質 平瓦	4×3角		凸面: タタキタタキ痕 凹面: 布圧痕	胎土: 微砂粒子(石英など) 含む 焼成: 普通 色調: 灰色
第39区270	4B区C13 2層	流紋岩 石英片石層	長さ 6 厚さ 1.4 一部欠損	幅 5.9 重量 65		表面の自然面は風化のため 材質となり棒状の千ス れあり
第39区221	4B区E17 2層	玉髓 石核	長さ 3.2 厚さ 2.2	幅 4.3 重量 32		
第39区222	4B区E17 2層	玉髓 石核	長さ 6.3 厚さ 3.9	幅 5.4 重量 100		自然面が残る
第39区223	4D区B8 2層	玉髓 石核	長さ 4.2 厚さ 3.2	幅 4.6 重量 72		敲打痕あり 身に凹痕
第39区274	4B区B7 2層	玉髓 棒形石核	長さ 2.4 厚さ 1.7	幅 2.7 重量 12		縁辺は刃消し
第39区275	4B区B6 2層	玉髓 石核	長さ 3.2 厚さ 2.1	幅 3.7 重量 27		縁辺の凸部に敲打痕なし
第39区276	4B区C11 2層	玉髓 石核	長さ 2.8 厚さ 2.2	幅 2.5 重量 20		
第39区227	4B区A7 2-3層	黒曜石 石核?	長さ 4.2 厚さ 2.2	幅 3 重量 28		
第39区228	4B区C13 2層	玉髓 石核	長さ 2.5 厚さ 2	幅 2.65 重量 18		
第39区229	4D区D5 3層	玉髓 棒形石核?	長さ 2.2 厚さ 1.4	幅 3.4 重量 13		上下縁辺部に敲打痕あり
第39区230	4D区C3 2層	玉髓 調整削片	長さ 3 厚さ 0.8	幅 3.4 重量 9		
第39区231	4B区C8 3層	玉髓 削片	長さ 5.3 厚さ 1	幅 2.4 重量 0.8		片側面に刃にぼれあり
第39区232	4D区D8 2層	安山岩 石核?	長さ 6.2 厚さ 1	幅 5.05 重量 60		縁辺に打ち欠き部あり
第39区233	4D区D7 2層	安山岩 石核?	長さ 8.4 厚さ 1.3	幅 5.5 重量 70		表面に打ち欠き部あり
第39区234	4B区B10 2層	凝灰岩 碓石	現存長さ 2 現存厚 0.75	現存幅 2.2 重量 6		玉髓材の可能性あり 形状 使用面は主(上面と側面) 側面は磨り切り痕のよう にみられる

採出番号	出土地点	種別	引測部 採寸	引測部 採寸	成形・状態・文様	備考
第39図235	4B区B16 3層	流紋岩 加工痕ある石帯	現存長 2.9 厚さ 1	現存幅 5 重量 18		
第39図236	4D区E5 3層	凝灰岩 凝石?	現存長 4.15 厚さ 0.5	現存幅 3.1 重量 10		石帯の二次使用? 使用面は2面 構造に小さな快りあり
第39図237	4D区E8 2層	凝灰岩 凝石	現存長 7.1 厚さ 7.5	現存幅 2.9 重量 20		3面の使用面(中研ぎ・仕上げ研ぎ2面) 構造あり
第39図238	4D区36 2層	凝灰岩 凝石片	現存長 7.7 現存厚 3.35	現存幅 6.5 重量 140		ほぼ全面使用(荒研ぎ～仕上げ研ぎ)
第39図239	4D区E7 2層	凝灰岩 凝石	現存長 4.2 厚さ 2.4	幅 3.8 重量 68		使用面は2面(中研ぎ面・仕上げ研ぎ2面)
第39図240	4D区E3 2層	凝灰岩 凝石	現存長 8.1 厚さ 2.0	幅 5.6 重量 160		4面の使用面(荒研ぎ～仕上げ研ぎ) 構造あり
第40図241	4D区C3 2層	凝灰岩 凝石	現存長 3.75 厚さ 2.3	現存幅 4 重量 48		2面の使用面(中研ぎ・仕上げ研ぎ)
第40図242	4A区323 2層	砂岩 凝石	現存長 6.5 厚さ 1.5	幅 4.4 重量 80		全面使用(荒研ぎ～仕上げ研ぎ)
第40図243	4B区B16 2層	凝灰岩 凝石	現存長 9 厚さ 2	幅 6.6 重量 115		全面使用(中研ぎ)面・仕上げ研ぎ3面
第40図244	4C区B4 3層	凝灰岩 凝石	現存長 5.8 厚さ 0.7	現存幅 3.9 重量 21		全面使用(風化のため不明瞭) 構造(押り切り痕?)あり
第40図245	4D区06 2層	凝灰岩 凝石	現存長 13.6 現存厚 2.3	現存幅 6.3 重量 100		仕上げ研ぎ 現状版がある
第40図246	4D区B8 2層	砂岩 凝石	現存長 8.1 厚さ 6.8	現存幅 6.05 重量 375		全面使用(荒研ぎ～仕上げ研ぎ)
第40図247	4C区B2 2層	凝灰岩 凝石	現存長 8.3 現存厚 6.1	現存幅 5.4 重量 375		2面の使用面(荒研ぎ～仕上げ研ぎ)
第40図248	4D区C4 2層	凝灰岩 凝石?	現存長 8.1 厚さ 2.6	現存幅 6.8 重量 220		中研ぎ
第40図249	4D区E5 2層	凝灰岩 凝石	現存長 9.8 厚さ 3.55	現存幅 7 重量 230		使用面は3面(中研ぎ・仕上げ研ぎ) 方向の一定しない現状版あり
第40図250	4B区D7 2層	凝灰岩 凝石	現存長 12.4 現存厚 6.5	現存幅 8.1 重量 600		使用面(荒研ぎ・仕上げ研ぎ) 構造あり
第41図251	4C区E8 2層	凝灰岩 凝石の形代	長さ 6.8 厚さ 3.4	幅 4.5 重量 140		凝石の転用?
第41図252	4D区B6 2層	砂岩 凝石	現存長 5.6 厚さ 2.9	幅 5.3 重量 110		全面使用(荒研ぎ・中研ぎ) V字状の痕あり
第41図253	4D区C2 2層	砂岩 凝石	現存長 5.5 現存厚 5.3	現存幅 4.1 重量 80		全面使用(荒研ぎ～仕上げ研ぎ)
第41図254	4D区D7 2層	流紋岩 凝石	現存長 7.85 現存厚 3.2	現存幅 3.1 重量 85		使用面は3面(中研ぎ・仕上げ研ぎ) 底に込んだ跡が凹みが見られる
第41図255	4B区B9 2層	凝灰岩 凝石	現存長 5.7 厚さ 3.2	現存幅 5.5 重量 80		3面の使用面(中研ぎ・仕上げ研ぎ)
第41図256	4B区A17 3層	安山岩 凝石	現存長 6.2 厚さ 2.2	現存幅 5.5 重量 85		荒研ぎ～仕上げ研ぎ
第41図257	4B区C15 3層	砂岩 凝石	現存長 9.4 厚さ 2.45	現存幅 6 重量 150		全面使用(中研ぎ・仕上げ研ぎ) 現状版(刃半式)あり
第41図258	4D区C8 2層	流紋岩 凝石	現存長 7.6 厚さ 5.7	現存幅 7 重量 455		2面の使用面(仕上げ研ぎ)
第41図259	4B区B13 2層	砂岩 凝石	長さ 7.1 厚さ 7.5	幅 10.6 重量 1520	角形の断面	全面使用(荒研ぎ～仕上げ研ぎ)
第41図260	4D区D-E8 6層	流紋岩 凝石	現存長 10.8 厚さ 6.3	幅 10.3 重量 900		3面の使用面(中研ぎ)

検出番号	土記号	特徴 別	計測値 (cm・g) 検出率		形状・種類・文様	備考
第41図261	4D区C8 2層	流紋岩 磁心	現存長 13.7 現存厚 3.4	現存幅 7.6 重量 305		3面の使用面(仕上げ研ぎ)
第42図262	4B区D8 7層	流紋岩 台石	現存長 16.1 厚さ 8.2	現存幅 13.5 重量 1480		上面のみ使用 痕状痕あり
第42図263	4B区D10 2層	流紋岩 研削痕ある塊	長さ 18 厚さ 6.95	幅 11 重量 1500		切り込んだような痕(石 物痕?)あり 断痕の痕、擦痕あり 痕状痕
第42図264	4D区C8 2層	流紋岩 磁石	長さ 17.2 厚さ 8.3	幅 10.2 重量 1970		ほぼ全面使用面(荒研ぎ へ仕上げ研ぎ)
第42図265	4D区E6 2層	流紋岩 磁石	現存長 14 厚さ 3.8	幅 13.6 重量 330		全面使用(研ぎ)
第42図266	4C区C6 2層	花崗岩	長さ 12.1 厚さ 6	幅 9.8 重量 910		上まのみ実なる使用面 (仕上げ研ぎ) 全体的に風化が著しい
第42図267	4D区B8 7層	花崗岩 研削痕ある塊	長さ 21.1 厚さ 10.6	幅 12.6 重量 2950		
第42図268	4B区D8 2層	流紋岩 磁石	現存長 7.1 厚さ 3.6	幅 8.6 重量 310		打製石片の転用
第42図269	4D区E3 6層	流紋岩 磁石	現存長 8.1 厚さ 1	現存幅 13 重量 115		2面使用(研ぎ・仕上げ 研ぎ) 刃部をもつ石器の転用?
第43図270	4D区D5 2層	木製品 磨の産石	長さ 6.4		全面黒塗布 見込み、一部赤塗布	
第43図271	4D区 山土地不明	木製品 楕円形	7.5×4.5角		外:黒塗 内:赤塗	
第43図272	4A区E0 7層	木製品 板片	5×4.1角		外:黒塗塗布の上に来厚で黒を長く 内:黒塗	
第43図273	4D区E2 2層	木製品 算盤玉状	長さ 1.7 厚さ 0.45	幅 1.4 孔径 0.4		断面は算盤玉状
第43図274	4C区O2 3層	木製品 折板の底板?	現存長 8.8 厚さ 0.6	現存幅 6.1	長方形 一角を丸く切り取る	小孔あり?
第43図275	4C区O4 2層	木製品 小丸型木皿	長さ 10.3 厚さ 0.5	幅 6.8		斜めに面取り
第43図276	4B区C14 2層	木製品 磁石	長さ 5.4	直径 4.7		上部は平坦なカット、下部は傾斜する 傾かいカット
第43図277	4C区O3 6層	木製品 角棒状品	現存長 13.5 厚さ 1.4	幅 2.35		柱目に沿って稜孔付の 皮が薄く剥き取られる
第43図278	4D区O5 2層	木製品 棒状	長さ 10.3 厚さ 3.1	幅 3.2		下方の先端部分が使用の 為?わずかに磨耗
第43図279	4D区O3 2層	木製品 透筒下駄	現存台長 17.7 現存筒高 前 4.4 後 3.1	現存台幅 8.4 後 3.1		台座は前後より筒が全 て欠損 後部は下半分を欠損 筒端穴は一部を無し磨削 不明 台の外面は二次的に火を 受け風化に近い状態
第43図280	4D区O3 2層	木製品 透筒下駄	現存台長 19.3 現存筒高 前 2.55 後 2.5	現存台幅 7.9 後 2.5		台の一部が削って切断されている(磨削 的?)
第43図281	4D区O5 2層	木製品 磁石	長さ 15.7 厚さ 0.75	幅 5.5		上端は面で切断?
第43図282	4D区B8 2層	木製品 板片	長さ 7.7 厚さ 1.5	現存幅 5.2		
第43図283	4D区C4 2層	木製品 板材	長さ 9.8 厚さ 1.2	幅 5.25		表面は歪が起っているが裏面は歪い 上下面とも面で切断
第43図284	4D区B8 2層	木製品 磁石	現存長 11.6 厚さ 0.8	幅 3.7		下端は方形に削る
第43図285	4C区O5 6層	木製品 板材	長さ 9.2 厚さ 0.3	幅 2.7		
第43図286	4B区E7 2層	木製品 板材	長さ 11.7 厚さ 0.3	幅 2.5		上方は粗粒の物のように加工

4区出土遺物観察表3

番号	種類	地区	グリッド	層位・洞窟	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	メタル比	残存率 (%)	備考
表1-1	楕形鏡治澤 (小・金銭)	4B区	C7	2	7.80	10.15	3.70	288.90	4	H(O)	100	平面、不整長楕円形。表面に多くの粉状付着。木炭痕あり。
表1-2	楕形鏡治澤 (小・金銭)	4C区	D4	2	8.70	7.05	3.00	144.73	6	鍍化(Δ)	100	平面、不整長楕円形。表面に木炭付着。上面半角が凹状になっている。
表1-3	楕形鏡治澤 (小・金銭)	4B区	D7	2	6.20	7.30	2.25	133.89	4	H(O)	100	平面、不整楕円形。規整。
表1-4	楕形鏡治澤 (小・金銭)	4C区	F2	2・3	9.35	7.20	3.35	175.63	3	H(O)	90	平面、不整五角形。上面3ヶ所、側面1ヶ所の木炭痕残る。
表1-5	楕形鏡治澤 (極小・金銭)	4C区	E5	3	5.45	4.30	2.60	68.92	4	H(O)	100	平面、楕円形。上面に木炭付着。鍍化。
表1-6	羽口 (鏡治)	4B区	D8	2	3.85	4.05	2.00	27.62	1	なし	一(破片)	羽口先端一部から鍍化。黒色ガラス質化部分あり。
表1-7	羽口 (鏡治)	4B区	C9	2	5.30	4.70	3.20	55.46	5	なし	一(破片)	羽口先端下部。
表1-8	粘土質海解物	4C区	D3	3	3.45	3.50	2.50	30.42	2	なし	一(破片)	粉量が多く付着する。
表1-9	鉄製品 (鍍治)	4C区	D6	2	6.20	3.50	0.70	43.13	7	特。(★)	一(破片)	断面により板状に成形。
表1-10	鉄製品 (鍍治)	4B区	C8	2	2.15	2.60	1.40	18.71	7	L●	一(破片)	断面により円形に成形。
表1-11	楕形鏡治澤 (中)	4D区	F4	2	8.80	7.35	3.00	271.42	3	なし	100	平面、不整長楕円形。表面に1ヶ所の木炭痕残る。
表1-12	楕形鏡治澤 (中)	4D区	C4	2	9.20	7.60	2.90	229.08	3	なし	100	平面、不整半円形。上面に4ヶ所の木炭痕残る。
表1-13	楕形鏡治澤 (中)	4D区	D4	2	8.70	6.80	3.60	256.88	4	なし	100	平面、不整半円形。表面に1ヶ所の木炭痕残る。
表1-14	楕形鏡治澤 (中)	4D区	D2	3	13.10	12.60	3.60	322.55	5	なし	100	平面、不整長楕円形。上面に4ヶ所の木炭痕残る。
表1-15	楕形鏡治澤 (小)	4D区	C4	2	5.00	4.00	2.85	67.22	6	なし	50	平面、不整半円形。鍍化である。
表1-16	楕形鏡治澤 (小)	4D区	F7	2	8.00	5.10	2.70	107.59	4	なし	90	平面、不整半円形。上面・側面に1ヶ所の木炭痕残る。
表1-17	楕形鏡治澤 (小)	4D区	C3	3	7.60	5.90	2.40	125.11	3	なし	90	平面、不整長楕円形。表面に多くの粉状が付着する。
表1-18	楕形鏡治澤 (小)	4D区	F6	2	6.50	6.90	3.30	110.61	2	なし	100	平面、不整五角形。波動状の鍍化。表面は、縦やかにカーブする。上面に1ヶ所の木炭痕あり。
表1-19	楕形鏡治澤 (極小)	4D区	C6	2	5.30	5.80	1.85	53.58	4	なし	80	平面、不整楕円形。上面・表面に1ヶ所ずつ木炭痕あり。
表1-20	楕形鏡治澤 (極小)	4D区	C4	2	5.70	4.50	2.70	58.15	4	なし	100	平面、不整長楕円形。上表面・側面、工具状1ヶ所残る。鍍化である。
表1-21	楕形鏡治澤 (極小)	4D区	C3	3	7.40	6.80	2.30	74.63	4	なし	80	平面、不整長楕円形。上面に1ヶ所の木炭痕残る。
表1-22	楕形鏡治澤 (極小)	4D区	F7	3 X 1140 (中)	4.70	4.00	1.70	78.05	4	なし	100	平面、不整五角形。上面2ヶ所、表面2ヶ所の木炭痕残る。鍍化である。
表1-23	楕形鏡治澤 (極小)	4D区	C5	3	4.60	3.60	1.40	30.11	4	なし	100	平面、不整三角形。表面に木炭付着。
表1-24	楕形鏡治澤 (極小)	4D区	B8	2	4.90	4.50	1.60	29.51	3	なし	80	平面、不整半円形。表面に4ヶ所の木炭痕残る。
表1-25	楕形鏡治澤 (極小)	4D区	E5	2	4.20	3.70	1.10	40.35	1	なし	50	平面、不整半円形。かなり磨耗である。
表1-26	鍍治澤	4D区	C2	2	3.30	2.35	1.20	5.51	2	なし	一(破片)	平面、不整長楕円形。鍍化である。
表1-27	鍍治澤	4D区	F7	2	2.00	2.40	1.60	11.20	4	なし	一(破片)	平面、不整長楕円形。砂状付着。
表1-28	鍍治澤	4D区	C3	2	3.80	2.80	1.80	8.07	4	なし	一(破片)	平面、不整長楕円形。表面に木炭付着。
表1-29	楕形鏡治澤 (中・金銭)	4D区	C2	2	7.60	5.60	3.20	113.95	5	鍍化(Δ)	90	平面、不整長楕円形。表面に木炭付着。

番号	種別	地区	ブレード	部位・遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	回数	メタル度	残存率 (%)	備考
表1-30	前期縄文層 (中・古鉄)	4D区	C3	SD112	6.70	7.20	3.40	199.33	4	鉄化(△)	90	平面、不整形塊形。側面、 底面に木炭付着。全面に砂 状付着。
表1-31	前期縄文層 (中・古鉄)	4D区	C5	2	10.50	8.40	2.70	233.15	3	鉄化(△)	100	平面、不整形。底面に木 炭残存。未加工物。
表1-32	約整 (銅治部)	4D区	B4	2	4.70	4.40	4.60	41.86	1	なし	—(破片)	表層以外全て破面。銅土は、 2cm以下の砂粒を包む程度 な見立。
表1-33	羽口 (銅治)	4D区	C3・4	3	4.7	3.50	7.00	71.39	7	なし	—(破片)	羽口先端上部(天井部)で ある。銅土は、2cm以下の 砂粒を包む程度な見立。
表1-34	羽口 (銅治)	4D区	C4	2	3.00	6.10	5.10	67.31	4	なし	—(破片)	羽口先端上部(天井部)で ある。羽口内部にスマキ炭 が残る。銅土は、緻密。
表1-35	赤土 (銅治)	4D区	C4	2	5.50	6.30	3.40	71.75	2	なし	—(破片)	羽口先端下部である。内部 先端にスマキ炭残る。
表1-36	羽口 (銅治)	4D区	B4	3	5.50	5.40	3.70	85.14	2	なし	—(破片)	上部から底部にかけての側 面部分である。外面は、緑 色にガラス質化している。
表1-37	粘土質銅治部	4D区	B2	2	4.60	4.00	4.60	38.89	1	なし	—(破片)	全体的に流動し、黒色ガラ ス質化している。on大の 石が付着している。
表1-38	粘土質銅治部	4D区	C2	3	5.10	6.00	4.30	63.99	3	なし	—(破片)	全体的に流動している。木 炭炭が3ヶ所残る。
表1-39	鉄製品 (銅治部)	4D区	C5	2	1.10	1.90	0.30	5.34	7	I(●)	—(破片)	刀身の先端部か？
表1-40	鉄製品 (銅治部)	4D区	C4	2	3.30	4.40	1.80	43.98	4	特L(★)	—(破片)	鉄片か？
表1-41	鉄片か？	4D区	D2	2	3.90	2.40	2.20	12.68	1	なし	—(破片)	石付不明。

## 第4章 5区の調査成果

### 第1節 調査の概要

今回の調査区は道路を挟んで南北2箇所に分かれている。道路の北側が「5A区」、道路の南側が「5B区」である。

5A区は平成17年度に調査を行った。北端は21グリッド、南端は32グリッドである。長さは約50m、幅25m、面積は約1,250㎡である。

5B区は平成18年度に調査を行なった。北端が33グリッド、南端が55グリッドである。長さは約100m、幅25m、面積は約2,500㎡である。

いずれの調査区も、耕作土は重機掘削を行い、遺物包含層以下は手掘りによって調査を行った。その結果、調査区全域で古墳時代から中世にかけての遺構を確認したが、ほとんどが中世の遺構である。

また、『築山遺跡Ⅱ』で報告した、c17～e20グリッドは、5B区のD44～D47グリッドに相当する。  
(高橋誠二)

#### 1 基本層序(第57図)

本調査区の基本層序は2層で、1層が耕作土、2層が遺物包含層である。2層には弥生時代から近世までの遺物が含まれている。隣接調査区との土層対応関係であるが、北側に位置する4D区西壁5ラインとは、耕作土・床上が1層、5～6層が2層に対応する。南側に位置する2区西壁17ラインとの比較では、1A・1C層が1層、3・3'層が2層に対応する。

(高橋誠二)

#### 2 遺構とその出土遺物

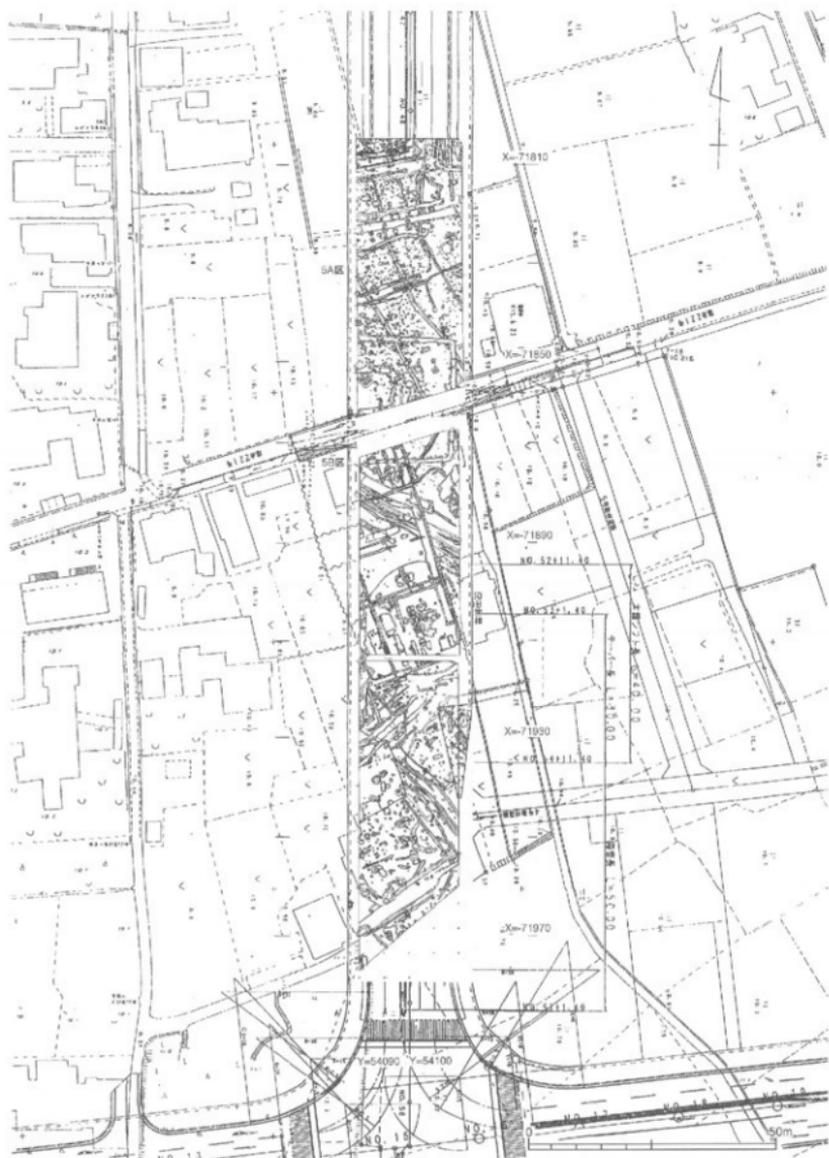
##### (1) 古墳時代の遺構とその遺物

##### 古墳(第62～64図 図版26)

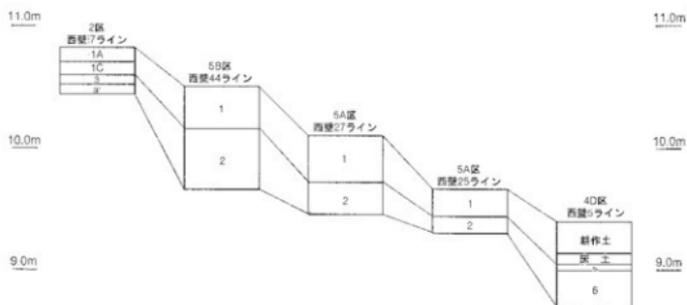
5号墳と円形周溝1を確認した。いずれも墳丘は削平されており、周溝底部がわずかに残る程度である。

##### 5号墳(第60・62・63図 図版26)

39ライン～43ラインに位置する。墳丘側の周溝の立ち上がりを基点として、墳丘規模を推定すると、直径約23mの円墳である。周溝幅は、北側セクションで約2m、南側セクションで約3.5mを測る。埋土は北側セクション(A38・B39グリッド)で4層、南側セクション(C43・44グリッド)で7層認められた。北側セクションで確認した埋土は、いずれも古墳削平後の堆積である。南側セクションの1～3層は、古墳時代以降の溝の堆積土である。4～7層は古墳



第56図 5区全体図 (1 : 1,000)



第57図 5区土層模式図(1:40)

削平後の堆積である。

周溝南側(C44グリッド)からは、土師器の高杯(第63図1~6)や須恵器の蓋杯(第63図7~12)、甕(第63図13)、甕(第63図14)などが出土した。1~6の土師器の高杯には、杯部を脚部にはめ込んで接合するもの(1~3)と、杯部を脚部に置き粘土で接合するもの(4~6)とがある。7~10の杯蓋はいずれも口縁端部内面に1条の沈線を描いている。7・9の天井部は中央からヘラケズリをしている。8は口縁端部がやや内湾している。天井部は外周のみヘラケズリをしている。11・12は杯身である。11の底部は12に比べ丸く仕上げている。13の甕は、口縁下端部に2条の凹線が入る。14の甕は口縁端部外面に面をもち、頸部には波状文を施す。

#### 円形周溝1・SX2190(第61・64図)

C49・50グリッドに位置する。SD2182と重複しており、円形周溝1が作られた後、SD2182が作られている。

周溝規模は、外径約8mと小規模である。幅0.85m、深さ0.2mである。埋土は1層で、黒色粘質土である。周溝内から須恵器の杯身(第64図1)が出土している。出土状況より流れ込みと考えられる。底部は平底で、たちあがりはやや内傾している。(高橋誠二)

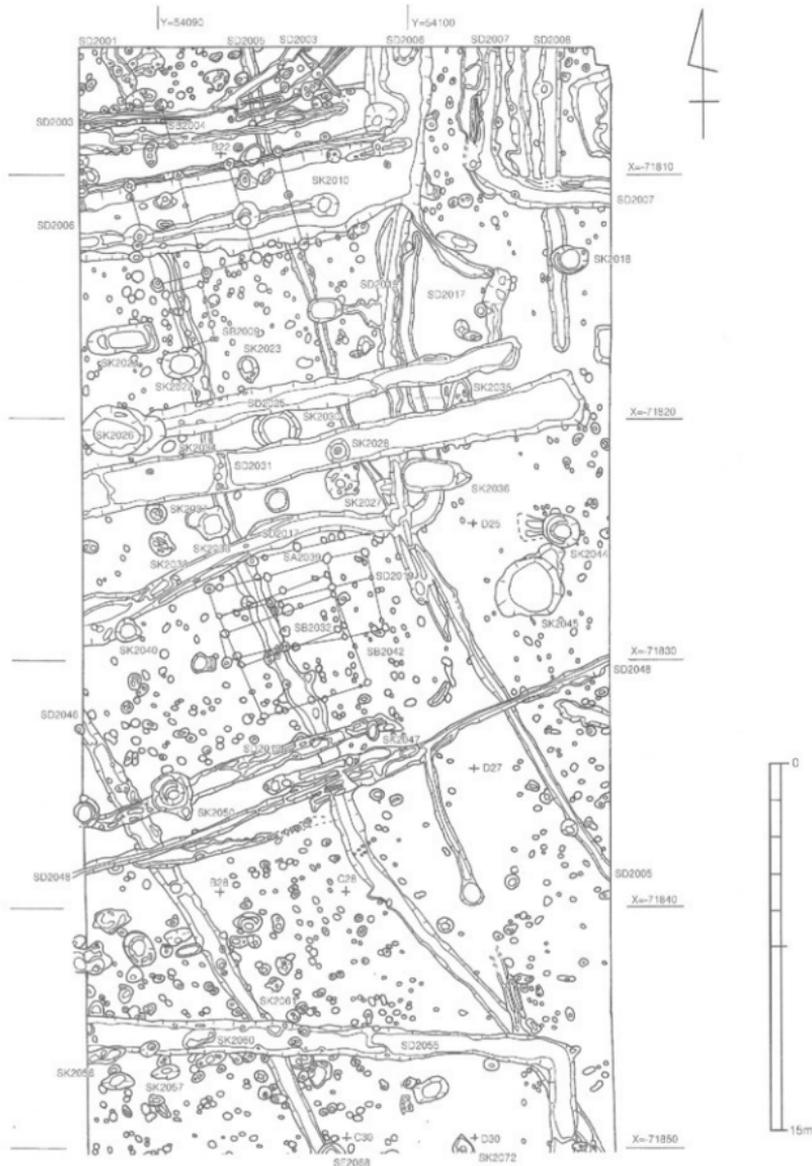
#### (2) 古代の遺構とその遺物

##### 土坑墓(第65図 図版27)

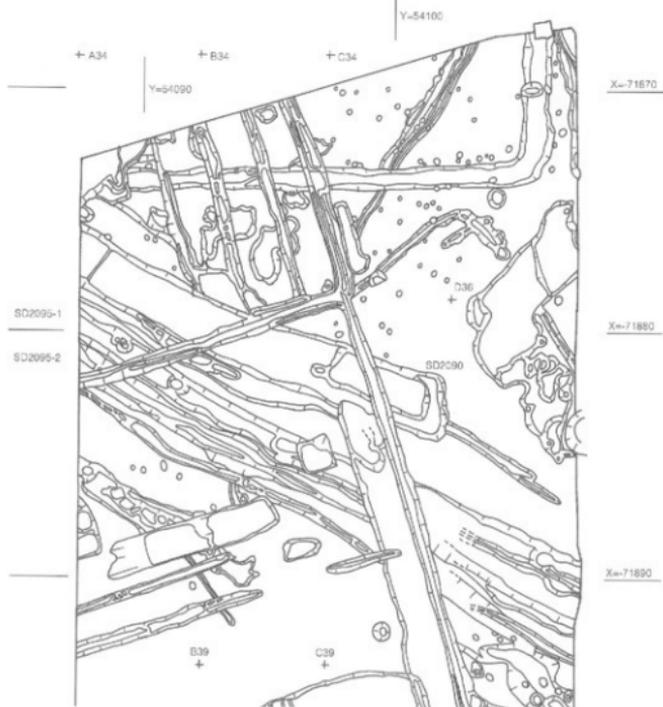
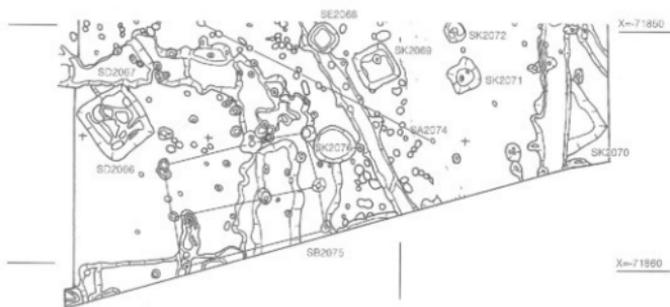
6基の素掘りの土坑を確認した。SX2174とSX2183は掘形と副葬品から土坑墓と判断した。その他の土坑は、土坑墓の可能性が高い遺構である。

##### SK2164(第60・65図 図版27-1)

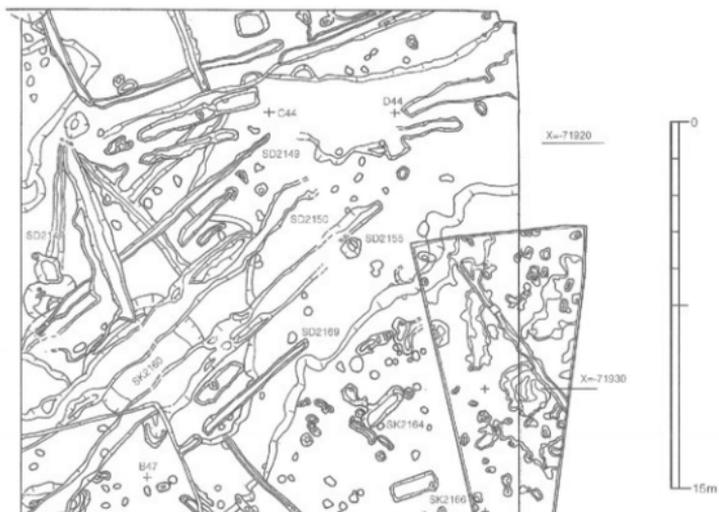
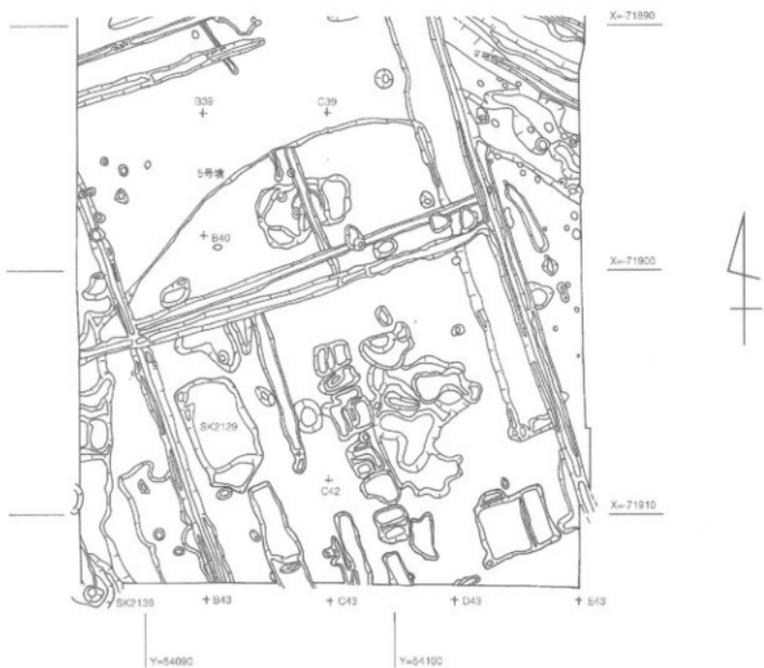
C46グリッドに位置する。SK2166の北3mにあり、主軸はN-42°-Eである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸2.1m、短軸0.6m、深さ0.25mである。埋土は2層で、1層は黒色粘質土、2層は黒褐色粘質土である。出土遺物はない。



第58图 5A区(1)遺構图1(1:200)



第59図 5A区(2)・5B区(1)遺構図(1:200)



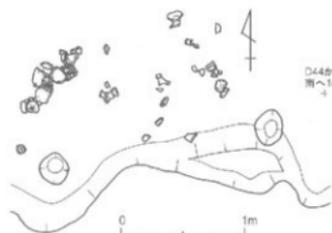
第60図 5B区(2)遺構図(1:200)



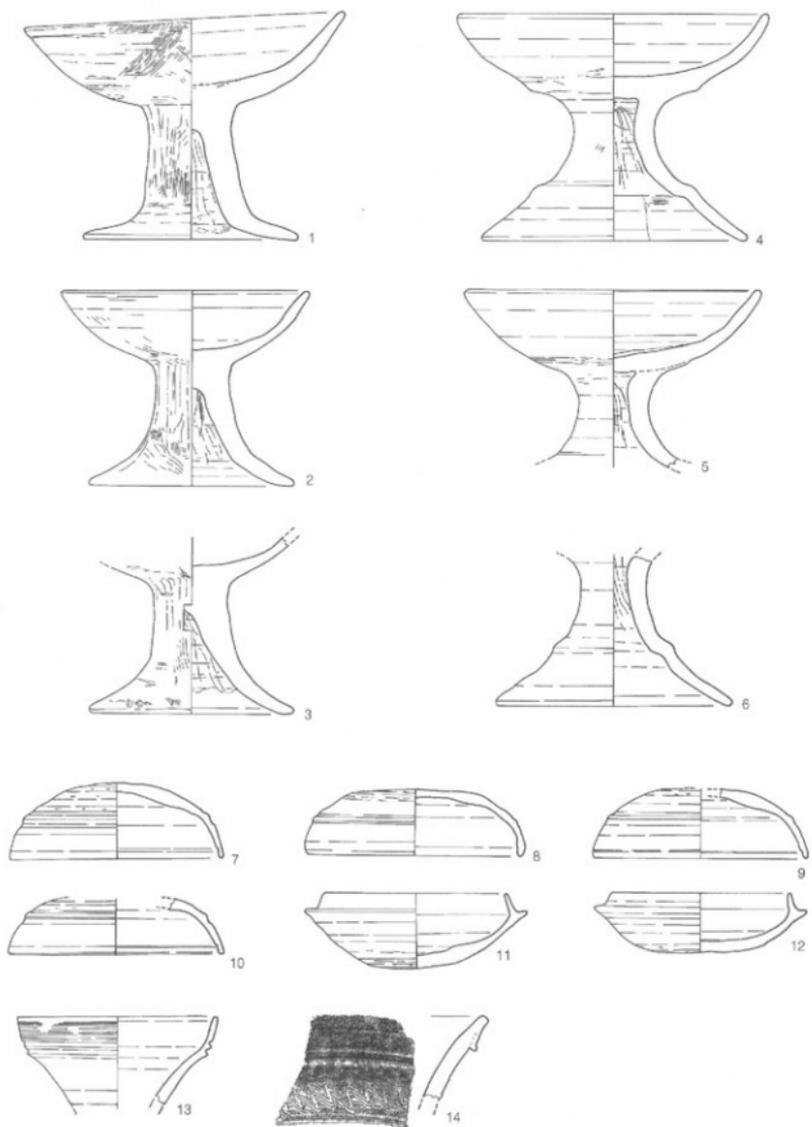


+ D44b-5 西へ2.5m

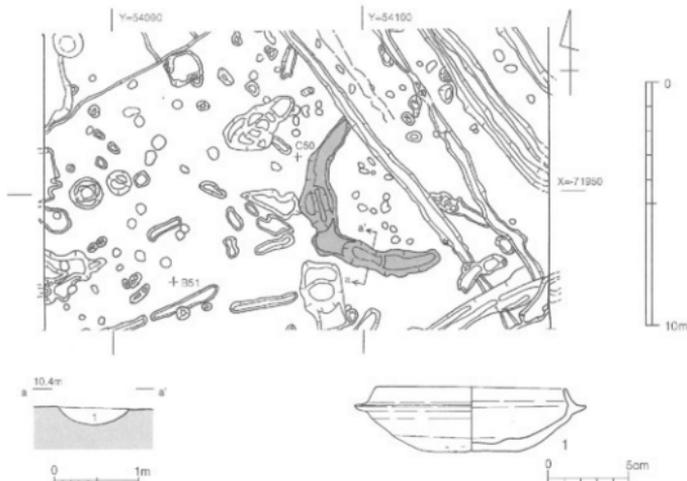
+ D44



第62図 築山5号墳全体図（遺構 1 : 200 断面 1 : 60 出土状況 1 : 40）



第63图 茌山5号墳出土遺物実測図（1：3）



第64図 円形周溝1の全体図と出土遺物実測図（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）

**SK2166**（第60・65図 図版27-5）

D47グリッドに位置する。SK2164の南3mにあり、主軸はN-68°-Eである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸1.95m、短軸0.7m、深さは0.2mである。埋土は1層で黒色粘質土である。出土遺物はない。

**SK2174**（第61・65図 図版27-2）

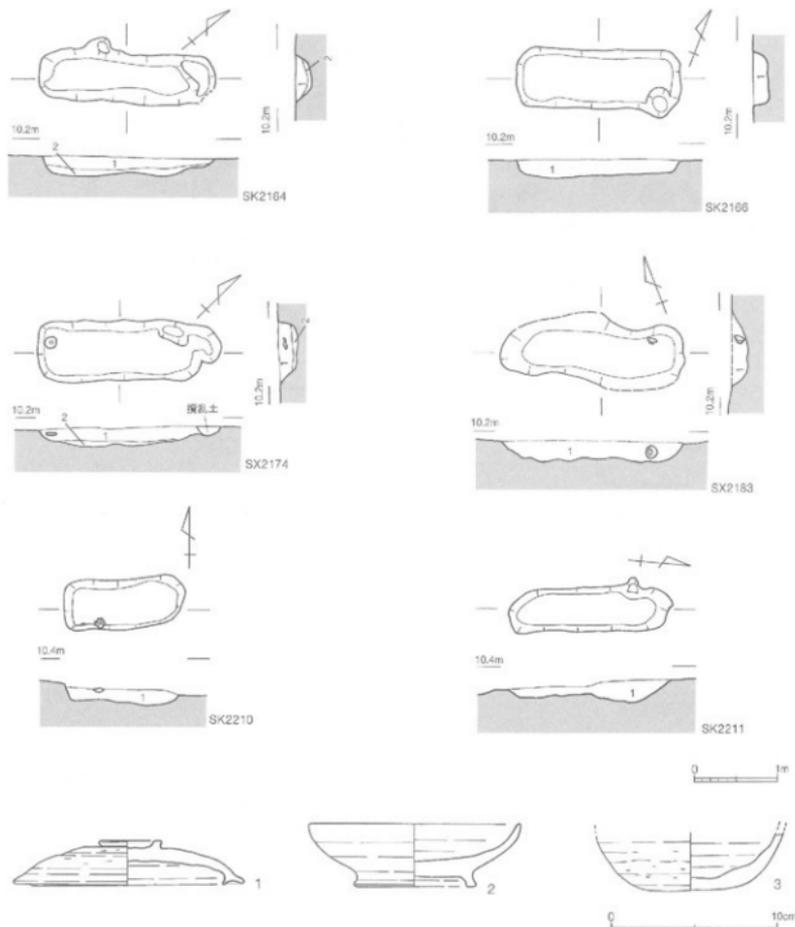
D48グリッドに位置する。SK2166の南6mにあり、主軸はN-46°-Eである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸2.2m、短軸0.7m、深さは0.25mである。埋土は2層で、1・2層とも黒褐色粘質土である。1層より、須恵器の蓋（第65図1）が出土している。輪状つまみもち、口縁部にはかえりをもつ。

**SK2183**（第61・65図 図版27-3・4）

C48グリッドに位置する。SD2177と重複しており、SK2183が作られたのちSD2177が作られている。主軸はE-19°-Sである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸2.15m、短軸0.9m、深さは0.2mである。埋土は1層で黒褐色土である。須恵器の高台付き杯（第65図2）が出土している。体部がやや内湾気味に立ち上がる。

**SK2210**（第65図 図版27-7・8）

C51グリッドに位置する。SD2199と重複しており、SK2210が作られたのちSD2199が作られている。主軸はE-1°-Sである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸1.45m、短軸0.6m、深さ0.15mである。埋土は1層で黒色土である。須恵器の壺（第65図3）の底部が出土してい



第65図 古代の遺構と遺物実測図 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)

る。底部中央から削っている。

**SK2211 (第65図 図版27-6)**

A51グリッドに位置する。SD2217と重複しており、SK2211が作られた後、SD2217が作られている。主軸はN-6°-Wである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸1.95m、短軸0.55m、深さ0.25mである。埋土は1層で黒色土である。出土遺物はない。(高橋誠二)

### (3) 中世の遺構とその遺物

#### 1) 5A区

##### 掘立柱建物跡

5A区内において、多くのピットを確認した。ピットの中には柱根を残すものもあった。いくつかの掘立柱建物を復元することができたが、この他にも建物が存在した可能性がある。

##### SB2004 (第58・66図)

A21グリッドに位置する。梁間1間(1.8m)×桁行3間(3.2m)の東西に長い建物である。主軸はN-81°-Eである。本遺構は、SD2006東西溝とほぼ平行で、SD2001・2003を壊してつくられる。柱穴は概ね直径20~40cm程度の円形で、地山面からの深さは10~40cmである。柱穴の底面は標高9.1m以下である。遺物は3つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。SD2006と主軸を平行にすることから、同時期の建物とみることができる。

##### SB2009 (第58・66図)

A23グリッドに位置する。梁間1間(1.3m)×桁行3間(2.3m)の南北に長い建物である。主軸はN-14°-Wである。本遺構は、SD2001と重複してつくられる。柱穴は概ね直径20~30cm程度の円形で、地山面からの深さはほぼ20cmである。柱穴の底面は標高9.1mで一定する。北東隅柱とその南隣の柱には柱根が残存する。遺物は出土しておらず、その年代は不明である。

##### SB2032 (第58・67図)

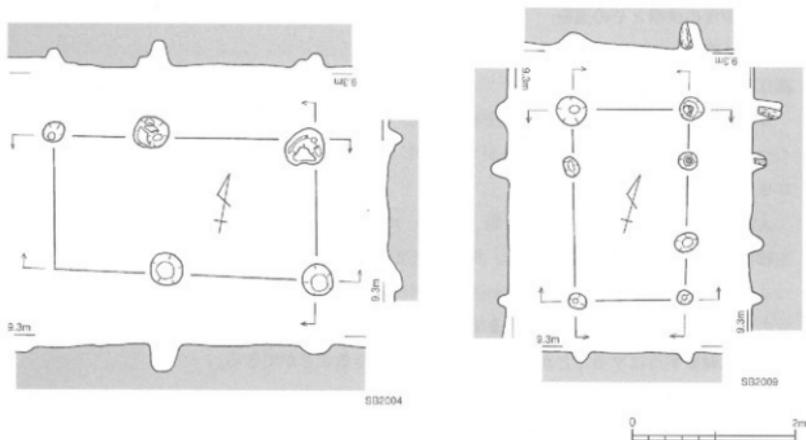
B・C25グリッドに位置する。梁間2間(3.2m)×桁行4間(6.4m)の東西に長い建物である。主軸はN-76°-Eである。本遺構はSD2017・SD2019に区画された敷地内にある。SD2025・2031との主軸方位がほぼ一致することから、それらの溝と同時期の可能性がある。柱穴は概ね直径30cm程度の円形で、地山面からの深さは30~50cmである。柱穴の底面は概ね標高9.0m前後で一定する。北東隅柱とその西隣の柱には柱根が残存する。遺物は4つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。

##### SA2039 (第58・67図)

B25グリッドに位置する。主軸はN-75°-Eである。SB2032の北側の柱筋とほぼ平行であり、SB2032の孫庇となる可能性もある。また、SD2017と重複する。規模は長さが4.5mで、柱間は西から1.3m、1.3m、1.1m、0.8mである。柱穴は直径20~30cmの円形で、深さは10~20cmである。柱穴底面の標高は9.1~9.2mである。

##### SB2042 (第58・68図)

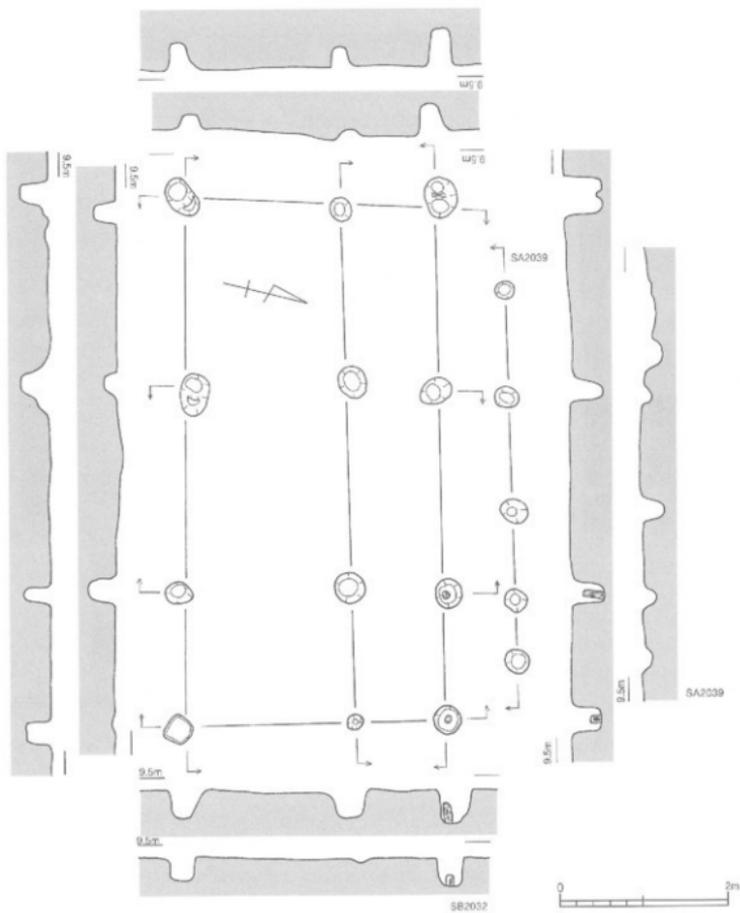
B25・26グリッドに位置する。梁間3間(4.3m)×桁行4間(4.6m)の南北に長い建物である。建物の平面形としては、梁間3間×桁行3間の身舎の北側に庇が取り付くものと思われる。主軸はN-23°-Wである。本遺構はSD2017・SD2019に区画された敷地内にある。SB2032と重複するが、SD2017・2019と主軸方位が近似することから、本遺構が先行する可能性が高い。柱穴は概ね直径15~20cm程度の円形で、地山面からの深さは10~50cmである。柱穴の底面は概ね標高9.1m前後で一定する。遺物は2つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。



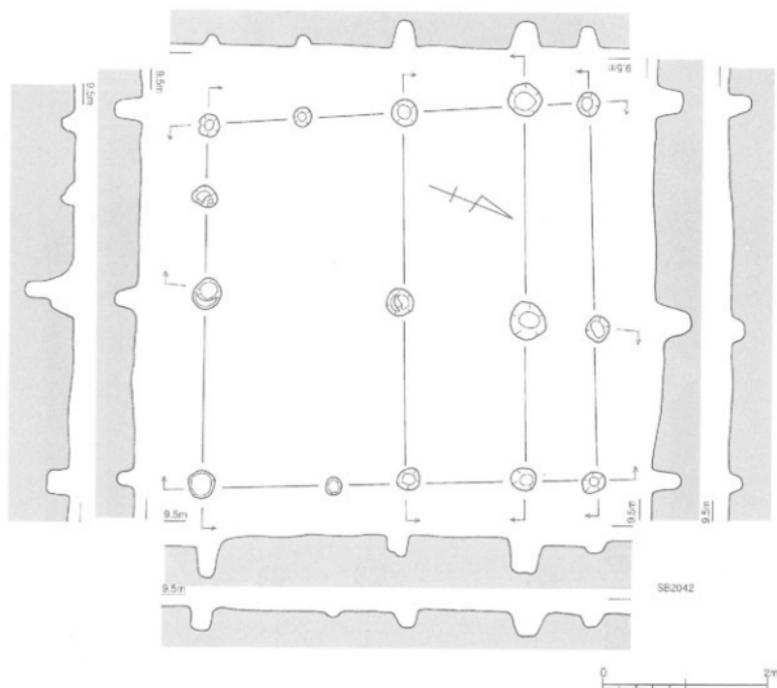
第66図 5 A区の中世建物遺構図1 (1:60)

#### SB2075 (第69図)

A・B31グリッドに位置する。梁間2間(3.7m)×桁行2間(5.8m)の東西に長い建物である。調査区の南端に接しており、調査区外に柱穴が存在する可能性がある。主軸はN-78°-Eである。本遺構はSD2055の区画内に存在するが、主軸が同溝と異なるために方形区画との関連性は不明である。柱穴の平面形は円形で、その直径は30~60cmとややばらつきが見られる。地山面からの深さは10~20cmのものが多く、直径に対して浅いことが特徴的である。本遺構周辺は後世の攪乱が顕著であり、本遺構は本来の遺構面を維持していない可能性が高い。なお、南西隅柱は攪乱により確認できない。柱穴の底面の標高は多くが9.3m前後で一定するが、西側の柱筋は9.6mとやや高い。遺物は4つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。



第67図 5A区の中世建物遺構図2 (1:60)

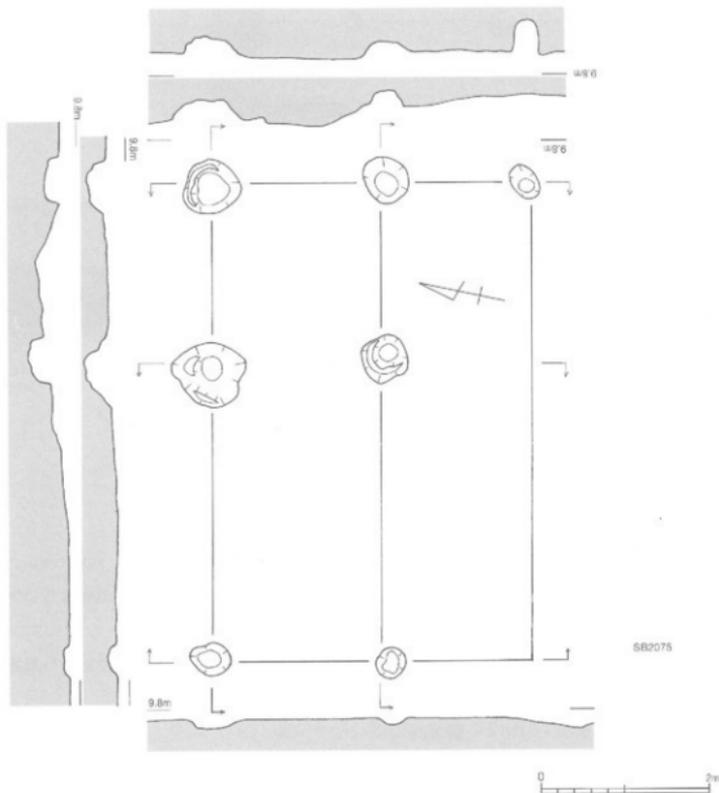


第68図 5A区の中世建物遺構図3 (1:60)

### 柱穴列跡

#### S A 2074 (第70図)

B・C30、C31グリッドに位置する。11の柱穴からなる柵列である。主軸はN-44°-Wである。長さは11.7mで、柱間は北から1.1m、1.4m、1.3m、0.5m、1.3m、1.3m、1.3m、1.25m、1.4m、1.1mである。柱間が短くなる箇所があるため、2つの柵列の可能性もある。柱穴の直径は20~30cmの円形で、深さは10~50cm。柱穴底面の標高は9.1~9.5mである。この柵列はSD2055の方形区画内にわたり、柵列の北側には方形土坑が集中し、南側では多量の土師質土器が集中する。これらの遺構・遺物との関連性は不明であるが、同時期に機能していた可能性が高い。



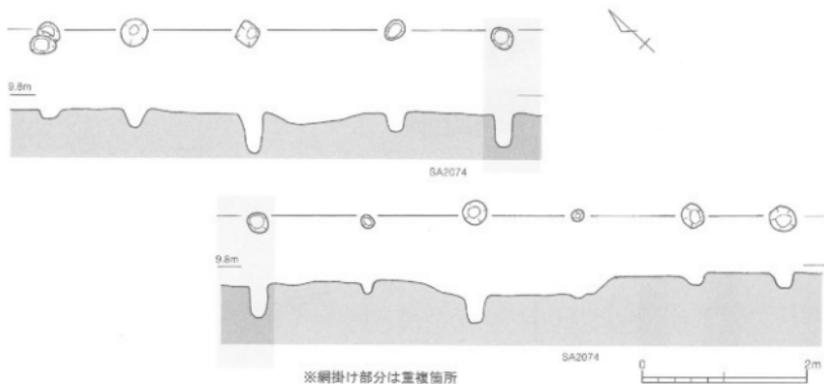
第69図 5A区の中世建物遺構図4 (1:60)

## 土坑

### 土坑SK2018 (第58・71図1・2 図版28-1)

D22グリッドに位置し、SD2008を壊してつくられている。平面形は楕円形で、その中央に円形の掘り込みを持つ。土坑本体の規模は、長径1.5m、短径1.1mを測り、中央の掘り込みは、直径0.8m、地山面からの深さ0.8mである。埋土は2層で、いずれも砂・地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。第2層がやや暗い。

出土遺物は、土師質土器の皿(第71図1)、中世須恵器の鉢(第71図2)がある。1は底部周辺を絞り、内傾しつつ立ち上がる(皿b-2類)。2は内面にハケメを施す。本遺構の時期は、出土遺物等から13世紀代と考えられる。



第70図 5A区の中世柱列図と遺物実測図（遺構1：60）

**土坑SK2021**（第58・71図3 図版28-2）

A23グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、規模は長軸2.8m、短軸1.0m、地山面からの深さ1.1mである。長軸はN-80°-Eである。SD2025・SD2031、短軸はSD2001とほぼ同方向の関係にある。

出土遺物は、備前焼（第71図3）、土師質土器の細片、同心円のタタキ目をもつ須恵器片がある。本遺構の時期は、周辺遺構と同時期の中世に属するものであろう。

**土坑SK2022**（第58・71図4 図版28-3）

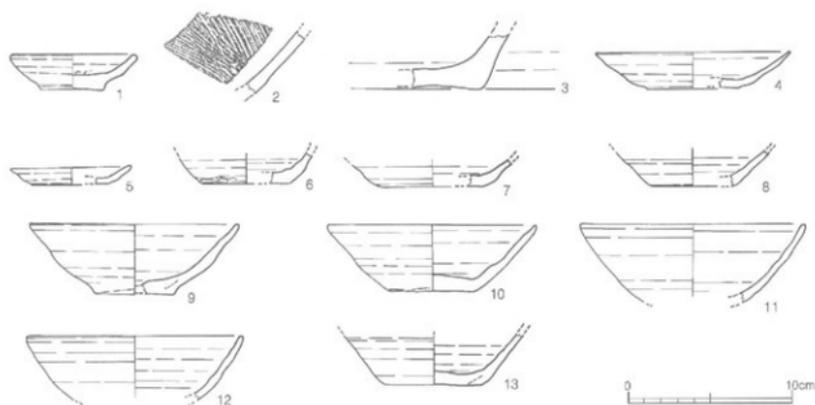
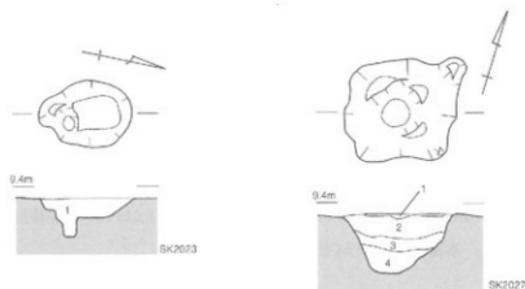
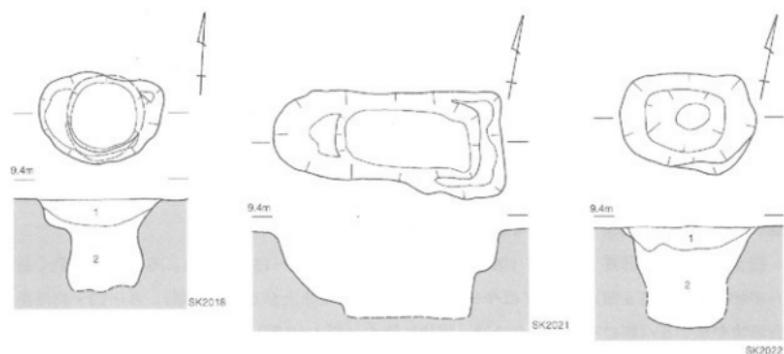
A23グリッドに位置し、SK2021の南東に近接する。SD2001を壊してつくられる。平面形はやや不整な長方形で、規模は長軸1.6m、短軸1.2m、地山面からの深さ1.2mである。長軸はN-79°-Eである。SK2021と同様に、SD2025・SD2031と同方向である。埋土は2層に分かれるが、いずれも黒色粘質土で、第1層は炭化物をわずかに含み、第2層は砂を含む。

出土遺物は、土師質土器の杯（第71図4）、箸状木製品・丸駒状木製品のほか用途不明木製品3点、同心円のタタキ目をもつ須恵器片2点が出土する。本遺構の時期は、中世に属すると思われる。

**土坑SK2023**（第58・71図）

B23グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.8m、地山面からの深さ0.4mで、南寄りに直径0.1m、深さ0.4mの円形の掘り込みを持つ。埋土は砂・炭化物・地山ブロックをわずかに含む黒色粘質土が堆積する。

遺物として土師質土器の細片が出土する。本遺構の時期は不明である。



第71図 5A区の中世土坑図と遺物実測図1 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)

#### 土坑SK2027 (第58・71図5～13)

B24グリッドに位置する。SD2031に北側上端を壊される。平面形は不整な隅丸方形で、規模は長軸1.3m、短軸1.2m、地山面からの深さ0.7mである。長軸はN-16°-Wである。西1.6mの土壌（遺構番号なし）、西4mのSK2033、西6mのSK2038と、長軸・短軸ともにほぼ同方向である。埋土は4層で、第1層に砂を含み粘性の弱い黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックや炭化物を含む黒褐色粘質土、第3層に砂を少し含む黒色粘質土、第4層に砂を含み粘性の強い黒色粘質土が堆積する。第4層からは遺物を確認しない。

出土遺物は、土師質土器の皿（第71図5）と杯（第71図6～13）がある。5は器高が低く逆ハ字状に開く（皿d類）。6・7はやや急に丸みをもち立ち上がる（杯C類）。8・10・13は逆台形状を呈する（杯C-2類）。9は逆ハ字状に開く（杯A-3類）。11・12は丸みをもち立ち上がる（杯A・B類）木遺構の時期は、13～14世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2028 (第58・72図1)

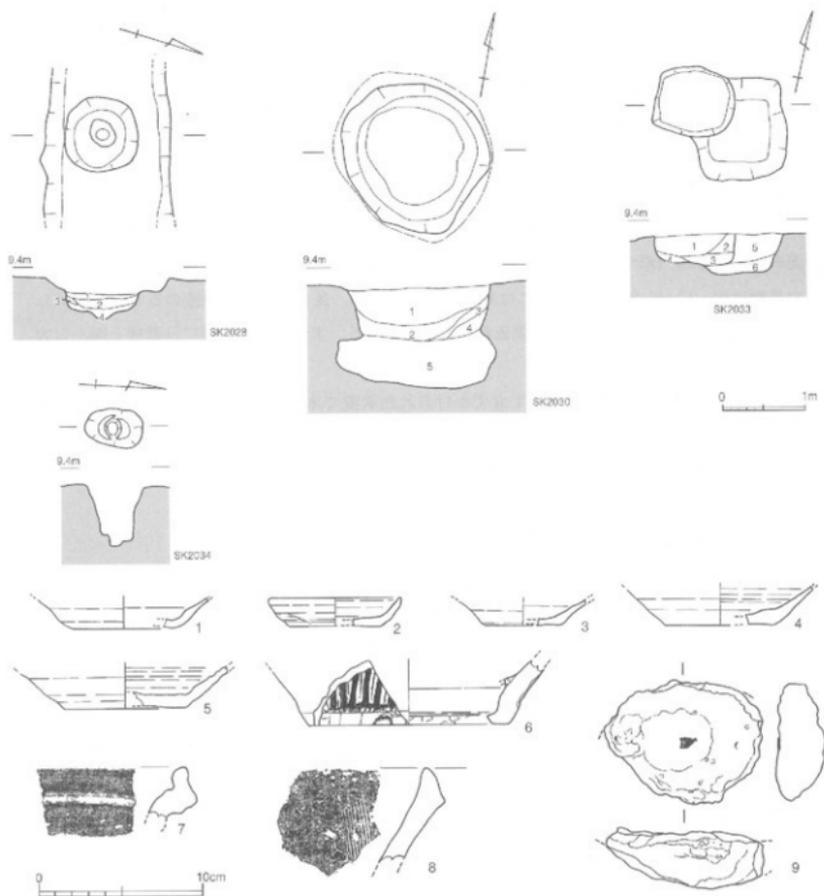
B24グリッドに位置する。SD2031により遺構上部は壊される。平面は円形で、規模は直径0.9m、地山面からの深さ0.4mである。また、底面中央で直径0.3mの円形に0.2m深く掘り込む。埋土は4層で、いずれも黒色粘質土が堆積する。第1層のみが地山ブロックを多く含み、第2層は粘性が強く、第3層は炭化物を多く含み、第4層は第3層より明るい。

出土遺物は、土師質土器の杯（第72図1）と古墳時代の須恵器片がある。1は内面の体部と底部の境に窪みをもつ（杯C・D類）。本遺構は13～14世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2030 (第58・72図2～9)

B24グリッドに位置する。SD2025に北側上端、SD2031に南側上端を壊される。平面はほぼ円形で、規模は直径1.8mで、地山面からの深さ1.2mである。埋土は5層で、第1層・第2層に黒色粘質土が堆積し、第1層は地山ブロックを少し含む。第3層に砂を多く含む黒褐色粘質土、第4層・第5層に黒色粘質土が堆積する。第5層は有機物を含む。

出土遺物は、土師質土器の皿（第72図2）と杯（第72図3～5）、龍泉窯系青磁の酒会壺（第72図6）、壺器系の甕（第72図7）、備前焼系の櫛鉢（第72図8）、碗形鉄滓（第72図9）、また、図化していないものとして、備前焼の片口片、国内陶器片、須恵器片、曲物の側板2点、用途不明木製品4点、竹筒片等が出土する。2は直線的に立ち上がる（皿c類）。3は逆ハ字状に立ち上がる（杯E類）。4・5は逆ハ字状に立ち上がり、内面の体部と底部の境を明瞭に囲ませる（杯D類）。6は島根県内初例で、越後守護所に比定される新潟県伝至徳寺跡（15世紀後半廃絶）出土の壺と形態が類似する。7は常滑編年5～6a型式（13世紀第2四半期～第3四半期）。8は間懸編年IV A期（14世紀後半～15世紀前半）。本遺構の時期は、14～15世紀代と考えられる。



第72図 5A区の中世土坑図と遺物実測図2（遺構1：60 土器1：3）

#### 土坑SK2033（第58・72図）

A24グリッドに位置する。SD2001を壊してつくられる。2つの方形の遺構が重複する。規模は、先行する遺構が長軸1.2m、短軸1.1m、地山面からの深さ0.5m、新しい遺構が一辺0.9m、地山面からの深さ0.4mである。先行遺構の長軸はN-13°-Wである。SK2027・SK2038等とほぼ同方向である。底面は2段となり、遺構中央で一段深く20cmを測る。

出土遺物には、少量の土師質土器の細片がある。本遺構の年代は、不明である。

#### 土坑SK2034 (第58・72図)

A24グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.7m、短径0.5m、地山面からの深さ0.8mである。底面に長径15cm、短径10cm、深さ15cmの楕円形の掘り込みをする。出土遺物には、少量の土師質土器の細片がある。本遺構の年代は不明である。

#### 土坑SK2035 (第58・73図1・第105図 図版28-5)

C24グリッドに位置する。SD2025と北側で接し、SD2031により上部南半を壊される。平面形は不整な楕円形で、規模は長径2.4m、短径1.3m、地山面からの深さ1.0mである。遺構の長軸はW-2°-Nである。底面には若干の凹凸があり、長さ10~40cm程度の石9個を確認した。埋土は2層で、粘性の異なる黒色粘質土が堆積する。また、遺構南端には遺構上部から大きな地山ブロックが入る。

出土遺物は、遺構中央に北面して立てかけられた状態で木簡(第73図1・第105図)が認められた。その詳細は後章に述べる。また、木簡と付随して竹筒片が出土する。このほかに、少量の土師質土器の細片が出土する。本遺構の年代はその内容から14世紀後半~15世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2036 (第58・73図2・3 図版28-4)

C24グリッドに位置する。SD2017・SD2019を壊してつくられる。平面形は不整な楕円形で、規模は長径2.2m、短径1.3mである。遺構の中央で長径1.8m、短径1.0mの楕円形に掘り込む。最大深さは1.0mを測る。遺構の長軸はW-0°-Nである。

出土遺物には、土師質土器の杯(第73図2)と摩擦痕のある石(第73図3)がある。また、図化していないが、内面を赤色、外面を黒色に塗る漆椀の小片2点、曲物の側板2点、用途不明木製品4点が出土する。2は逆台形状に立ち上がる(杯C-2類)。本遺構は14~15世紀代と考えられる。

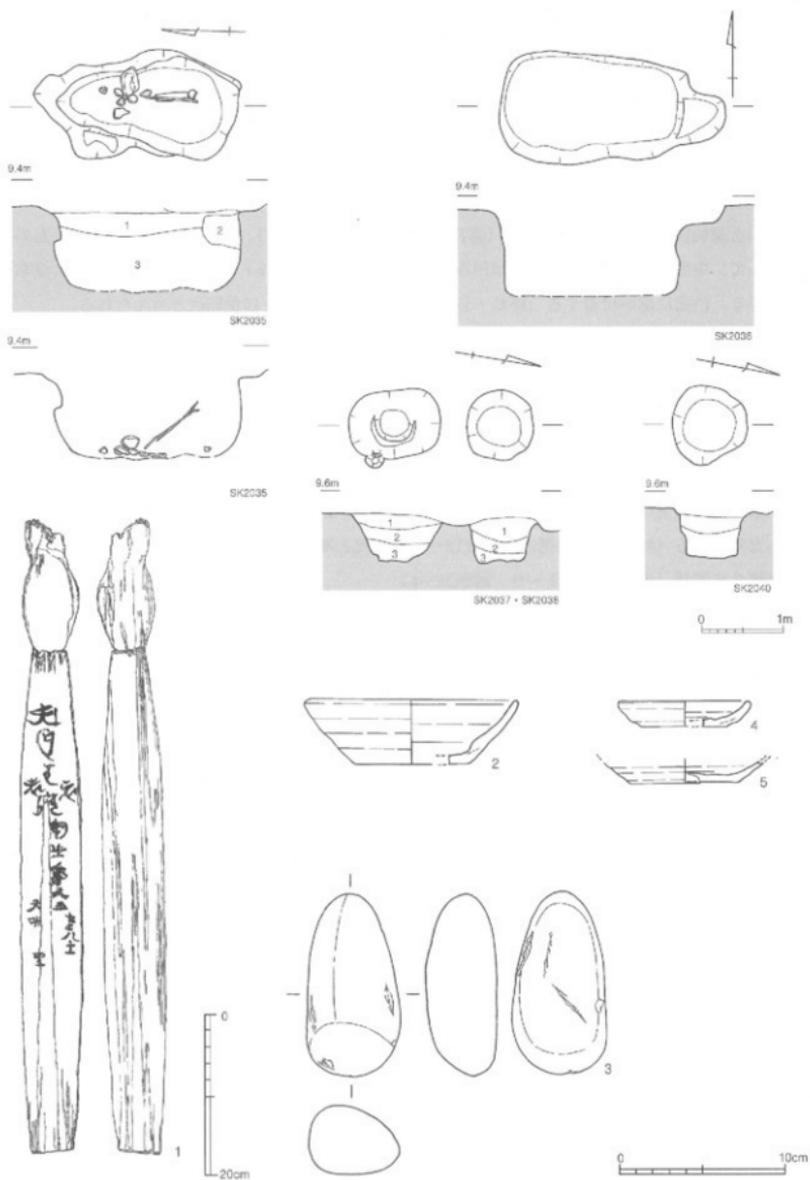
#### 土坑SK2037 (第58・73図)

A24グリッドに位置する。SK2038と南側で、SD2031と北側で近接する。平面形は楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.8m、地山面からの深さ0.6mである。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土である。第1層・第2層に地山ブロックを含み、第3層には含まない。第2層の遺構中央に長さ30cm程度の石を確認する。

出土遺物には、土師質土器の細片と須恵器片がある。遺構の年代は不明である。

#### 土坑SK2038 (第58・73図)

A25グリッドに位置する。SK2037と北側で近接し、本遺構とSK2037との中心軸はN-11°-Wである。両遺構の中心軸はSD2001とほぼ平行する。平面形は隅丸方形で、規模は一辺0.8m、地山面からの深さ0.5mである。底面に10~30cm程度の石が詰められた状態で確認された。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土が堆積する。第1層・第2層に地山ブロックを含み、第3層には含まない。



第73図 5A区の中世土坑と遺物実測図3 (遺構1:60 土器1:3 木簡1:6)

出土遺物には、土師質土器の細片がある。遺構の年代は不明であるが、SK2037ともSD2001と同時期と考えられる。

#### 土坑SK2040 (第58・73図4・5)

A25グリッドに位置する。SD2017を壊してつくられる。平面形は不整な円形で、規模は直径0.9m、地山面からの深さ0.5mである。底面に長さ10~20cm程度の石6個を確認した。埋土は2層である。本遺構の主軸はN-11°-Wである。

出土遺物には、土師質土器の皿(第73図4)と杯(第73図5)。また、図化していないものとして、中世須恵器片がある。4は円みをもち立ち上がる(皿b-1類)。5は逆八字状に立ち上がり、内面に煤が付着する(杯C・D類)。遺構の年代は14~15世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2044 (第58・74図1・2)

D25グリッドに位置する。SK2045と近接する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.5m、短径1.3mである。遺構中央に長径0.7m、短径0.6mの楕円形の掘り込みをする。地山面からの最大深は1.1mを測る。

出土遺物には、土師質土器の皿(第74図1)と杯(第74図2)、また、図化していないものとして、備前焼の小片や瓦質の鉢片がある。1は円みをもつ(皿b類)。2は体部が円みをもち立ち上がる(杯B類)。遺構の年代は13~14世紀代と考えられる。

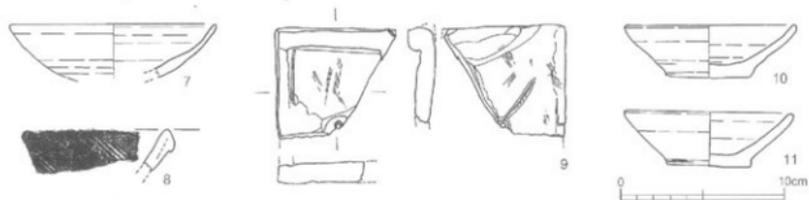
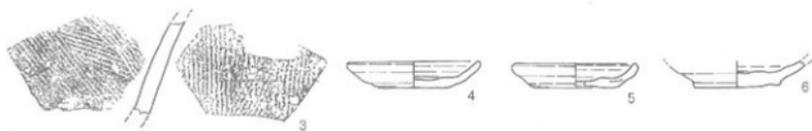
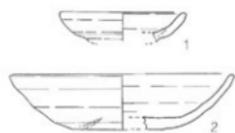
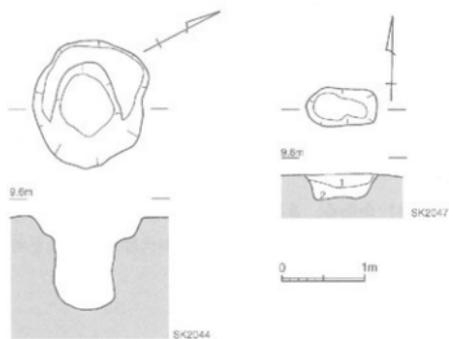
#### 土坑SK2045 (第58・74図3~9 図版29-4)

D25グリッドに位置する。SE2044と近接する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径3.6m、短径2.5mである。深さ20cmの浅い掘り方の中央に直径2.4mの円形の掘り込みをもつ。掘り込みの最大深は、遺構上端より1.4mを測る。埋土は8層で、第1層は黒褐色粘質土、第2層は黒色粘質土、第3層は黄灰色砂質土、第4層は地山ブロックを少し含む黒色粘質土、第5層は黄灰色砂質土、第6層は第3層と似る黄灰色砂質土、第7層は地山ブロックを少し含む黒色粘質土、第8層は黒色粘質土を含む灰黄褐色砂質土である。埋土の堆積状況から井戸の機能を推定でき、第3層~第5層は井戸枠の裏込め土と考えられる。また、出土遺物は第1層・第2層・第8層で確認され、順次埋没したことが窺える。

出土遺物は、土師質の埴鉢(第74図3)、土師質土器の皿(第74図4・5)・杯(第74図6・7)、瓦質土器の鉢(第74図8)、石製の碗(第74図9)である。図化していないものとして、内外面とも黒塗りの漆碗の破片が5点あり、その1つは外面に赤色で描画する。また、国内陶器片2点、中世須恵器片、土師質土器の細片及び鍋の口縁部片がある。4は丸みをもち逆八字状に開く(皿b-3類)。5は口縁部が内傾気味となる(皿b-1類)。6は底部周辺をやや絞り、緩やかに立ち上がる。(杯A類)。7は丸みをもち立ち上がる(杯A・B類)。6・7ともに内面に煤付着が認められ、内面・外面に被熱による変色がある。8は口縁が玉縁状となる。遺構の年代は4が底面から出土することから、13~14世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2047 (第58・74図10・11 図版29-1)

C26グリッドに位置する。SD2019を壊してつくられる。平面形は不整な隅丸長方形で、規



第74図 5A区の中世土坑図と遺物実測図4 (遺構1:60 土器1:3)

横は長軸0.9m、短軸0.5m、地山面からの深さ0.3mである。埋土は2層で、いずれも地山ブロック・炭化物を少し含む黒褐色粘質土であるが、第2層はやや粘性が強い。

出土遺物は、土師質土器の杯（第74図10・11）である。10・11ともに、小ぶりの杯で、逆八字状に立ち上がる（杯E-1類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2050（第58・75図1・2）

A27グリッドに位置する。SD2019を壊してつくられる。平面形は不整な楕円形で、深さ20cmの浅い掘り方の中央に直径80cmの円形の掘り込みをする。規模は長径1.2m、短径1.0m、地山面からの最大深1.0mである。埋土は4層で、第1層は砂を多く含む黒褐色粘質土、第2層は砂を含まない黒褐色粘質土、第3層は地山ブロックや炭化物を少し含む粘性の強い黒褐色粘質土、第4層は砂などの不純物が混入する黒褐色粘質土である。埋土の堆積状況から、埋没後に再び掘り込みがなされたと推定される。

出土遺物は、中国白磁・四耳壺の口縁（第75図1）、須恵器の高杯（第75図2）である。また、図化していないものとして、国内陶器片がある。1は丸く折り曲げる口縁。

#### 土坑SK2056（第58・75図3・4）

A29グリッドに位置する。SD2055に近接する。平面形は不整な楕円形で、遺構中央に直径20cmの浅い凹みがある。規模は長径1.4m、短径0.6m、地山面からの最大深0.4mである。埋土は2層で、第1層は黒褐色粘質土、第2層は黒色粘質土である。第1層・第2層ともに、地山ブロックを少し含む。

出土遺物は、土師質土器の杯（第75図3・4）がある。3は緩やかに逆八字状に立ち上がる（杯E類）。4は底部周辺を絞り、内面に煤が付着する（杯F類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2057（第58・75図5・6 図版29-3）

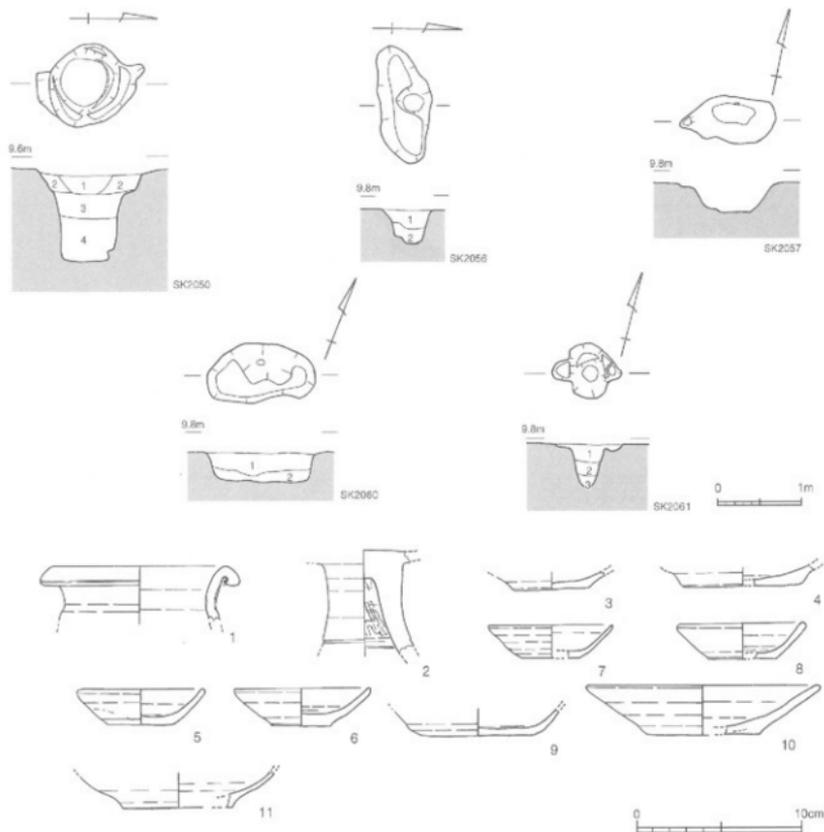
A29グリッドに位置する。SD2055に近接する。平面形は不整な楕円形である。規模は長径1.1m、短径0.6m、地山面からの深さ0.4mである。

出土遺物は、土師質土器の皿（第75図5・6）がある。5・6ともに内面の底部と体部の境が不明瞭（皿e-2類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2060（第58・75図7～10）

A29グリッドに位置する。SD2055を壊してつくられる。平面形は不整な楕円形で、遺構北半にやや浅い落ち込みがある。規模は長径1.3m、短径0.7m、地山面からの深さ0.3mである。埋土は2層で、第1層は地山ブロック・炭を含む黒褐色粘質土、第2層は地山ブロックを少し含む黒色粘質土である。

出土遺物は、土師質土器の皿（第75図7・8）、杯（第75図9・10）がある。7・8は逆八字状に立ち上がる（皿e類）。7は器壁が特に薄い。9は円みをもち立ち上がる（杯B類）。10は緩やかに直線状に立ち上がり、内面に煤が付着する（杯F類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

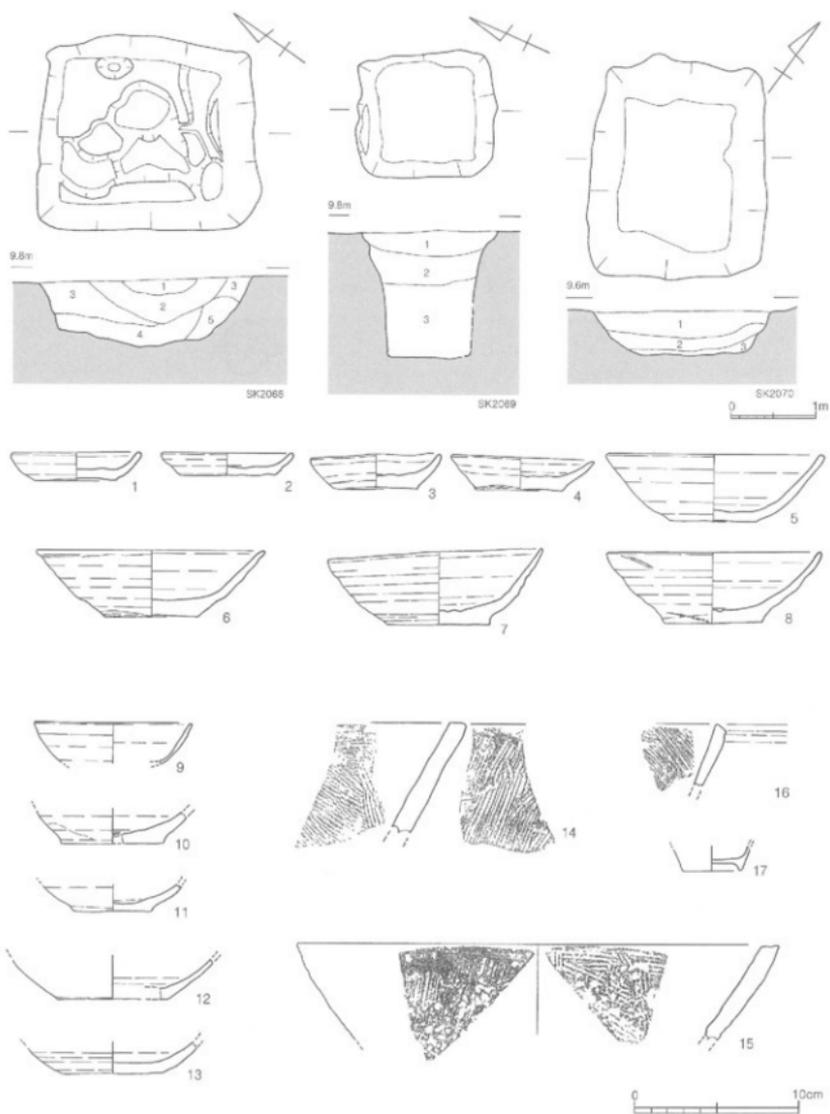


第75図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図5 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)

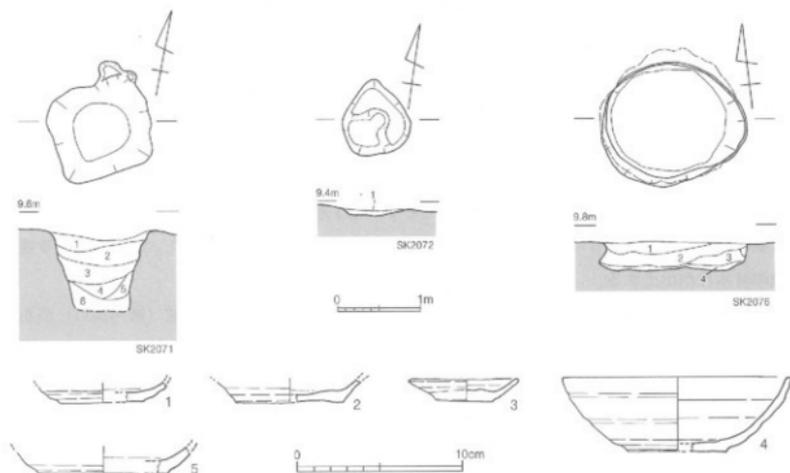
#### 土坑SK2061 (第58・75図11)

B28グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、遺構中央に直径50cmの円形に掘り込みをもつ。規模は長径0.8m、短径0.7m、地山面からの最大深0.5mである。埋土は3層で、3層ともに黒色粘質土である。第1層・第2層ともに地山ブロックを含むが、第2層は粘性がやや強い。第3層は地山ブロックを含まない。

出土遺物は土師質土器の杯(第75図11)がある。11は丸みをもちつつ立ち上がり、内面には墨の付着が認められる(杯F類)。遺構の年代は15世紀代と考えられる。



第76図 5A区の中世土坑図と遺物実測図6 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)



第77図 5A区の中世土坑図と遺物実測図7 (遺構1:60 遺物1:3)

#### 土坑SK2066 (第76図1~8)

A30・31グリッドに位置する。平面形はやや不整な方形で、規模は一辺2.4m、地山面からの深さ0.8mである。遺構の主軸はN-35°-Wである。SD2001とほぼ平行である。埋土は5層で、いずれも黒色粘質土である。第1層は粘性が少なく地山ブロックを含み、第2層は地山ブロックをわずかに含む。第3層は地山ブロックを含むが、第2層よりやや明るく粘性も少ない。第4層は粘性が少なく地山ブロックを多く含む。第5層は粘性が少なく地山ブロックを非常に多く含む。埋土には地山ブロックが多く含まれることから、人為的に埋められた可能性がある。その堆積状況から少なくとも2回以上の掘り返しが想定される。

出土遺物は、土師質土器の皿(第76図1~4)と杯(第76図5~8)である。すべてが最下層から出土し、すべてに被熱痕が見られる。1~4は内傾気味に立ち上がる(皿c類)。2は底面外縁に回転ナデ調整が見える。4は底部の器壁が厚い。5は丸みをもち立ち上がり、6~8は底部周辺を絞る(杯A-3類)。遺構の年代は13~14世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2069 (第76図9 図版30-4)

C30グリッドに位置する。平面形はやや不整な方形で、規模は一辺1.6m、深さは1.5mである。遺構の主軸はW-25°-Nである。SD2001・SD2046と同方向である。埋土は3層で、第1層は地山ブロックを少し含む黒褐色粘質土、第2層・第3層ともに地山ブロックを多く含む黒色粘質土である。第2層が第3層よりやや粘質性が強い。また、遺構西半の第3層上面に多

数の石が集中する。これらの石は遺構廃棄時に埋め土とともに投棄されたと考えられる。

出土遺物は、山茶碗（第76図9）がある。口縁部に薄く軸がかかる。周辺の遺構の時期から、13世紀代のものと考えられる。図化しないものとして、土師質土器の細片、鉄滓などがある。

#### 土坑SK2070（第76図10～17 図版30-2）

D30グリッドに位置する。SD2055に壊される。平面形は長方形で、規模は長軸2.6m、短軸2.0m、地山面からの深さ0.5mである。本遺構の主軸はN-35°-Wである。SD2001と平行する。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土である。第1層は炭・地山ブロックを少し含み、第2層は粘性が強く炭を含み、第3層は粘性が強く砂の混入が見られる。また、遺構底面より複数の材木片が出土する。

出土遺物は、土師質土器の杯（第76図10～13）・鉢（第76図14～16）・白磁（第76図17）がある。10・11は底部を絞り、丸みをもち立ち上がる（杯A類）。11には内面に煤が付着する。12は逆八字状に立ち上がる（杯B・C類）。13は丸みをもちつつ立ち上がり（杯B類）、内面・外面ともに煤が付着する。14～16は内外面にハケ目。17は高台畳付の軸を削る。一乗谷朝倉氏遺跡に類似がある。高台の形状から近世肥前系陶器の可能性もある。遺構の年代は、13～14世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2071（第77図1・2 図版30-1）

C・D30グリッドに位置する。平面形は方形で、規模は一辺1.1m、地山面からの深さ0.8mである。本遺構の主軸はN-28°-Wである。SD2001と同方向である。埋土は6層で、第1層は地山ブロックを多く含む黒色粘質土、第2層は地山ブロック・炭をわずかに含む黒色粘質土、第3層は粘性の強い黒色粘質土で、第3層下層には植物遺体が堆積する。第4層は粘性の強い黒色粘質土、第5層は地山・砂粒を非常に多く含む灰黄褐色粘質土、第6層は粘性の強い黒色粘質土である。

出土遺物は、土師質土器の皿（第77図1）・杯（第77図2）、瓦質土器片が出土する。1は丸みをもち立ち上がる（皿b類）。ロクロ成型痕が明瞭。2は内面で体部と底部の境に凹みがあり（杯D類）、内外面に被熱痕が明瞭にある。遺構の年代は、14～15世紀代と考えられる。

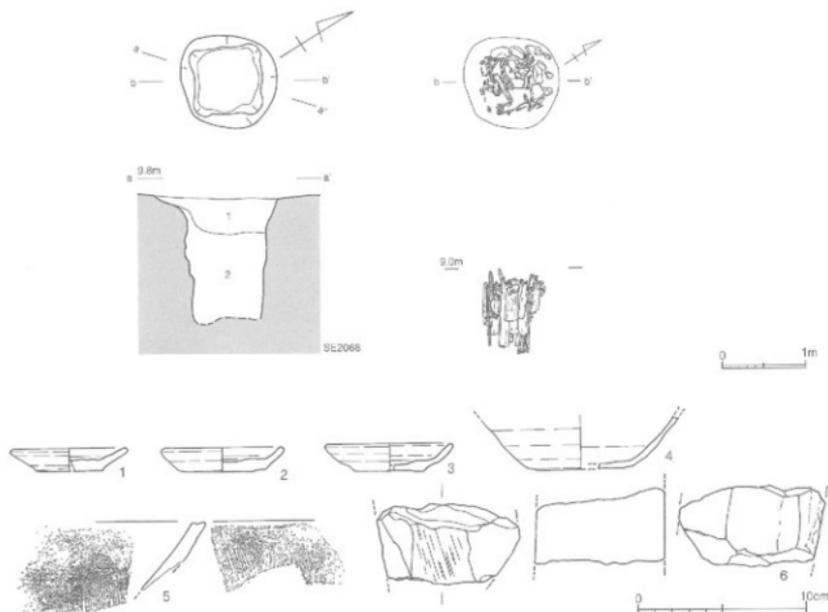
#### 土坑SK2072（第58・77図3・4）

C30グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径0.9m、短径0.8m、地山面からの深さ0.06mである。埋土は1層で、地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物は、土師質土器の皿（第77図3）と杯（第77図4）がある。3は底部から逆八字状に立ち上がる（皿a類）。4は内湾しつつ立ち上がり、ロクロ成型痕が明瞭（杯A-1類）。遺構の年代は13～14世紀代と考えられる。

#### 土坑SK2076（第77図5 図版29-6）

B・C30グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、規模は直径1.6m、深さは0.3mである。埋土は4層で、第1層は地山ブロック・炭を少し含む黒褐色粘質土、第2層は炭を含む黒色粘質土、第3層は炭をわずかに含む第2層より粘性の強い黒色粘質土、第4層は第3層より



第78図 5A区の中世井戸実測図と遺物実測図（遺構1：60 土器1：3）

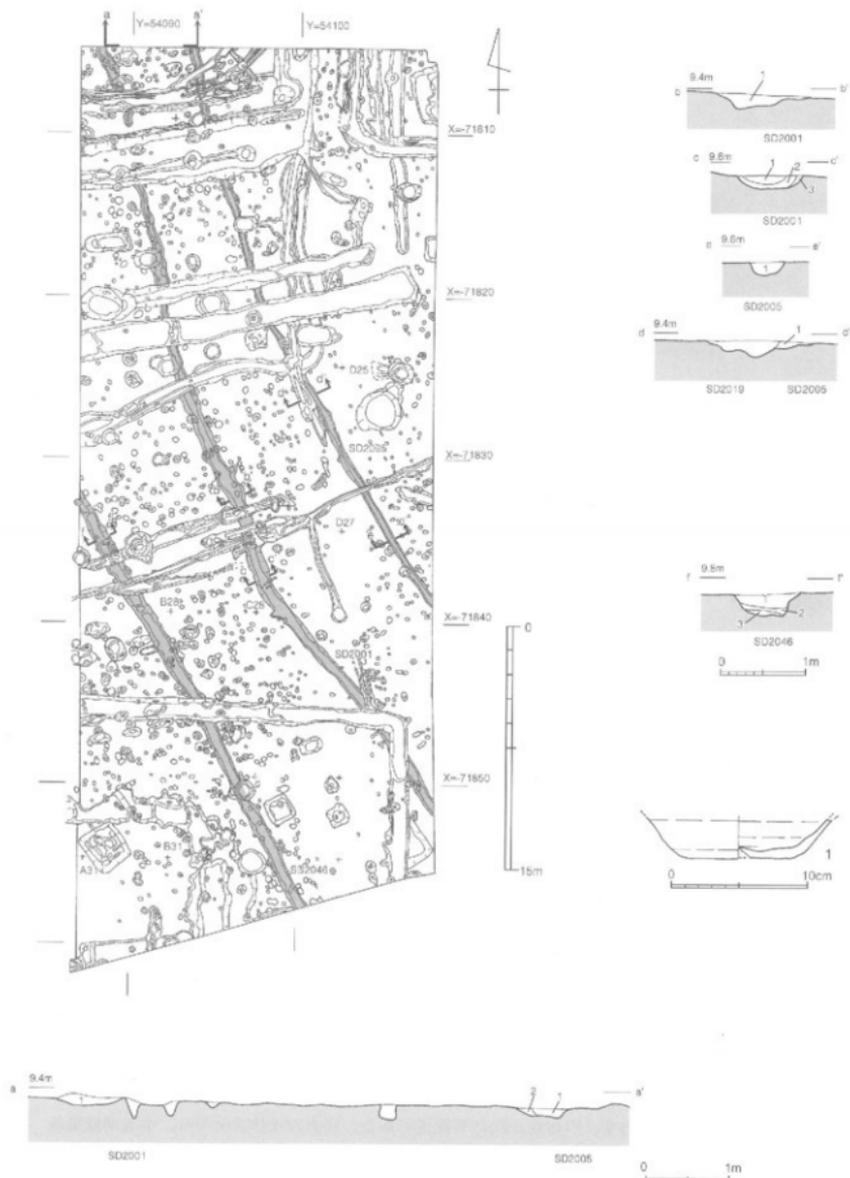
やや暗い黒色粘質土である。

出土遺物は、土師質土器の杯（第77図5）がある。また図化していないものとして、龍泉窯系青磁片、須恵器杯蓋の口縁が出土する。5は底部周辺をやや絞り、内傾しつつ立ち上がる（杯A類）。遺構の年代は13～14世紀代と考えられる。

## 井戸

### 井戸 SE2068（第58・78図 図版30-5）

B30グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径1.1mである。遺構中央で80cm四方の方形の掘り込みを持ち、地山面からの最大深は1.6mを測る。方形の掘り込みに合わせて、井側が北半を中心に残存し、北側に北西隅の隅柱、縦板10点、横板1点、南側に南西隅の隅柱、縦板5点を確認できる。北側の隅柱は幅5cmの角材で長さは65cm。南側の隅柱は幅4cmの角材で長さは57cm、中央部分に釘が残存する。縦板は57cm～99cmのものがある。東西の井側はほとんど原位置を保っておらず、引き抜かれた可能性がある。井側の残存状況から、本遺構は縦板隅柱横板型の井戸に相当すると考えられる。また、方形の掘り方に合わせ、遺構上面に長さ10～20cm程度の複数の石が配される。井戸廃棄時の祭祀行為は確認できない。埋土は2層で、い



第79図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図1 (遺構 1 : 300 断面 1 : 60 土器 1 : 3)

ずれも黒色粘質土であるが、第1層は粘性が弱く地山ブロックをわずかに含み、第2層は粘性が強い。井戸廃棄後はごみ捨て穴として利用された可能性が考えられ、出土遺物の多くは第1層から出土する。

出土遺物は、土師質土器の皿（第78図1～3）と杯（第78図4）と鉢（第78図5）、砥石（第78図6）がある。1は逆八字状に立ち上がり（皿d類）、2は内傾しつつ立ち上がる（皿c類）。3は底部周辺を絞り、内傾しつつ立ち上がる（皿b-2類）。2・3には煤の付着が見られる。4は特に器壁が薄く丸みもち立ち上がる（杯B類）。底部外縁に回転ナデ調整が見られる。5は内・外面にカキ目調整がある。6は被熱痕が見られる。遺構の年代は、2・4が井側内からの出土であることから、13～14世紀代と考えられる。

## 溝

5A区において、多くの溝状遺構が確認された。ここでは、遺構番号に拘らず、溝の方向性及び規格性から分類して報告する。

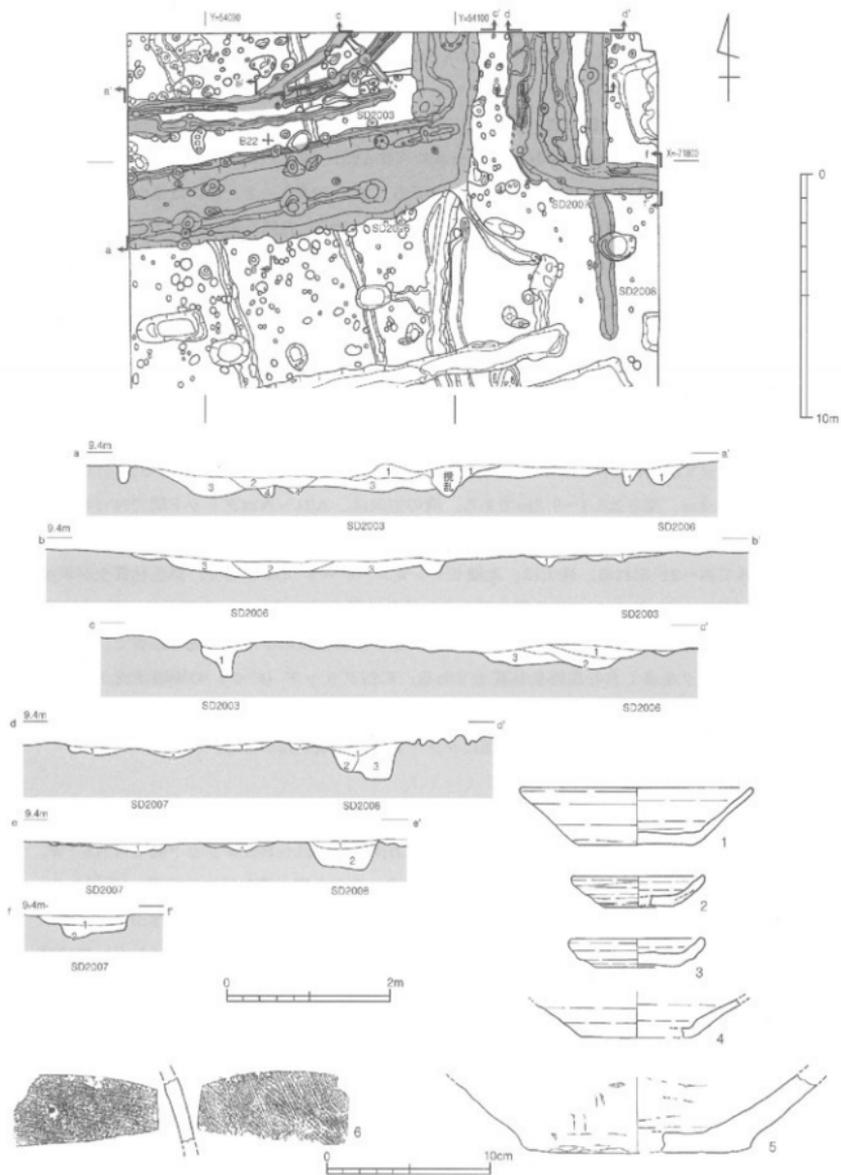
### 溝SD2001（第58・79図 図版33-3）

A21グリッドからE30グリッドまで、調査区を南北に走る溝である。確認できる長さは51m、幅は0.5～0.9m、深さは0.1～0.2mである。溝の方向は、A21～A24グリッド間でN-14°-W、B25～B27グリッド間でN-22°-W、C27～E30グリッド間でN-35°-Wとなり、北から南へ進むにつれて西へ21°振れる。埋土は、北壁セクション（a-a'）では1層で、黒色粘質土が堆積し、B27グリッド（b-b'）でも1層の砂を含む黒色粘質土が堆積する。C27グリッド（c-c'）では3層で、第1層は粘性の少ない黒色粘質土、第2層は粘性の少ない黒褐色粘質土、第3層は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質土である。C27グリッド（c-c'）の堆積状況から、少なくとも1回の部分的な掘り返しを推測することができる。

出土遺物は、土師質土器の細片や内面にタタキ目をもつ須恵器がある。

### 溝SD2005（第58・79図 図版33-3）

B21グリッドからE27グリッドまで、調査区を南北に走る溝である。確認できる長さは37m、幅は0.4～0.6m、深さは0.1～0.2mである。溝の方向は、B21～B23グリッド間でN-15°-W、C24グリッドからE27グリッド間でN-30°-Wとなり、北から南へ進むにつれて西へ15°振れる。埋土は、北壁セクション（a-a'）では2層で、第1層は黒色粘質土、第2層は地山ブロック・砂を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。C25グリッド（e-e'）・D26グリッド（d-d'）では同様な1層の粘質性のある黒色粘質土が堆積する。北壁セクション（a-a'）の堆積状況から、少なくとも1回の部分的な掘り返しを推測することができる。



第80図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図2 (遺構 1 : 200 断面 1 : 60 土器 1 : 3)

出土遺物は、A22グリッドより土師質土器の杯（第79図1）がある。1は底部から丸みをもって立ち上がる（杯C-1類）。

SD2001とSD2005との心々間は約5～7mで、ほぼ平行に調査区の南北を走る。したがって、両遺構が道路の側溝として機能した可能性がある。また、5A区内の殆どの遺構に先行し、本遺構の方位を意識したと考えられる溝や土坑・建物が多数存在することから、調査区周辺の地割に影響を与えるものであったと考えられる。遺構の年代は、本遺構のほか主軸を同じくする遺構の多くが13～14世紀代の遺物が出ることから、同時期に考えられる。

#### 溝SD2046（第58・79図 図版34-4）

A26グリッドからC31グリッドまで、調査区の南北を直線的に走る溝である。確認できる長さは28m、幅は1.0m、深さは0.1～0.3mである。溝の方向はN-28°-Wであり、SD2005と北側で同方向になる。埋土は、A26グリッド（f-f'）では3層で、第1層は黒褐色粘質土、第2層は黒色粘質土、第3層は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質土が堆積する。出土遺物は、土師質土器の細片が多くある。

本遺構も5A区内の殆どの遺構に先行し、SD2001・SD2005に関連して形成されたものと考えられる。

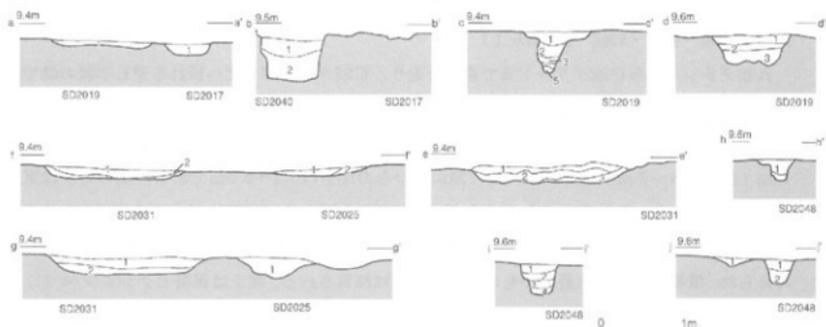
#### 溝SD2003（第58・80図）

A21グリッドからB21グリッドで、調査区の東西を走る南北2条の溝である。本報告においては、同時期に形成された溝として一括して扱う。確認できる長さは約11m、幅は0.2m～0.4m、深さは0.1～0.6mである。溝の方向はA21グリッドでは2条ともにN-86°-Eである。B21グリッドでは、南側の溝が直線的に延びるのに対して、北側の溝は円弧条に北へ2条に分流して延びる。埋土は西壁セクション（a-a'）では、南側の溝に地山ブロックを含む黒粘質土、北側の溝に砂を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。また、北側セクション（c-c'）では、北側の溝に黒色粘質土が堆積する。

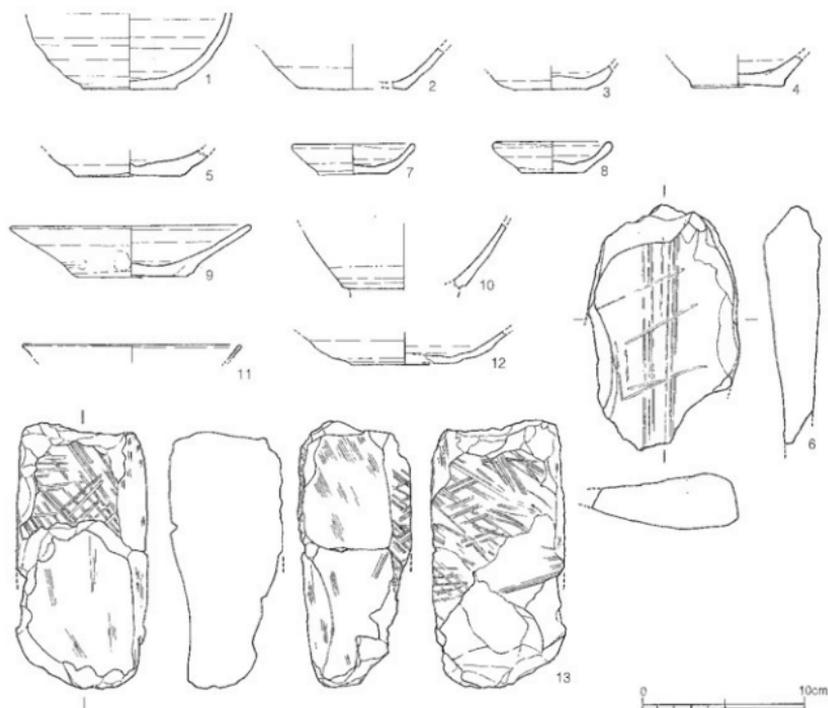
出土遺物は、土師質土器の杯（第80図1）が出土する。1は逆八字状に立ち上がり、内面の底部と体部の境が凹む（杯D類）。

#### 溝SD2006（第58・80図 図版33-1）

A22グリッドからC22グリッドまで東西を走り、C22グリッドで北へ折れる逆L字状の溝である。また、A22グリッドからC22グリッドの間で、遺構の北辺に沿って浅い溝が掘られる。本報告では、これらを同時期に形成された溝として一括して扱う。確認できる長さは東西12～13m・南北4.5～7m、幅2.5～4.8m、地山面からの深さは0.2～0.6mである。溝の方位は東西がN-79°-Eで、南北がN-3°-Eである。特にSD2001・SD2005に対してはほぼ直交することから南北方向は正方位を、東西方向は両溝を意識した可能性がある。方形の区画溝の一角と考えられ、溝幅が調査区内最大のものであることは注目される。埋土は西壁セクション（a-a'）では4層で、第1層はややソフトな黒褐色粘質土、第2層は粘性の強い黒色粘質土、第3層は粘性の弱い黒色粘質土、第4層は地山ブロックを含む粘性の強い黒色粘質土が堆積する。B21-



第81図 5 A区の中世溝状遺構と遺物実測図3 (遺構 1 : 200 断面 1 : 60)



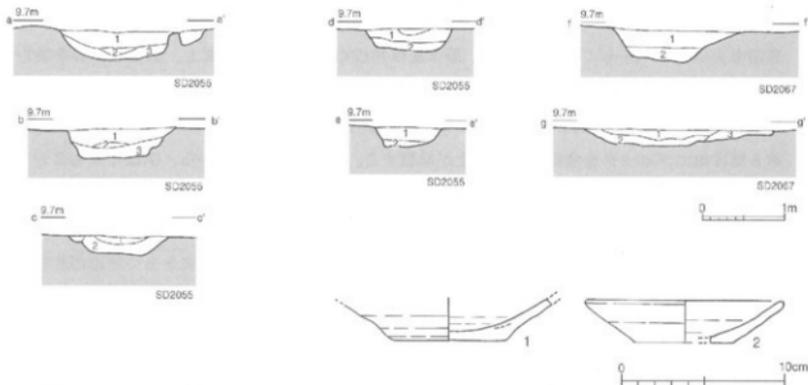
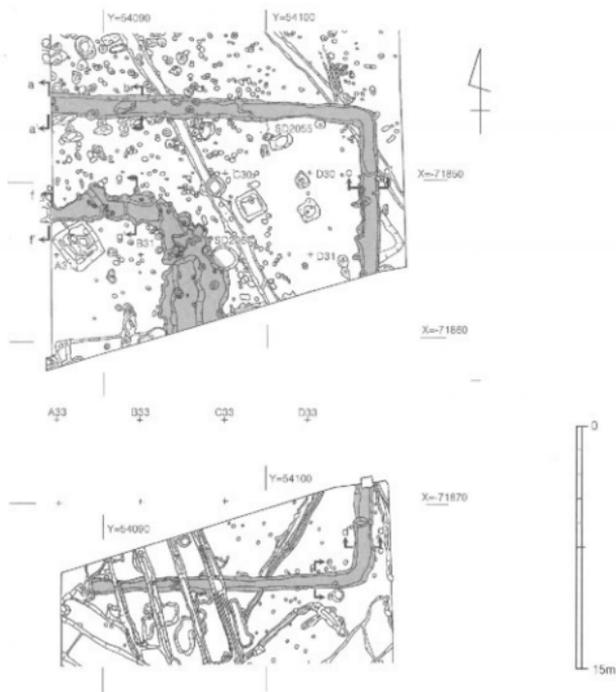
第82図 5A区の中世溝状遺構出土遺物実測図(1:3)

B23セクション(b-b')では3層で、第1層は粘性の強い黒褐色粘質土、第2層は砂を含む粘性の強い黒色粘質土、第3層は砂を含む第2層よりやや暗い黒色粘質土である。北壁セクション(c-c')では3層で、第1層は粘性の弱い黒色粘質土、第2層は粘性の弱い黒褐色粘質土、第3層は地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。埋土の堆積状況から、少なくとも2~3回の掘り返しを確認することができ、長期間維持された可能性がある。

出土遺物は、土師質土器の皿(第80図2・3)・杯(第80図4)、瓷器系陶器の甕(第80図5)がある。また、図化していないものとして、土師質土器の鉢2点、波状文をもつ須恵器片などがある。2は逆ハ字状に丸みをもちつつ立ち上がる(皿b-3類)。3はやや内傾気味に立ち上がる(皿b-1類)。4は直線的に立ち上がり、内面で底部と体部の境が凹む(杯D類)。

#### 溝SD2007(第58・80図 図版32-2)

D21グリッド西半からD22グリッドへL字状に走る溝である。南北方向では3条の溝に分か



第83図 5 A区の中世溝状遺構と遺物実測図4 (遺構 1 : 300 断面 1 : 60 土器 1 : 3)

れるが、本報告では一括して扱う。確認できる長さは南北5.5m・東西4m、幅は0.5~0.9m、地山面からの深さは0.04m~0.3mである。溝の方向は南北がN-1°-W、東西がN-89°-Eである。SD2008と一部重複するが、前後関係は不明である。

屈曲部は隅丸形を呈するが溝は正方位を意識しており、方形の区画溝の一角の可能性はある。埋土は北壁セクション(d-d')では3条の溝のいずれも粘性の弱い黒色粘質土が堆積し、D21グリッド(e-e')では3条の溝のうち西2条には黒色粘質土、東1条には砂や地山ブロックを少し含む黒色粘質土が堆積する。また、東壁セクション(f-f')では2層で、第1層に黒色粘質土、第2層に砂が多く第1層より明るめの黒色粘質土が堆積する。本遺構の南北方向は浅めの溝であるが、東西方向は深く掘り込まれる。

出土遺物は、備前焼の甕の体部片(第80図6)がある。外面に明瞭なタテハケ、内面にヨコハケの明瞭な調整をする。間壁編年Ⅲ・ⅣA期(14世紀前半~15世紀初頭)に相当すると思われる。また、図化しないものとして、龍泉窯系青磁碗の体部片が出土する。

#### 溝SD2008(第58・80図 図版33-2)

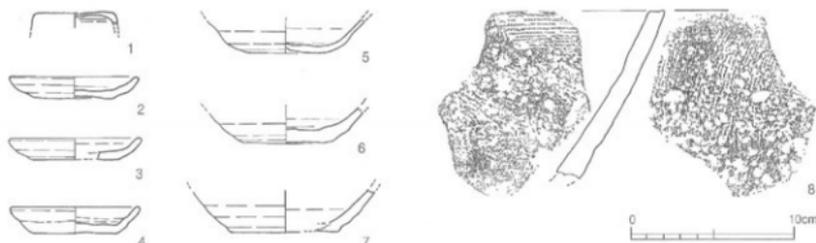
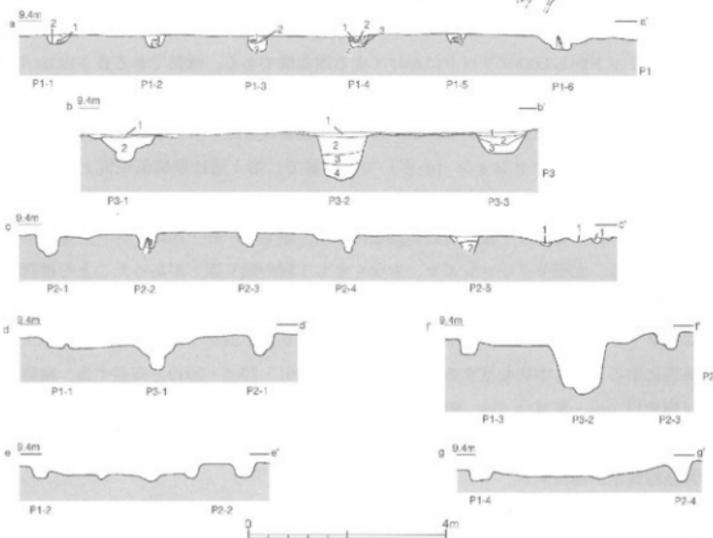
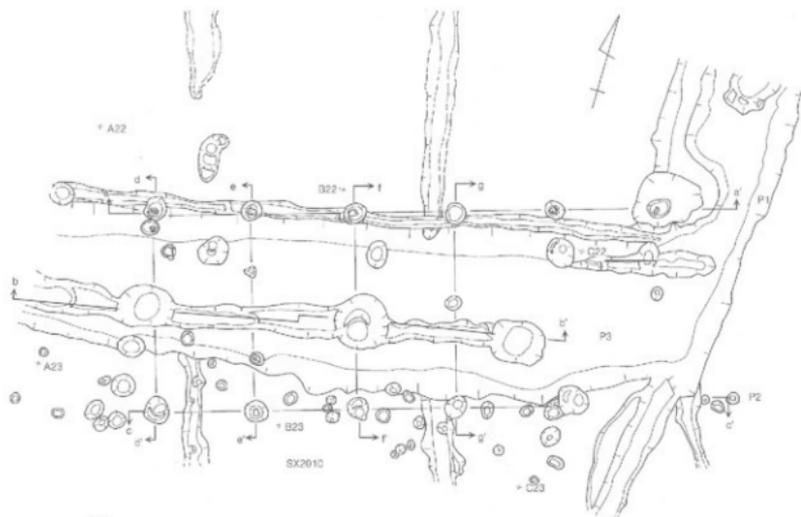
D21グリッドからD23グリッドにかけて走る南北溝である。確認できる長さは12.5m、幅0.6~0.8m、地山面からの深さは0.3~0.5mである。溝の方向はN-3°-Wである。SD2007と一部重複するが、前後関係は不明である。また、本遺構は後述のSD2055南北溝の延長線上に一致する。埋土は北壁セクション(d-d')では3層で、第1層に黒褐色粘質土、第2層に第1層より明るめで砂を多く含む黒褐色粘質土、第3層に黒色粘質土が堆積し、D21グリッド(e-e')では2層で、第1層に砂・礫を含む黒褐色粘質土、第2層に砂・地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。北壁セクションより、少なくとも1回の掘り返しがあったことを推測できる。

#### 溝SD2017(第58・81図 図版34-1)

C22グリッドからC24グリッドにかけて南北に走り、C24グリッドからA25グリッドにかけて東西に走る、逆L字状を呈する溝である。SD2001・2005・2019と交差する。確認できる長さは南北12.0m・東西14.2m、幅0.6~0.9m、地山面からの深さは0.1~0.2mである。溝の方向は南北がN-5°-E~N-10°-W、東西がN-89°~63°-Eである。埋土はC23グリッド(a-a')で黒色粘質土が堆積する。

#### 溝SD2019(第58・81・82図1~5 図版34-1)

C22グリッドからC25グリッドにかけて南北に走り、C26グリッドからA27グリッドにかけて東西に走る、逆L字状を呈する溝である。南北溝から東西溝へ屈曲する部分は遺構が不明瞭であるが、本報告では一連の溝として扱う。SD2001・2005・2017と一部交差する。確認できる長さは南北19.0m・東西15.7m、幅は0.5~0.9m、地山面からの深さは0.2~0.5mである。溝の方向は南北がN-5°-E~N-9°~21°-W、東西がN-70°-Eである。埋土は、C23グリッド(a-a')では粘性の弱い黒色粘質土が堆積し、C25グリッド(c-c')では5層で、第1層に黒色粘質土、第2層に非常にソフトな黒色粘質土、第3層に粘性が強く非常にソフトな黒色粘質土、第4層に褐色砂質土、第5層に粘性の強い黒色粘質土が堆積する。また、A27グリッド



第84図 橋状遺構実測図と5A区Pit内遺物 (遺構 1 : 100 土器 1 : 3)

ド(d-d')では3層で、第1層に粘性の弱い黒色粘質土、第2層に第1層より暗めの粘性の弱い黒色粘質土、第3層に地山ブロックをわずかに含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物は土師質土器の杯(第82図1~5)がある。1は底部周辺を絞り、内湾しつつ立ち上がる(杯A・1類)。2は器壁が薄く逆ハ字状に立ち上がる(杯C・D類)。3は丸みをもち立ち上がる(杯B・C類)。4・5は内面の底部と体部の境が不明瞭(杯E・F類)。

S D2017とS D2019に囲まれた区画内には複数の建物が確認されることから、両溝はそれらの区画溝として機能した可能性が高い。

#### 溝S D2025(第58・81・82図6 図版34-3)

A24グリッドからD23グリッドにかけて直線状に走る東西溝である。調査区西端でS K2026に壊されるが、更に調査区外へ西進する。S D2001・2005・2017・2019と交差し壊している。確認できる長さは17.8m、幅は1~1.3m、地山面からの深さは0.08~0.2mである。溝の方向はN-78°-Eである。埋土は、B24グリッド(f-f')では2層で、第1層は粘性が強く砂を少し含む黒褐色粘質土、第2層は砂を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。本遺構はS D2031と平行で、S D2001と直交することから、それらの影響を受けて形成された可能性が高い。

出土遺物は砥石(第82図6)がある。研磨痕が明瞭に残り、一部に被熱痕がある。凶化しないものとして、内面が黒色の土師質土器の皿がある。灯明皿として使用されたと考えられる。

#### 溝S D2031(第58・81・82図7~11 図版34-3)

A24グリッドからD23・24グリッドにかけて直線状に走る東西溝である。S D2001・2005・2017・2019・S K2028・2030・2035と交差し壊している。確認できる長さは20.2m、幅は1.5~2.2m、地山面からの深さは0.15~0.3mである。溝の方向はN-79°-Eである。また、B24グリッド付近では、不規則にピットが並ぶ塚状遺構を確認する。そのピット群の一つには、柱根が残存する。埋土は、D24・23グリッド(e-e')では3層で、第1層に地山ブロックを含む粘性の弱い黒褐色粘質土、第2層に部分的にシルトを含むオリーブ灰色粘土、第3層に黒色粘質土が堆積する。B24グリッド(f-f')では2層で、第1層に部分的にシルトを含むオリーブ灰色粘土、第2層に黒色粘質土が堆積する。また、西壁セクション(g-g')では2層で、第1層に地山ブロックを含む黒褐色粘質土、第2層に不純物を含む緑灰色粘土が堆積する。本遺構はS D2025と平行で、S D2001と直交することから、それらの影響を受けて形成された可能性が高く、塚状遺構が確認されることから、何らかの機能を持った溝であると想定される。

出土遺物は、土師質土器の皿(第82図7・8)・杯(第82図9)、古瀬戸の天目茶碗(第82図10)、中国白磁(第82図11)がある。7・8ともに逆ハ字状に立ち上がり、底部と体部の境が不明瞭(皿e-1類)。9は直線的に立ち上がる(杯F-1類)。10は削り出し部の形態から後期様式天目C類(Ⅲ期・15世紀第2四半期~中頃)のものである。11は口先げの口縁(皿I X類・13世紀中頃~14世紀初め)。

#### 溝S D2048(第58・81・82図12・13 図版34-2)

A27グリッドからD26グリッドにかけて直線状に走る東西溝である。数条の溝に分流し、C

26グリッドからC・D28グリッドで南へ走るものもあるが、本報告では一括して扱う。SD2001・SD2005・SD2046を横し交差する。確認できる長さは22.5mで、幅は0.2~0.6m、地山面からの深さは0.1~0.3mである。また、C26-C・D28グリッド間で長さ6.7m・幅0.4~0.9mの溝が南へ延びる。溝の主軸の方位はN-68°-Eである。SD2019東西溝とほぼ平行になり、SD2001・2005・2046とほぼ直交する。埋土は、D26グリッド(h-h')では2層で、ともに黒色粘質土が堆積し、第1層には地山ブロックがなく、第2層にそれを少し含む。B27グリッド(i-i')では4層で、ともに黒色粘質土が堆積し、第1層は粘性が弱く、第2層はややソフト、第3層は地山ブロックを含みややソフト、第4層は粘性が強く地山ブロックを含むという特質をもつ。A27グリッド(j-j')では2条の溝となり、北側の溝は2層で、第1層に地山ブロックを含み粘性の弱い黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックを含まない黒色粘質土が堆積する。また、南側の溝には地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物は、土師質土器の杯(第82図12)、砥石(第82図13)がある。12は底部周辺に段を付け、丸をもち立ち上がる(杯B類)。13は表裏に研磨痕。また、図化していないものとして、瓷器系陶器や中世須恵器の体部片がある。

#### 溝SD2055(第58・83図 図版34-5~8)

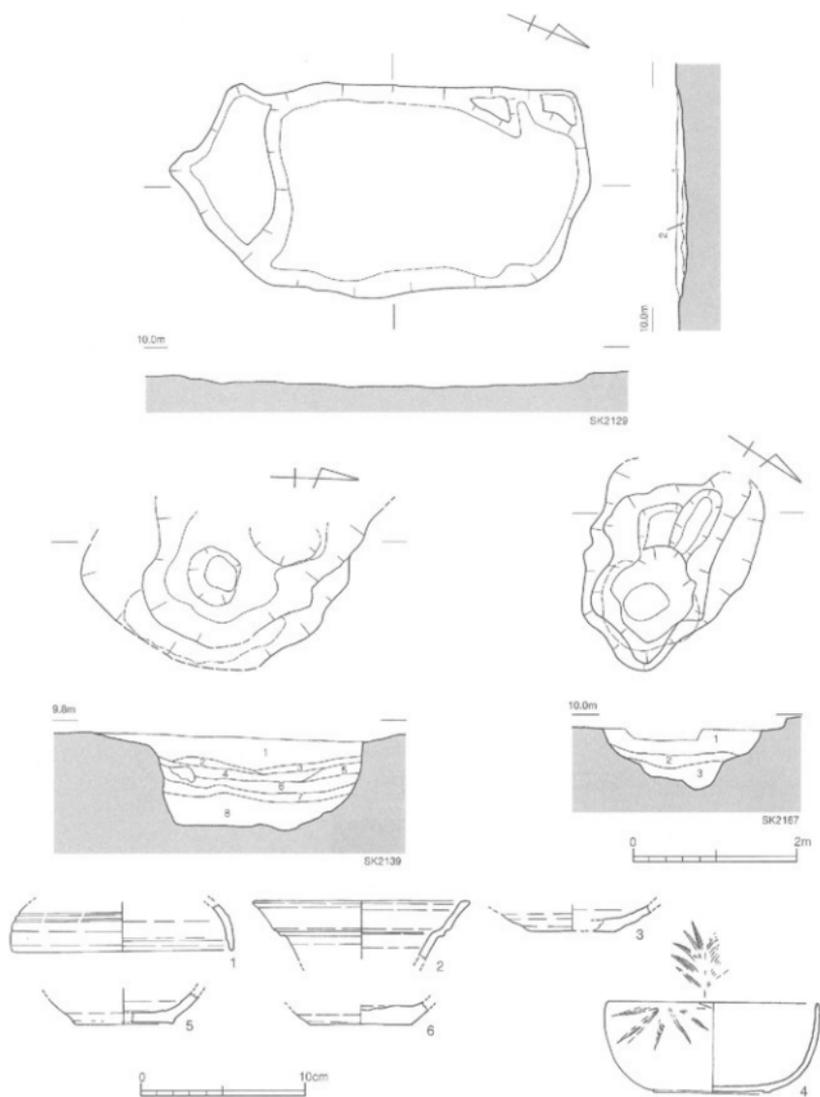
29グリッドから35グリッドの範囲を方形に区画する溝である。SD2001・SD2046を横し交差する。確認できる長さは北側の東西溝は19.5m、東側の南北溝は29.6m、南側の東西溝は16.9m、幅は0.9m~1.4m、地山面からの深さは0.2~0.4mである。溝の方位は北側の溝でN-91°-W、東側の溝でN-0°-E、南側の溝でN-88°-Eである。正方位を意識する。埋土は、西壁セクション(a-a')・B29グリッド(b-b')では3層に分かれる。D30グリッド(c-c')では2層で、第1層に黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックを少し含む黒色粘質土が堆積する。また、D34グリッド(d-d')・D35グリッド(e-e')では同様に2層で、第1層に粘性の弱い黒色粘質土、第2層に地山ブロックや砂を多く含む黒色粘質土が堆積する。本遺構内では総じて同様な堆積状況が見られ、少なくとも1回の掘り返しが行われた可能性がある。

出土遺物は、土師質土器の杯(第83図1・2)がある。また、図化していないものとして、同心円のタタキ目をもつ須恵器片が4点ある。1・2ともに底部から直線的に立ち上がる(杯F類)。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

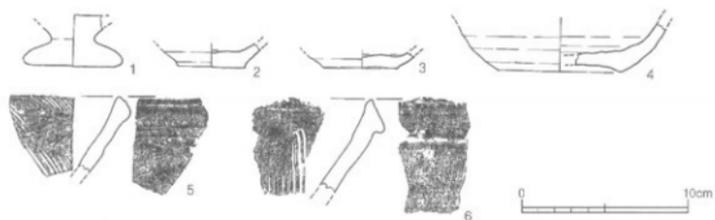
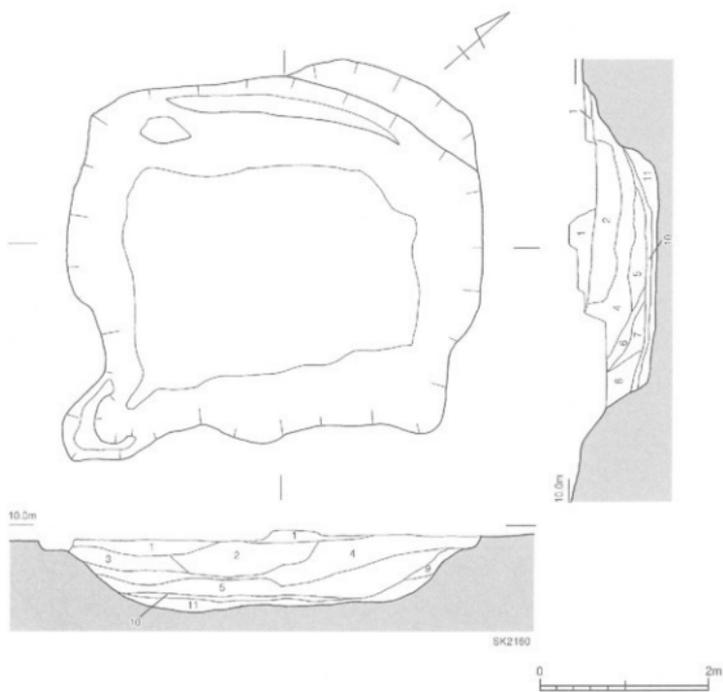
#### 溝SD2067(第59・83図)

A30グリッドからB31グリッドにかけて、隅丸状を呈する溝である。本遺構の1/3は攪乱をうけ、正確な形状は不明である。確認できる長さは約10.7m、幅は1.3m~2.0m、地山面からの深さは0.4mである。埋土は西壁セクション(f-f')では2層で、第1層に地山ブロックを含む黒褐色粘質土が堆積する。また、B30グリッド(g-g')では3層で、第1層に地山ブロックを少し含む黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックを多く含む黒褐色粘質土、第3層に砂をやや多く含む黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物は、土師質土器の細片と同心円のタタキ目をもつ須恵器片がある。



第85図 5B区の中世土坑図と遺物実測図1 (遺構 1 : 60 遺物 1 : 3)



第86図 5B区の中世土坑図と遺物実測図2 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)

## P i t 内遺物 (第84図)

本報告に非掲載の遺構から出土した遺物を報告する。

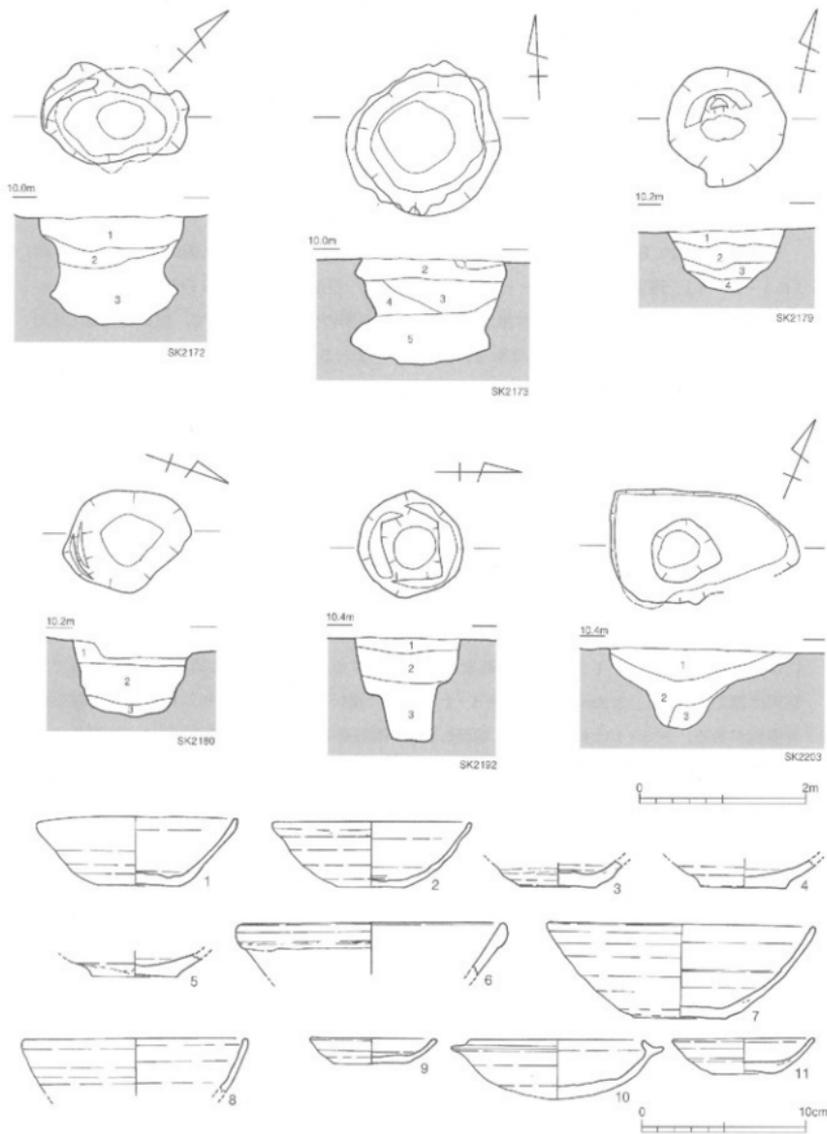
第84図1は国内陶器。茶入の蓋か。外面に軸が僅かにかかる。2～4は土師質の皿である。2・3は円みをもち内傾しつつ立ち上がる(皿b-3類)。4は逆八字状に立ち上がる(皿c類)。5～7は土師質の杯である。いずれも丸みをもち立ち上がる(杯A・B類)。8は土師質の鉢の口縁である。内外面にハケ目調整。

## S X 2010 (第58・84図 図版33-1)

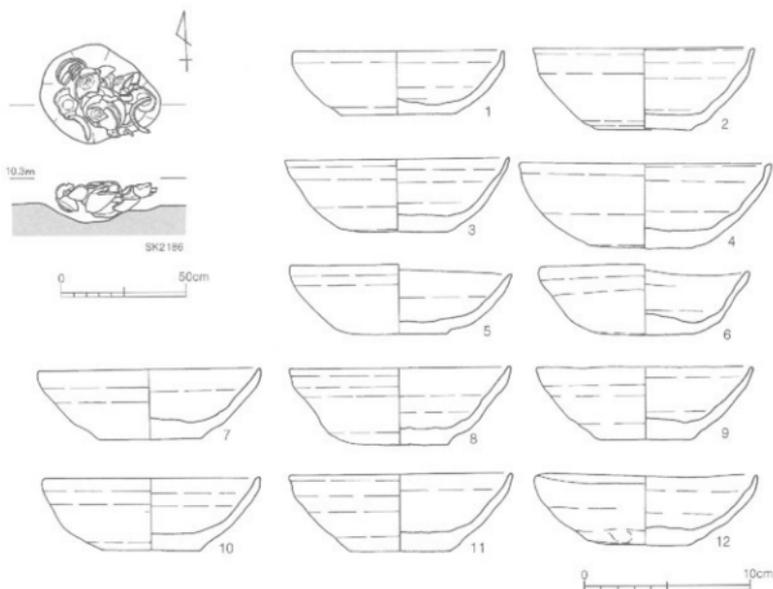
B・C21、A・B22グリッドに位置する。東西溝SD2006に沿い、北側に6つのピット列(P1-1～6)、南側に5つのピット列(P2-1～5)が並ぶ。また、SD2006の底面に3つの大きなピット(P3-1～3)が並ぶ。P1-1～6間の長さは10.2mで、柱間は西から2.0m、2.1m、2.0m、2.0m、2.1mである。P1-1・2・5・6には柱根、P1-3には石が残存する。柱根はいずれも打ち込まれたものではなく、底面を平坦に切断し、側面も面取りが施される。P1-3の石は最下層と上層の間にある。埋土はP1-1は2層で、第1層が地山ブロックを多く含む黒色粘質土、第2層が砂を少し含む黒色粘質土、P1-2は砂を少し含む黒色粘質土、P1-3は3層で、第1層が砂を少し含む黒色粘質土、第2層が砂を多く含む粘性の弱い黒色粘質土、第3層が砂をやや多く含む黒色粘質土、P1-4は4層で、第1層が砂を少し含む黒色粘質土、第2層が砂を多く含む粘性の弱い黒色粘質土、第3層が砂をやや多く含む黒色粘質土、第4層が砂を多く含む黒色粘質土、P1-5は砂を少し含む黒色粘質土が堆積する。P2-1～5間の長さは8.5mで、柱間は西から2.0m、2.1m、2.0m、2.0mである。P2-2には柱根が残存し、P-1と同様に底面を平坦に加工する。P3-1～3間の長さは7.5mで、柱間は西から4.3m、3.3mである。P3-1・2間に浅い落ち込みがあり、ピットが存在した可能性がある。P3-1は長径1.1m、短径0.9mの楕円形の掘り方で、深さは0.6mを測る。埋土は地山ブロックを多く含む黒色粘質土であり、掘り方上面にはSD2006の最下層が堆積する。P3-2は直径1.1mの楕円形の掘り方で、深さは1.0mを測る。埋土は3層で、第1層が砂を含む黒色粘質土、第2層が第1層や地山ブロックを含む灰黄褐色砂質土、第3層が有機物を含む黒色粘質土が堆積する。P3-1と同様に掘り方上面にSD2006の最下層が堆積する。P3-3は長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸方形の掘り方で、深さは0.4mを測る。埋土は2層で、第1層が地山ブロックを多く含む黒色粘質土、第2層が砂を多く含む黒色粘質土が堆積する。P3-1と同様に掘り方上面にSD2006の最下層が堆積する。

P1-1～6の方位はN-74°-E、P2-1～5の方位はN-73°-Eとほぼ平行であり、それぞれ対応するピットの間隔は4.0mずつとなる。また、P1-1とP3-1とP2-1は2.0m等間隔で南北に並び、P1-3とP3-2とP2-3も同様な関係にある。南北方向のピット列の方位はN-17°-Wである。これらの方位はSD2006と必ずしも合致せず、SD2001とSD2005からなる道路状遺構とほぼ平行となる。

SD2006は最大深0.4mの浅い溝ではあるが、地山面の傾斜により水が流れこみやすい状況



第87図 5B区の中世土坑と遺物実測図3 (遺構1:60 土器1:3)



第88図 5B区の中世土坑図と遺物実測図4（遺構1：20 土器1：3）

であったと考えられる。P3-1～3間に見られる溝状の落ち込みは水流による可能性がある。したがって、道路状遺構と平行であることなどから、SX2010は橋梁状遺構もしくはSD2006に先行する大型建物の可能性が考えられる。（高橋 周）

## 2) 5B区

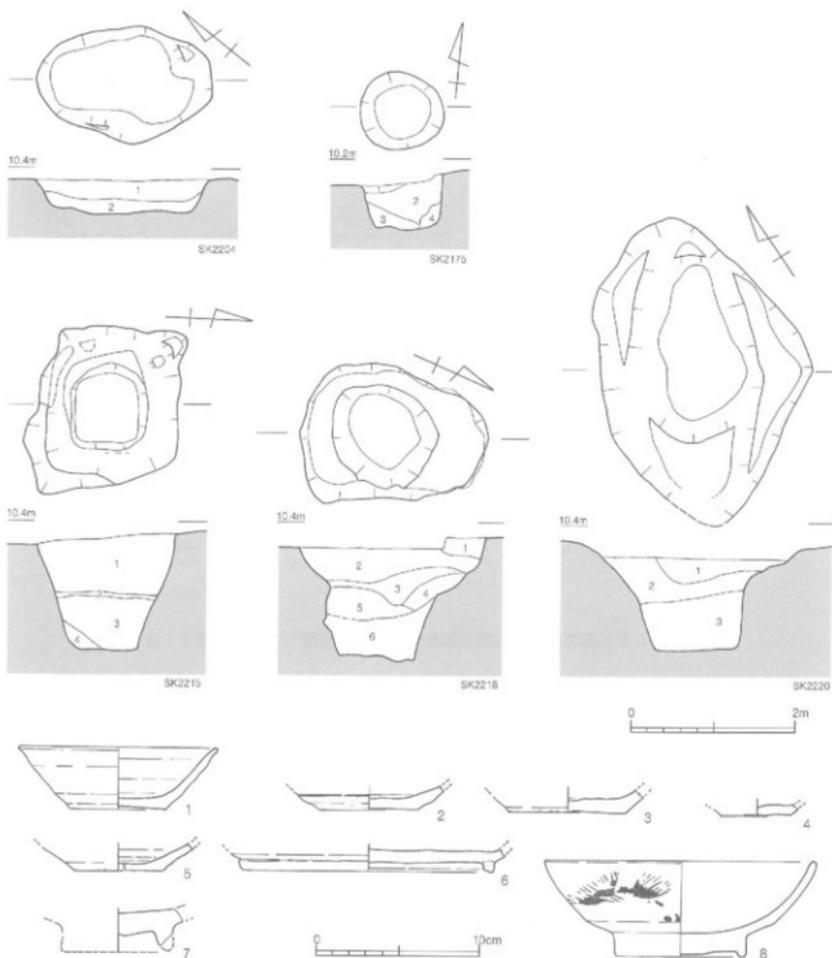
### 土坑

#### 土坑SK2129（第60・85図 図版31-4）

A・B41グリッドに位置し、主軸はN-20°-Wである。掘形は不整形長方形で、規模は長軸4.88m、短軸2.58m、深さ0.14mである。埋土は2層で、1層が黒褐色砂礫、2層が黒褐色粘質土である。出土遺物は岡化できなかつたが、須恵器の甕の体部片や土師質土器片などがある。

#### 土坑SK2139（第60・85図1～3）

A42グリッドに位置する。掘形は不整形円形で、規模は長軸3.24m、短軸1.98m以上、深さ0.96mである。埋土は8層で、1・2層が黒色粘質土、3層が黒褐色粘質土、4・5層が黒色粘質土、6層が黒褐色砂質土、7層が黒色粘質土、8層が灰褐色砂質土である。須恵器の杯蓋（第85図1）や甕（2）、土師質土器の杯（3）などが出土している。1は口縁端部を段状に仕上げています。2は口縁端部下端に1条の凹線を施している。3の底部内面は体部との境が不明



第89図 5B区の中世土坑図と遺物実測図5 (遺構1:60 遺物1:3)

隙である。

土坑SK2167 (第61・85図4～6)

A47グリッドに位置する。掘形は不整楕円形で、規模は長軸2.12m、短軸1.96m、深さ0.6mである。埋土は3層で、1層が黒褐色粘質土、2層が黒色粘質土、3層が黒褐色粘質土であ

る。漆碗（第85図4）や土師質土器の杯（5・6）などが出土している。4は低い高台をもち、体部は口縁付近になると、ほぼ垂直になる。樹種は、ハリギリ属ハリギリ。5の底部内面は体部との境が明瞭である。6の底部内面は体部との境が明瞭で、体部は内湾気味に立ち上がる。

#### 土坑SK2160（第60・86図 図版31-3）

B46グリッドに位置する。掘形は隅丸方形で、主軸はN-42°-Eである。規模は長軸4.99m、短軸4.44m、深さ0.92mである。埋土は11層で、1層が黒褐色粘質土、2層が黒色粘質土、3・4層が黒褐色粘質土、5層が黒色粘質土、6層が黒褐色粘質土、7～9層が黒色粘質土、10層が黒色粘土、11層が黒褐色砂である。土師質土器の柱状高台付皿（第86図1）と杯（2・3）、須恵器の壺（4）、瓦質土器のすり鉢（5）偏前のすり鉢（6）などが出土している。1は脚部がほとんどなく、脚端部は丸く仕上げている。2の底部は器壁が厚い。底部と体部との境は明瞭。3の底部内面は体部との境がやや不明瞭で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。4の底部外面は上底になっている。5の口縁下端部はやや肥厚している。6の口縁端部は上下に拡張する。

#### 土坑SK2172（第61・87図1～3）

A・B47グリッドに位置する。掘形は不整楕円形で、規模は長軸1.75m、短軸0.92m、深さ1.3mである。埋土は3層で、1層が黒褐色粘質土、2・3層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図1～3）などが出土している。1は杯C-1類で、2は杯B類である。3の底部内面は体部との境が不明瞭。

#### 土坑SK2173（第61・87図4・5）

A・B48グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.76m、深さ1.29mである。埋土は5層で1・2層は黒褐色粘質土、3～5層は黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図4・5）が出土している。4・5は杯F類である。

#### 土坑SK2179（第61・87図6 図版31-1）

B48グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.44m、深さ0.72mである。埋土は4層で、1層が黒褐色土、2～4層が黒色粘質土である。白磁の碗（第87図6）が出土している。

#### 土坑SK2180（第61・87図7）

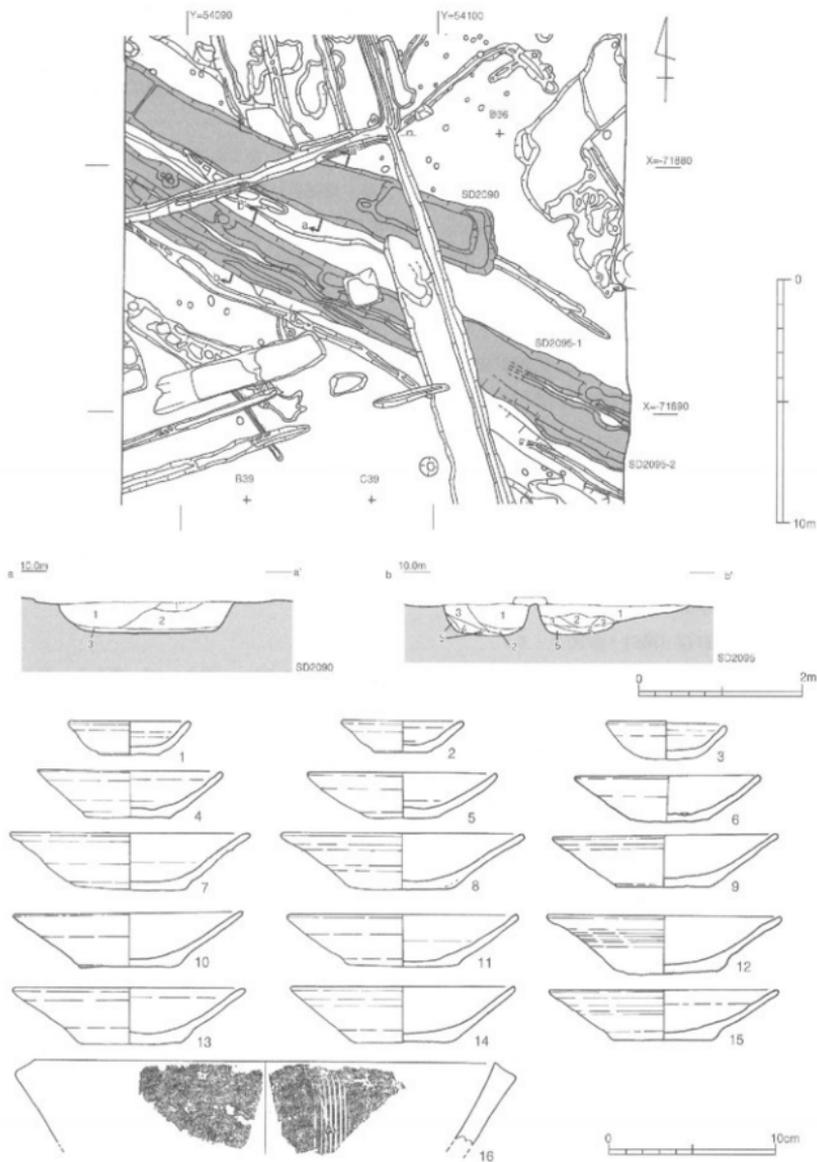
A48グリッドに位置する。掘形は不整楕円形で、規模は長軸1.44m、短軸1.24m、深さ0.86mである。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図7）が出土している。杯B類である。

#### 土坑SK2192（第61・87図8・9）

A50グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.28m、深さ1.26mである。埋土は3層で、1・2層が黒褐色土、3層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図8）と皿（9）が出土している。9は皿b-3類である。

#### 土坑SK2203（第61・87図10・11）

A51グリッドに位置する。SK2204と重複しており、SK2203が作られた後、SK2204が作



第90図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図1 (遺構 1:200 断面 1:60 土器 1:3)

られている。掘形は不整楕円形で、規模は長軸2.27m、短軸1.34m、深さ0.98mである。埋土は3層で、1・2層が黒色粘質土、3層が黒褐色粘質土である。須恵器の杯身（第87図10）や土師質土器の皿（11）などが出土している。11は皿e-1類である。

#### 土坑SK2186（第61・88図 図版31-5）

B49グリッドに位置する。掘形は円形。規模は、直径0.4m、深さ0.08mである。土師質土器の杯（第88図1～12）が積み重なった状態で出土している。1～12の杯は、杯A-2類である。

#### 土坑SK2204（第61・89図1）

A51グリッドに位置する。掘形は楕円形で、規模は長軸2.1m、短軸1.42m、深さ0.4mである。埋土は2層で、1層が黒褐色粘質土、2層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第89図1）が出土している。杯C-2類である。

#### 土坑SK2175（第61・89図）

B48グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.0m、深さは0.56mである。埋土は4層で、1層が暗褐色土、2層が黒褐色土、3層が黒色粘質土、4層が焼土である。図化できなかったが土師質土器片が出土している。

#### 土坑SK2215（第61・89図）

B52グリッドに位置する。掘形は不整方形で、主軸はN-3°-Wである。規模は長軸1.96m、短軸1.67m、深さ1.38mである。埋土は4層で、1層が黒褐色粘質土、2層が暗褐色粘質土、3層が黒色粘土、4層が黒褐色砂礫である。出土遺物は小片のため図化できなかった。側壁には火を受けた痕跡がある。

#### 土坑SK2218（第61・89図2～4）

C52グリッドに位置する。掘形は不整楕円形で、規模は、長軸2.25m、短軸1.66m、深さ1.32mである。埋土は6層で、1～3層が黒褐色粘質土、4層が黒色粘質土、5・6層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第89図2～4）が出土している。いずれも底部のみであるが、2の底部内面は体部との境がやや不明瞭である。3の底部内面は体部との境が明瞭である。

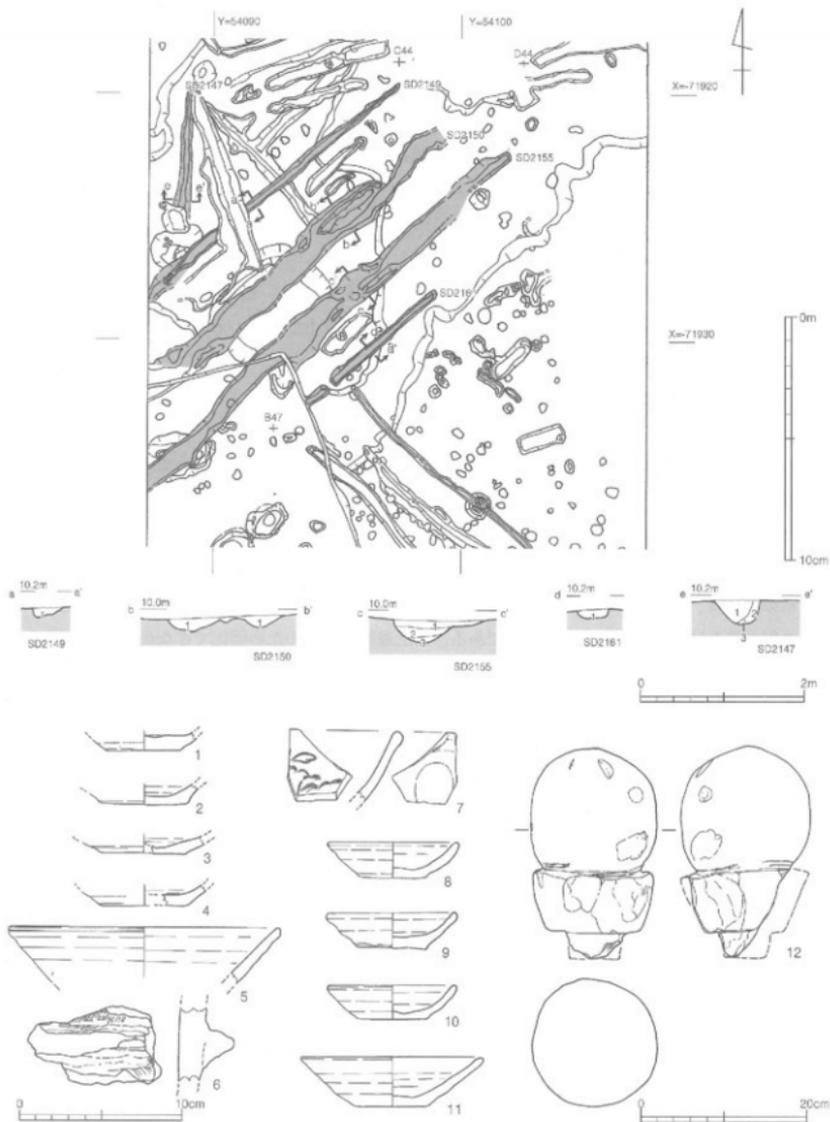
#### 土坑SK2220（第61・89図5～8 図版31-2）

B52グリッドに位置する。掘形は不整楕円形で、規模は長軸3.56m、短軸2.54m、深さ1.3mである。埋土は3層で、1・2層が黒褐色粘質土、3層が黒色粘土である。土師質土器の杯（第89図5）、須恵器の高台付皿（6）、青磁の椀（7）、漆椀（8）などが出土している。5の底部内面は体部との境が不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。6の高台は底部の端に付く。7青磁の高台を砥石として再利用している。8は高台をもち、体部は口縁に向けて内湾気味に立ち上がる。樹種は、トチノキ属トチノキ。

#### 溝

#### 溝SD2090（第59・90図1～15 図版35-1・2）

35ライン～38ラインに位置し、主軸はN-65°-Wである。規模は長さ16.5m、溝幅2.4m、深



第91図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図2 (遺構1:200 断面1:60 遺物1:3 石1:6)



第92図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図3（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）

さ0.35mである。埋土は4層で、1～3層が黒褐色粘質土、4層が黒褐色粘土である。土師質土器の皿（第90図1～3）と杯（第90図4～15）が出土している。1～3は皿e-1類である。4～6・9～11・13～15は杯F-1類、7・8・12は杯F-2類である。

**溝SD2095-1（第59・90図16 図版35-3）**

36ライン～38ラインに位置し、主軸はN-64°-Wである。SD2095-1は、D38杭周辺でSD2095-2と合流する。規模は長さ23m、溝幅1.8m、深さ0.35mである。埋土は5層で、1層が

褐色砂礫、2層が明赤褐色砂礫、3層が黄灰色粘質土、4層が暗灰黄色粘質土、5層が褐灰色粘質土である。備前のすり鉢（第90図16）が出土している。

**溝SD2095-2**（第59・90図 図版35-3）

36ライン～38ラインに位置し、主軸はN-62°-Wである。SD2095-2は、D38杭周辺でSD2095-1と合流する。規模は長さ23m、溝幅1.05m、深さ0.35mである。埋土は5層で、1層が褐灰色粘質土、2層が褐灰色粘土、3層が褐灰色粘質土、4層がにぶい黄褐色砂礫、5層が暗褐色砂礫である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

**溝SD2149**（第60・91図）

44ライン～45ラインに位置し、主軸はN-48°-Eである。規模は長さ10.8m、溝幅0.35m、深さ0.1mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

**溝SD2150**（第60・91図1～6・12）

44ライン～46ラインに位置し、主軸はN-48°-Eである。規模は長さ15m、溝幅1.2m、深さ0.25mである。埋土は1層で、黒色粘質土である。円筒埴輪（第91図6）や土師質土器の杯（1～5）や五輪塔（12）が出土している。1・4の底部は厚く、体部は緩やかに立ち上がっている。3の底部内面は体部との境が不明瞭で、体部は緩やかに立ち上がる。12は空風輪である。

**溝SD2155**（第60・91図7）

44ライン～47ラインに位置し、主軸はN-48°-Eである。規模は長さ16.2m、溝幅1.1m、深さ0.25mである。埋土は3層で、1・2層が黒褐色粘質土、3層が黒色粘質土である。青磁の碗（第91図7）が出土している。

**溝SD2161**（第60・91図）

45ライン～46ラインに位置し、主軸はN-49°-Eである。規模は長さ4.5m、溝幅0.3m、深さ0.1mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

**溝SD2147**（第60・91図8～11）

A44ライン～45ラインに位置する。主軸N-4°-Eで他の4本の溝とは方向を異にする。規模は長さ3.6m、溝幅0.55m、深さ0.3mである。埋土は3層で、1層が黒色粘質土、2層が黒褐色粘質土、3層が暗褐色砂質土である。土師質土器の皿（第91図8～10）と杯（第91図11）が出土している。8・10は皿e-1類で、9は皿e-2類である。11は杯D類である。

**溝SD2165**（第61・92図 図版35-4）

46ライン～48ラインに位置し、主軸はN-47°-Wである。規模は長さ9m、溝幅0.3m、深さ0.18mである。埋土は1層で、黒褐色土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

**溝SD2168-1**（第61・92図2・5 図版35-4）

47ライン～49ラインに位置し、主軸はN-45°-Wである。SD2168-2とC48グリッドで合流

する。規模は長さ15.3m、溝幅0.5m、深さ0.18mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。須恵器の杯蓋（第92図2）や土師質土器の皿（3）が出土している。3は皿d類である。

#### 溝SD2168-2（第61・92図 図版35-4）

48ライン～50ラインに位置し、主軸はN-45°-Wである。SD2168-1とC48グリッドで合流する。規模は長さ11.8m、溝幅0.35m、深さ0.2mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

#### 溝SD2170（第61・92図1 図版35-4）

47ライン～49ラインに位置し、B・C47グリッドの主軸はN-56°-Wであるが、D48・49グリッドではN-36°-Wである。規模は長さ13.5m、溝幅0.4m、深さ0.35mである。埋土は2層で、1層が黒褐色土、2層が黒褐色粘質土である。須恵器の高台付杯（第92図1）が出土している。高台は底部の端に付く。

#### 溝SD2177（第61・92図 図版35-4）

48ライン～50ラインに位置し、B48グリッドの主軸はN-56°-Wであるが、C48グリッドからD50グリッドではN-32°-Wである。SK2183と重複しており、SK2183が作られた後、SD2177が作られている。

規模は長さ15.3m、溝幅0.6m、深さ0.25mである。埋土は1層で、黒褐色土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

#### 溝SD2182（第61・92図）

48ライン～51ラインに位置し、主軸はN-36°-Wである。円形周溝1と重複しており、SD2182が作られた後、円形周溝1が作られている。規模は長さ13.5m、溝幅0.5m、深さ0.1mである。埋土は1層で、黒色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

（高橋誠二）

### 3 包含層の遺物

#### A 弥生時代（第93図1・2）

第93図1は弥生土器の甕の口縁である。口縁部は外反し、口唇部には刻み目を施している。

2は弥生土器の甕の底部で、底部と体部の境は明瞭である。

#### B 古墳時代（第93図3～11・21・22）

第93図3は土師器の高杯である。口縁部は強いヨコナデで外反させている。4は須恵器の杯蓋で、口縁はやや内湾し、口縁端部は丸くおさめている。5は須恵器の杯蓋で、口縁内面に1条の凹線がある。6は須恵器の杯身で、底部はやや平底になっている。7は壺の口縁で、口縁端部は外反している。8は須恵器の子持壺である。親壺の頸部は緩やかに外反している。子壺は「凸」字状に張り出した親壺の胴部に貼り付けている。子壺の接合方法は、柳浦分類（1993）のd類である。9は須恵器の子持壺の脚部で、粘土紐の単位が確認できる。10は須恵器の長頸壺の頸部である。頸部内面は粘土の継ぎ足しにより肥厚している。11は須恵器の高杯の受部で

ある。口縁は欠損している。脚部との境には透かしの切り込みがある。21は須恵器の壺の口縁である。22は須恵器の壺の口縁である。口縁端部は丸くおさめている。(高橋誠二)

### C 古代 (第93図12~20)

第93図12は須恵器の直口壺の口縁で、やや内湾気味に立ち上がる。13は須恵器の壺の体部で、肩部には4本の線刻がある。底部は削っている。14は須恵器の杯で、口縁と底部の一部が欠損している。体部はほぼ直線的に立ち上がる。15は須恵器の杯で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は細く仕上げている。16は須恵器の高台付杯の底部で、高台は底部と体部の境よりやや内側に貼り付けている。17は須恵器の高台付杯の底部である。高台は底部と体部の境に貼り付けている。18は須恵器の高台付杯の底部である。高台端部は面をもつ。19は須恵器の高台付杯の底部で、高台端部には面を作り、中央を若干凹ませている。20は須恵器の高台付皿である。高台は底部と体部の境より若干内側に貼り付けている。

### D 中世

#### 土師質土器の分類

築山5区において総破片数7500点以上(完形を含む)の土師質土器が出土した。良好な一括資料は少ないが、以下の分類を試みた。杯については、藤小路西分類(藤小路西遺跡1999)及び古志本郷分類(古志本郷遺跡1999)を参考にした。皿については、杯との共存関係や形状の類似に着目し分類した。

①杯A類は、体部に丸味を持ち、底部を絞るもので、3種類に細分した。他遺跡の分類においては、藤小路西分類の2期、古志本郷分類の杯A類に相当し、13世紀代に比定される。

杯A-1類 口径12.0~13.8cm、底径5.6~6.0cm、器高4.4~5.0cmを測る。体部が丸味を持ち、A-2・3類に比して立ち上りが急なもの。底部周辺をやや絞る。

杯A-2類 口径12.6~13.2cm、底径5.8~6.0cm、器高:3.8~5.0cmを測る。体部が丸味を持ち、口縁端部が内傾する。底部周辺をやや絞る。底部の器壁が厚い。5区SK2186からまとまって出土した。

杯A-3類 口径12.6~13.0cm、底径:5.0~6.0cm、器高:4.0~4.4cmを測る。体部が丸味を持ち、逆八字状に開く。口縁端部を細め、底部周辺をやや絞る。底部の器壁が厚い。5区SK2066から皿c類と相伴して出土した。

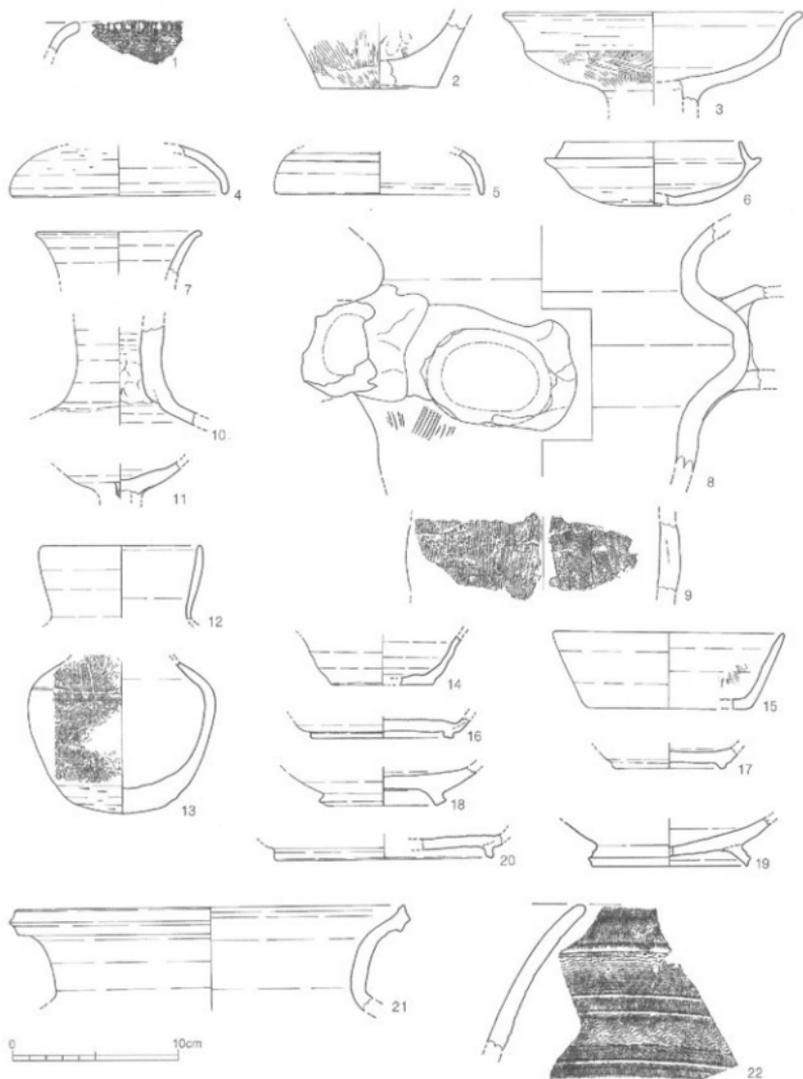
②杯B類は、体部が丸味を持ち、内湾気味に立ち上る。内面の底部と体部の境が杯A類に比して明瞭である。器壁が厚いものと薄いものがある。口径の大きさにより細分される。

①口径15.0~16.0cm、底径5.6~6.2cm、器高5.0~5.8cm

②口径13.4~13.8cm、底径5.4~5.6cm、器高3.3~4.0cm

③口径11.5~11.8cm、底径4.0~5.2cm、器高3.6~4.0cm

③杯C類は、底部から逆八字状に立ち上がる。内面の底部と体部の境にくぼみを持つ。形態よ



第93図 5区遺構外出土の遺物実測図1 (1:3)

り2種類に細分した。

杯C-1類 口径12.0～13.0cm、底径5.0～6.2cm、器高3.4～4.2cmを測る。底部からの立ち上りは丸みをもちつつ、逆ハ字状に立ち上がる。内面の底部と体部の境に凹みをもつ。

杯C-2類 口径11.8cm～13.0cm、底径4.8～6.8cm、器高3.8～4.8cmを測る。底部からの立ち上がりは直線的で、逆ハ字状に立ち上がる。形状は杯D類に近い。内面の底部と体部の境に凹みをもつ。

④杯D類は、底部からの立ち上がりが直線的で、逆ハ字状に立ち上がる。内面の底部と体部の境が明瞭。杯C-2類に比して、立ち上がりの角度が緩やかで器壁が薄いのが特徴。口径14.0～15.6cm、底径：7.0cm、器高：3.3～4.3cmを測る。

杯B・C・D類は、蔵小路西分類の2～3期、古志本郷分類の杯B・C・E類に相当し、13～14世紀代に比定される。

⑤杯E類は、底部からの立ち上がりが直線的で、逆ハ字状に立ち上がる。形態より3種類に細分した。

杯E-1類 口径：10.0～11.2cm、底径：4.4～5.2cm、器高：2.6～3.2cmを測る。底部からの立ち上がりが直線的で、逆ハ字状に立ち上がり、底部を絞る。内面の底部と体部の境が不明瞭。杯F類に比して小ぶりなもの。

杯E-2類 口径：11.0～11.5cm、底径：4.2～6.0cm、器高：2.7～3.2cmを測る。形状の特徴はE-1類と同様であり、底部を絞らないもの。

杯E-3類 口径：11.2～12.2cm、底径：5.0～5.6cm、器高：2.2～2.5cmを測る。形状の特徴はE-1類と同様であり、底部を絞らず器高が低いもの。

杯E類は、蔵小路西分類の4期、古志本郷分類の杯C類に相当し、15世紀代に比定される。5区B30グリッドの土器溜りにおいて、杯E-1・2類が龍泉窯系青磁碗B3類と共伴する。青磁の年代は14世紀初頭～15世紀前半とされる。

⑥杯F類は、底部からの立ち上がりをやや絞り、直線的に立ち上がる。形態の違いから2種類に細分した。

杯F-1類 口径12.6～14.4cm（14.0cm前後に集中）、底径5.8～6.8cm、器高：3.1～3.6cmを測る。底部からの立ち上がりをやや絞り、直線的に立ち上がる。内面の底部と体部の境が不明瞭。

杯F-2類 口径13.8～15.0cm、底径5.8～7.2cm、器高3.0～3.6cmを測る。形状は杯F-

1類と同様で、口縁部が外反気味となるもの。

杯F-3類 口径15.5~16.4cm、底径5.6~7.4cm、器高：3.2~3.6cmを測る。形状はF-2類と同様で、底部周辺及び底部にヘラ削り調整が見られるもの。

杯F類は、藏小路西分類の5期、古志本郷分類の杯D類に相当し、15~16世紀代に比定される。特に杯F-3類は古志本郷分類D-3類と類似し、遺跡間での関係が注目される。

⑦皿a類は、口径6.6~7.2cm、底径3.4~4.6cm、器高1.0~1.4cmを測る。底部から直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。内面の底部と体部の境が明瞭。5区SK2072で杯A-1類と共存する。

藏小路西分類の1期に相当し、12世紀後半に比定される。

⑧皿b類は、3種類に細分した。

皿b-1類 口径6.6~8.0cm、底径4.2~5.8cm、器高1.4~2.1cmを測る。底部から円みをもち立ち上がり、口縁部が内傾気味になる。立ち上がりの角度がやや急なものと緩やかなものがある。

皿b-2類 口径7.4~7.6cm、底径3.5~4.8cm、器高1.7~2.2cmを測る。底部周辺を強く絞り、円みをもち内傾気味に立ち上がる。

皿b-3類 口径7.6~8.6cm、底径：3.9~4.6cm、器高：1.6~2.1cmを測る。底部から円みをもち立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。

皿b類は、藏小路西分類の2期、古志本郷分類の皿b類に相当し、13世紀代に比定される。

⑨皿c類は、底部から直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。皿a類に比して、立ち上がりの角度が急。内面の底部と体部の境が明瞭で、底部の器壁が厚い。口径7.0~8.5cm、底径4.4~5.8cm、器高1.2~2.0cmを測る。5区SK2066で杯A-3類と共存する。

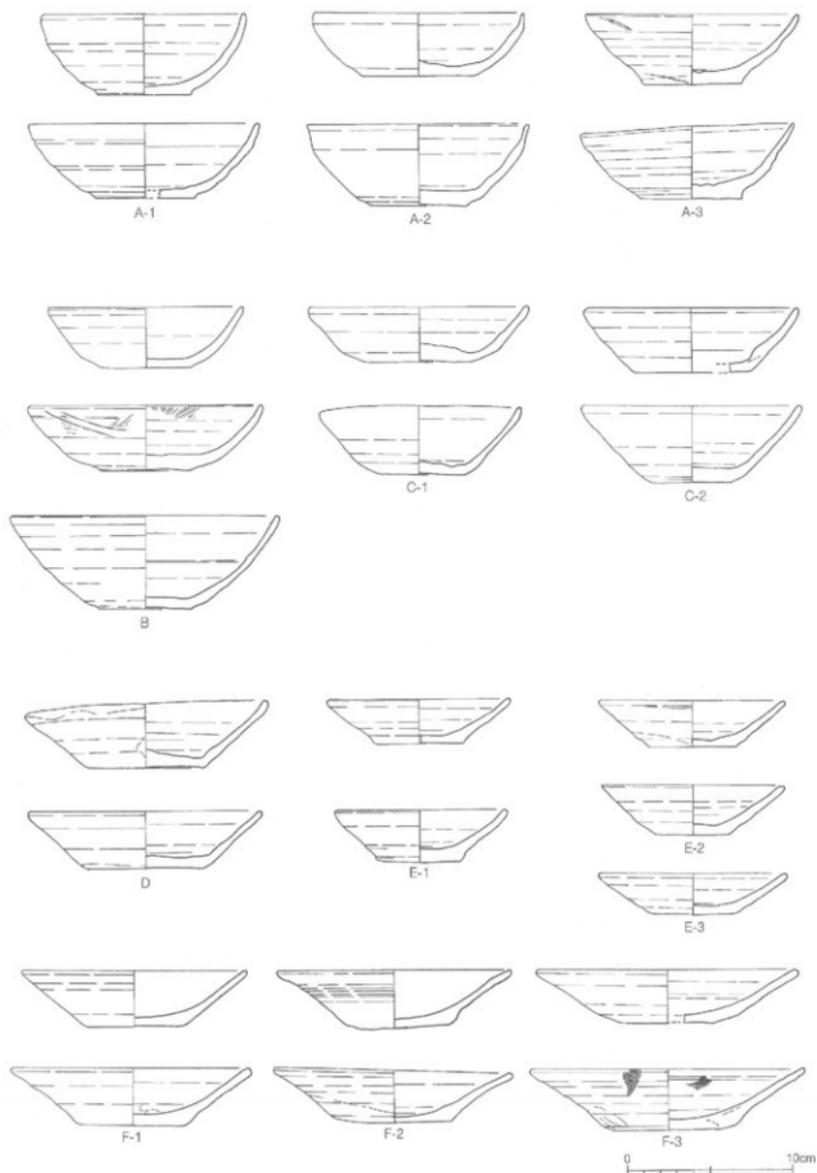
藏小路西分類の3期に相当し、13~14世紀代に比定される。

⑩皿d類は、底部からの直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。皿a類に比して、立ち上がり外傾する。内面の底部と体部の境を凹ませるものと不明瞭なものがある。口径：6.8~8.2cm、底径3.8~4.8cm、器高1.3~2.0cmを測る。

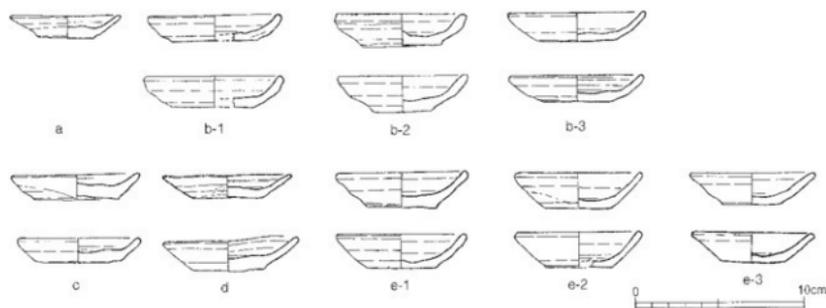
藏小路西分類の4期に相当し、14~15世紀代に比定される。

⑪皿e類は、底部から直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開く。内面の底部と体部の境が不明瞭。形態より3種類に細分される。

皿e-1類 口径7.0~8.8cm、底径2.1~4.2cm、器高1.8~2.2cmを測る。底部からやや



第94図 5区出土の土師質土器分類図1 (1:3)



第95図 5区出土の土師質土器分類図2 (1:3)

円みをもちつつ立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。内面の底部と体部の境が不明瞭。

皿 e-2 類 口径7.4~7.6cm、底径3.6~4.2cm、器高2.1~2.2cmを測る。直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。内面の底部と体部の境が不明瞭。

皿 e-3 類 口径6.8~7.6cm、底径3.2~3.8cm、器高:1.8~2.2cmを測る。底部から直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。やや外傾する。内面の底部と体部の境が不明瞭。

古志本郷分類の皿 c・d 類に相当し、15~16世紀代に比定される。5区A30・B30グリッドの上器溜りで杯 E・F 類と共伴する。

#### 土師質土器 (第96~100図)

本調査区内において確認した遺構の多くは中世に属するものであるが、包含層の遺物においても中世の土師質土器が多く確認された。しかし、調査区内全域において均等に確認されたわけではなく、その出土分布には顕著な偏向が見られる。特に5A区内においては一定量を認めることができるが、5B区内ではその量は激減する。

次に示した第96図は、5A区内グリッド毎の総破片数を示したものである。それによると、A27グリッドとB29・30グリッドを中心とする範囲に集中することが分かる。遺構との関連についてみると、A27グリッドではSD2019・SD2048が確認され、B29・30グリッドはSD2055に近接する。これらの遺構はともに区画溝としての性格をもつものであり、これらのグリッド内の包含層における上器の集中は遺構と無関係に捉えることはできない。また、A27グリッド・A30グリッド・B30グリッドにおいては、「上器溜まり」を確認できる。これらも包含層の土器集中分布と一致しており、ある一定の期間、継続的に土器が特定の範囲に投棄されたことを

示唆するものである。

したがって、本報告においては、包含層の土師質土器をグリッド毎に分け、「土器溜まり」の土器については、当該グリッドの土器と並べて図示する。なお、「土器溜まり」の位置は、第96図に示す。

#### 21～26グリッド (第97図1～11)

第97図1～11の土師質土器が出土した。1～5が皿である。1・2は内傾気味に立ち上がる(皿b-1類)。3・4は底部周辺を絞る(皿b-2類)。3は内面底部中央を尖らせる。灯明皿として使用か。5は逆ハ字状(皿c類)。いずれも13世紀代のものである。6～11が杯である。6は丸みをもち内傾気味に立ち上がる(杯B類)。7・8も丸みをもつ(杯B・C-1類)。8は器壁が薄い。9・10は逆ハ字状に立ち上がる(杯C-2・D類)。11は底部から直線的に立ち上がる(杯E類)。

#### 27グリッド (第97図12～24 図版32-1)

第97図12～24の土師質土器が出土した。ほぼA・B27グリッドからのものである。12～19が皿である。12は内傾気味(皿b-1類)、13は逆ハ字状に開く(皿c類)。14は器高が高く内傾気味(皿b-3類)。15は円みをもち逆ハ字状に開く(皿e-1類)。16は直線的に立ち上がる(皿e-2類)。17・18はやや外傾する(皿e-3類)。19は内面に赤色顔料が付着する。20～24が杯である。20は丸みをもち立ち上がる(杯B類)。21・22は底径が小さく直線的に立ち上がる(杯F類)。23・24は底部周辺をやや絞り、直線的に立ち上がる(杯F類)。後掲の土器溜りと同様に27グリッドは15世紀代の杯E・F類と皿c類が多く見られる。

#### 土器溜り① (A27グリッド) (第97図25～39 図版32-1)

第97図25～39の土師質土器が出土した。25～29が皿である。25～27は丸みをもち逆ハ字状に開く(皿e-1類)。25は口縁部に煤。28・29はやや外傾する(皿e-3類)。30～32はやや小さめの杯で、30は底部周辺を絞り(杯E-1類)、31・32は直線的に立ち上がる(杯E-2類)。33・34は直線的に立ち上がり大きく開く(杯F-1類)。35は口縁が外傾する(杯F-2類)。36は底部周辺をヘラ削りし、底面を回転糸切りの後にヘラで丁寧削る(杯F-3類)。他にC29グリッドから1点出土する。類似例として、古志本郷遺跡で杯D-3類として報告される。37～39も杯F類。この土器溜りの土器は杯E・F類と皿e類であり、15世紀代に投棄されたものと考えられる。

#### 28グリッド (第98図1～7)

第98図1～7の土師質土器が出土した。1は内傾し立ち上がる(皿b-1類)。2は逆ハ字状に立ち上がり、内面の底部と体部の境が不明瞭(杯E-2類)。3～5は底部をやや絞り立ち上がる(杯F類)。6は静止糸切り。底部が厚く、古志本郷分類のC-3類に相当。16世紀。7は耳皿である。底面に回転糸切り痕を残す。伊藤分類では5c類に相当し、15世紀代と考えられる。

#### 29グリッド (第98図8～33)

第98図8～33の土師質土器が出土した。8～13は器高の低い皿で、8～10は円みをもち内傾(皿b-1類)、11～13は逆ハ字状に開く(皿c類)。14は円みをもち立ち上がり、口径が大きい(皿b-3類)。15～17は直線的に立ち上がる(皿e-2類)。18～21は円みをもち立ち上がる杯である。18～20は内面の底部と体部の境に凹みがある(杯B・C-1類)。21は逆ハ字状に開く(杯C-2類)。22は内面に煤が付着する。23～27は小ぶりの直線的に立ち上がる杯で、23・24は底部を絞り(杯E-1類)、25は逆ハ字状に開く(杯E-2類)。26・27は器高が低い(杯E-3類)。28～32は口縁が大きく開く杯で、28は直線的に立ち上がり(杯F-1類)、29は底部周辺や底面をヘラ削りする(杯F-3類)。30～32も杯F類。33は口縁を玉縁状に成形する。

### 30・31グリッド(第98図34～39)

30グリッド以南は土師質土器の出土が激減する。第98図34～39の土師質土器が出土する。34・35は直線的に立ち上がり、やや外傾する(皿e-3類)。36は小ぶりの杯で、直線的に立ち上がる(杯E-2類)、37～39は逆ハ字状に大きく開く(杯F-1類)。

### 土器溜り②(A30グリッド)(第99図1～8 図版32-2)

第99図1～8の土師質土器の皿が出土した。個体差はあるが、基本的に外傾しつつ直線的に立ち上がり、内面の底部と体部の境が不明瞭な特徴をもつ。皿d類に分類し、15世紀代のものと考えられる。

### 土器溜り③(B30グリッド)(第99図9～13 図版32-3)

第99図9～13の土師質土器が出土した。9～12は小ぶりの杯で、9～11は底部を絞り(杯E-1類)、12は器高がやや低い(杯E-3類)。13は鉢の底部。また、龍泉窯系青磁碗B3類の口縁が共伴する。青磁の年代より、杯E類は14世紀初頭～15世紀前半に比定できる。

### 34～56グリッド(第100図)

31グリッド以北に比べ、34グリッド以南は包含層の土師質土器が少ない。第100図1～6の土師質土器が出土した。1は皿で逆ハ字状に開き、内面の底部と体部の境が凹む(皿d類)。2～6は杯である。2・3は小ぶりで直線的に立ち上がる(杯E-2類)。4は直線的に立ち上がり、内面の底部と体部の境が凹む(杯D類)。5は直線的に立ち上がり、内面の底部と体部の境が不明瞭(杯F-1類)。6は口縁部が外傾する(杯F-2類)。

第100図7～13は包含層から出土した土師質の鉢である。いずれも内外面ともにハケ目調整、口縁部にナデ調整を施す。7・8は片口鉢。9・10は播鉢。ともに3条の播り目を確認できる。11～13は控鉢。

### 貿易陶磁器(第101図)

第101図1～14は龍泉窯系青磁である。1は碗B1類。外面に鎗蓮弁文。横田・森田編年(横出ほか1978) I-5類(13世紀初頭～14世紀前半)。2・3は碗B2類。外面に片彫りの粗略な蓮弁文。4は碗B3類。ヘラ描きの蓮弁文。2～4は14世紀初頭～15世紀前半。5・6は碗B4類(15世紀後半～16世紀前半)。外面に細い線描きの蓮弁文。7～9は横田・森田編年の杯皿類(13世紀中頃～14世紀初頭)。7は外面に鎗蓮弁を施す。10は杯IV類(15世紀)以降。

全体的に被熱。11・12は碗類。11は小さな玉縁状、12は外反する。13は壺の口縁。14は体部片で内面に雲文を施す。碗I類（12世紀中頃～後半）。15は同安窯系青磁碗I類（12世紀中頃～後半）。内面に樹描による文様を施す。16は白磁。内面に劃花文を施す。17は中国陶磁の天目茶碗。にぶい赤褐色と黒色の釉が混じる。18は褐釉陶器の壺の肩部。19～24は龍泉窯系青磁の底部。いずれも高台内天井部・壺付の一部が無釉。見込み部に19は劃花文、20は貫入、21は菊花の押型文を施す。22は体部に線描きの蓮弁文があり、碗B4類（15世紀後半～16世紀前半）。25・26は白磁の底部。いずれも壺付の釉を削る。横田・森田編年の皿E群（16世紀）。

#### 国内陶器（第103図）

第103図1～4は備前焼の口縁である。1は玉縁状の口縁で間壁編年（間壁ほか1966～68・84）Ⅲ期（14世紀半ば）。2は切断面に漆を塗る。1と同一個体の可能性あり。3は壺。玉縁状の口縁を呈するが、やや扁平化する。間壁Ⅳ期（14世紀後半～15世紀）。4は甕の体部片か。内面にヨコハケ、外面にタテハケの調整を施す。間壁Ⅲ・Ⅳ期（14世紀～15世紀前半）。5～10は瓷器系陶器である。5～7は口縁。5は口縁断面がL字状を呈する。常滑編年（赤羽ほか1995）5形式（13世紀半ば）。6・7は口縁断面がN字状を呈する。常滑編年6～7型式（13世紀後半～14世紀半ば）。8は体部片で、内面に回転ナデとユビオサエ調整が明瞭に残る。常滑編年9～11型式か（15世紀前半～16世紀半ば）。9・10は甕の底部。ともに内面にナデ、外面の底部周辺にユビオサエ、立ち上り部に細かいナデを施す。ともに常滑編年9～10型式か（15世紀前半～後半）。第103図11～14は播鉢の体部片。産地は不明であるが、11・12と13・14とで色調・胎土が異なる。この他に5A区を中心に多くの播鉢片が包含層から出土する。15～18は肥前系陶器である。15～17は灰釉皿で、15は九州陶磁編年（九州近世陶磁学会2000）の1-2期（1594年～1610年代）、16・17はⅡ期（1610～1650年代）に相当する。16は口縁に灰白色の釉による文様を施す。18は小型の碗。Ⅳ期（1690～1780年代）に相当する。

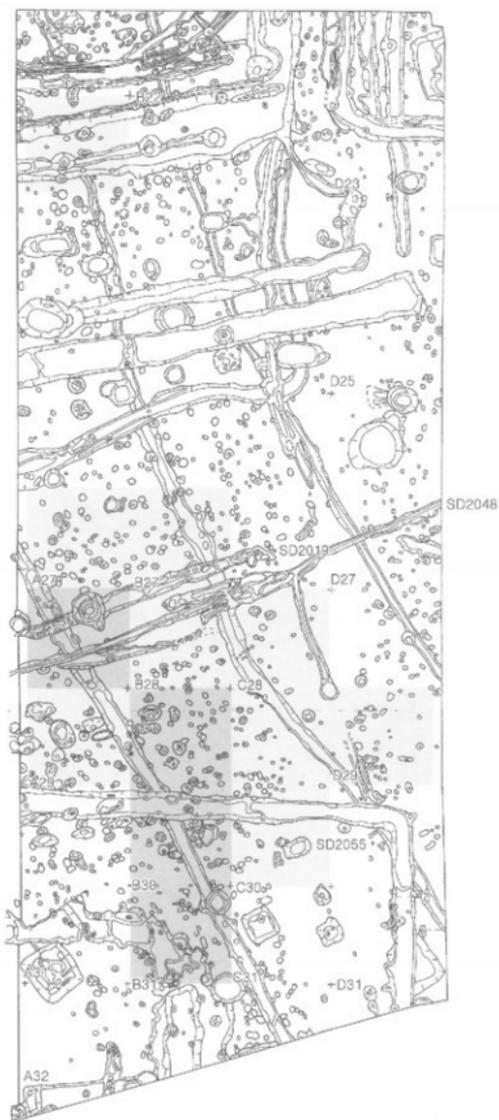
#### 中世須恵器・瓦質土器（第102図）

第102図1は東播系鉢である。口縁部外面をやや肥厚させる。2～6は須恵質の鉢である。2～5は口縁。いずれも外面にヨコナデ、内面にハケメを施す。口縁部はナデ調整。2・3は玉縁状の口縁。7～11は瓦質土器である。7は内面にわずかにハケメを認める。わずかに口縁が玉縁状となる。8は口縁端部に平坦面をつくる。鉢か。9は七宝文のスタンプを施す。同例のものが蔵小路西遺跡からも出土する。10は口縁が「く」字状に屈曲する。直径2cmの円形の窓を開ける。火鉢か。11は平底で外傾気味に立ち上がる。火鉢か。

#### E その他（第104図）

第104図1は短冊形の打製石斧と思われる。2は碗の陸部である。3・4は砥石で、いずれも2面使用している

（高橋 周）



出土土師質土器の総破片数

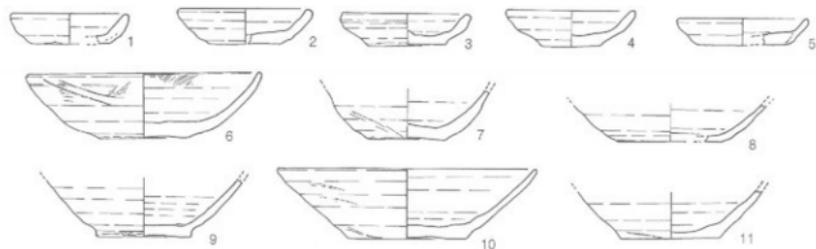
□ 100~499

■ 500~

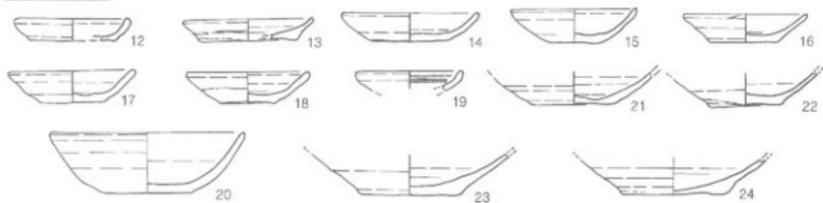
右図の●内は土器涵まり

第96図 遺構外出土の土師式土器分布図 (左図1:250 右図1:300)

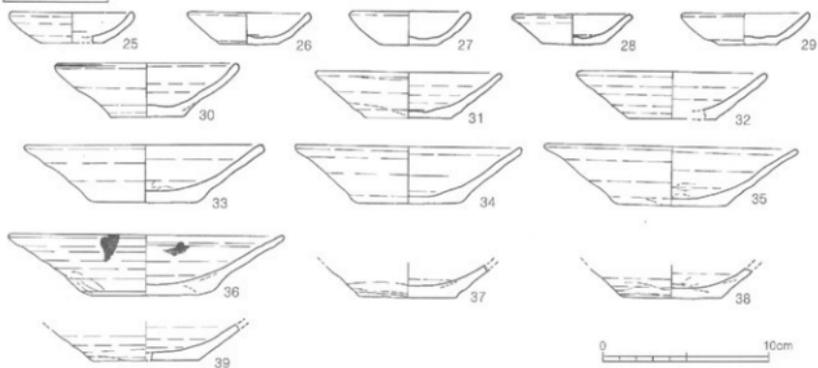
21~26グリッド



27グリッド

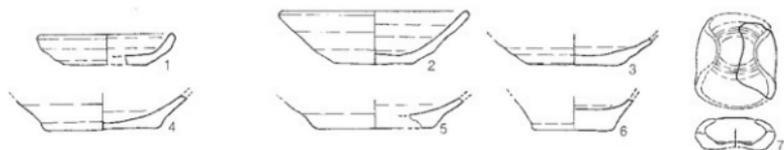


土器溜り①

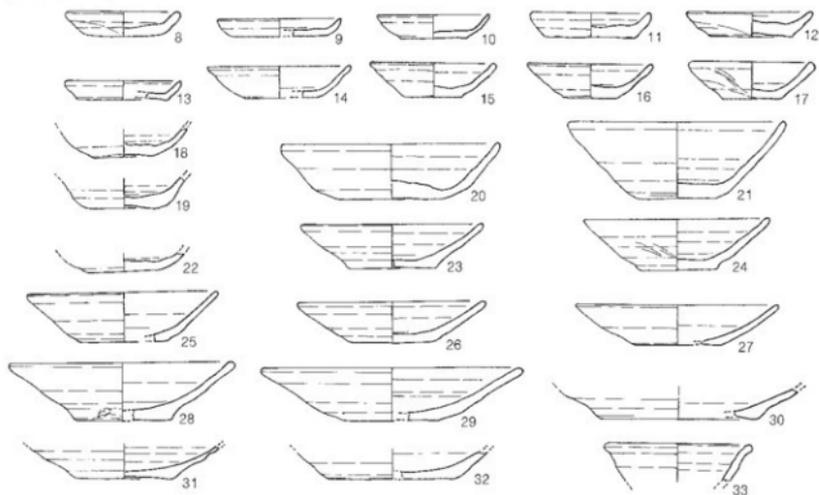


第97図 5区遺構外出土の遺物実測図1 (1:3)

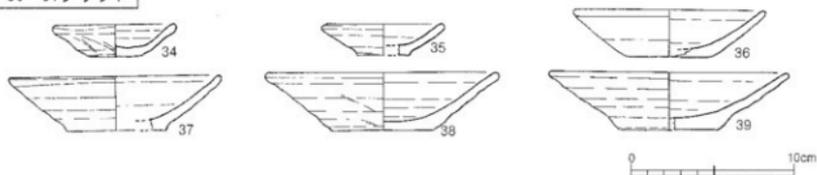
28グリッド



29グリッド

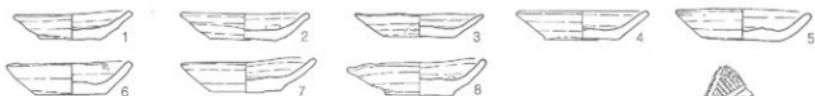


30・31グリッド



第98図 5区遺構外出土の遺物実測図2 (1:3)

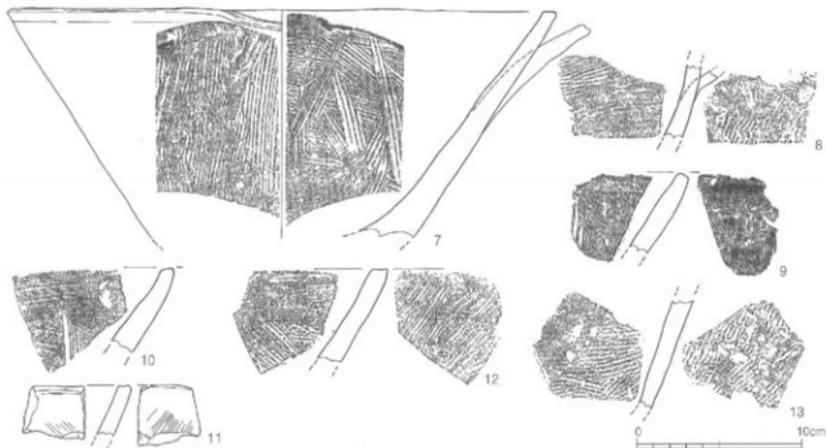
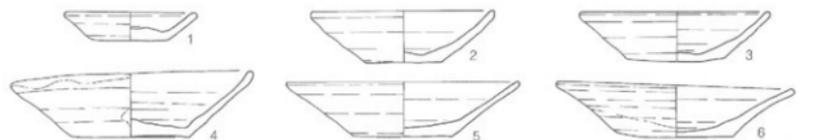
土器溜り②



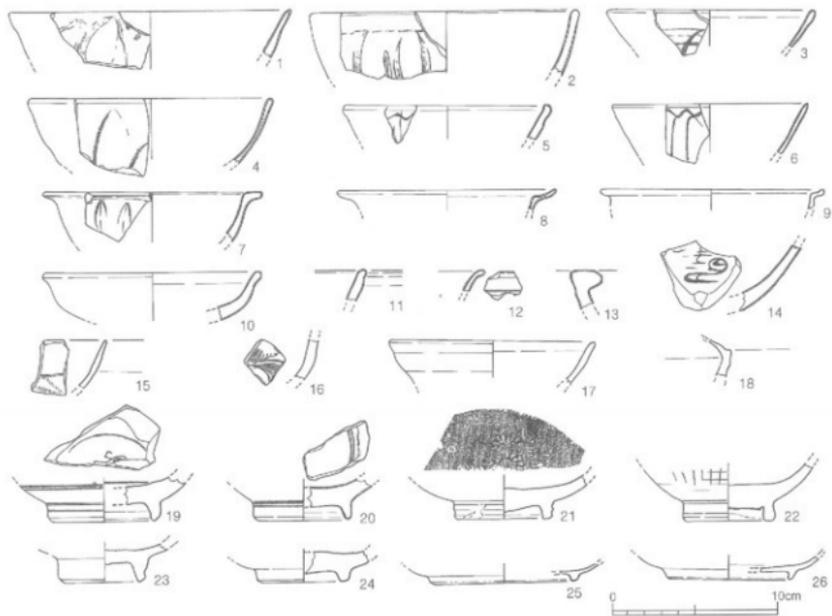
土器溜り③



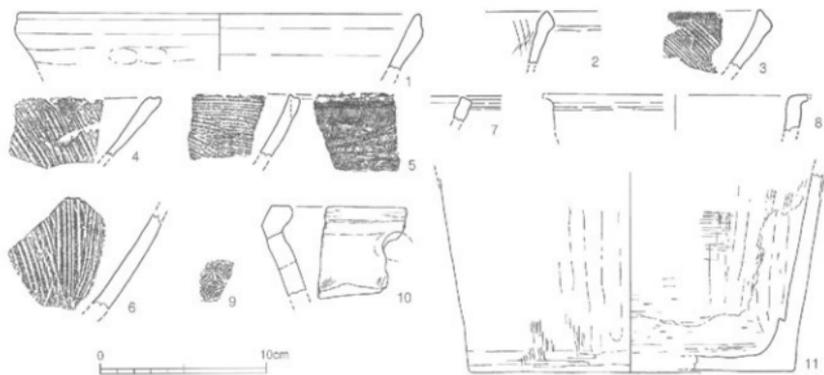
第99図 5区遺構外出土の遺物実測図3 (1:3)



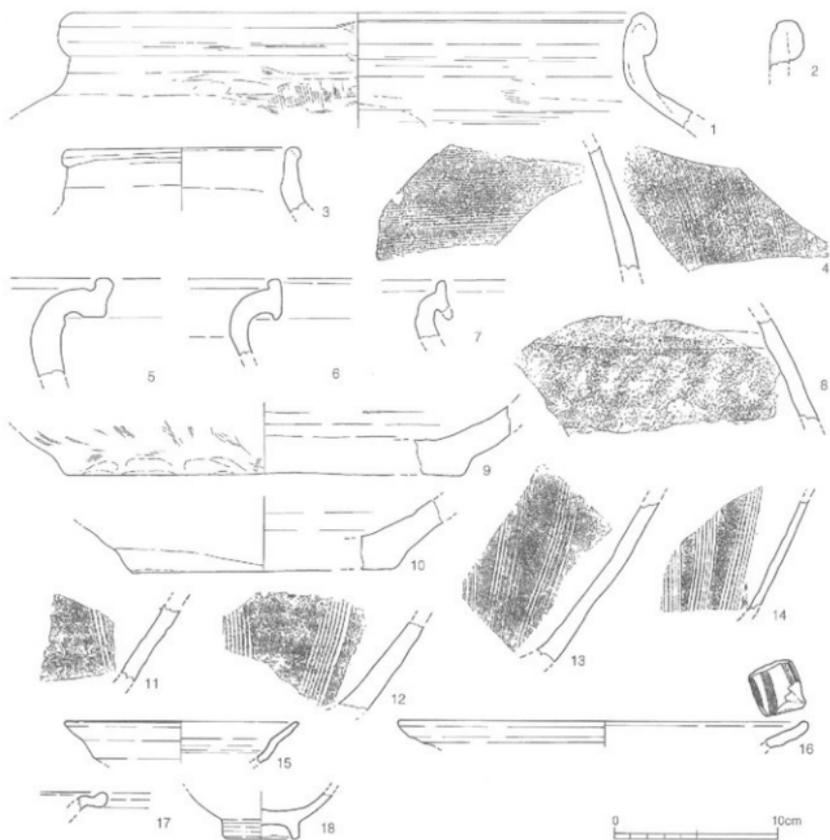
第100図 5区遺構外出土の遺物実測図4 (1:3)



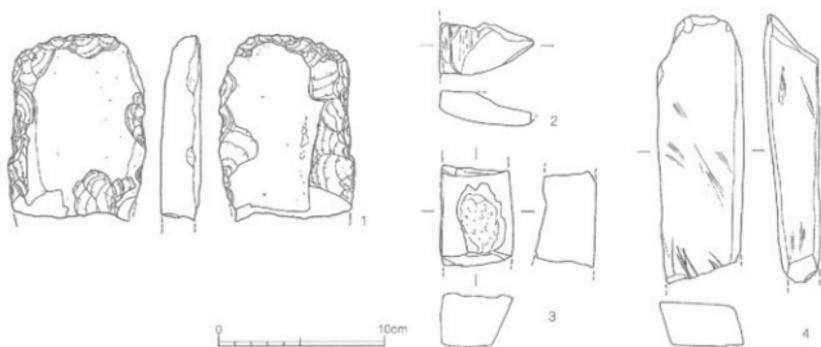
第101図 5区遺構外出土の遺物実測図5 (1:3)



第102図 5区遺構外出土の遺物実測図6 (1:3)



第103図 5区遺構外出土の遺物実測図5 (1:3)



第104図 5区遺構外出土の遺物実測図8 (1:3)



## 第2節 ま と め

### 1 古墳時代

古墳1基と古墳の可能性をもつ周溝を1基確認した。いずれも墳丘は大きく削平されていた。

5号墳から出土した土器は、杯蓋より大谷編年（大谷1994・2001）の出雲4期の可能性が高い。本古墳の南西で確認された築山1～4号墳は、4号墳が出雲3～5期、1～3号墳が出雲4期であることから、5号墳は、1～3号墳とほぼ同時期に築造されたものと考えられる。また今のところ、5号墳より北からは古墳が見つかっていない、上塩冶築山古墳を中心とする古墳群の範囲を考える上で重要な意味を持つ。

円形周溝1は、『築山遺跡Ⅱ』で報告した6号墳と多くの点で類似している。（報告書では溝状遺構の周溝としている）。いずれも標高はほぼ10.2mである。墳丘径はともに約8m、残存する周溝の深さ、幅も近い数値であることから、元々は同じ規格のもとに作られた可能性が高い。6号墳は出土遺物より、7世紀以降のものであることから、円形周溝1もこの時期に作られた小型の古墳の可能性はある。

（高橋誠二）

### 2 古 代

古代の遺構としては、明確な土坑墓2基、土坑墓の可能性が高いものを4基確認した。また、2区からは火葬骨を須恵器の蓋杯に入れて埋葬しているSK2255（『築山遺跡Ⅱ』では土坑墓SK19としている。）が見ついている。

SX2174やSX2183に副葬されていた須恵器と、SK2255の火葬骨の須恵器は大谷編年の出雲7期前後のものであることから、築山遺跡の古代の墓葬を考える上で貴重な資料である。

（高橋 周）

### 3 中 世

本調査区においては、5A区で5棟の抛立柱建物跡、溝15条、土坑34基、井戸1基、不明遺構1、5B区で溝12条、土坑16基を確認した。溝のうち、SD2001・SD2005は道路状遺構と想定され、SD2006・SD2007・SD2055は正方位を意識する方形の区画溝である。特にSD2055は一边約30mと確認した。調査区内の遺構はSD2001・SD2005の道路状遺構の方位（北側でN-14°-W（N-76°-E）、南側でN-35°-W（N-55°-E））と正方位を意識する方形の区画溝（N~-1°-3°~E）とに方位を従うものに分けることができる。出土した土師質土器から、道路状遺構は13～14世紀代、方形の区画溝は15世紀代と考えられる。

出土遺物については、土師質土器が5A区の27～30グリッドを中心に総数7500点以上が出土した。5A区と5B区とで土師質土器の出土量に偏りがあり、5B区の南側ではほとんど出土しない。この傾向は5区における中世の遺構の多寡と同様であり、中世における遺跡の範囲を示唆するものであろう。貿易陶磁器の分布も土師質土器と同様である。具体的には、青磁として龍泉窯系碗（I類2点、B1類5点、B2類8点、B3類1点、B4類4点、D類3点）、

龍泉窯系杯（Ⅲ類1点、Ⅳ類2点）、同安窯系皿3点が出土している。島根県初例となる酒会壺や特殊品1点もある。白磁としては四耳壺や端反皿E群、壺などが出土している。この他に、褐釉陶器、天目も出土する。そして、国内陶器は古瀬戸の天目、山茶碗、東播系や備前焼の甕・鉢、甕系系陶器の甕・鉢、肥前系陶器の皿などが出土している。特に酒会壺について、国内の出土例としては鎌倉や守護所に比定される遺跡などからのものが多く、本調査区における出土は周辺遺構が塩治氏と関連するものであることを示唆している。

また、5A区において中世の呪符木簡が出土した。陰陽道的な性格の強い木簡である。ほぼ真北を向いた状態で確認されたことも注目される。調査区付近には中世において神東（塩治）八幡宮が所在したとされ、木簡は八幡宮の供僧によるものである可能性が高い。

神東八幡宮関連文書である『富家文書』<sup>1)</sup>から、中世における調査区周辺は、八幡宮の諸施設や屋敷が複数存立し街区的な景観をなしたと考えられる。特に正方位を意識する中世の遺構は、周辺の壽昌寺遺跡や角田遺跡においても確認されており、周辺に広がることは注目される。本調査区における中世の遺構は、神東八幡宮の盛衰と一致しており、その関連遺構である可能性が高い。また、八幡宮を勧請した塩治氏との関連も考えられる。5A区の方形区画の溝周辺からは、古志本郷遺跡出土の土師質土器の底部にヘラケズリ調整が見られる杯と類似するものが出土しており、出雲平野の他の中世遺跡との関連を今後検討する必要がある。（高橋 周）

#### 註

- 1) 「18 明仏願状」『富家文書』古代文化叢書3 1997 島根県古代文化センター

#### 参考文献

##### 須恵器

- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会  
大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会。

##### 子持壺

- 柳浦俊一 1993 「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会

##### 土師質土器

- 『蔵小路西遺跡』——一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2—1999  
建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会  
『古志本郷遺跡』 I 一斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI—1999  
建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

山陰中世土器検討会 2006 『第5回山陰中世土器検討会資料集 山陰における中世前期の諸  
様相—伯耆・出雲を中心として—』

#### 耳皿

伊藤正人 2000 「耳皿ノート」『中近世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会

#### 常滑

赤羽一郎・中野晴久 1995 「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』

#### 備前

間壁彦彦・間壁霞子 1966～68・84 「備前焼研究ノート」1～5『倉敷考古館研究集報』1・2・  
5・18号 倉敷考古館

乗岡実 2005 「備前焼の編年について」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

山陰中世土器検討会 2008 『第7回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における備前焼』

#### 肥前

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』

#### 瓦質土器

佐藤浩司 2006 「スタンプ文を有する瓦質土器の展開」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生  
古希記念論集刊行会

#### 貿易陶磁器

横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心  
にして—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

日本貿易陶磁研究会 2002 『日本貿易陶磁研究会中国大会資料集 中世後期における貿易  
陶磁器の様相』

#### 中世須恵器

山陰中世土器検討会 2003 『第3回山陰中世土器検討会資料集 中世須恵器の生産と流通—  
山陰地方を中心として—』

# 第5章 考察

## 第1節 築山遺跡5区出土の呪符木簡について

### 1 木簡の出土状況と形状

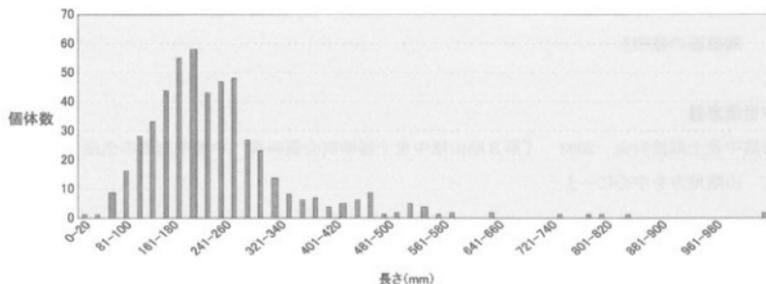
本木簡は5A区C23グリッドのSK2035から出土した。出土遺構は長径約2.4m、短径約1.3m、深さ約1mの不整な楕円形をした素掘りの土坑である。相当量の湧水が認められることから、井戸・水溜の可能性はあるが、正確な機能は不明である。本木簡の方位はN-2°-Wであり、木簡の表面が北面する状態で出土した。周辺には正方位を意識した方形の区画溝SD2006・SD2007・SD2055が確認されることから、それらの遺構との関連も注目される。また、本木簡には節抜きの竹筒が副えられていた。

土坑内の共存遺物は細片で量も少なく、直接的に年代を決定することは難しい。ただし、土坑上面を覆す溝から15世紀代の土師質土器が出土しており、少なくとも、土坑の年代の下限はその時期に考えることができる。

本木簡の量尺は長さ771mm、幅73mm、厚さ10mmを測る。上端部が欠損するため、その正確な長さは不明である。樹種はスギ属スギである。板目材で、下端を切断し、両側面を表裏から細かく面取りし整形する。その形状は人形に似るが、上端が折損するため、正確な形状は不明である。両側面は「南無〜星」の側面間を最大幅にとり、「**𠄎**」字の6cm上で最も細くなる。出土時には、その細まる部分が折れた状態で確認された。明瞭な切り込みが認められないため、埋納後の土圧により折れたものと考えられる。

本木簡について注目されるのは、その長さで形状である。以下に示した表は全国出土の呪符木簡の長さを集成したものであるが(註1)、呪符木簡は一般的に30cmを越えるものは少ない。殊に本木簡に関わる「蘇民将来」「天形星」などの字句を記す木簡はすべて30cm以下のもので

表5 呪符・物忌木簡全長一覧



ある。

60cm以上の呪符木簡については、多くの場合、物忌札に類するものである。『師守記』康永4年(1345)条に「札様 長三尺許也 楯也」と物忌札について触れた記述がある。物忌札などの長大な木簡は、人の目に示すことが前提となるものであり、77cm以上を測る本木簡の性格についても同様の可能性を指摘できるのではないかと考える。

また、本木簡の形状も同種の呪符木簡において類例のないものである。ただし、両側面に2か所の切り込みを入れる点においては、新潟県・下沖北遺跡(『木簡研究』25号)出土の蘇民将来木簡が本木簡と類似する。また、呪符木簡以外での類例については、松江市の原の前遺跡出土の人形代木製品をはじめとして、古代・中世の人形にいくつかの類例がある(註2)。後述するが、本木簡の内容は陰陽道との関わりが深く、その形状は陰陽道の思想に起因する可能性が高いと思われる。

## 2 釈文

(ママ)

□ 九々八十一  
南無牛頭天王  
天□ 星  
[刑力]

冒頭に梵字で「アピラウンケン」、双行で「ウン」「キリーク」と記す。「キリーク」については、意味を通じないが、そのまま釈読した。続いて、「南無牛頭天王」と記し、双行で「九々八十一」「天□[刑力]星」とする。

## 3 木簡の内容

本木簡は中央に「南無牛頭天王」の字句を配することから、牛頭天王への帰依・祈願を図ったものと考えられる。しかしながら、この種の呪符木簡においては、牛頭天王説話に基づく「蘇民将来」の字句を用いることが一般的であり、「牛頭天王」と記す木簡は全国で3例を数えるのみである。その1つが草戸千軒遺跡(広島県)で出土したもので、折敷の底板に観世音菩薩・八幡大菩薩とともに併記される(註3)。また、腰廻遺跡(新潟県)から「蘇民将来」木簡とともに出土する(4)。未報告ではあるが、塩津港遺跡(滋賀県)出土の平治元年(1159)の紀年を記す起請文札に「大■北野祇園五頭天王」とある(註5)。したがって、本木簡を「蘇民将来」木簡と同様なものと捉えることができるのか、更に慎重な検討をする必要がある。

本木簡の内容として注目されるのは、「牛頭天王」と「天刑星」「九々八十一」などの字句が併記されることである。呪符木簡のうち、個々の字句を記す木簡は珍しくないが、併記するものは初例である。

「牛頭天王」は本来インドの神で、中世以降、行疫神の本元として各村落で信仰されるようになるが、史料上に信仰の対象として表れるのは13世紀以降である。一方で、早くから防疫神として位置づけられたのは「天刑星」である。「天刑星」は唐代の書を初見とする中国の神で

あり、12世紀後半の繪巻物には疫鬼である牛頭天王を食する神として見え、特に密教僧の疫病に対する祈祷法に天刑星の經典が用いられた。天形星は大日如來の変化としても捉えられ、天形星と大日如來の種字を併記する中世の呪符木簡は珍しくない。したがって、少なくとも12世紀代には「牛頭天王」と「天刑星」とは対称的な存在として捉えられていたことが分かる。

「牛頭天王」と「天刑星」とを同一とする思想は、『竈竈内伝金烏玉兔集』（以下、『竈竈内伝』とする。）を初見とする。『竈竈内伝』は牛頭天王信仰に基づいて日時・方角の吉凶などを集大成した陰陽道の書で、14世紀末には成立していたと考えられている。この『竈竈内伝』の成立を契機として、牛頭天王信仰が広がったとの指摘がある（註6）。

本木簡は以上のような「牛頭天王」と「天刑星」との融合を端的に表した内容であると言える。この融合に際しては密教僧と陰陽道とが関連したとの指摘があり、本木簡における真言密教の根本仏である大日如來を示す「アピラウンケン」や陰陽道の呪句である「九々八十一」の字句の併記は、その融合の性格を示唆するものである。先述のように、本木簡出土の遺構は15世紀代を下限として考えられ、本木簡の内容は、『竈竈内伝』の成立とほぼ同時代の牛頭天王信仰の様相を知ることができる貴重な資料と言える。

#### 4 木簡の背景

出雲地域における牛頭天王信仰の嚆矢は、鱒淵寺に現存する牛頭天王像である。その製作方法から平安時代後期ごろの作と推定される。牛頭天王の史料上の確実な初見が『本朝世紀』久安4年（1148）3月29日条で、これらの木像の製作時期は祇園御霊会が牛頭天王の祭礼として恒例化してくる時期とほぼ重なる。ただし、12世紀の密教の史料に乾闥婆王の姿形として牛頭を頭に戴くという記述（註7）があり、平安時代後期には牛頭天王の姿形は未だ明確化していなかった可能性もある。牛頭天王信仰の中心となった祇園感神院は延暦寺の末寺であり、鱒淵寺も同様にその末寺であることから、天台僧を通じた信仰の広がりを考えることができる。

先述したように、本木簡は14～15世紀のもと考えられるが、調査区周辺には木簡と同時期に神東（塩治）八幡宮が所在したと推定されている。『富家文書』によると、14世紀半ばには、八幡宮の施設として大宮・若宮・御堂・舞殿・御供所・供僧六人屋敷・舞人屋敷などがあり、また、別当屋敷・神主屋敷などの複数の屋敷の名称を知ることができる（註8）。木簡出土の遺構周辺においても複数の正方位を意識した方形の区画溝が確認され、13～15世紀代の貿易陶磁器や備前・瓷器系などの国内陶器を含めて多くの土師質土器が出土することから、これらの遺構は八幡宮周辺に展開する施設もしくは屋敷の一部である可能性が高い。本木簡もほぼ正方位に北面して出土することから、方形の区画溝に関連すると思われる。また、木簡出土の調査区以南において中世の遺構がほぼ見られないことから、木簡の出土地点は、八幡宮の所在した神東村の境界に位置し、境界祭祀の場として機能した可能性がある。本調査区において、2条の溝が平行する道路状遺構を確認し、その道は南へのびる。木簡出土も遺構は、その道に近接することも注目される。

『富家文書』応永33（1426）年3月21日「某昌本寄進状」には、「高貞御社の御崇り」によ

る寄進の記述が見える。中世において、「崇り」は主に陰陽師のト占により判断される場合が多く、15世紀前半には神東八幡宮周辺には陰陽道の知識を有する者がいたことを窺わせる。

本木簡は陰陽道や密教的な内容を含み、出土状況は正方位を意識したもので正方位の区画溝や道路状遺構とも関連する可能性が高いことから考えると、神東八幡宮の供僧としての陰陽師法師が関与した可能性を想定することができる。

#### 註

- 1 集成に際しては独立行政法人奈良文化財研究所「木簡データベース」(<http://www.nabunken.go.jp>)を利用した。なお、集計にあたっては、完形、折損などに拘らず、「現状の長さ」を単純にカウントした。
- 2 島根県教育委員会『原の前遺跡』1995年
- 3 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1980 『草戸千軒町遺跡—第28・29次発掘調査概要』
- 4 『木簡研究』 23
- 5 『木簡研究』 30
- 6 牛頭天王信仰については、今堀太逸「牛頭天王と蘇民将来の子孫」(同『本地垂迹信仰と念仏—日本庶民仏教史の研究』所収 1999 法蔵館)を参照とした。
- 7 『澤妙』巻七
- 8 貞治四年五月「塩治八幡宮神人宮人等申状案」、正平十二年八月十九日「明仏護状」(島根県古代文化センター編『富家文書』)

5区出土遺物観察表1

検出番号	出土位置	名称	口径 cm	高さ cm	底径 cm	調様・手法の特徴	胎土/焼成	色澤	備考
第63図1	5号墳	土師器 高杯	(18.4)	13	13.4	杯内外面: 回転ナデ 脚柱内面: ケズリ 脚柱部: 回転ナデ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5R(7/6) にぶい褐色	赤色顔料塗布 裏化
第63図2	5号墳	土師器 高杯	(15)	12.4	(11.9)	杯内外面: 回転ナデ 脚柱内面: ケズリ 脚柱部: 回転ナデ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5R(7/3) にぶい褐色	赤色顔料塗布
第63図3	5号墳	土師器 高杯			(12.4)	脚柱外面: 旋方向の ミガキの付いたナデ 脚柱内面: ケズリ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5R(6/4) にぶい褐色	赤色顔料塗布
第63図4	5号墳	土師器 高杯	(18.6)	16	(13.8)	深縁部: 回転ナデ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10R(8/4) 浅黄褐色	裏化
第63図5	5号墳	土師器 高杯	(17.8)			杯部: 回転ナデ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10R(8/4) 浅黄褐色	裏化
第63図6	5号墳	土師器 高杯			14.2	脚柱部: 回転ナデ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10R(8/3) 浅黄褐色	裏化
第63図7	5号墳	須恵系 杯蓋	12.8	4.6		内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(5/) 灰色	出土編年4期
第63図8	5号墳	須恵系 杯蓋	13	4		内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(5/) 灰色	出土編年4期
第63図9	5号墳	須恵系 杯蓋	(13)			内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(5/) 灰色	出土編年4期
第63図10	5号墳	須恵系 杯蓋	(13)			内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(5/) 灰色	出土編年4期
第63図11	5号墳	須恵系 杯蓋	11	4.6		内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(5/) 灰色	
第63図12	5号墳	須恵系 杯蓋	10.8	6.7		内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(6/) 灰色	
第63図13	5号墳	須恵系 杯蓋	(12)			口縁: ノコメ 脚部: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 5Y(8/1) 灰色	自然釉がかかる。
第63図14	5号墳	須恵系 杯蓋				内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(6/) 灰色	
第64図1	円形周溝1	須恵系 杯蓋	11.4			内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 N(6/) 灰色	
第65図1	S<K2174	須恵系 杯蓋	13.8	2.7		内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 5Y(8/1) 灰色	
第65図2	S K 2183	須恵系 高台付杯	12.1	7.4	3.8	内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 5Y(8/1) 灰色	内面に黒い斑の痕跡あり。
第65図3	S K 2210	須恵系 杯蓋				外周: ケズリ 内面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面 5Y(8/1) 灰色	
第71図1	S K 2018	土師器 皿	7.6	2.3	3.7	内外面: 回転ナデ 底面: 回転系切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (C10R7/3)	完存 皿b-2類
第71図2	S < 2018	中世須恵系 鉢	-	-	-	内面: ナデ、コノハ 外面: ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内面: 灰白色 (5Y7/1) 外面: 灰色 (10Y4/1)	
第71図3	S K 2021	須恵系 鉢	-	-	(32.0)	内面: ナデ 外面: ナデ、ユビオ ヤニ	胎土: 密 焼成: 良好	内面: 灰色 (7.5Y6/1) 外面: 暗灰色 (5Y3/)	底部のみ残存
第71図4	S K 2022	土師器 鉢	-	-	(5.4)	内外面: 回転ナデ 底面: 回転系切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	鉢b-3類
第71図5	S < 2027	土師器 皿	(7.2)	2.1	(4.6)	内外面: 回転ナデ 底面: 回転系切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (C10R6/3)	皿d類
第71図6	S K 2027	土師器 鉢	-	-	(5.4)	内外面: 回転ナデ 底面: 回転系切り	胎土: 密 焼成: 良好	内面: 灰褐色 (7.5Y6/2) 外面: にぶい褐色 (7.5Y7/3)	鉢c類
第71図7	S K 2027	土師器 鉢	-	-	(6.0)	内外面: 回転ナデ 底面: 回転系切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	灰黄褐色 (C10R6/2)	鉢c類
第71図8	S < 2027	土師器 鉢	-	-	(5.0)	内外面: 回転ナデ 底面: 回転系切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	灰黄褐色 (10YR6/2)	鉢c-2類
第71図9	S K 2027	土師器 鉢	(12.6)	4.3	(4.8)	内外面: 回転ナデ 底面: 回転系切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい褐色 (C10R7/2)	鉢A-3類

棟号番号	出工位置	種 類	幅 cm	高さ cm	図解・手注の特徴	施工/焼成	色 展	備 考	
第71図10	S K 2027	土師質 坏	(12.4)	4.1	5.7	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R7/3)	坏C-2類
第71図11	S K 2027	土師質 坏	(13.6)	-	-	内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内面: にぶい黄褐色 (10R7/2) 外面: にぶい褐色 (7.5R6/3)	内面に煤付着 坏A・B類
第71図7	S K 2027	土師質 坏	(13.0)	-	-	内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R7/2)	坏A・B類
第71図13	S K 2027	土師質 坏	-	-	5.8	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R6/3)	坏C-2類
第72図1	S K 2028	土師質 坏	-	-	(8.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	坏C・D類
第72図2	S K 2030	土師質 坏	(8.0)	1.8	(5.4)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R7/3)	坏C類
第72図3	S K 2030	土師質 坏	-	-	(4.8)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	洗黄褐色 (7.5R6/3)	坏C類
第72図4	S K 2030	土師質 坏	-	-	(8.6)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	坏D類
第72図5	S K 2030	土師質 坏	-	-	(7.2)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	内面に煤付着・粘熱痕 坏D類
第72図6	S K 2030	黄磁 (肥原系系) 素面器	-	-	(12.0)		胎土: 緻密 焼成: 良好	胎土: 灰白色 (5/7) 釉: オリーブ灰色 (2.5Y6/7)	底部1/6残存
第72図7	S K 2030	黄褐色陶器 鉢	-	-	-	内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内面: 灰色 (5R6/7) 外面: 灰褐色 (7.5Y4/2)	口縁部のみ残存 滑潤断面5-6a形式
第72図8	S K 2030	黄褐色陶器 鉢	-	-	-	外面: ナデ 内面: ナデ, スリ目	胎土: やや粗い 焼成: 良好	外面: にぶい赤褐色 (5R6/3) 内面: 灰褐色 (2.5R4/2)	9条1單位の入り目 調整断面4V形
第73図2	S K 2036	土師質 坏	12.8	4.0	7.0	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	内面: にぶい褐色 (10R7/4) 外面: 洗黄褐色 (10R6/3)	坏C-2類
第73図4	S K 2040	土師質 坏	(8.0)	1.6	(5.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	坏b-1類
第73図5	S K 2040	土師質 坏	-	-	(5.2)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	洗黄褐色 (10R6/3)	内面に煤付着 坏C・D類
第74図1	S K 2044	土師質 坏	(7.6)	-	-	内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R7/3)	坏b類
第74図2	S K 2044	土師質 坏	(13.5)	3.4	(5.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	内面: にぶい黄褐色 (10R7/2) 外面: 洗黄褐色 (10R6/1)	坏b類
第74図3	S K 2045	土師質 坏	-	-	-	内外面: ハケメ	胎土: 緻密 焼成: 良好	内外面: 黄褐色 (5R6/6)	
第74図4	S K 2045	土師質 坏	(8.1)	1.6	(4.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	内面: にぶい黄褐色 (10R7/3) 外面: 洗黄褐色 (10R6/2)	坏b-3類
第74図5	S K 2045	土師質 坏	(7.6)	1.5	(4.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	内面: にぶい褐色 (7.5R7/4) 外面: にぶい黄褐色 (10R7/3)	坏b-1類
第74図6	S K 2045	土師質 坏	-	-	(5.2)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 緻密 焼成: 良好	内面: にぶい褐色 (7.5R7/3) 外面: にぶい黄褐色 (10R7/2)	内面に煤付着 坏A類
第74図7	S K 2045	土師質 坏	(12.2)	-	-	内外面: 回転ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R6/4)	内面に煤付着 粘熱による変色あり 坏A・B類
第74図8	S K 2045	瓦質 鉢	-	-	-	内面: ナデ, ヨコハ 外面: ナデ	胎土: 緻密 焼成: 良好	洗黄褐色 (2.5Y5/2)	口縁部残存

標頭番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	直径 cm	調整・手法の特徴	胎土/規成	色調	備考
第74図10	S K 2047	十郎貫 杯	10.2	3.3	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/3)	完存 杯E-1類
第74図11	S K 2047	十郎貫 杯	10.4	3.2	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/3)	完存 杯E-1類
第75図1	S K 2050	白磁 四角杯	12.0	-	-		胎土：緻密 規成：良好	灰白色 (7.5Y7/1)	口縁1/6残存
第75図2	S K 2050	深身西 蓋杯	-	-	-	内面：回転ナデ、し ぼり 外面：回転ナデ	胎土：密 規成：良好	灰色 N(5)	脚部のみ残存
第75図3	S K 2056	土師貫 杯	-	-	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	杯E類
第75図4	S K 2056	土師貫 杯	-	-	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/4)	底部内面に窪付着 杯F類
第75図5	S K 2057	土師貫 杯	(7.8)	2.2	4.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	内面：にぶい褐色 (7.5YR7/4) 外面：褐色 (5YR7/6)	口縁の一部に被熱痕 皿E-2類
第75図6	S K 2057	土師貫 杯	(8.2)	2.3	3.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 規成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	皿E-2類
第75図7	S K 2060	土師貫 皿	(7.4)	2.0	(3.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	皿E-1類
第75図8	S K 2060	土師貫 皿	(7.6)	2.2	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 規成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	皿E-2類
第75図9	S K 2060	土師貫 杯	-	-	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (7.5YR6/4)	杯B類
第75図10	S K 2060	土師貫 杯	(14.0)	2.1	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/3)	杯F類
第75図11	S K 2061	十郎貫 杯	-	-	(6.4)	内外面：回転ナデ、 ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 規成：良好	内面：にぶい黄褐色 (10YR7/3) 外面：褐色 (10YR5/1)	内面に窪付着 杯F類
第76図1	S K 2066	土師貫 皿	7.8	1.7	4.9	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	内・外面に被熱痕 皿C類
第76図2	S K 2066	土師貫 皿	(7.6)	1.4	3.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り、 ナデ	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/4)	外底部中央に被熱痕 皿C類
第76図3	S K 2066	土師貫 皿	7.9	2.1	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	完存 内面に被熱痕 皿C類
第76図4	S K 2066	土師貫 皿	(8.3)	2.0	5.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	内面に被熱痕 皿C類
第76図5	S K 2066	土師貫 杯	13.1	4.1	5.2	内外面：回転ナデ、ナデ 底部：回転糸切り、ナデ	胎土：密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/4)	内面・外面に被熱痕 杯A-3類
第76図6	S K 2066	土師貫 杯	13.6	4.0	5.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/4)	内面・外面に被熱痕 杯A-3類
第76図7	S K 2066	土師貫 杯	12.9	4.5	6.1	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/4)	内面に被熱痕 杯A-3類
第76図8	S K 2066	土師貫 杯	12.8	4.3	5.9	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 規成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	外面に被熱痕 杯A-3類
第76図9	S K 2069	山形総 碗	(9.4)	-	-	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (2.5Y7/3)	口縁部に輪かかると
第76図10	S K 2070	土師貫 杯	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 規成：良好	浅黄褐色 (10YR6/3)	杯A類
第76図11	S K 2070	土師貫 杯	-	-	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 規成：良好	内面：浅黄褐色 (2.5Y7/3) 外面：灰白色 (2.5Y9/2)	内面に窪付着 杯A類

種別番号	出土位置	形 様	口径 c.m	胴径 c.m	底径 c.m	調整・手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第76図12	S K 2070	土師質 杯	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：褐色 焼成：良好	灰白色 (2.577/2)	杯B・C類
第76図13	S K 2070	土師質 杯	—	—	(6.0)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：褐色 焼成：良	にぶい黄褐色 (2.578/3)	杯B類
第76図14	S K 2070	土師質 杯	—	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良	にぶい黄褐色 (2.578/4)	
第76図15	S K 2070	土師質 杯	(28.8)	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良	灰白色 (2.579/2)	
第76図16	S K 2070	土師質 鉢	—	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良好	内面：黄褐色 (2.577/4) 外面：灰白色 (2.576/2)～ 黄褐色 (2.579/3)	口縁外面に浅い凹線
第76図17	S K 2070	中国産磁器	—	—	(3.2)	白磁土製 伊万里	胎土：秘密 焼成：良好	釉：灰白色 (7.579/1) 胎土：灰白色 (2.578/1)	墓台臺代の釉を剥る
第77図1	S K 2071	土師質 皿	—	—	(5.0)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.578/6)	皿b類
第77図2	S K 2071	土師質 皿	—	—	(6.4)	外面：肉転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：密 焼成：良	内面：オリーブ褐色 (7.573/1) 外面：褐色 (7.578/5)	内外面に濃熱痕 杯D類
第77図3	S K 2072	土師質 皿	6.6	1.3	3.4	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：秘密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.577/3)	残存 皿s類
第77図4	S K 2072	土師質 皿	(13.8)	4.6	(6.0)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：密 焼成：良	浅黄褐色 (2.578/3)	牙A-1類
第77図5	S K 2076	土師質 皿	—	—	(7.6)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：密 焼成：良	灰白色 (2.576/2)	杯A類
第78図1	S E 2068	土師質 皿	(7.1)	1.4	(4.0)	外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：秘密 焼成：良好	内面：にぶい褐色 (2.576/4) 外面：褐色 (2.576/6)	皿d類
第78図2	S E 2068	土師質 皿	(7.4)	1.5	(5.0)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：秘密 焼成：良好	灰黄褐色 (2.576/2)	内面に保存着 皿c類
第78図3	S E 2068	土師質 皿	(7.2)	1.7	(4.2)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.577/4)	内面に保存着 皿b-2類
第78図4	S E 2068	土師質 皿	—	—	(6.2)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：秘密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (2.577/4)	杯B類
第78図5	S E 2068	土師質 鉢	(16.0)	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.576/4)	内面に濃熱痕
第79図1	S D 2005	土師質 杯	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	内面：褐色 (7.574/5) 外面：黄褐色 (7.577/5)	杯C-1類
第80図1	S D 2003	土師質 杯	14.0	3.5	7.0	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.574/3)	杯D類
第80図2	S D 2006	土師質 皿	8.0	1.8	4.9	内外面：回転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：粗い 焼成：良	にぶい黄褐色 (2.577/2)	皿b-3類
第80図3	S D 2006	土師質 皿	8.1	1.9	4	内外面：肉転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	褐色 (2.578/6)	皿b-1類
第80図4	S D 2006	土師質 皿	—	—	(6.4)	内外面：肉転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.578/6)	杯D類
第80図5	S D 2006	飛鳥系陶磁 器	—	—	(12.3)	内面：ナデ 外面：ナデ、ニヒオ サエ	胎土：密 焼成：良好	内面：灰色 釉 外面：にぶい黄色 (2.576/3)～ 黄褐色 (2.575/3)	
第80図6	S D 2007	備前焼	—	—	—	内面：肉転ナデ、ヨ ハケ 外面：肉転ナデ、ク アエ	胎土：密 焼成：良好	内面：黄灰色 (2.576/1) 外面：黄褐色 (2.573/1)	伴野のナ模赤 瓦交編年表・IV期
第81図1	S D 2019	土師質 杯	12.2	4.9	5.7	内外面：肉転ナデ 底形：肉転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良	内面：にぶい褐色 (7.577/3) 外面：灰褐色 (7.578/2)	杯A-1類
第82図2	S D 2019	土師質 杯	—	—	(6.4)	内外面：肉転ナデ 底形：不明瞭	胎土：やや粗い 焼成：良	灰白色 0/0 ～灰色 04/0	杯C・D類

神田番号	土台位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	形状・手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第82図3	S D 2019	土師質 杯	—	—	(4.4)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良	黄灰色 (2.5R/1)	杯b・c類
第82図4	S D 2019	土師質 杯	—	—	(5.6)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良	灰色 (5R/1-4/1)	内面片込み部に土を 染む 杯E・F類
第82図5	S D 2019	土師質 杯	—	—	(6.2)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R/7.4)	杯b・c類
第82図7	S D 2031	土師質 杯	7.4	1.9	4.3	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい褐色 (10R/7.2)	杯a-1類
第82図8	S D 2031	土師質 杯	7.0	2.0	3.8	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R/7.3)	杯e-1類
第82図9	S D 2031	土師質 杯	4.6	3.1	6.8	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R/7.4)	杯F-1類
第82図10	S D 2031	大羽戸 天目茶碗	—	—	(6.4)	回転ナデ 高台部有り出し	胎土: 密 焼成: 良好	胎: 黒色 (10R/2/1) 胎土: 灰白色 (5R6.5-8/7)	/ 6 残存 天目c類
第82図11	S D 2031	中国白磁 皿	(13.0)	—	—	—	胎土: 密 焼成: 良好	胎: 灰白色 (10R6.5/1) 胎土: 灰白色 (2.5R/7.1)	白磁器台 皿IX類
第82図12	S D 2040	土師質 杯	—	—	(6.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R/7.3)	杯b類
第83図1	S D 2055	土師質 杯	—	—	(6.8)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	褐色 (7.5R/7.6)	杯b類
第83図2	S D 2055	土師質 杯	(12.0)	2.6	(6.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (7.5R/7.4)	杯c類
第84図1	P 2501	国産陶器 糸入の菓子	—	—	—	回転ナデか	胎土: 密 焼成: 良好	灰色 (N4) ~ 褐色 (10R6.4/4)	/ 4 残存
第84図2	P 2816	土師質 皿	(8.8)	1.3	(4.6)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R/7.3)	皿b-3類
第84図3	P 2908	土師質 皿	(8.1)	1.3	(5.4)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R/7.4)	皿b-3類
第84図4	P 2401	土師質 皿	(7.8)	1.6	(5.0)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい褐色 (7.5R/7.3)	皿c類
第84図5	P 2604	土師質 杯	—	—	(4.9)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 良好	にぶい黄褐色 (10R/7.4)	外面に煤付 杯A・B類
第84図6	P 2905	土師質 杯	—	—	(4.6)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 不良	内面: 淡黄色 (2.5R/3) 外面: 灰白色 (2.5R/2)	杯A・B類
第84図7	P 2907	土師質 杯	—	—	(6.4)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: 密 焼成: 不良	にぶい黄褐色 (10R6.5/3)	杯A・B類
第84図8	P 2821	土師質 杯	—	—	—	内外面: ナデ、ハケ目	胎土: 密 焼成: 良	淡黄褐色 (10R/7.4)	口縁のみ残存
第85図1	S < 2139	須恵系 杯	(13.3)	—	—	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 N (b/) 灰色	—
第85図2	S < 2139	須恵系 杯	(13)	—	—	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 N (b/) 灰色	—
第85図3	S K 2139	土師質 杯	—	—	(5)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10 Y R (7/3) にぶい黄褐色	—
第85図5	S K 2167	土師質 杯	—	—	(5.4)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10 Y R (7/3) にぶい黄褐色	—
第85図6	S K 2167	土師質 杯	—	—	(6.8)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: やや粗い 焼成: 良好	外面 10 Y R (8/2) 灰白色 内面 10 Y R (b/) 黄灰色	—
第86図1	S K 2160	土師質 柱状高台 杯	(6.1)	—	—	外面: ナデ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5 Y R (8/4) 淡黄褐色	風化
第86図2	S K 2160	土師質 杯	—	—	4.2	内面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10 Y R (7/3) にぶい黄褐色	風化
第86図3	S < 2160	土師質 杯	—	—	4.6	内面: 回転ナデ 底部: 回転糸切り	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5 Y R (7/6) にぶい黄褐色	風化

種別番号	出上り型	器 種	口径 cm	筒高 cm	胴径 cm	調整・手洗の特徴	胎二/焼成	色 相	備 考
第0604	S K 2160	須色器 壺			7.2	外外面：回転ナデ	胎二：標準 焼成：良好	内外面 N (6/1) 灰色 外外面 10 Y R (5/1) 茶褐色 内外面 10 Y R (5/2) 灰白色	
第0605	S K 2160	瓦葺 覆鉢				内外面：横ハケ・スリ 目	胎土：密 焼成：良好	外外面 5 Y R (5/3) にぶい灰褐色 内外面 5 Y R (5/2) 灰褐色	開製前年程度 15～6世紀後半
第0606	S K 2160	傷疵 覆鉢				外外面：回転ナデ 内外面：回転ナデのち スリ目	胎土：密 焼成：良好	外外面 5 Y R (5/3) にぶい灰褐色 内外面 5 Y R (5/2) 灰褐色	開製前年程度 15～6世紀後半
第0701	S K 2172	二脚蓋 杯	11.9	4.7	4.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	外外面 10 Y R (6/2) 灰白色	坏C-1類
第0702	S K 2172	十脚蓋 杯	12	4	4	外外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 10 Y R (6/2) 灰白色	坏B類
第0703	S K 2172	十脚蓋 杯			4.8	外外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 10 Y R (5/2) 灰白色	
第0704	S K 2173	十脚蓋 杯			(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/4) にぶい灰褐色	坏F類
第0705	S K 2173	二脚蓋 杯			(5.2)	内外面：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	外外面 10 Y R (7/3) にぶい灰褐色 内外面 7.5 Y R (7/4) にぶい褐色	坏F類
第0706	S K 2170	輸入器類 中国白磁	(16)			内外面：胎跡	胎土：密 焼成：良好	外外面 10 Y R (8/2) 灰白色 内外面 2.5 Y R (7/1) 灰白色	玉縁群類 12世紀
第0707	S K 2180	上脚蓋 杯	(16.2)	5.7	5.6	外外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/4) にぶい黄褐色	坏B類
第0708	S K 2192	土師蓋 杯	(13.6)			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/4) にぶい黄褐色	
第0709	S K 2192	二脚蓋 杯	7.6	1.5	4.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/1) にぶい黄褐色	坏B-3類
第0710	S K 2203	須色器 杯身	10.4	3.7		内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外外面 5 Y (5/1) 灰白色	
第0711	S K 2203	土師蓋 杯	8.7	2.1	3.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	外外面 2.5 Y R (6/6) 褐色 内外面 7.5 Y R (7/4) にぶい黄褐色	坏E-1類
第0801	S K 2186	土師蓋 杯	(12.4)	4.9	(6.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0802	S K 2186	上脚蓋 杯	(13.7)	4.9	(5.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0803	S K 2186	土師蓋 杯	(13.4)	4.5	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0804	S K 2186	二脚蓋 杯	15	5.3	6.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0805	S K 2186	土師蓋 杯	13.3	4.3	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0806	S K 2186	土師蓋 杯	12.4	4.3	5.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0807	S K 2186	土師蓋 杯	13.2	4.3	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0808	S K 2186	上脚蓋 杯	13.7	4.8	6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0809	S K 2186	上脚蓋 杯	(13)	4.5	5.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0810	S K 2186	土師蓋 杯	13	4.4	6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0811	S K 2186	土師蓋 杯	13.4	4.7	6.1	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類
第0812	S K 2186	土師蓋 杯	13.3	4.3	6.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 褐色	坏A-2類

評定番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	造型・手法の特徴	胎土/焼成	色調	備考
第89図1	S K 2204	土師質 杯	(12)	3.9	3.8	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5Y (7/6) 褐色	風化 坏F-2類
第89図2	S K 2218	土師質 杯			(6)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10Y R (7/4) にぶい黄褐色	
第89図3	S K 2218	土師質 杯			/	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 10Y R (7/3) にぶい黄褐色	風化
第89図4	S K 2218	土師質 杯			4.2	内面: ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5Y R (7/4) にぶい黄褐色	
第89図5	S K 2220	土師質 杯			(5, 6)	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y R (7/4) にぶい黄褐色	
第89図6	S K 2220	須惠器 灰白付目			(15)	内外面: 回転ナデ	胎土: やや粗い 焼成: 不良	外底 10Y R (7/3) にぶい黄褐色 内底 2.5Y (7/3) 浅褐色	
第89図7	S K 2220	惣堂系須 惠器検				内外面: 施粒	胎土: やや粗い 焼成: 良好	胎土 10Y R (8/2) 灰白色 2.5Y (7/1) 明オレンジ色	臺台部を磁石に転用 している。
第90図1	S D 2090	土師質 皿	(7, 6)	2.1	3.8	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄褐色	皿e-1類
第90図2	S D 2090	土師質 皿	7.4	1.9	3.8	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	皿e-1類
第90図3	S D 2090	土師質 皿	7.4	2.4	3.7	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄褐色	皿e-1類
第90図4	S D 2090	土師質 杯	11.2	2.9	4.8	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	風化 坏F-1類
第90図5	S D 2090	土師質 杯	11.4	2.8	4.4	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	風化 坏F-1類
第90図6	S D 2090	土師質 杯	11.4	2.8	5.0	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄褐色	坏F-1類
第90図7	S D 2090	土師質 杯	(14, 5)	3.5	6.6	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	風化 坏F-2類
第90図8	S D 2090	土師質 杯	(7, 4)	3.4	6.2	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	坏F-2類
第90図9	S D 2090	土師質 杯	13.5	3.2	5.9	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄褐色	坏F-1類
第90図10	S D 2090	土師質 杯	13.7	3.3	5.9	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	坏F-1類
第90図11	S D 2090	土師質 杯	14	3.2	6.7	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	坏F-1類
第90図12	S D 2090	土師質 杯	(14)	3.6	6.2	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄褐色	風化 坏F-2類
第90図13	S D 2090	土師質 杯	14	3.5	6.2	内外面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄褐色	坏F-1類
第90図14	S D 2090	土師質 杯	(14, 2)	3.4	6.4	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄褐色	風化 坏F-1類
第90図15	S D 2090	土師質 杯	(13, 8)	3.1	6.2	内外面: 回転ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄褐色	風化 坏F-1類
第90図16	SD2095-1	須惠器 鉢	(30)			外底: ナデ 内底: スリ目	胎土: 密 焼成: 良好	外底 5Y R (5/6) にぶい赤褐色 内底 2.5Y R (5/4) にぶい赤褐色	簡型罐年3期 4世紀
第91図1	S D 2150	土師質 杯			4.6	内面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5Y R (7/4) にぶい黄褐色	
第91図2	S D 2150	土師質 杯			5.4	内面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内外面 7.5Y R (7/4) にぶい黄褐色	
第91図3	S D 2150	土師質 杯			(5, 2)	内面: 回転ナデ 底部: 回転糸きり	胎土: やや粗い 焼成: 良好	外底 10Y R (8/3) 浅黄褐色 内底 7.5Y R (7/4) にぶい褐色	

拝託番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	口径 cm	調整・手法の特徴	胎土/焼成	色調	備考
第91図4	S D 2150	土師製 杯			(5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10 Y R (7/3) こぶい黄褐色	
第91図5	S D 2150	土師製 杯	(16.4)			内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 10 Y R (7/3) こぶい黄褐色	
第91図6	S D 2150	内陶焼 杯				ハケ目・ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 5 Y R (6/6) 棕色	
第91図7	S D 2155	陶器系 青磁焼 杯				内外面：施釉	胎土：密 焼成：良好	胎土 7.5 Y R (6/2) 灰褐色 釉 2.5 G Y (4/2) 灰イノブ色	陶器系類D類14世 紀中ころ～15世紀
第91図8	S D 2147	土師製 皿	7.8	2.2	4.2	外外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (8/4) 洗黄褐色	皿c-1類
第91図9	S D 2147	土師製 皿	7.8	2.1	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 5 Y R (7/6) 棕色	皿e-2類
第91図10	S D 2147	土師製 皿	7.6	2.1	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 棕色	皿c-1類
第91図11	S D 2147	土師製 杯	11	3	4.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 棕色	杯D類
第92図1	S D 2170	須恵器 西向作 杯				内外面：回転ナデ 底部：回転糸きりの ち高当り作り	胎土：やや粗い 焼成：不良	内外面 7.5 Y R (4/1) 褐色	
第92図2	SD 2168-1	須恵器 和蓋				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (4/1) 褐色	
第92図3	SD 2168-1	土師製 皿	(7.6)	1.8	4.4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/4) こぶい黄褐色	皿d類

## 5区出土遺物観察表2

拝託番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	口径 cm	技法の特徴	色調	備考
第85図4	S K 2167	漆器 椀	(12.6)	0.5	6.9	内外面黒色漆 底部内面と体部外面に赤色漆で上絵	内外面 N (2/) 黒色	原料は朱
第89図A	S K 2220	漆器 椀	13.2	5.9	7.8	外面は黒色漆、内面は黒色漆を塗ったのち 赤色漆を塗っている。 体部外面に赤色漆で上絵	外面 N (2/) 黒色内面 2.5 Y R (4/6) 赤褐色	原料は朱

5区出土遺物観察表3

検体番号	出土位置	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	調整・手摺の特徴	胎土/焼成	色調	備考
第93図1	B25	弥生土高 罎				内外面：ニニナデ	胎土：粗い 焼成：良好	外面 7.5Y R (5/3) にぶい褐色 内面 10Y R (7/3) ～5Y1黄褐色	口縁部外面に刻み目あり。
第93図2	B26	弥生土高 罎			7.0	外面：クテハケ 内面：ナデ	胎土：粗い 焼成：良好	外面 7.5Y R (7/4) にぶい褐色 内面 10Y R (7/3) にぶい黄褐色	
第93図3	B48	土器 高杯	18.0			外面：ハケ・アア 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 2.5Y R (5/6) 黄褐色	赤色顔料塗布
第93図4	C48	須恵器 杯蓋	13			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 N (4/1) 灰色	
第93図5	A43	須恵器 杯蓋	12.4			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 N (5/1) 灰色 内面 2.5Y (7/4) にぶい褐色	
第93図6	A43	須恵器 杯蓋	13	4	5	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 2.5Y R (6/1) 黄褐色	
第93図7	横土中	須恵器 蓋	10			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y R (8/1) 灰色	
第93図8	A52	須恵器 子持壺				外面：ナデハケ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 5Y (5/1) 灰色 内面 5Y (4/1) 灰色	
第93図9	A53	須恵器 子持壺				外面：クテハケ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 5Y (5/1) 灰色 内面 5Y (4/1) 灰色	
第93図10	C28	須恵器 高脚杯				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y R (4/1) 灰色	
第93図11	C27	須恵器 高脚杯				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 N (5/1) 灰色	
第93図12	D43	須恵器 高脚杯	9.6			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 N (5/1) 灰色	
第93図13	E43	須恵器 杯				外面：ナデ 内面：回転ナデ 底面：別格ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 N (5/1) 灰色	肩部に4本の線刻あり。
第93図14	E34	須恵器 杯			6.2	内外面：回転ナデ 底面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y R (5/1) 灰色	
第93図15	A49	須恵器 杯	4	4.6	10	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (6/1) 黄褐色 内面 2.5Y (6/2) 黄褐色	焼成時の焼けむらあり。
第93図16	C47	須恵器 高台付鉢			8.5	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 2.5Y (6/1) 黄褐色	
第93図17	A38	須恵器 高台付鉢			6.8	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (6/1) 黄褐色 内面 2.5Y (5/1) 黄褐色	内面底部にもみ痕あり。
第93図18	D46	須恵器 高台付鉢			7.6	外面：回転ナデ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 5Y (5/1) 灰色	
第93図19	B54	須恵器 高台付鉢			9.2	外面：回転ナデ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 N (5/1) 灰色	
第93図20	A45	須恵器 高台付鉢			13.2	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 2.5Y (6/1) 黄褐色	
第93図21	A53	須恵器 杯	23.6			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 5Y (5/1) 灰色 内面 5Y (4/1) 灰色	
第93図22	B54	須恵器 杯				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (5/2) 黄褐色 内面 2.5Y (6/1) 黄褐色	

5区出土遺物観察表4

押収番号	出土位置	形態	口径 cm	底径 cm	高さ cm	調整・手法の特徴	胎土/焼成	色調	備考
第97図1	B7 包舎裏	土師黄 皿	(7.0)	1.9	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	皿b-1類
第97図2	C2 包舎裏	土師黄 皿	(8.0)	2.2	(4.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3-7/3)	皿b-1類
第97図3	A27 包舎裏	土師黄 皿	7.7	2.0	4.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：灰黄褐色 (10YR6/2) 外面：にぶい黄褐色 (10YR7/3)	完形 皿b-2類
第97図4	C26 包舎裏	土師黄 皿	(7.0)	2.3	(3.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	皿b-2類
第97図5	C24 地山頂上	土師黄 皿	(8.0)	1.6	(5.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	褐色 (10YR5/1)	皿c類
第97図6	A23 包舎裏	土師黄 杯	(14.3)	4.0	(5.3)	内外面：回転ナデ、 ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや悪い 焼成：良好	灰黄褐色 (10YR6/2-6/2)	坏B類
第97図7	B25 包舎裏	土師黄 杯	--	--	(4.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや悪い 焼成：やや不良	内面：灰白色 (10YR8/1-8/2) 外面：浅黄褐色 (10YR8/3)	坏B・C-1類
第97図8	B26 包舎裏	土師黄 杯	--	--	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (10YR8/3)	坏B・C-1類
第97図9	B25 包舎裏	土師黄 杯	--	--	(5.7)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/3)	底部に保存着 赤C-2・D類
第97図10	D24 包舎裏	土師黄 杯	(15.6)	4.3	(7.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	坏C-2・D類
第97図11	C26 包舎裏	土師黄 杯	--	--	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：褐色 (7.5YR7/6) 外面：にぶい褐色 (7.5YR7/4)	坏E類
第97図12	B27 包舎裏	土師黄 皿	(6.8)	1.3	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：浅黄褐色 (10YR8/4) 外面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	皿b-1類
第97図13	B27 包舎裏	土師黄 皿	(7.4)	1.3	(5.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：良好 焼成：良好	内面：褐色 (7.5YR7/6) 外面：にぶい褐色 (7.5YR6/4)	皿c類
第97図14	A27 包舎裏	土師黄 皿	(7.0)	1.7	(3.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5YR6/6)	皿b-3類
第97図15	A27 包舎裏	土師黄 皿	(7.2)	2.1	(3.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5YR6/4)	底部に保存着 皿e-1類
第97図16	A27 包舎裏	土師黄 皿	(7.4)	1.8	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5YR6/4)	皿e-2類
第97図17	A27 包舎裏	土師黄 皿	(7.5)	2.0	(3.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	褐色 (5YR7/6)	皿e-3類
第97図18	A27 包舎裏	土師黄 皿	7.3	1.9	3.4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	褐色 (5YR7/6)	完形 皿e-3類
第97図19	C27 包舎裏	土師黄 皿	(6.2)	--	--	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	明黄褐色 (10YR7/6)	内面に赤色顔料
第97図20	D77 地山頂上	土師黄 杯	11.7	3.7	5.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	完形 坏B類
第97図21	B27 地山頂上	土師黄 杯	--	--	(4.3)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (10YR7/4)	坏E類
第97図22	A27 包舎裏	土師黄 杯	--	--	(4.5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	坏E類
第97図23	A27 包舎裏	土師黄 杯	--	--	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	坏F類
第97図24	A27 包舎裏	土師黄 杯	--	--	(6.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	坏F類
第97図25	A27 土器部1	土師黄 皿	(7.6)	1.6	(3.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁に保存着 皿e-1類
第97図26	A27 土器部1	土師黄 皿	7.2	2.0	3.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	完形 皿e-1類

評区番号	止土位置	器種	口径 cm	器軸 cm	器径 cm	成型・手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第97図27	A27 土器蓋り	土師質 皿	7.4	2.0	3.5	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5R7/6)	完存 皿c-1類
第97図28	A2/ 土器蓋り	土師質 皿	6.9	1.9	3.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4-7/0)	完存 皿e-3類
第97図29	A27 土器蓋り	土師質 皿	7.4	1.9	3.5	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5R7/6)	完存 皿e-3類
第97図30	A27 土器蓋り	土師質 坪	(11.0)	3.3	(4.5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	坪E-1類
第97図31	A27 土器蓋り	土師質 坪	(11.2)	2.8	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	坪E-2類
第97図32	A27 土器蓋り	土師質 坪	(12.4)	2.9	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5R7/6)	坪E-2類
第97図33	A27 土器蓋り	土師質 坪	14.3	2.5	8.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5R7/6)	完形 坪F-1類
第97図34	A27 土器蓋り	二師質 坪	(13.7)	3.5	6.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5R7/6)	坪F-1類
第97図35	A27 土器蓋り	二師質 坪	(15.2)	3.6	6.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	坪F-2類
第97図36	A27 土器蓋り	土師質 坪	(16.5)	3.7	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り、 ヘラ削り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい褐色 (7.5R6/3) 外面：にぶい褐色 (7.5R7/4)	内面に窪(凹)付 坪F-3類
第97図37	A27 土器蓋り	土師質 坪	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5R7/6)	坪F類
第97図38	A27 土器蓋り	土師質 坪	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	内面に被蝕或 坪F類
第97図39	A27 土器蓋り	土師質 坪	-	-	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：褐色 (5R7/6) 外面：にぶい褐色 (7.5R7/4)	坪F類
第98図 1	B28 包舎蓋	土師質 皿	(8.6)	1.9	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	皿b-1類
第98図 2	B28 包舎蓋	土師質 皿	(11.4)	3.2	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	坪E-2類
第98図 3	B28 包舎蓋	土師質 皿	-	-	(4.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5R8/6)	坪F類
第98図 4	B28 包舎蓋	土師質 皿	-	-	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5R8/4)	坪F類
第98図 5	B28 包舎蓋	土師質 皿	-	-	(7.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい黄色 (2.5Y6/3) 外面：褐色 (7.5R6/6)	被蝕痕 坪F類
第98図 6	D28 包舎蓋	土師質 皿	-	-	(4.8)	内外面：回転ナデ、 ナゲ 底部：静止糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (5R7/4)	古志本部 皿C-3類
第98図 7	B20 包舎蓋	土師質 皿	-	-	-	内外面：ナゲ、コピ オリ工 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5R7/6)	長尾6.8cm図4.8cm 対照還元 5c類
第98図 8	B29 包舎蓋	土師質 皿	(7.0)	1.5	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	皿c-1類
第98図 9	C29 包舎蓋	土師質 皿	(7.2)	1.1	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：軽い 焼成：良	にぶい黄褐色 (10R7/4)	皿b-1類
第98図 10	B29 包舎蓋	土師質 皿	(6.6)	1.4	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	褐色 (5R6/6)	皿b-1類
第98図 11	B29 包舎蓋	土師質 皿	(7.2)	1.6	5.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10R7/6)	皿c類
第98図 12	B29 包舎蓋	土師質 皿	7.6	1.5	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5R7/4)	完存 皿c類
第98図 13	C29 包舎蓋	土師質 皿	(6.8)	1.2	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：軽い 焼成：良	にぶい黄褐色 (10R7/4)	皿c類
第98図 14	A29 包舎蓋	土師質 皿	(8.4)	1.9	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5R8/6)	皿b-3類

検査番号	出二位置	種類	口径 cm	高さ cm	底径 cm	調整、手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第98回15	A29 包含層	土師甕 環	7.6	2.1	3.5	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5YR7/5)	皿e-2類
第98回16	B29 包含層	土師甕 皿	(6.6)	2.1	3.4	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	皿e-2類
第98回17	A29 包含層	土師甕 環	7.5	2.3	3.6	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	完存口縁部に被熱成 皿e-2類
第98回18	B29 包含層	土師甕 環	—	—	(3.6)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：粗い 焼成：及	内面：褐色 (7.5YR7/6) 外面：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	外面に被熱成 環B・C-1類
第98回19	A29 包含層	土師甕 環	—	—	(4.0)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：及	淡黄褐色 (10YR8/4)	環B・C-1類
第98回20	B29 包含層	土師甕 環	(11.2)	3.4	(3.4)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4-6/4)	環B・C-1類
第98回21	A29 包含層	土師甕 環	(13.2)	4.7	4.8	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	環C-2類
第98回22	C29 包含層	土師甕 環	—	—	(4.3)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り、 ナブ	胎土：密 焼成：良	内面：黒色 (5Y2/1) 外面：淡黄褐色 (10YR6/3)	内面黒染塗り
第98回23	B29 包含層	土師甕 環	(11.0)	2.7	(5.4)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	環E-1類
第98回24	B29 包含層	土師甕 環	(7.2)	3.1	4.6	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5.5YR7/6)	底面中央に穿孔 環E-1類
第98回25	B29 包含層	土師甕 環	(11.0)	3.1	(5.2)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：褐色 (7.5YR7/6) 外面：淡黄褐色 (10YR8/4)	環E-2類
第98回26	A29 包含層	土師甕 環	(11.4)	2.5	(5.0)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	環E-3類
第98回27	B29 包含層	土師甕 環	(12.0)	2.5	(5.2)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	環E-3類
第98回28	A29 包含層	土師甕 環	(13.6)	3.5	(5.0)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	環F-1類
第98回29	C29 包含層	土師甕 環	(15.8)	3.3	(5.6)	内外面：回転ナブ 上半周り底面：ナブ	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	環F-3類
第98回30	A29 包含層	土師甕 環	—	—	(7.8)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	底部内面に被熱成 環F類
第98回31	B29 包含層	土師甕 環	—	—	(6.0)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	淡黄褐色 (10YR8/4)	環F類
第98回32	A29 包含層	土師甕 環	—	—	(7.6)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	環F類
第98回33	C29 包含層	土師甕 環	(8.6)	—	—	内外面：回転ナブ	胎土：密 焼成：良	内面：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 外面：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁部に黒染塗り 玉線状の二線
第98回34	B30 包含層	土師甕 皿	7.2	2.0	3.3	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁に被熱成 皿e-3類
第98回35	C31 包含層	土師甕 皿	(7.4)	1.9	(3.2)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5YR7/6)	皿e-3類
第98回36	B30 包含層	土師甕 皿	(11.4)	2.9	(5.2)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	環E-2類
第98回37	B30 包含層	土師甕 皿	(12.8)	3.3	(5.0)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	環F-1類
第98回38	B30 包含層	土師甕 皿	(14.1)	3.5	(5.2)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	環F-1類
第98回39	C30 包含層	土師甕 皿	(14.6)	3.5	(5.0)	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	環F-1類
第98回1	A30 土師層	土師甕 皿	7.2	1.5	3.7	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	完形 皿e類
第98回2	A30 土師層	土師甕 皿	7.8	1.6	4.1	内外面：回転ナブ 底面：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR7/6)	完形 皿e類

種類番号	出土位置	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土・焼成	色 澤	備 考
第99図3	A30 土器溝り	土師質 皿	7.7	1.4	4.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5YR/6)	壳形 皿口縁
第99図4	A30 土器溝り	土師質 皿	(8.0)	1.5	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (5YR/6)	底部外面に横付 皿口縁
第99図5	A30 土器溝り	土師質 皿	8.2	1.9	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り、 ヘラ痕?	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (5YR/7)	壳形 皿口縁
第99図6	A30 土器溝り	土師質 皿	7.6	1.9	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (10R4/1)	壳形 外面に横付 皿口縁
第99図7	A30 土器溝り	土師質 皿	8.1	1.8	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや軽い 焼成：良好	灰黄褐色 (10R6/2)	壳形 皿口縁
第99図8	A30 土器溝り	土師質 皿	8.4	2.0	4.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや軽い 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10R7/3)	壳形 皿口縁
第99図9	B30 土器溝り	土師質 杯	11.4	2.9	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR/6)	外面に被熱痕 杯E-1類
第99図10	B30 土器溝り	土師質 杯	11.2	3.0	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR/6)	底部内面に被熱痕 杯E-1類
第99図11	B30 土器溝り	土師質 杯	10.4	2.9	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR/6)	壳形 口縁部に被熱痕 杯E-1類
第99図12	B30 土器溝り	土師質 杯	(11.6)	2.5	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (7.5YR/6)	杯E-3類
第99図13	B30 土器溝り	土師質 杯	—	—	(11.4)	内面：ハケ目 外面：ナデ			底部のみ残存
第100図1	A45 包含層	土師質 皿	(8.0)	1.7	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい褐色 (7.5YR/6) 外面：にぶい褐色 (7.5YR/6)	皿口縁
第100図2	A30 包含層	土師質 皿	11.0	3.1	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	壳形 杯E-2類
第100図3	A45 包含層	土師質 杯	11.5	3.0	5.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	杯E-2類
第100図4	A50 包含層	土師質 杯	14.6	3.7	7.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	壳形 杯口縁
第100図5	A37 包含層	土師質 杯	(14.4)	3.5	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (7.5YR/4)	杯F-1類
第100図6	A45 包含層	土師質 杯	14.4	3.2	7.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR/7)	壳形 杯F-2類
第100図7	B27・29 包含層	土師質 杯	(33.0)	—	—	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	浅黄褐色 (10R6/3)	片口縁の二枚
第100図8	B28 包含層	土師質 杯	—	—	—	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	内面：灰黄褐色 (10R4/2) 外面：浅黄褐色 (10YR6/3)	片口縁の口縁下部
第100図9	D22 包含層	土師質 杯	—	—	—	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5Y/4)	内面に6本の横り目
第100図10	A22 包含層	土師質 杯	—	—	—	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良	にぶい褐色 (5YR/4)	外面に4本の横り目
第100図11	B27 包含層	土師質 杯	—	—	—	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	内面に被熱痕
第100図12	C20 包含層	土師質 杯	—	—	—	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄褐色 (10R7/4)	
第100図13	B27 包含層	土師質 杯	—	—	—	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	内面：明黄褐色 (5Y5/6) 外面：褐色 (5YR/6)	やや変質

## 5区出土遺物観察表5

調査番号	出土位置	種別	口径 cm	高さ cm	底径 cm	素材・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
第101図1	B29 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(16.6)	-	-	曜目1類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ黄赤 (7.5/6/3)	外壁に絞足弁文
第101図2	B27 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(16.0)	-	-	曜目2類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (2.5/6/2)	外壁に片彫りの蓮弁文
第101図3	A26 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(12.0)	-	-	曜目3類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10/6/2)	外壁に片彫りの蓮弁文
第101図4	A27 地山直上	青磁 (龍泉窯系) 碗	(14.4)	-	-	曜目3類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10/6/2)	外壁に片彫りの蓮弁文
第101図5	B30 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(12.0)	-	-	曜目4類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10/6/2)	縁飾りの蓮弁文
第101図6	B26 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(11.4)	-	-	曜目4類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (2.5/6/1)	縁飾りの蓮弁文
第101図7	B29 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 外	(13.0)	-	-	坏重類(F形)	胎土：緻密 焼成：良好	釉：黄オリーブ灰色 (5/7/1) 胎土：灰白色 (7.5/7/1)	外面に絞足弁文
第101図8	B27 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 外	(13.0)	-	-	坏重類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：黄オリーブ灰色 (2.5/7/1) 胎土：灰白色 (7.5/7/1)	
第101図9	C29 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 外	(13.2)	-	-	坏重類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10/6/2) 胎土：灰白色 (7.5/7/1)	
第101図10	A22 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 外	-	-	-	坏IV類以降			全体的に破損する
第101図11	C30 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗カ	-	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (5/7/2) 胎土：灰白色 (5/7/1)	
第101図12	C31 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗カ	-	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10/6/2) 胎土：灰白色 (7.5/7/1)	
第101図13	D24 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 盃	-	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	釉：黄オリーブ色 (5/6/2) 胎土：灰白色 (7.5/7/1)	
第101図14	E34 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗カ	-	-	-	第1類(D形)	胎土：緻密 焼成：良好	釉：黄オリーブ色 (5/5/2) 胎土：灰白色 (7.5/7/1)	内面に雲文
第101図15	B25 惣倉層	青磁 (向泉窯系) 皿	-	-	-	皿1・b(D形)類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ黄赤 (5/6/3) 胎土：灰白色 (10/7/1)	縁飾りによる文様
第101図16	鉢土中	白磁	-	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (7.5/8/2) 胎土：灰白色 (2.5/8/1)	
第101図17	B24 惣倉層	中国陶磁 天目茶碗	(12.0)	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	釉：黒色(黄.5/7)～ 赤い赤褐色 (5/6/4) 胎土：灰色 (6/6)	
第101図18	A24 惣倉層	桃輪 豆	-	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	釉：黄オリーブ色 (5/5/3)～ 赤灰色 (2.5/5/1) 胎土：ぶいかな褐色 (2.5/5/5/4)	蓋の彫刻
第101図19	A27 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	-	-	6.2		胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10/6/2) 胎土：灰白色 (5/7/1)	足込み部に刺花文 高台天井部は無釉
第101図20	A27 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	-	-	5.4		胎土：緻密 焼成：良好	釉：黄オリーブ色 (5/4/3) 胎土：黄灰色 (2.5/6/1)	足込み部に黄入 蓋付・高台の一部に 無釉
第101図21	鉢土中	青磁 (龍泉窯系) 碗	-	-	3.6		胎土：緻密 焼成：良好	釉：黄オリーブ灰色 (2.5/7/1) 胎土：ぶいかな褐色 (7.5/6/1/4)	足込み部中央に刺花 文 高台の一部・蓋付・ 高台内は無釉
第101図22	B33 惣倉層	青磁 (龍泉窯系) 碗	-	-	5.2	曜目4類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10/6/2) 胎土：灰白色 (7.5/7/1)	高台内に絞足による 文様・蓋の残存 高台天井部は無釉

押戻番号	出土位置	器種	口径 cm	口径 cm	高さ cm	調整・手ぬいの特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第101図23	A 25 包合層	青磁 (磨家定宋) 碗	-	-	4.2		胎土: 密 焼成: 良好	釉: 淡黄色 (2.5Y7/4) 胎土: 灰白色 (7.5Y6/1)	高台内の一彩・高台 入耳部は黒地
第101図24	埴土中	青磁 (磨家定宋) 碗	-	-	5.6		胎土: 密 焼成: 良好	釉: 明オリブ灰色 (5G7/7) 胎土: 灰白色 (4/7)	縁台内・高台入耳部 は黒地
第101図25	埴土中	白磁 皿	-	-	(8.0)	皿E群(16c~)	胎土: 密 焼成: 良好	釉: 灰白色 (5Y8/1) 胎土: 灰白色 (8/2)	唇部部の釉を削る
第101図26	A 25 包合層	白磁 皿	-	-	(7.2)	皿E群(16c~)	胎土: 密 焼成: 良好	釉: 灰白色 (5Y8/1) 胎土: 灰白色 (8/2)	縁台部の釉を削る

### 5区出土遺物観察表6

押戻番号	出土位置	器種	口径 cm	口径 cm	高さ cm	調整・手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第103図1	D 21 包合層	備前焼 鉢	-	-	(34.4)	内外面: ココナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内面: にじい黄褐色 (10Y7/4) 外面: にじい褐色 (7.5Y5/3)	玉縁状の口縁 調整時期
第103図2	C 21 包合層	備前焼 鉢	-	-	-	内外面: ココナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内面: にじい黄褐色 (10Y7/4) 外面: にじい褐色 (7.5Y5/3)	玉縁状の口縁 調整時期に連なる 1と同一個体が調整 時期
第103図3	B 23 包合層	備前焼 鉢	-	-	(13.4)	内外面: ココナデ	胎土: やや粗い 焼成: 良好	内面: にじい黄褐色 (10Y8/3) 外面: 灰黄色 (2.5Y7/3)~灰黄色 (2.5Y6/2)	玉縁状の口縁 調整時期
第103図4	A 28 包合層	備前焼 鉢	-	-	-	内面: ヨコバケ外面: クテハケ	胎土: 密 焼成: 良好	内面: オリーブ灰色 (5G7/4) 外面: 灰色 (10Y5/1)	調整III・IV期
第103図5	D 21 包合層	磁器系陶器 鉢	-	-	-	内外面: ココナデ	胎土: 粗 焼成: 良好	内外面: 灰褐色 (7.5Y6/2) 胎土: 灰褐色 (10Y6/1)	字状の口縁常滑編 年5型式
第103図6	A 28 包合層	磁器系陶器 鉢	-	-	-	内外面: ココナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内面: 黄褐色 (5Y6/2) 外面: オリーブ灰色 (5G7/4)胎土: 黄褐色 (10Y6/1)	N字状の口縁常滑編 年6~7型式
第103図7	A 28 包合層	磁器系陶器 鉢	-	-	-	内外面: ココナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面: 緑黄色 (2.5G7/1)~ 灰黄色 (10Y6/2)胎土: 黄 褐色 (10Y6/1)	N字状の口縁常滑編 年7型式
第103図8	埴土中	磁器系陶器 鉢	-	-	-	内面: 斜め方向のナ デ? 外面: 面割ナデ、コ ビオサエ	胎土: 粗 焼成: 良好	内面: 灰色 (6/2) 外面: 灰白色 (8/2)~灰色 (7.5Y4/1)	常滑編年9~11型式 か
第103図9	A 27 地山直上	磁器系陶器 鉢	(23.6)	-	-	内面: ナデ 外面: ナデ、コビ オサエ	胎土: 粗 焼成: 良好	内面: にじい赤褐色 (2.5R4/2) 外面: にじい赤褐色 (2.5R4/4) 胎土: 灰色 (10Y6/1)	常滑編年9型式か
第103図10	D 23 包合層	磁器系陶器 鉢	(15.4)	-	-	内面: ナデ 外面: ナデ、コビ オサエ	胎土: 粗 焼成: 良好	内外面: にじい赤褐色 (2.5Y6/3) 胎土: 灰色 (10Y6/1)	常滑編年10型式か
第103図11	C 23 包合層	埴内陶器 楕鉢	-	-	-	内外面: ココナデ	胎土: 粗 焼成: 良好	内外面: 灰色 (9/4)	4条1単位の横り目
第103図12	C 21 包合層	埴内陶器 楕鉢	-	-	-	内外面: ナデ、コ コナデ	胎土: 粗 焼成: 良好	内面: 灰色 (6E/7) 黄褐色 (10Y7/2) 外面: 黄褐色 (10Y5/2)	7条1単位の横り目
第103図13	B 29 包合層	埴内陶器 楕鉢	-	-	-	内外面: ココナデ、 ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面: にじい赤褐色 (2.5Y6/3) 胎土: 灰色 (10Y6/1)	6条1単位の横り目
第103図14	B 27 包合層	埴内陶器 楕鉢	-	-	-	内外面: ココナデ、 ナデ	胎土: 密 焼成: 良好	内外面: にじい褐色 (7.5Y5/3) 胎土: 胎土:	6条1単位の横り目 胎土:

検出番号	出土位置	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第103図15	D 29 惣舎窯	肥前系陶器 灰釉甗	(14.2)	-	-	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	胎土：黄褐色 (10YR7/7) 胎土：灰白色	九州海運線年Ⅰ-Ⅱ
第103図16	C 27 惣舎窯	肥前系陶器 灰釉皿	(24.4)	-	-	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	胎土：灰黄褐色 (10YR6/2-6/2) 胎土：に濃い赤褐色 (2.5YR4/3)	口縁部に灰白色の釉 による文様九州海運 線年Ⅱ期
第103図17	C 26 惣舎窯	肥前系陶器 灰釉皿	(24.2)	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	胎土：灰白色 (2.5YR/2) 胎土：赤褐色 (10YR6/6)	九州海運線年Ⅱ期
第103図18	B 26 惣舎窯	肥前系陶器 甗	-	-	(4.2)	雲付部は露胎	胎土：緻密 焼成：良好	胎土：黄褐色 (5Y7/4) 胎土：灰白色 (10YR6/2)	九州海運線年Ⅱ期

### 5区出土遺物観察表7

検出番号	出土位置	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第102図1	粘土土	東海系滑石 鉢	(24.0)	-	-	外面：回転ナデ、コ ピオリテ 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	灰色 (9G/)	
第102図2	D 24 惣舎窯	中世須恵系 鉢	-	-	-	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	緑黄色 (5G2/1)～ 灰白色 (2.5YR/2)	玉縁状の口縁が 美しい
第102図3	B 23 惣舎窯	中世須恵系 鉢	-	-	-	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	黄灰色 (2.5Y4/1)	玉縁状の口縁
第102図4	B 27 惣舎窯	中世須恵系 鉢	(18.6)	-	-	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	灰色 (7.5Y5/1)	口縁に浅い沈線
第102図5	D 24 惣舎窯	中世須恵系 鉢	-	-	-	外面：ナデ、ヘラ削 り 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	黄灰色 (2.5Y4/1)	口縁に浅い沈線
第102図6	B 26 惣舎窯	中世須恵系 鉢	-	-	-	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	灰色 (7.5Y5/1)	
第102図7	D 30 惣舎窯	瓦質 鉢カ	-	-	-	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：緻密 焼成：良好	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)～ 灰黄色 (2.5Y7/2)	わずかに口縁が玉縁 状
第102図8	B 30 惣舎窯	瓦質 鉢カ	(16.0)	-	-	外面：ナデ、ヘラ削 り 内面：ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	灰色 (9G/) ～ 暗灰色 (9G/)	
第102図9	C 29 惣舎窯	瓦質	-	-	-		胎土：緻密 焼成：良好	暗灰色 (9G/)	七宝文のスタンプ
第102図10	B 49 惣舎窯	瓦質 火鉢カ	(26.0)	-	-	外面：ヨコナデ、ナ デ 内面：ヨコナデ、ナ デ	胎土：密 焼成：良好	内面：灰白色 (10YR7/1) 外面：に濃い黄褐色 (10YR7/2)	<字状の口縁
第102図11	B 52 惣舎窯	瓦質 火鉢カ	-	-	(19.4)	外面：ナデ、ミガキ 内面：ケズリ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内面：黄灰色 (9G/) 外面：灰色 (9G/)	

### 5区出土遺物観察表8

検出番号	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	調整・手法の特徴	胎土/焼成	色 調	備 考
第79図3	S K 2036	滑き石カ	11.1	5.6	4.3				235g
第74図9	S K 2045	硯	(6.6)	(6.3)	1.6	全面に研磨痕、片面 に穿孔			2/3欠損 砥石として転用か
第78図6	S F 2068	砥石	(6.5)	(4.8)	(2.7)	1面のみ研磨面			373g 同種は欠損 切磨面に被熱痕、僅
第82図6	SD 2075	砥石	(14.6)	(9.0)	(3.4)	1面のみ研磨面			一部被熱、煤付着
第82図13	SD 2048	砥石	(15.7)	(8.8)	(6.6)	2面に研磨痕			2つの石を合成 研磨痕が顕著
第72図9	S K 2030	狹刀	9.5	7.55	3.4	扇形鉄滓			250g 中央に木炭

5区出土遺物観察表9

押戻番号	出土位置	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	詳細・手法の特徴	備 考
第73回1	S K 203b	木簡	(77.1)	7.3	1.0	裏・側立：ケズリ 下端：キリ	上端は欠損 表裏に「アヒラウケン」「キリーク」の 文字、「海皇年頭天王」「天刑庫」「九々八 十一」の数字 裏面は未調査

5区出土遺物観察表10

押戻番号	出土位置	種 別	残存長 cm	残存幅 cm	重量 g	備 考
第104回1	A32	打製石片	11.1	8	272	一部欠損している。
第104回2	排土口	礫	3.1	5.7	38	礫の部分に、縦方向の擦痕あり。
第104回3	D25	礫石	6.1	4.4	157	2面に擦痕あり。
第104回4	D262	礫石	16	5	364	2面に擦痕あり。

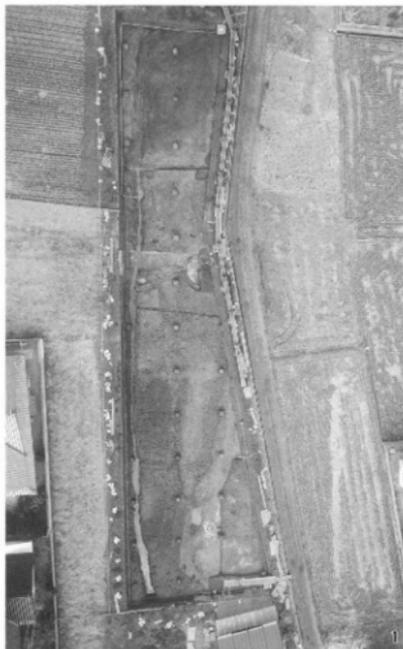
# 写真図版



上空から見た調査区（4D区、北から）



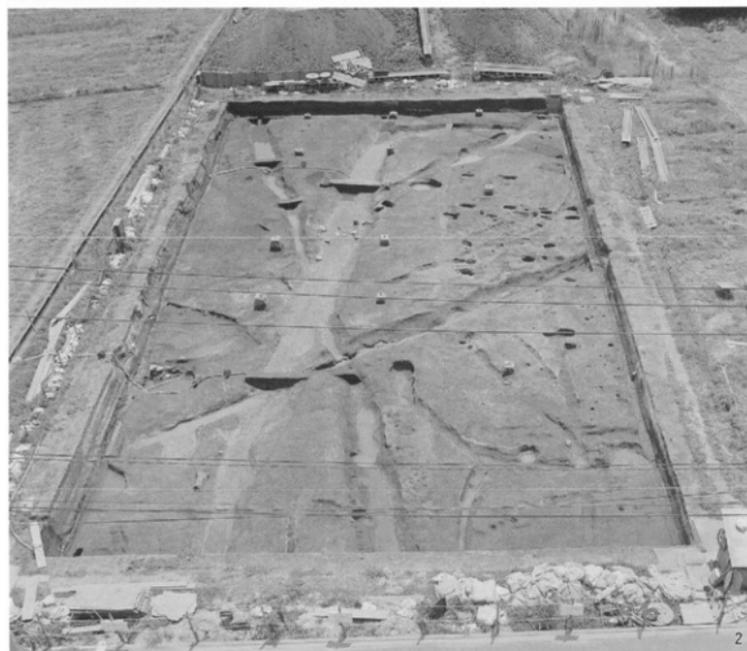
1.4A区北半（南から） 2.4A区南半（南から）



1.4B区全景（上空から） 2.4B区北半 3.4B区南半 4.4B区全景（北から）



1.4C区全景（南から） 2.4C区全景（北から）

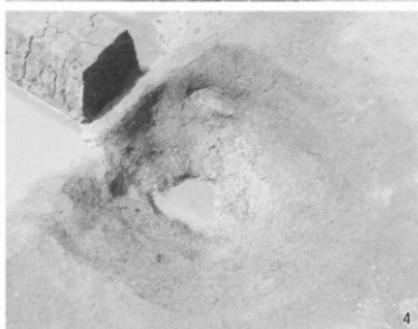


1.4D区全景 (上空から) 2.4D区全景 (北から)

図版6 遺構(1)

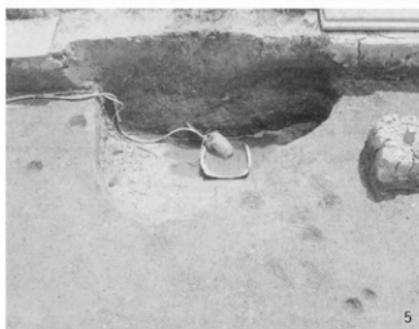


1.溝SD1000 (4A区、南西から)    2.溝SD1000 (4B区、北から)    3.溝SD1000 (4C区、南から)  
4.溝SD1000 (4D区、南東から)

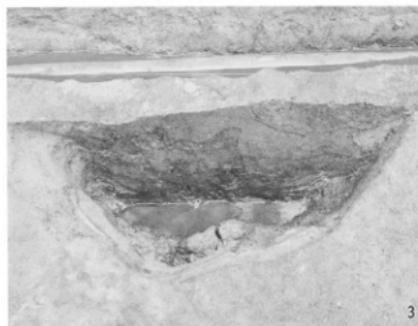
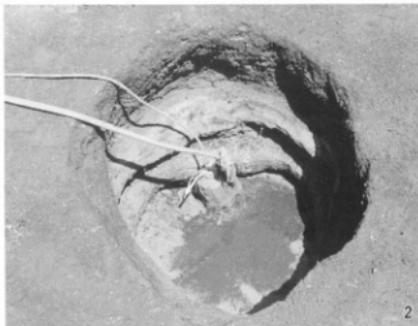
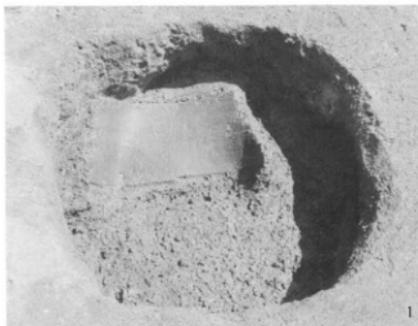


1.井戸SE1094 (東から) 2.井戸SE1094 (北から) 3.土坑SK1080 (東から) 4.井戸SE1142 (南東から)  
5.東西溝SD1032 (西から) 6・7.SX1131ほか (南から)

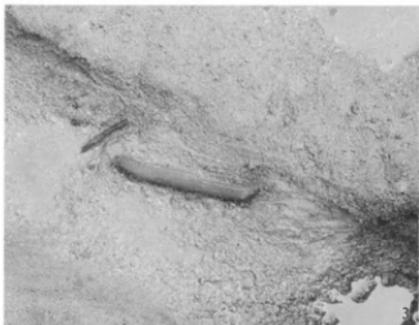
図版8 遺構 (3)



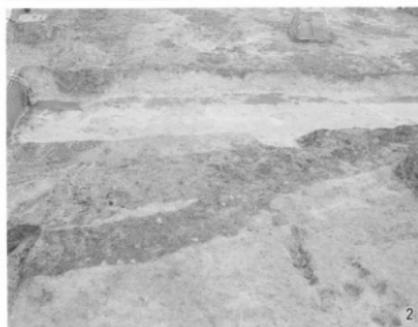
1.土坑SK1048 (南から) 2.井戸SE1025 (南西から) 3.土坑SK1092-1093 (東から) 4.土坑SK1084 (東から)  
5.井戸SE1026 (西から) 6.井戸SE1100 (東から) 7.井戸SE1083 (西から) 8.井戸SE1083 (南西から)



1.井戸SE1116 (北から) 2.井戸SE1117 (西から) 3.井戸SE1119 (西から) 4.井戸SE1122 (西から)  
5.井戸SE1141 (南西から) 6.井戸SE1146 (南から) 7.東西溝SD1011 (東から)

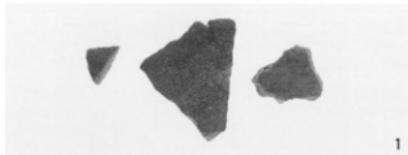


1.溝SD1111と土坑SK1110 (北東から) 2.土坑SK1110 (南から) 3.舟形木製品(形代A)出土状態(北から)  
4.舟形木製品(形代B)出土状態(東から)

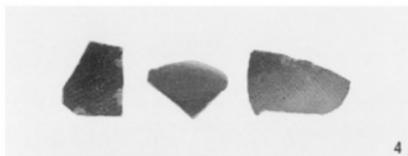


1.東西溝SD1090(東から) 2.東西溝SD1047(南から) 3.斜行溝SD1144(南西から) 4.溝SD1120(西から)  
5.溝SD1120(南から) 6.SX1039~1042(北から) 7.SX1056(南から)

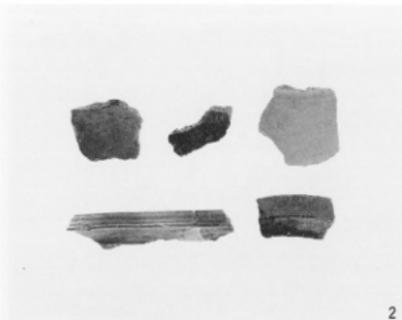
図版 12 遺構内出土遺物 (1)



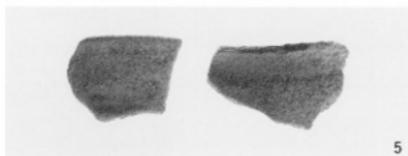
1



4



2



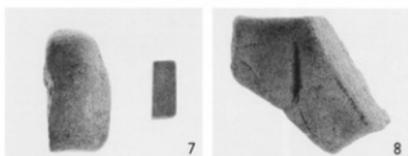
5



3



6

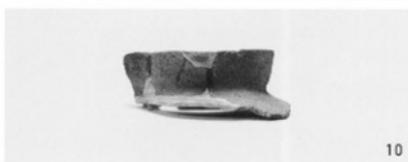


7

8



9



10



11



13



12

1.SX1034 2・3.満SD1000 4.土坑SK1070・満SD1050 5.満SD1050・井戸SE1051 6.満SD1054・1123

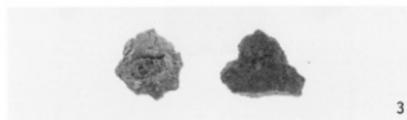
7.井戸SE1137・満SD1054 8.井戸SE1100 9.満SD1054・1073 10.満SD1096 11.満SD1123 12.満SD1054 13.満SD1145



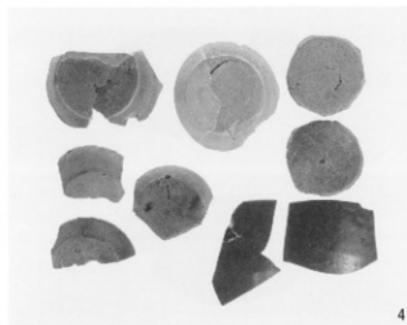
1



2



3



4



8



5



9



6



10



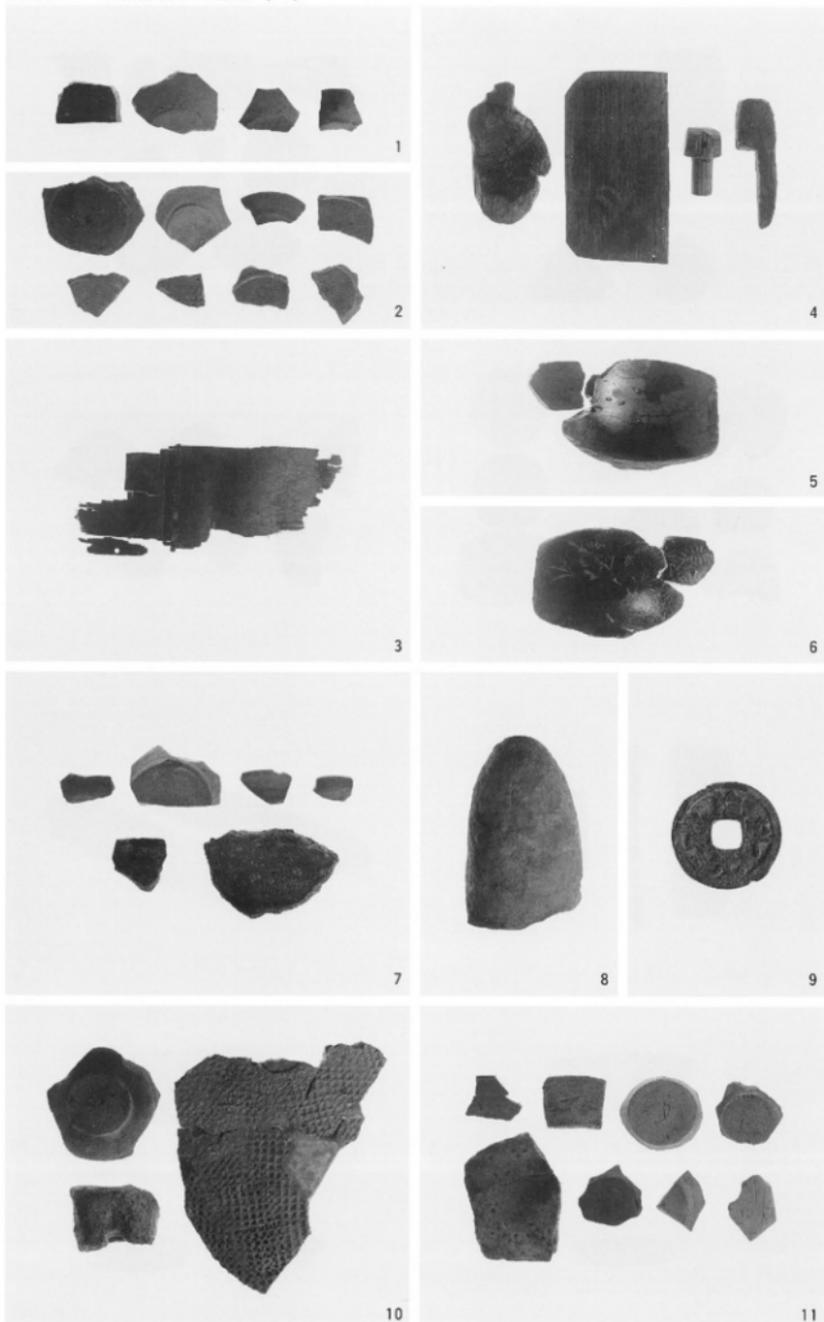
7



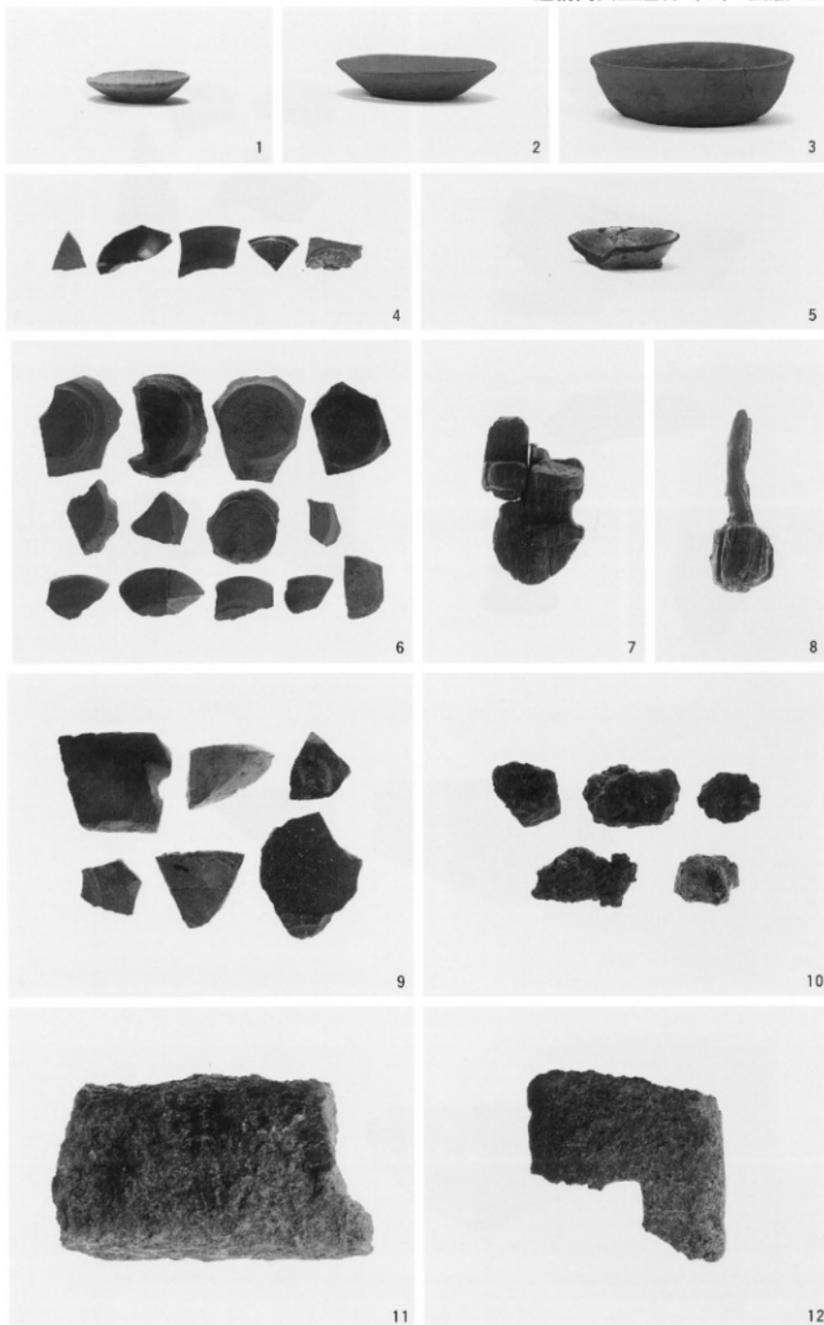
11

1.柱穴SP1104 2.土坑SK1084・1092・1093 3.土坑SK1093・1110 4.土坑SK1110  
5.土坑SK1110・井戸SE1025 6・7.土坑SK1110 8~11.溝SD1111

図版 14 遺構内出土遺物 (3)



1. 柱穴SP1147・1148 2. 井戸SE1025・1026・1083・1100・1116・1117 3. 井戸SE1116 4. 井戸SE1083  
5・6・8. 井戸SE1146 7. 井戸SE1119・1122・1141・1146 9. 溝SD1024 10. 溝SD1144 11. SX1077・1109・1131



1.溝SD1113 2~11.溝SD1120 12.SX1127



1



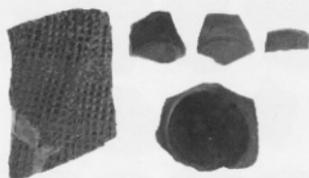
2



4



3



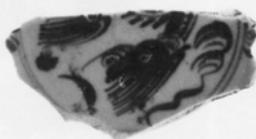
5



6



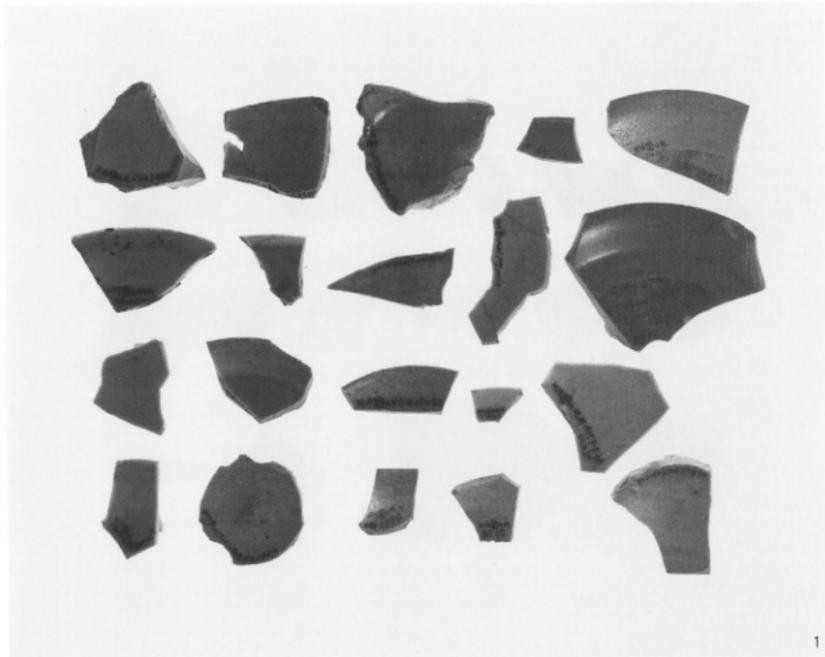
7



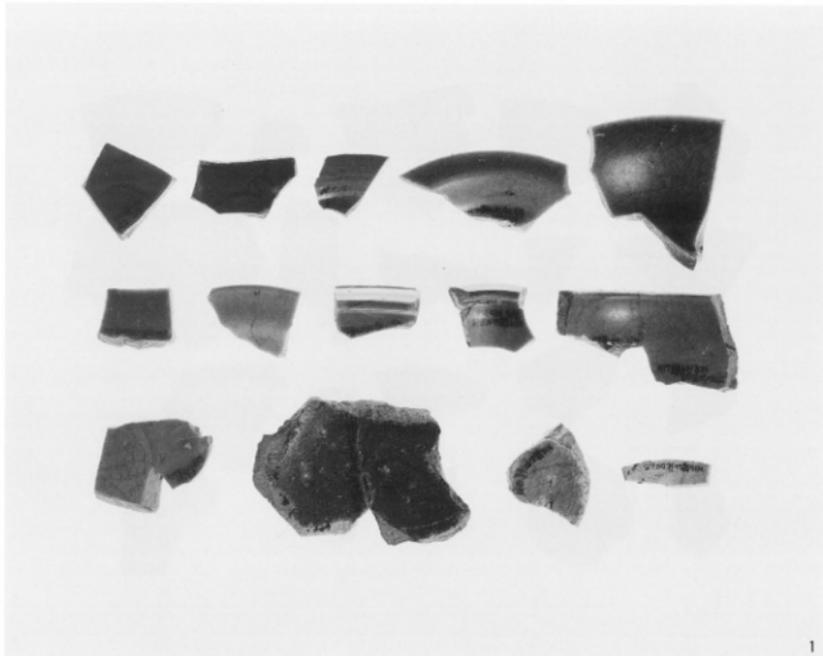
8

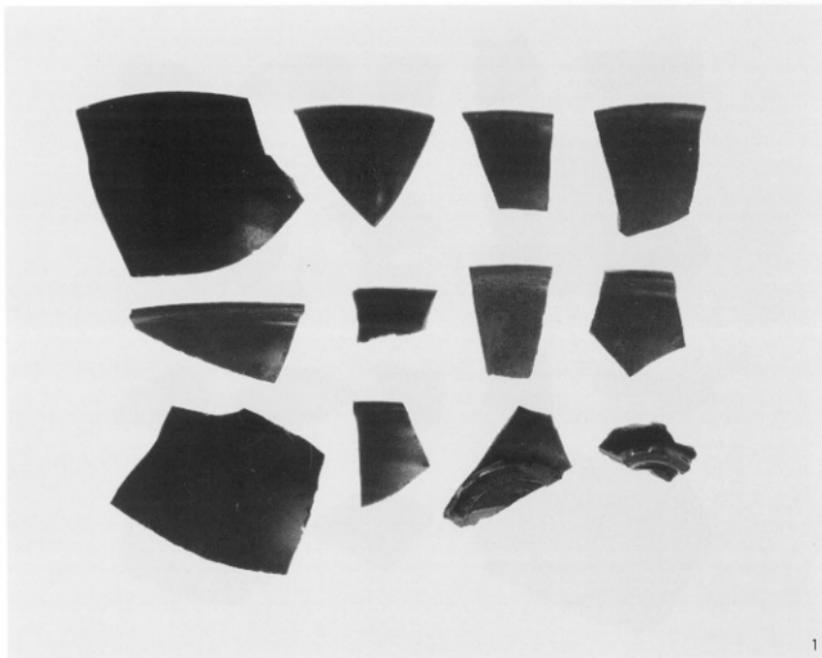


9

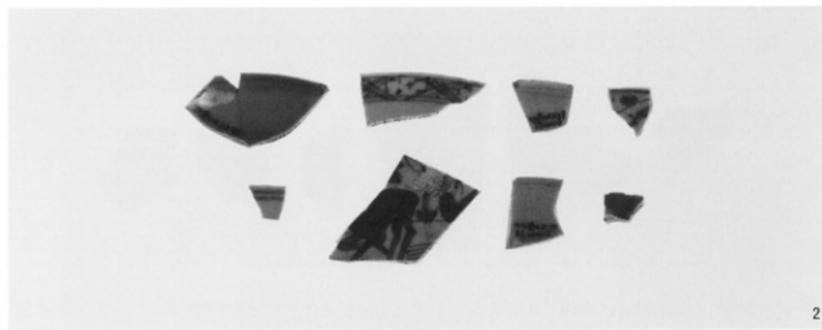


1・2.白磁

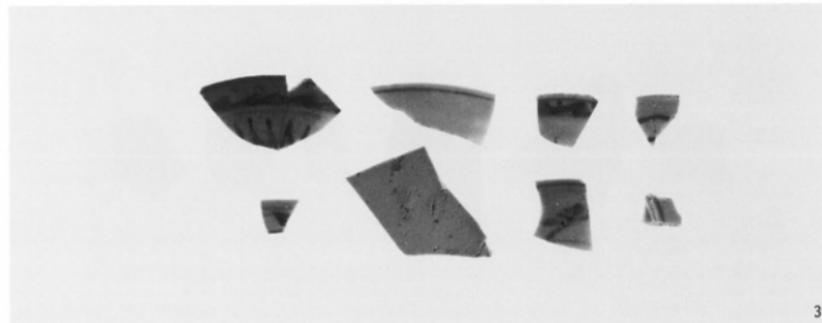




1

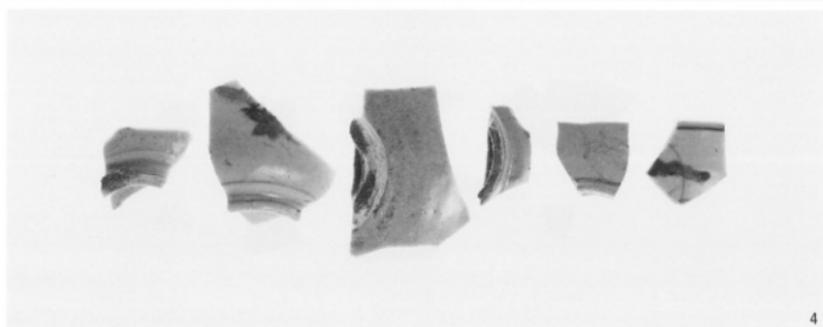
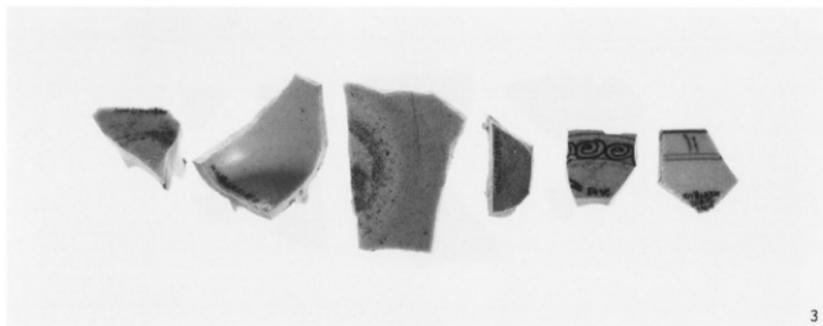
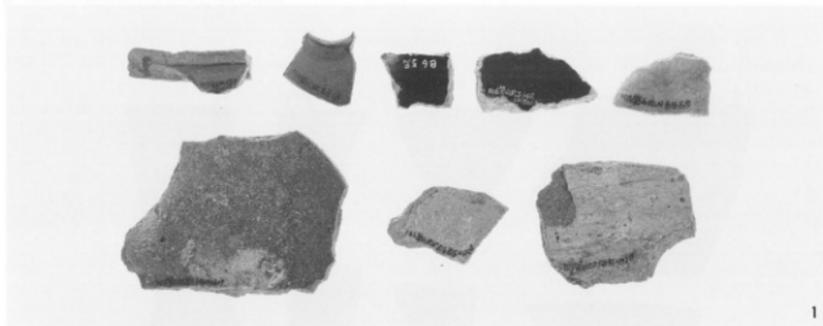


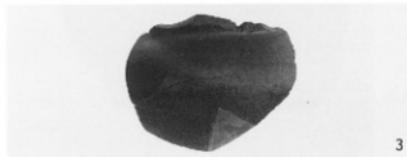
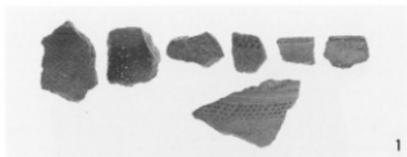
2



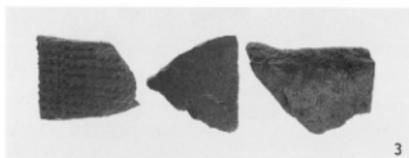
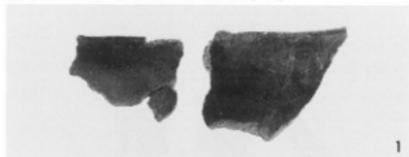
3

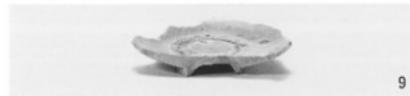
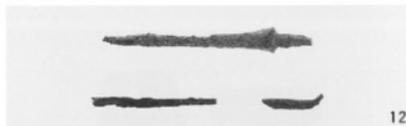
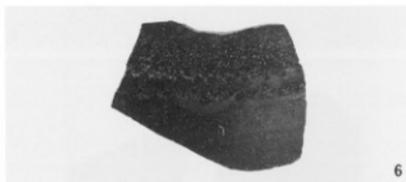
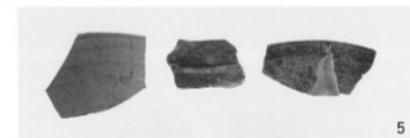
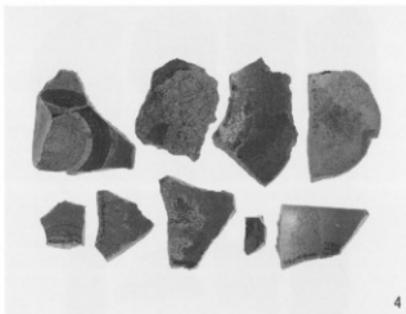
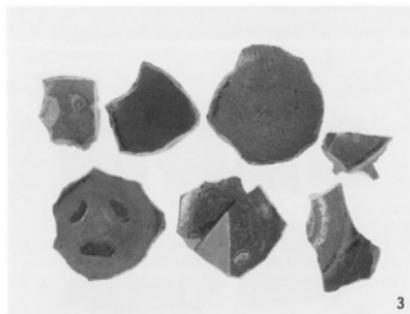
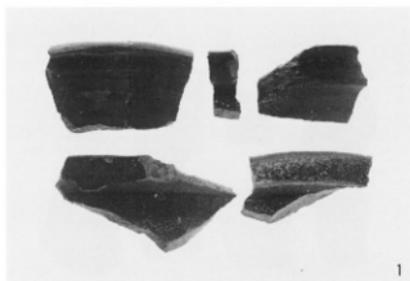
1.青磁 2・3.染付(青花)



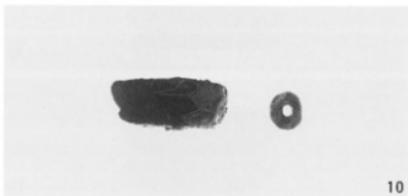
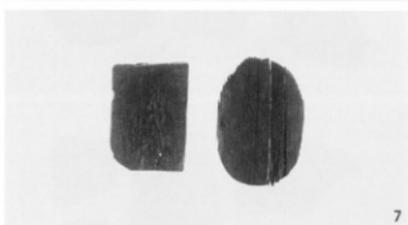
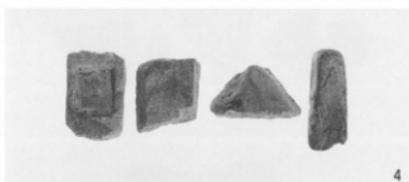
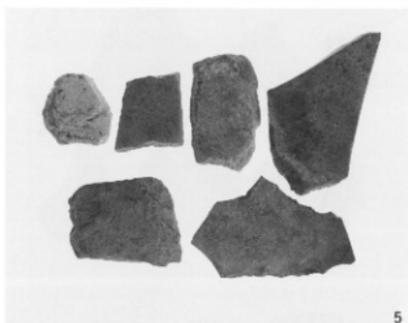
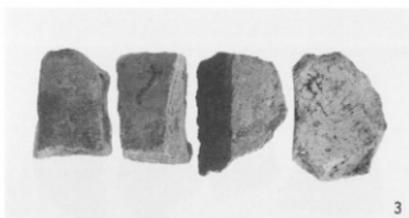
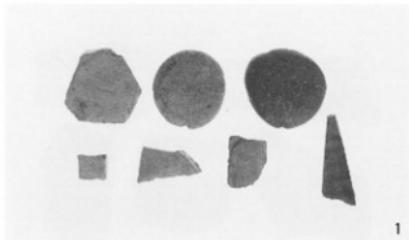


1・2.弥生土器 3～6.須恵器 7.中世須恵器 8・9.土師器





1・2.中世陶器 3・4・6・8～10.肥前系陶器 5.中世陶器・瓦質土器 7.瓦質土器 11.土製品  
12.鉄製品 13.石製品





1.5B区北半 (南から) 2.5B区南半 (南から)

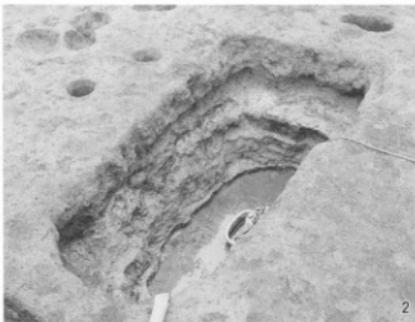
図版 26 遺構 (1)



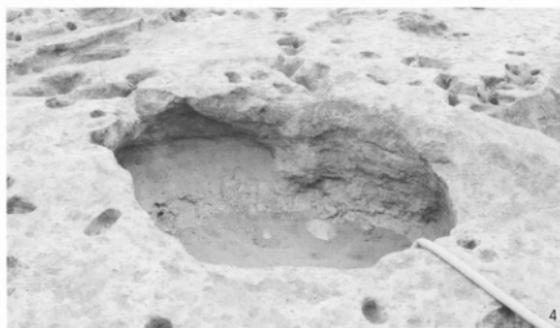
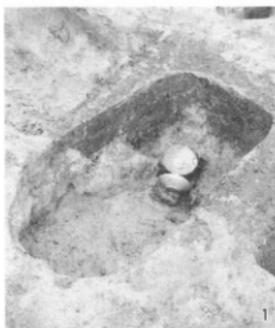
1.5号墳周溝北側 (西から) 2.5号墳周溝南側 (東から)



1.土坑SK2164 (北東から) 2.土坑SK2174 (北から) 3・4.土坑SK2183 (南から) 5.土坑SK2166 (北東から)  
6.土坑SK2211 (南東から) 7.土坑SK2210 (南から) 8.土坑SK2210 (西から)

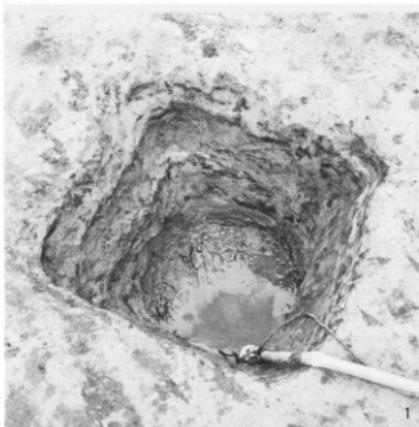


1.土坑SK2018 (南西から) 2.土坑SK2021 (南西から) 3.土坑SK2022 (東から) 4.土坑SK2036 (南から)  
5.土坑SK2035 (北西から)

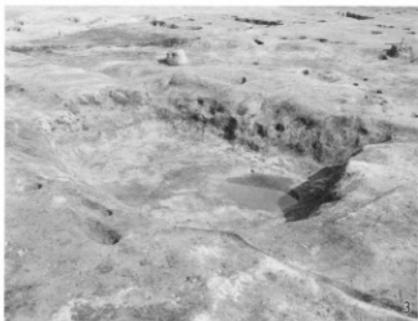


1.土坑SK2047 (南西から) 2.土坑SK2030 (北西から) 3.土坑SK2057 (南東から) 4.土坑SK2045 (南東から) 5.SX2010  
A列西端ピット (北西から) 6.土坑SK2076 (北から) 7.SX2010 A列東端ピット (東から) 8.SX2010 B列中央ピット (南から)

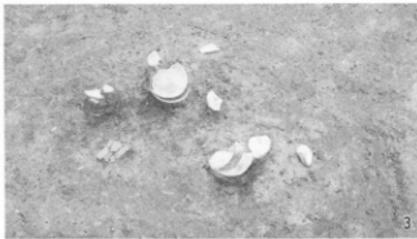
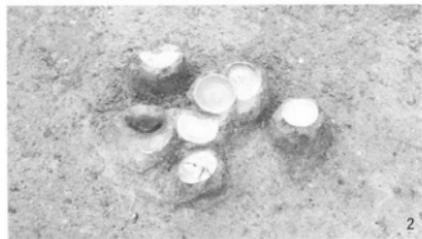
図版 30 遺構 (5)



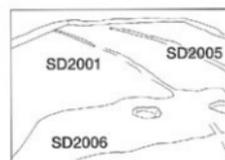
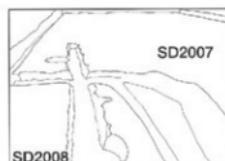
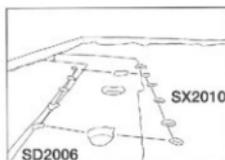
1.土坑SK2071 (東から) 2.土坑SK2070 (南東から) 3.土坑SK2066 (南西から)  
4.土坑2069 (西から) 5.井戸SE2068 (南西から)



1.土坑SK2179 (南西から) 2.土坑SK2220 (北東から) 3.土坑SK2160 (北西から)  
4.土坑SK2129 (南西から) 5.土坑SK2186 (南から)



1.A27グリッド土器集中出土状況 2.A30グリッド土器集中出土状況  
3.B30グリッド土器集中出土状況 4.5A区南半(北西から)



1.溝SD2006・SX2010 (西から) 2.溝SD2007・溝SD2008 (北から)  
3.溝SD2001・溝SD2005 (北から)

図版 34 遺構 (9)



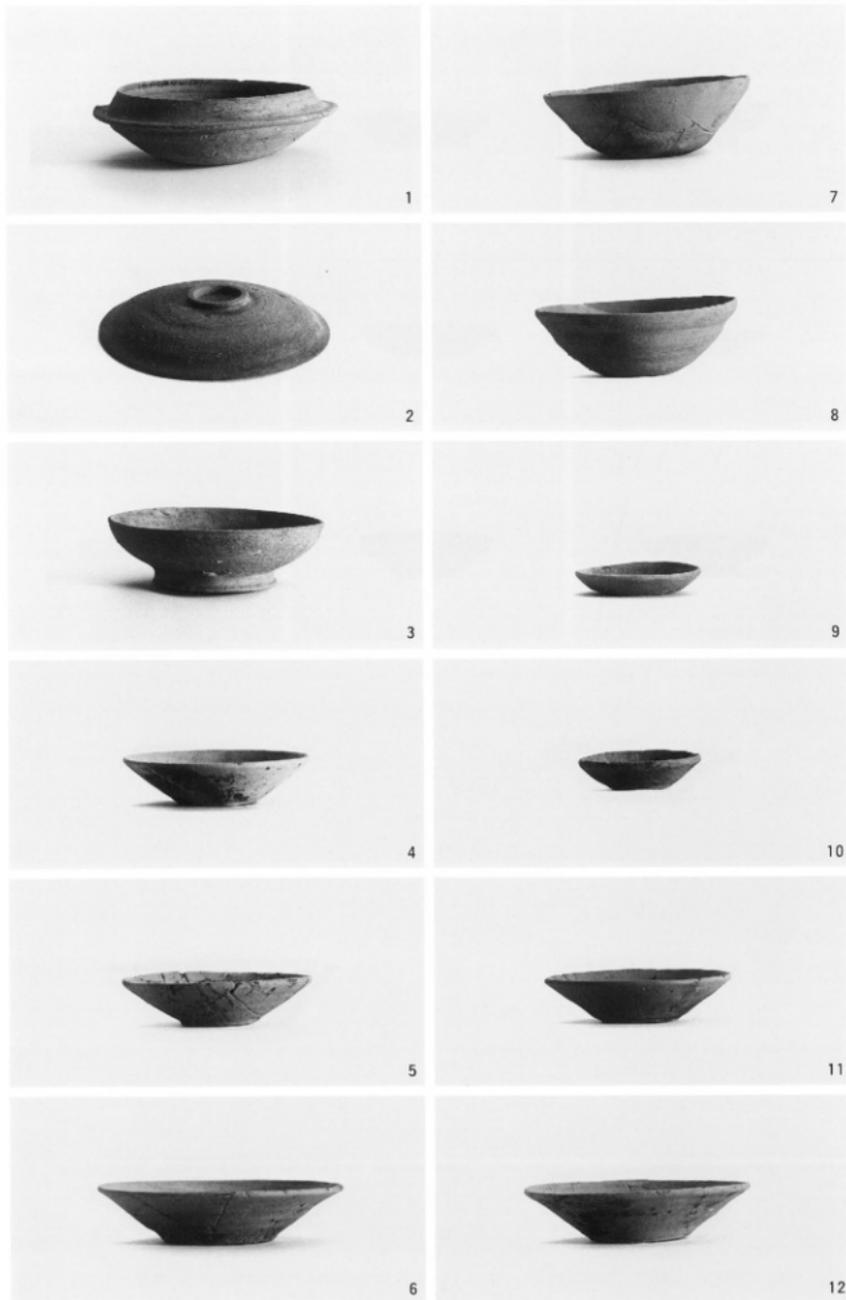
1.溝SD2017・溝SD2019 (東から) 2.溝SD2019・溝SD2048 (西から) 3.溝SD2025・溝SD2031 (東から) 4.溝SD2046 (南東から)  
5.溝SD2055北東隅 (北東から) 6.溝SD2055南東隅 (東から) 7.溝SD2055北半 (西から) 8.溝SD2055南半 (西から)



1.溝SD2090 (南東から) 2.溝SD2090 (南東から) 3.溝SD2095-1・2 (南東から)  
 4.溝SD2165,2168-1・2,2170,2177 (南東から) 5.5A区作業風景 6.5B区作業風景

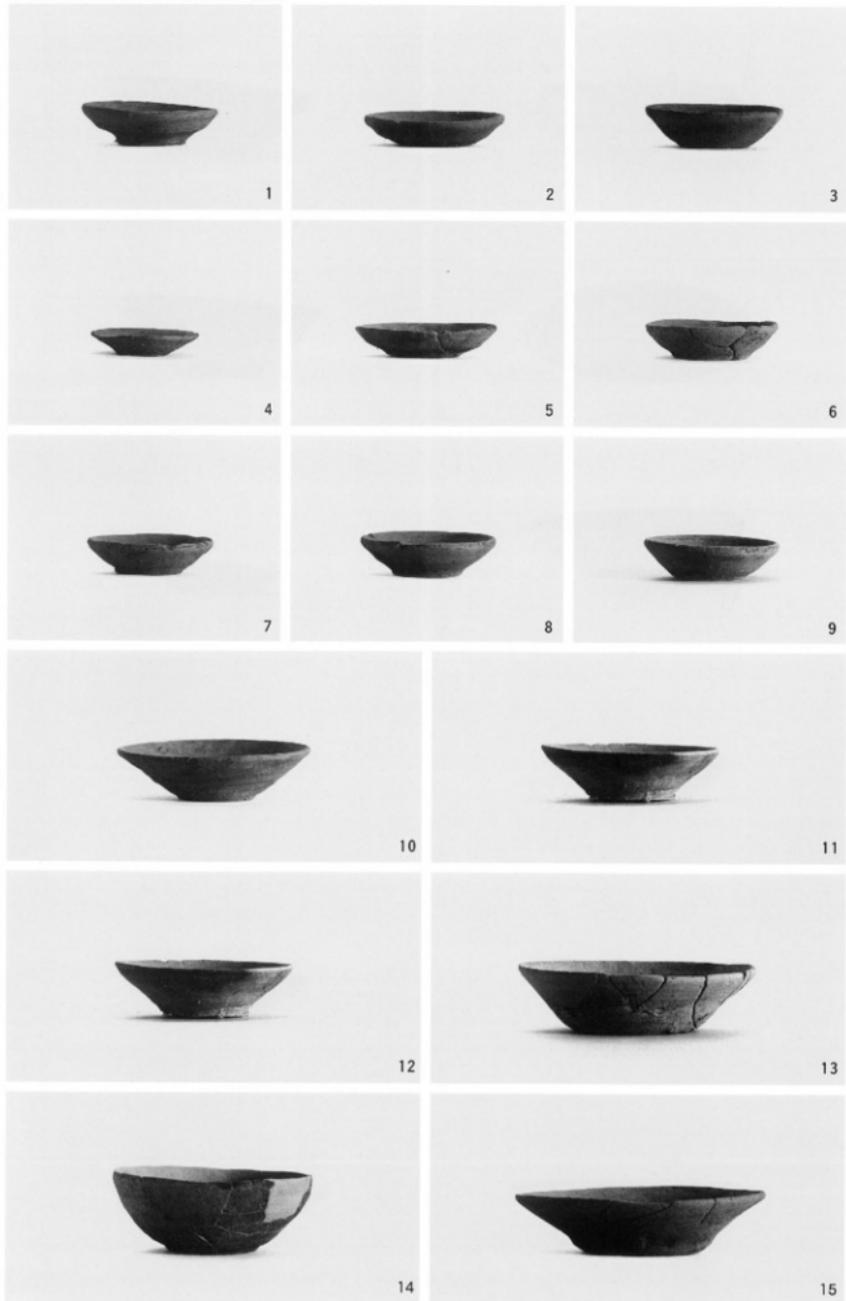
図版 36 遺構内出土遺物 (1)





1.円形周溝 2.土坑SK2174 3.土坑SK2183 4~6・10~12.溝SD2090 7・8.土坑SK2172  
9.土坑SK2192 (1:3)

図版 38 遺構内出土遺物 (3)



1.土坑SK2018 2.土坑SK2045 3.土坑SK2057 4.土坑SK2076 5.井戸SE2068 6・7・14.溝SD2019  
8~12.土坑SK2047 13.溝SD2003 15.溝SD2031 (1:3)



1



2



3



4



5



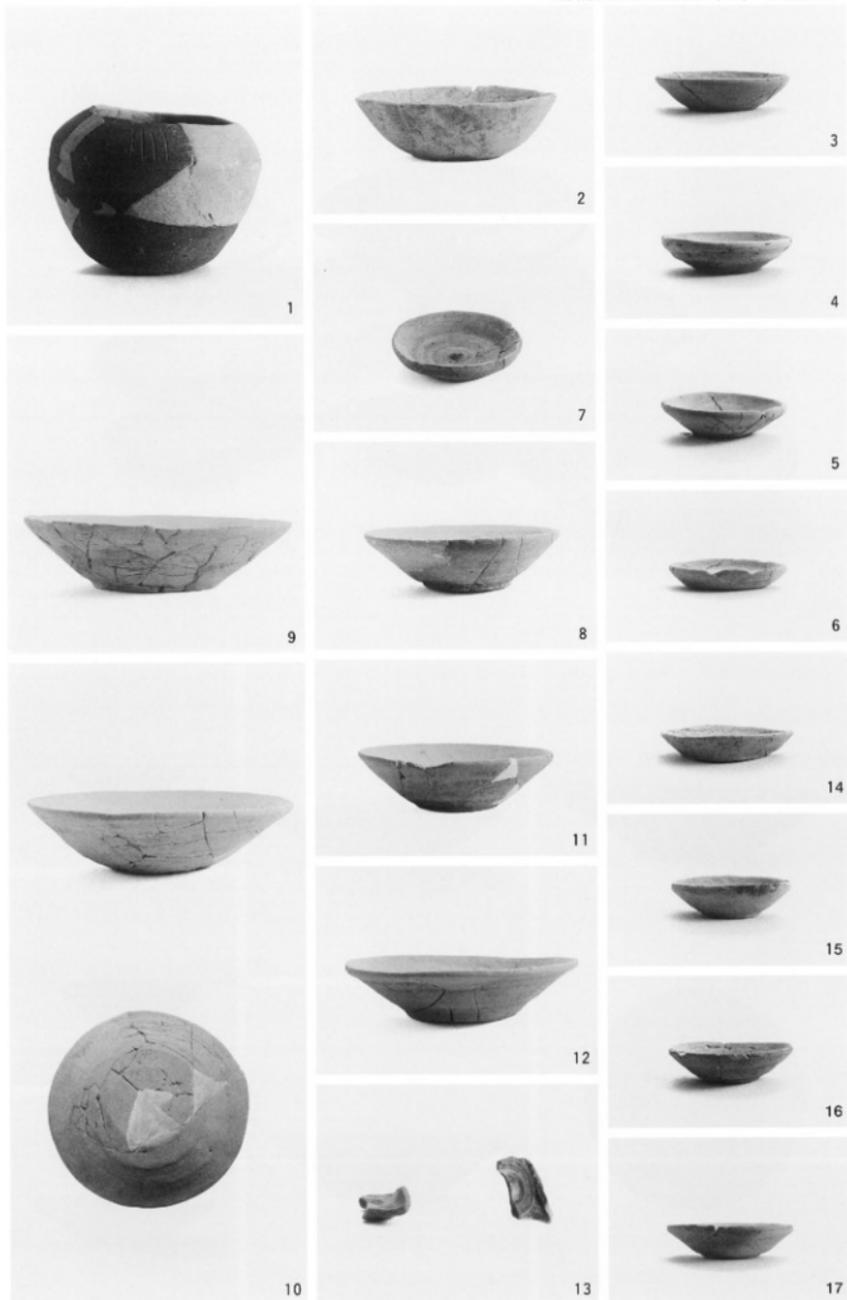
6



7

1.土坑SK2066 (集合) 2~7.土坑SK2066 (個別) (1:3)





1~17.5A・5B区遺構外 (1:須恵器、2~17:土師質土器) (1:3)



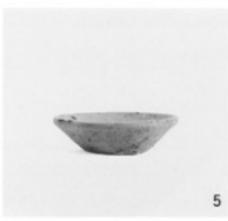
1



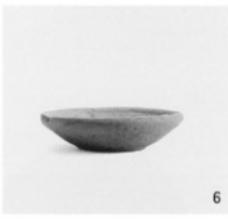
2



3



5



6



4



7



1



2



3



10



4



5



11



6



7



12



8



9



13



14

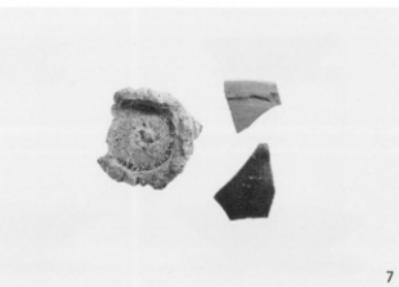
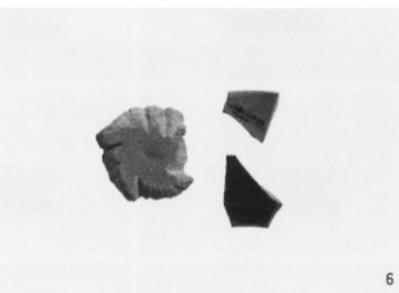
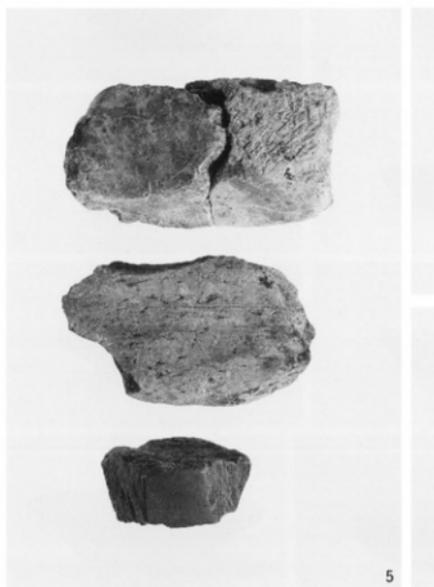
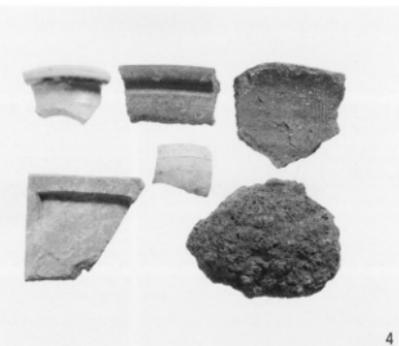


15

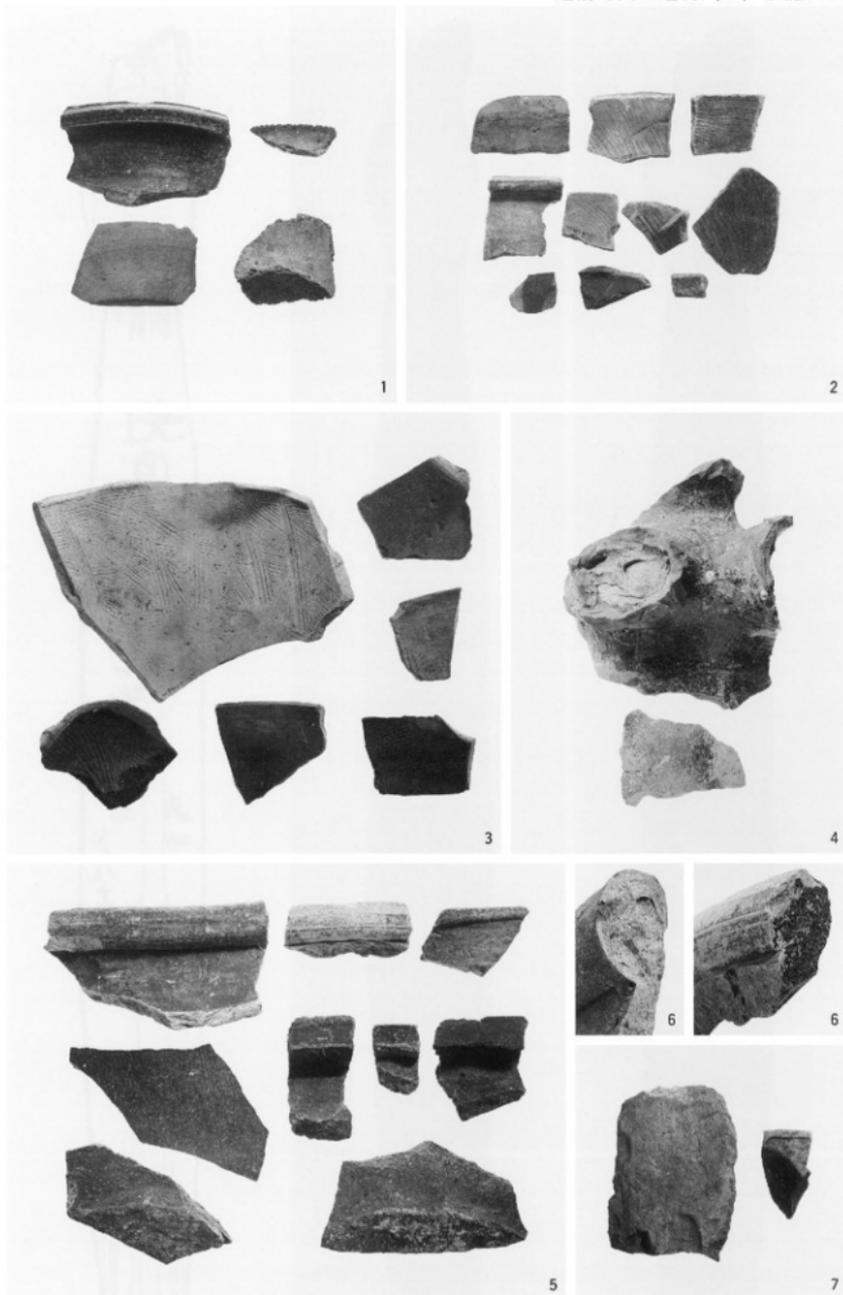


16

1.A30グリッド土器集中 (集合) 2~9.A30グリッド土器集中 (個別) 10~13.B30グリッド土器集中 (個別)  
14~16.5B区遺構外 (1:3)



1・2.土坑SK2018・土坑SK2045・土坑SK2070 3.井戸SE2068・溝SD2006・溝SD2007・溝SD2031  
 4.土坑SK2030・土坑SK2045・土坑SK2050・土坑SK2069 5.井戸SE2068・溝SD2025・溝SD2048  
 6・7.土坑SK2220・土坑SK2179・溝SD2155 (1:3)



1～7.5A・5B区遺構外 [1:縄文・弥生・須恵器 2:中世須恵器 3:土師質土器 4:須恵器(子持壺)  
5:国内陶器 6:国内陶器(断面) 7:石器] (1:3)



1

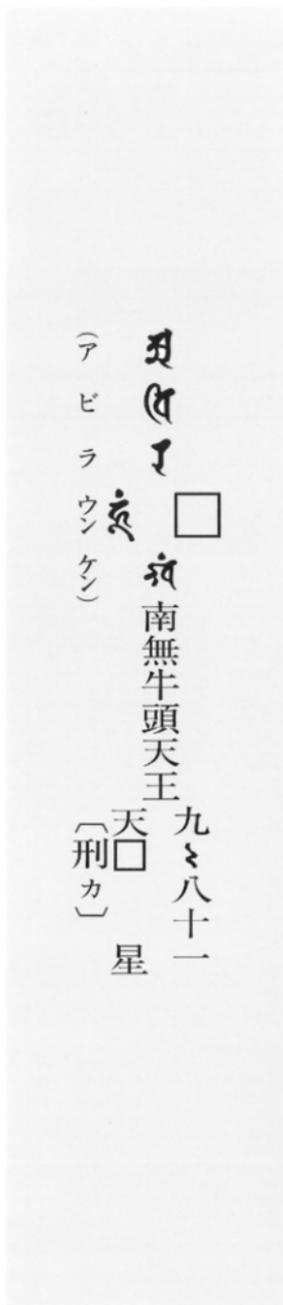


2



3

1.木簡全体写真 2.木簡全体写真(赤外線) 3.木簡全体図 (1:3)



1.木簡積文 2~5.木簡拡大 (赤外線)

## 報告書抄録

ふりがな	つきやまいせきさん							
書名	築山遺跡Ⅲ							
副書名	県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	出雲市の文化財報告							
シリーズ番号	5							
編集者名	原 俊二							
編集機関	出雲市文化企画部文化財課							
所在地	〒693-8530 島根県出雲市今市町70番地 TEL0853-21-6893							
発行年月日	平成21年(2009)年3月							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つきやまいせき 築山遺跡	しまねけん 出雲市 かみんやちよう 上塩治町 1742外	32203	W24 <small>(島根県遺跡番号)</small>	35度	132度	2004.4	4区	県道今市 古志線改 良事業
			F23 <small>(出雲市遺跡番号)</small>	21分 05秒	45分 42秒	～ 2006.10	3950㎡  5区 3850㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
築山遺跡	集落跡	縄文時代か ら中・近世	建物跡、 土壇墓、土坑、 井戸、溝	土師器、須恵器、 中世土師器、 陶磁器、木製品、 石製品など	牛頭天王と記 す木簡が出土			

出雲市の文化財報告5

## 築山遺跡Ⅲ

県道今市古志線改良事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年3月

編 集 出雲市文化企画部文化財課

発 行 島根県出雲県土整備事務所  
出雲市教育委員会

印刷・製本 松栄印刷有限会社

